

えた積み石で、栗石を隙間にかませる。石積み背後に栗石による控え積みが円形に巡る（第45図）。

井戸枠の東壁は西壁側より積み石が1～3段分多く0.3～0.4mと高いので、井戸枠の天端（上端）面は石敷部側に向けて傾斜する。一方、井戸枠西壁側では、一辺0.4mの大いの地輪や方形の大ぶりな平石を組らせて天端面とし、平石を60°ほど傾斜させて積み上げて石敷部との境とする。

**井戸枠内の堆積土** 堆積土は9層に分層された。下層（第45図第12・13層）は緑灰色土や灰黃褐色砂質土で井戸枠の転落石を包含する。中層（第11層）は砂礫や角礫を含む褐色土、上層（第1・3・4・5・7・10層）は黃褐色・青灰色・灰褐色粘土質である。

**石敷部の構造** 1.5m×2.3mの横長長方形形状で井戸本体と連続する。井戸主軸方向は一辺0.3～0.4mの大いの平石が置かれる。それ以外は0.2m大の割石が層厚0.2m程度に乱雜に敷き詰められる。その上面ラインは、b期までと異なり水平面ではなく傾斜する。五輪塔の地輪、凹石（1135）、砥石（1209）や石皿（1210）も転用される。敷石部の南端は、板牌（1289・1291）の転用を含む平石8個を縦位に直線的に置いて仕切り線とする。内区のラインと一致する。

この仕切り線から井戸枠の南東側壁を結ぶラインは円礫・角礫を堆積させた捨石状となる。その対辺も同様である。従って、実際に敷かれた石の範囲は3.2m×4.2mの方形状となる（第45図）。井戸枠壁体の控え積みと連続した作業が読み取れ、作業後は埋め戻されて内・外区の列石が施される。

**出入り口部** 井戸本体は区画内の北東隅に位置するが、その対角線上の南西側に段落ち面が設けられる。この構造は、0.6m×1.4mの平面横長長方形で、底面は道構検出面より0.3m低い。円礫や平石、水輪（1259）、地輪あわせて6個の石で敷石がなされる。この段落ちを有する敷石面は、井戸主軸方向にあるので井戸への出入口部と考えられる。

井戸へのルートは、出入り口部から排水溝をまたいで石敷部に入り、わずかな上り傾斜の石敷面を過ぎて、井戸枠と石敷面の境にある傾斜面を越えると井戸の縁に至る行程となる（第46図m-n）。

**排水溝** 石敷部と段落ち面（出入り口部）との境には細い排水溝がありSE1に接続する。底面の幅0.1～0.25m、深さ0.15mと幅狭で浅く、高低差は0.1mと落水の差は低いが排水は可能である。

### SF1（c期）の構築工程 大きく5工程となる。

①SF1-b期と同じく、井戸枠東壁の後背斜面を逆L字形にカットして掘り方とする。

②石積みに連動して控え積みと盛土がなされる。南～西側付近は、一旦盛土上面を方形に掘り込んで作業空間を確保する（第45図第23・25・52・55層の上面）。

③井戸枠天端の石積みと円形状の控え積みに連続して敷石部が形成される。

④掘り方や作業空間を埋める（第45図第43～47・50・51層等）。控え積みと石敷面の一部も埋め戻される。

⑤内区外縁と外区の列石を置く。列石は④工程の時点で据えられて、埋め戻される箇所もある（第46図）。

**出土遺物と年代** 井戸枠内（第45図13層）より

15～16世紀代の備前焼甕や青磁甕等が出土した。井戸枠内からは、節を抜いた竹や桃核といった井戸廻绝に付した祭祀遺物は出土していない。

井戸枠の控え積み内（第45図第2・b層）では瓦質土器の双耳釜（646）、掘り方内（第14層）では備前焼擂鉢（394）、景德鎮系青花が、石敷部構成土（第21層）で備前焼甕・擂鉢、褐釉陶壺（326・327）、土師器皿（610・618）等が出土した。これらの遺物は、概ね16世紀中頃～17世紀初頭の年代幅に収まる。

石敷部の焼出面や堆積土（第6層）より、景德鎮系青花皿（231）、瀬戸美濃焼丸皿（481）、褐釉陶器四耳壺（316）、備前焼甕、瓦質土器擂鉢、土師器皿（578・586・604・609）や挽臼白口（1159）等が出土した。481は大窯跡の後半に相当し、AD1545～1560年の年代が与えられている。

井戸枠の最終埋没を示す第3層からは備前焼甕口壺（455）が出土した。この455は16世紀初頭～17世紀初頭の間に製作されたと考えられる。

なお、第21層出土の土師器皿（618）はSE2上層出土部分と接合関係にある。618は底部と口縁部との境にV字割りが巡る特徴を持つ。この特徴は、宮崎県都城市都之城跡、鹿児島県霧島市富隈城跡や鹿児島市鹿児島城跡等の宇津氏系城郭出土の土師器皿に多い。618の形態的特徴は、富隈城例と類似するので16世紀後半～末と捉えられる。

**SF1（c期）の構築時期** SF1（c期）の構築時期は、製作年代がある程度限定される瀬戸美濃焼丸皿（481）と土師器皿（618）の年代から16世紀後半でも末頃と導かれる。少なくとも、摩城の時代である17世紀初頭までは存在していたと考えられる。



第42図 水の手曲輪遺構配置図(第V期面)

#### (4) 1号石積遺構 (SS1)

**位置と構造** SS1は主郭部西側から続くY字形谷地形の狭隘部に位置し、水の手曲輪と自然地形(谷部)との境界となる。SS1より西側は深く狭い谷地形が沖積地に向けて緩やかに開く。

SS1は、石積部と堀および土塁部とスロープ部、排水溝で構成される。石積部の上・背面には、SE1の暗渠部(C区)、柵列4条(SR4・5・9+10)と掘立柱建物跡1棟(SB12)が位置する(第42図)。

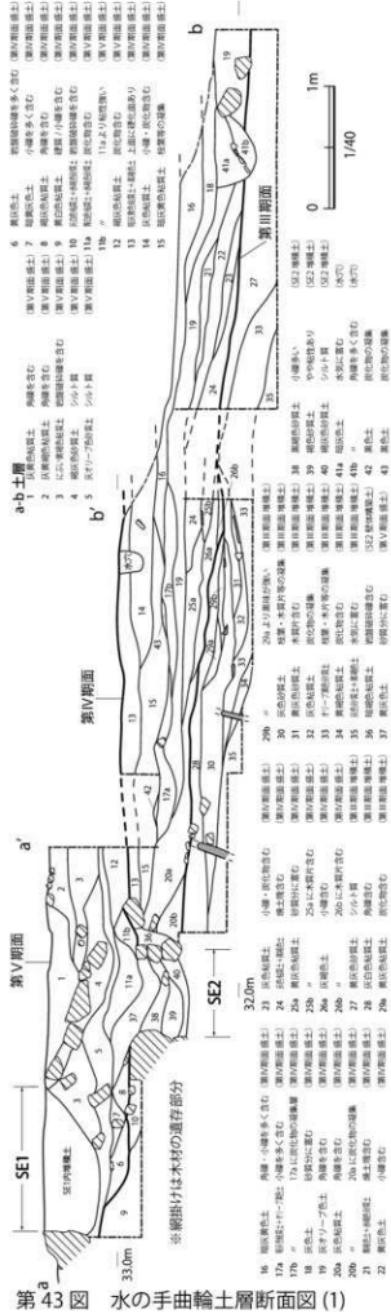
石積部の前面には、堀と土塁が付設される(第51図)。東側から順に1号堀→1号土塁→2号堀→2号土塁とする。1号堀の北側は平坦面、南側はスロープ部が位置する。1号土塁上には柵列2条(SR6+7)と掘立柱建物跡(SB13)が設けられる。(今塩屋)

**検出時の状況** 石積部上面に堆積する後世の造成土(第44図第2層～24層)を除去すると、SR4付近から石積部本体にかけての部分が大きく損なわれた状態で検出された(第47図)。石積部の天端は失われ内部構造が露出した状態で、特に石積部中央部の損壊が著しい(第48図)。1号堀やその周辺には石積部の構築石材が広範囲に散乱し、石積部本来の姿を保つのはその両端付近のみであった。

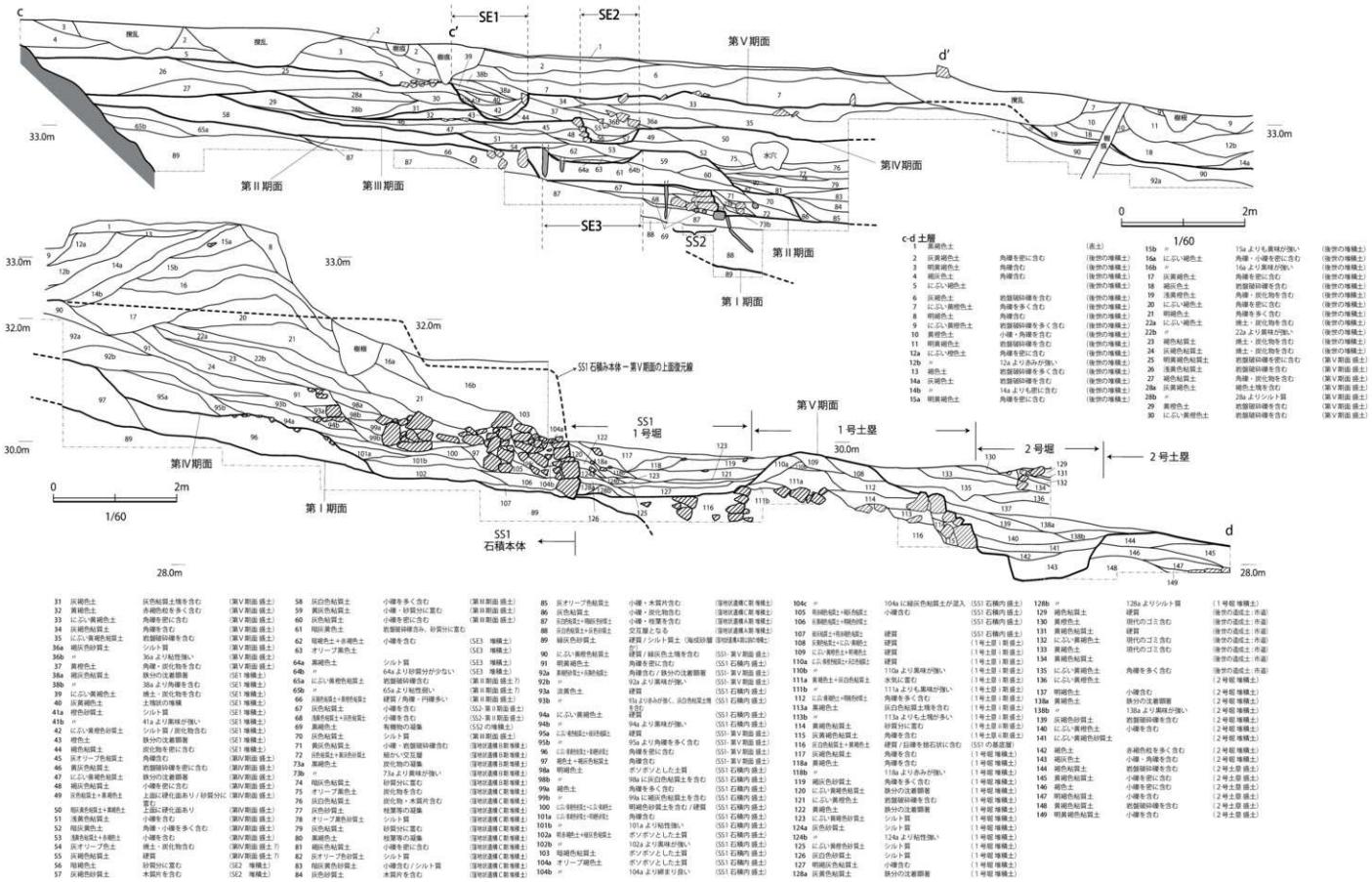
1号堀の北側部分にはコンクリート製の井戸が埋設され、1号土塁より西側は、市道建設の関係で最大1mもの厚い造成土が堆積していた(第44図)。

本来の姿を大きく損なったSS1の全体構造の把握が難しく、後世の造成土と盛土層の見極めに手間取った上に、遺構面を掘り下げるすぎて柵列の柱穴を失う等の失敗や試行錯誤を繰り返して、ようやく完掘までこぎつけることが出来た。(堀口)

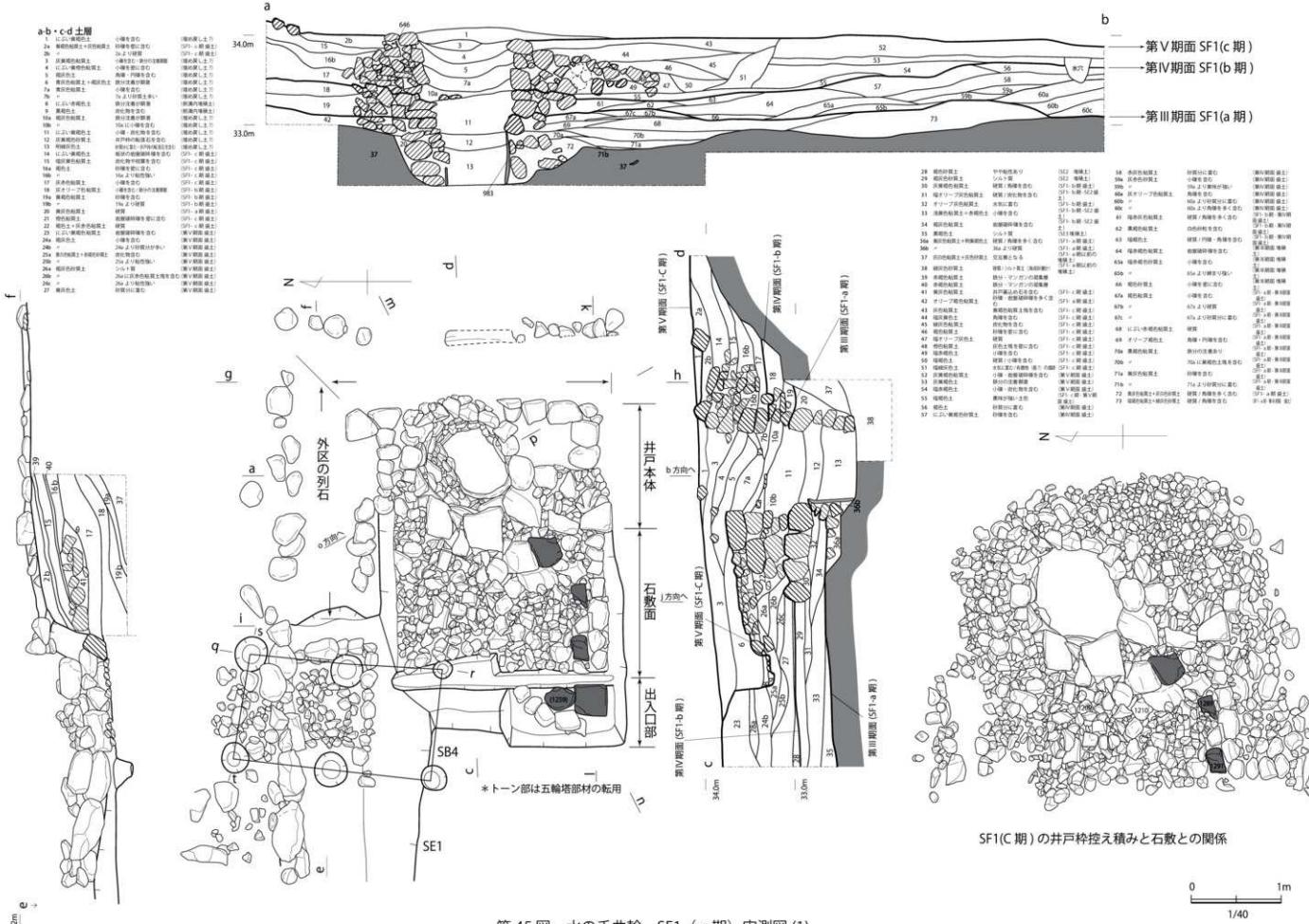
**新旧の堀と土塁** SS1の1号堀の端にある割石の集中箇所とスロープ部(第51図)を除去すると、その下部から2段の底面を持つ堀が新たに検出された(第47・48図)。さらに1号土塁を斬ち割ると、土塁前面の石積み上段部に下段部が付け足されることが判明した(第44図第114・115層)。この石積みは2号堀と2号土塁の付け根を巡る構造となるから、1号土塁に2号堀・土塁が別途追加される関係となる(第51図)。またSE1は1号堀が終点となる時期と1号土塁を切断して曲輪外へ延伸する時期が確認された(第47・51図)。つまり、SS1は構築後にスロープ部や堀・土塁が新設されるといった改造を受ける。そこで改造前のI期と改造後のII期に区分して報告する。

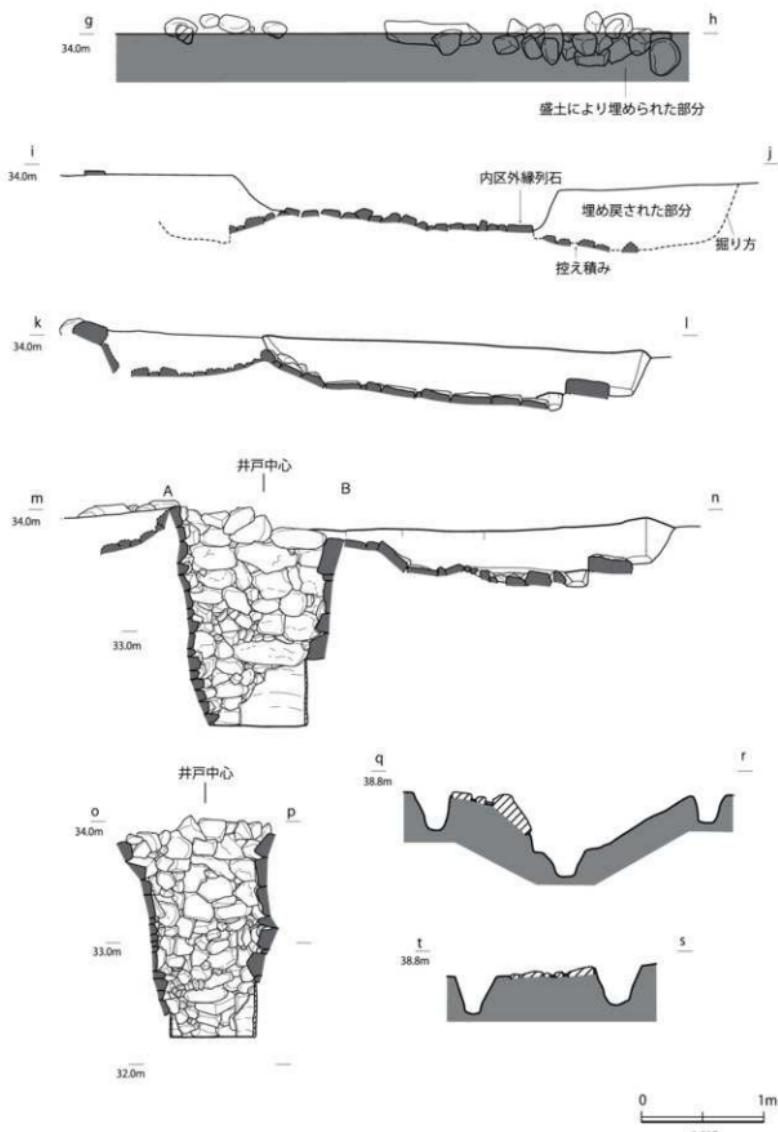


第43図 水の手曲輪土層断面図(1)



第44図 水の手曲輪土層断面図(2)





第46図 水の手曲輪 SF1(c期) 実測図(2)

### (5) SS1(Ⅰ期)の構造

**構造** SS1(Ⅰ期)は石積部と1号堀および1号土塁と柵による複合的な遺構である(第47・48図)。

**石積部の規模と形態** 石積部の長さは16mを測る。石積部の南端側は階段状の天端面を有する構造で、天端の高さは31.7m(上段部・SR5側)と31.4m(下段部・1号堀側)を測る(第48図)。幅(石積部前面の基底石からSR5側)は4mである。高さは基底石から1.8~2mとなる。下段部は奥行き1.6mの平坦面となり、上段部とは0.3~0.4mの段差が生じる。

石積部中央付近は大きく損なわっているので天端面の構造は不明確である。しかし、石積部南端に認められた段差は、SS1北端のSE1吐水口の高さと対応し、平面的にも吐水口の端部と対応するので、SS1石積部の天端面は段状であったと理解される。

**石積部内部の構造** 石積部の内部では、土留め壁や擁壁の機能をもつ石積み壁体や列石が計4列確認された。東側より第1・第2(a・b)・第3(a・b)・第4列とする(第49・50図)。第1~3列は埋め戻されて表出しない。石積み壁体で大きく4つに仕切られた空間は硬く埋め戻されていた。これら石積み壁体は土留め擁壁の構造でありSS1の堅牢さを目指す。また、石材に五輪塔の火輪や地輪も利用されていた。

**石積み壁体** 第1列は6~8段で高さ0.8~1.3mであるが、中央~南半部では列状の置石に変化する。

第2列は6~9段の石積みで高さ1.2~1.8mを測る。北半部はa・bの2小列で一つの壁体とする。壁体上端の石には五輪塔の火輪も用いられる。なお、第1列同様に中央~南半部では壁体から列石となる。

第3列はa・bの2小列からなる石積みで、2小列で一壁体となる。石積みは6段で高さ1.4mを測る。第3b列は南(西)端付近で第4列と合流する。第2・3列の基底石は扁平な石を数個積み重ねていた。

第4列は、石積部本体の最前列で露出する。ほぼ垂直に積まれる第1~3列とは異なり、70°の仰角となる。第4列の石積みは、0.2~0.3m×0.4m大の割石を横位に置いて基底石とし、その上に10段ほど積み上げる。この石材は平均0.1~0.2m×0.2~0.4m大で、基底石がやや大きい。基底石の下端ラインは緩い下弦を描く(第48図)。

**石積み技法** 布石(煉瓦・重箱)積みと乱石積みが並用される。安定性のない積み方であるが、石と石の接点には栗石や小蝶をはさんで安定させている。

**石積部の構築過程** 大きく5工程となる。

①1号堀から1号土塁の底面に、巨礫を含む灰白色粘土を投入して地盤強化を図る。巨礫は扇形に広がるので周堤状に盛土されたようである(第44・第49図)。

②第1~2列の基底面に水平な盛土(第50図第19-20層)をして、平坦面(作業面)を確保し(南端部は第2~4列)、第1列を構築しながら、その背面に第V期面の造成に連動した盛土を重ねる。第52-2図第15層は、マンガンや酸化鉄の沈着が著しい岩盤破碎体である。南半部では第2列が石積み壁体となる。

③第2列を構築後、第1列との間隙には粘質土と割石主体の層を交互盛土して突き固める。

④第3列と第2列との間隙を埋め戻す。粘質土と角礫を含むボソボソとした質感の土で交互層となる。第2列側の基底面付近は割石を敷き並べて強化する。

⑤第3列との間隙を埋めながら第4列を構築する。

⑥工程と同様に、第3列側の基底面は割石が並べられる。第3・第4列との間隙は④工程と同じく交互層で硬く突き固められて埋め戻される。

**石積部本体の柱穴** SR5は、SS1の天端の石列に軸線が偏るSR4とも対応するので1期とする。

なお、SE1のうちSR4・5に挟まれた部分は暗渠部である。この暗渠部の上に堆積する8~10層(第56図)は、盛土の可能性があるけれども判断し得なかった。

**1号堀** 石積部本体の前面に位置する。長さ16m、幅2.9~3.2mである。堀の断面形は箱形に近いが、両端部部分は段差が生じる2段掘りで、1号土塁側の壁面は傾斜する。堀の両端部は岩盤面を1.7mの深さに掘削して長さ14m・下幅2.5mの平坦な堀底と垂直に近い壁面を削り出す。1号堀の中央部は盛土面を堀底とし、岩盤削りだしの堀底より0.3m深い。また、掘り方の上端は、石積部本体の前面と幅0.3~0.6mの空間を隔てる位置にある。

従って、1号堀の最底面と石積部との比高差は3m、1号土塁の平坦面との比高差は1mとなる。

SE1は1号堀内に導水される構造である(第47図)。

**1号土塁** 1号堀の西側に位置する。長さ13+a、高さ1m、上幅1.4m、下幅は2.5mを測る。谷地形の両端を直線的に結ぶ土塁である。断面形は台形状を呈し、黄白色粘質土や褐色土の硬質な土で盛土されていた。土塁の上端面は直線的であるが、2号堀側の下端線は下膨れ状に緩い円弧を描く。

土塁上端（平坦）面上では、直線的に継ぐ SR6 が検出された。柱穴間隔は 0.8 ~ 1 m と不揃いである。

土塁の 2 号堀側壁面には石積みが施される。その位置は肩部付近にあり、鉤巻様となる。南端部のみが良好に遺存していた。

なお、中央部分から北側は大きく損なわれ、北端部は SE1 (SS1-Ⅱ期に伴う) に切断されていた。

1 号土塁より西側（谷部側）の構造は、幅 1.2 m 以上の緩い平坦面となるが、2 号土塁付近で大きく下降すると考えられる（第 42 図）。

このように 1 号土塁は、谷部斜面を跨いで外部と空間を遮断する閉鎖的な構造であったと解釈される。

#### （6）SS1（Ⅱ期）の構造

**構造** SS1(Ⅱ期) は石積部本体と 1 号堀・1 号土塁、さらに 2 号堀と 2 号土塁で構成される（第 51 図）。

SS1(Ⅱ期) は、1 号堀の両端が埋め戻されて南側はスロープ部となり、1 号土塁側から石積部本体や曲輪内へ出入り可能な構造を作り変えられ、さらに 1 号土塁の前面に 2 号堀と 2 号土塁が構築されて虎口状構造へと改造される複合遺構である。

**石積部本体の柱穴** 柱穴から SB12 と SR9・10 を復元できた。SB12 はスロープ部の階段部に面し、身舎内には小縄による石敷面も認められた。平面形はやや歪であるが、柱穴は直径 0.6 m と大きく、深さ 0.6 m と岩盤面を丁寧に掘削される（第 59 図）。この SB12 は規模と構造およびスロープ部との位置関係から門状遺構であったと考えられる。

この SB12 の桁方向線上にあるのが SR9-10（柵列）である。SR9・10 に伴う柱穴列の北端は切岸 3 の上にあり、岩盤を深さ 0.6 m 掘削する掘り方である。この柱穴は SB12 床面より 1.6 m も高い位置にあるので、単なる柵列とは考えにくい。SR9・10 は柵状の構造物に伴う柱穴列とも考えられる（第 51 図）。

なお、切岸 3 の SR11 は、柵列とするよりも曲輪 B 群方面に行跡の後世の階段であった可能性が高い（第 42 図）。

**1 号堀** 1 号堀の両端はスロープ部の構築と割石等による埋め戻しにより、長さ 7 m、幅 2.9 ~ 3 m に縮小する。このため 1 号堀の北壁（岸）は縄と土による壁面、南壁はスロープ部の壁面となる。1 号土塁側の隅角部にはテラス面が付いて入りやすい。

また、SS1(Ⅰ期) の 1 号堀の北縁であった部分は、岩盤壁面に沿って 4.8 m の石列が設けられる。

1 号堀の北側は 2.6 × 3.6 m の範囲に大小様々な大きさの割石が捨石状に集石されていた（第 51・52-2 図）。石は石積部本体のものと違い、角張った形状が多い。

この捨石状の集石部分と石積部本体の間には幅 0.8 m の空白部が存在するが、そこは SE1 からの分流水や石積部本体から染み出す地下水が 1 号堀へと導水されていた。この SE1 は、埋め立てられた 1 号堀と 1 号土塁を縱断する構造に改修される。

1 号堀の堆積土は、灰色系粘質土と褐色系砂質土の交互堆積で静水と流水が繰り返される（第 44 図）。

**スロープ部** 1 号堀の南側に位置する。1 号土塁と石積部本体を繋ぐ傾斜面である。SB12 への通路と考えられる。路面幅 1.2 ~ 1.3 m・長さ 5.6 m を測り、傾斜角は 10° と緩い。石積部側は 3 段の階段面、1 号堀側は平坦面が続く通路面となる。通路面には岩盤破碎礫が薄く敷かれていた。また、SB12 の前面部分の通路幅は開口状に急に広がる（第 51・53 図）。

スロープ部は 1 号堀底面に薄く流入土が堆積した時点（第 53 図第 11・12 層）で盛土により構築される。このスロープ部は 2 列の石積みによる土留め壁と 1 列の内護列石による区画内に盛土を流し込むようにして構築される。北側の石積みは部分的に表出するが 2 列目は埋められたままとなる（第 53 図）。

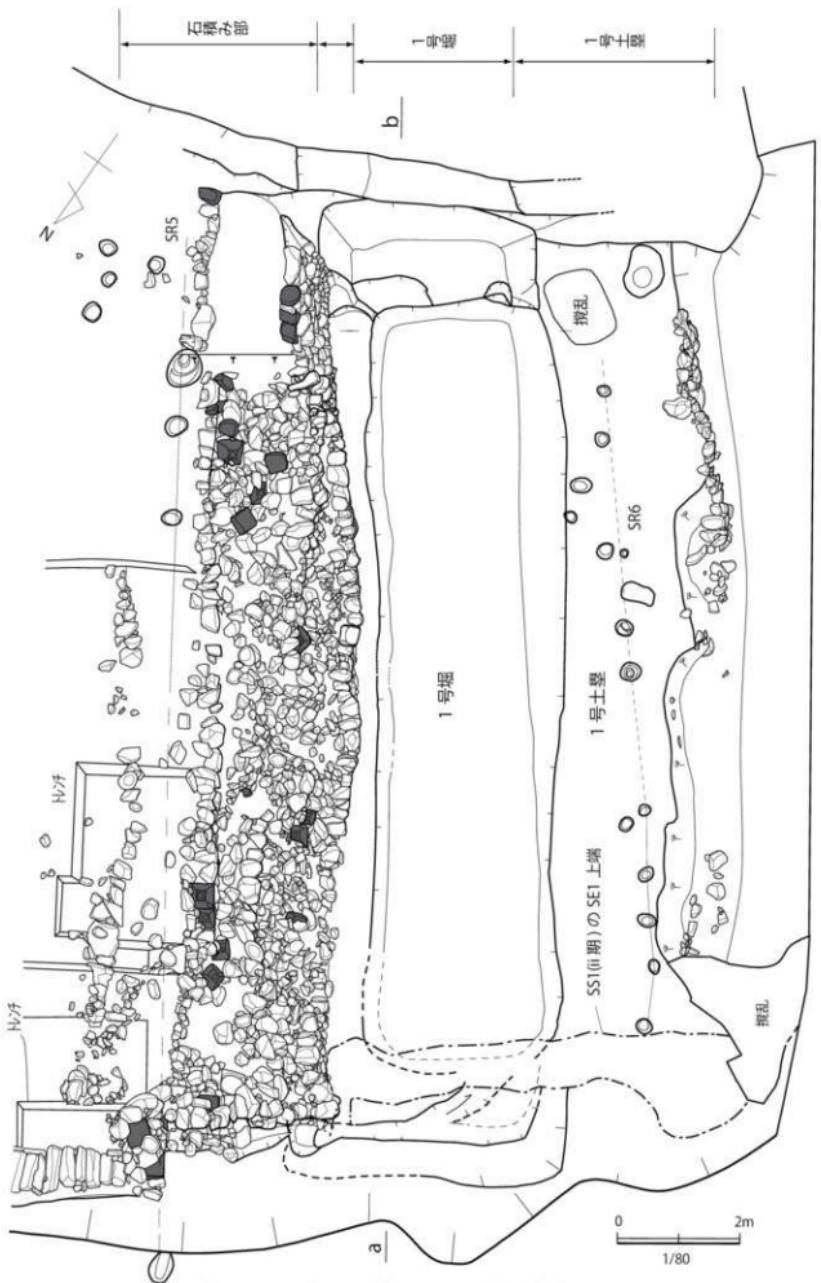
スロープ部の盛土は褐色土や砂質土が主体で岩盤破碎礫も多く混入するなど、SS1 石積部本体や 1 号土塁の盛土とは大きく性状が異なる。

**1 号土塁（新）** 2 号堀側の壁面の下部には張り出すように石積みと盛土が構築される（第 51・52 図）。この石積みは腰巻状となり 1 号土塁を直線的に巡る。

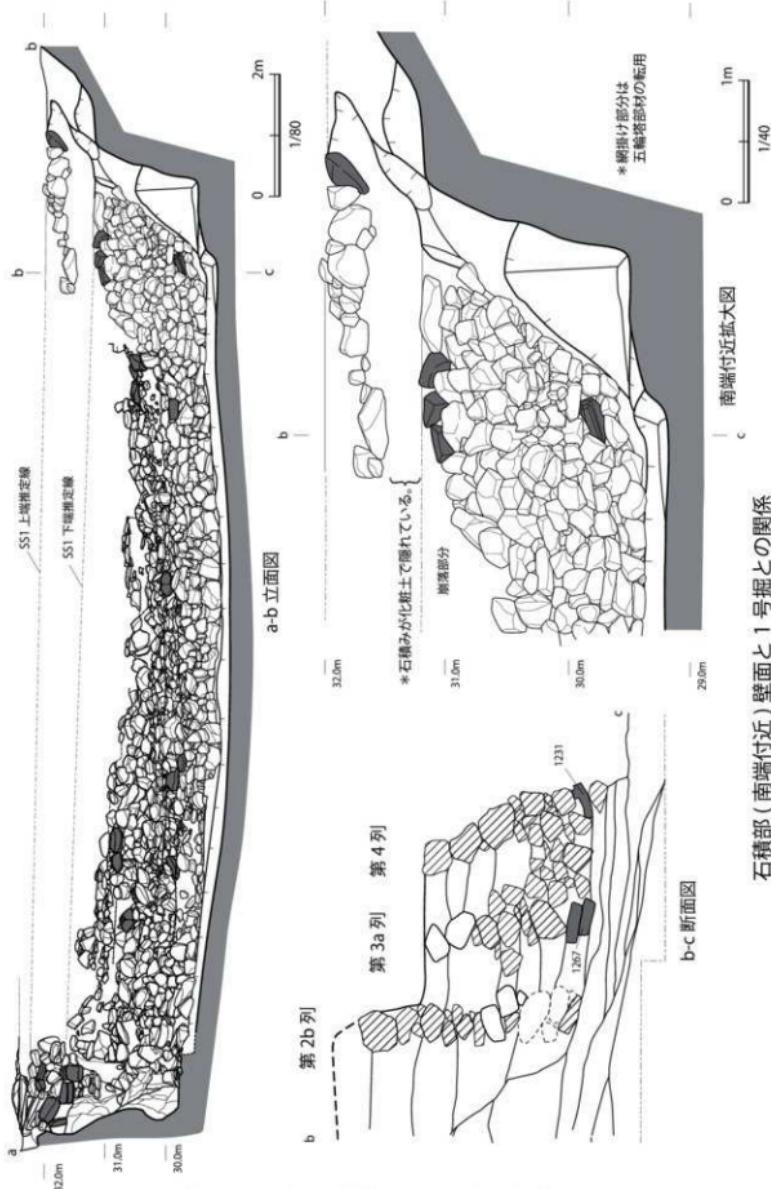
この石積部の中央付近には 0.4 m × 0.6 m 大の巨礫が 2 箇所置かれていた。巨礫間の距離は 1.6 m で、その対辺側の 1 号土塁面上には柱穴が 2 箇所認められたので掘立柱建物跡（SB13）とした。この SB13 は 1 号堀（新）と 2 号堀の中軸線上に位置する。1 号土塁側の柱穴を控柱、巨礫を鏡柱の礎石とみなすならば、門状遺構と捉えられる（第 60 図）。

土塁平坦面上の柵列（SR7）の柱穴は、この SB13 を間に挟んで、土塁面を矩形に囲む配置となる（第 51 図）。

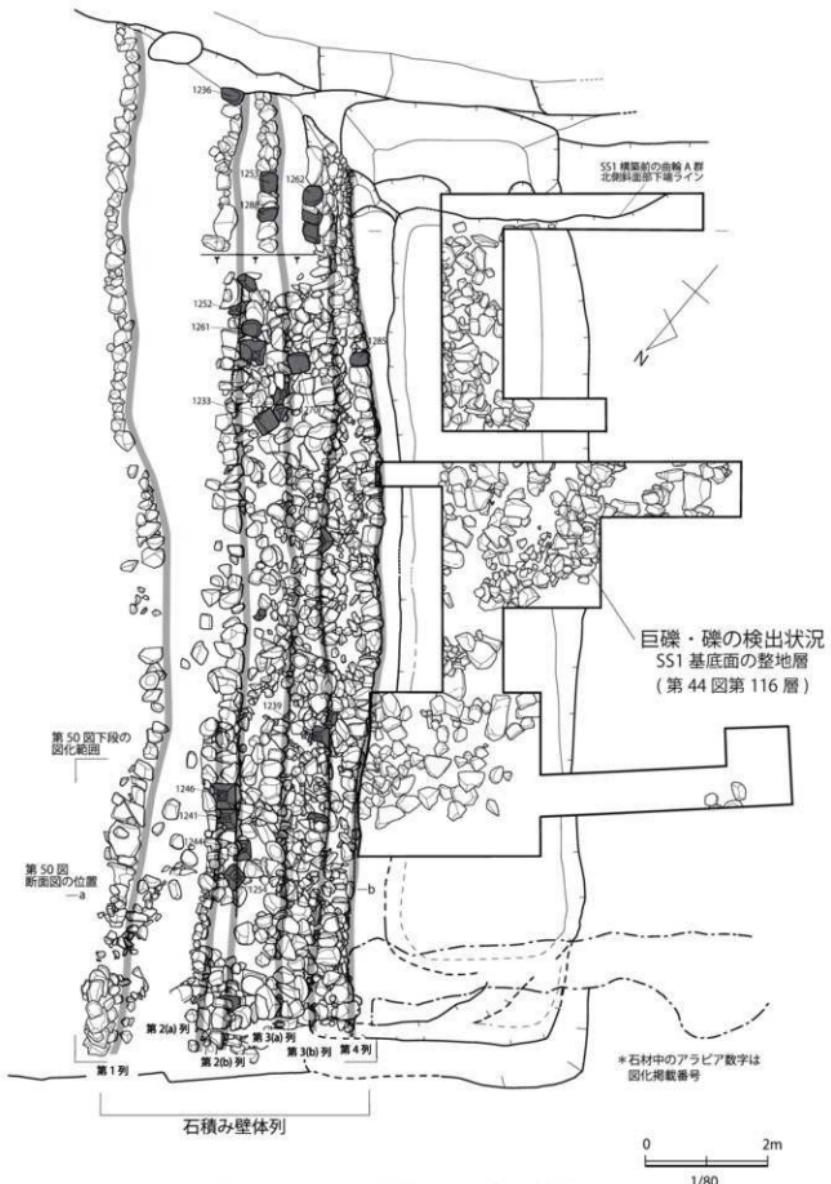
**2 号堀** 長さ 10 m +  $\alpha$ 、幅 1.4 m を測る長方形の堀である。1 号土塁の平坦面と堀底最深部との比高差は 0.75 m となる。2 号堀の西壁面は開くが、東壁面は石積みで閉じる。この東壁面は 1 号土塁から続く石積みとなる。この石積み部は岩盤を掘削して 2 号



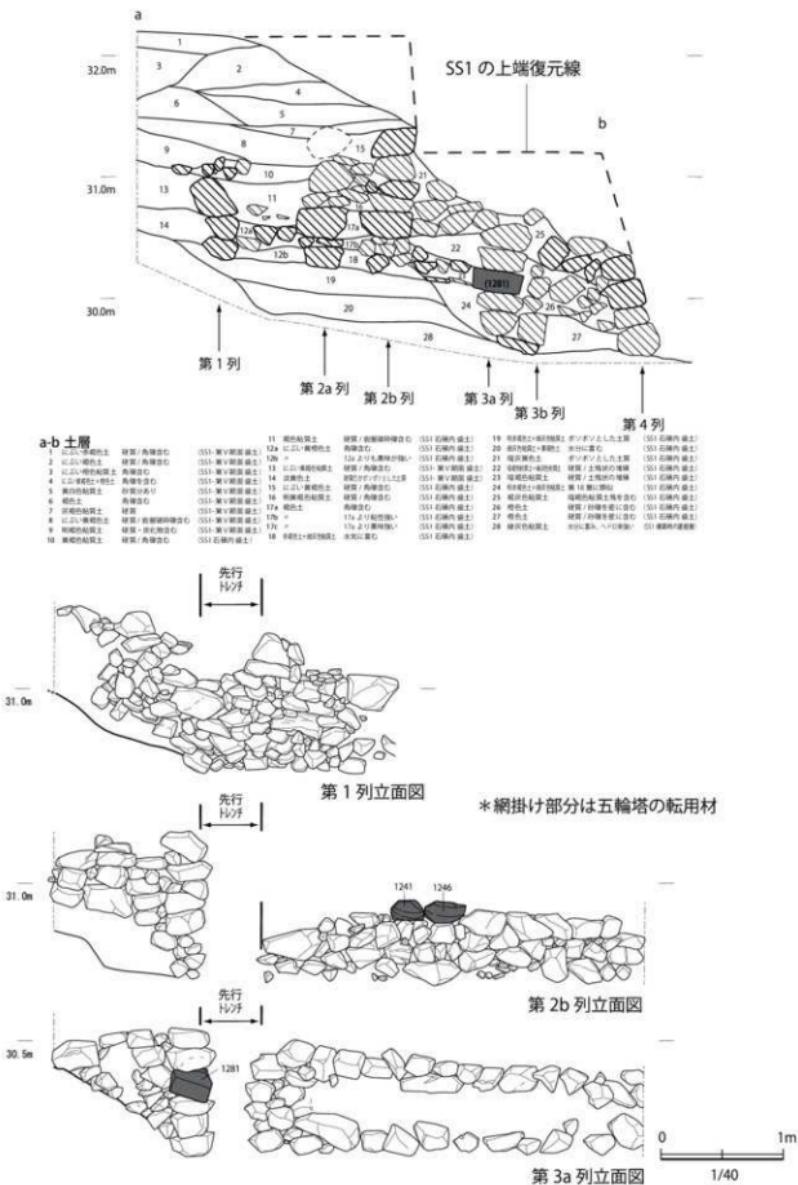
第47図 水の手曲輪 SS1(i)期実測図(1)



第48図 水の手曲輪 SS1( i 期 ) 実測図 (2)



第 49 図 水の手曲輪 SS1 内部の構造



第50図 水の手曲輪 SS1 内部の石積み壁体実測図

塙と2号土塁の肩部を削り出した後に岩盤由来の角礫や層状の礫が主体となる石材で構築されている。

なお東壁の掘り方上端と1号土塁の前面との間に幅0.6 mを測る狭い平坦面がつく。この平坦面には4本の柱穴が検出され、一直線上に位置するので柵列(SR8)とした。柱穴の深さは0.6 m前後と深い。

**2号土塁** 2号塙の南壁面から北側へ延伸する土塁である。長さ8.4 m、上幅1.2 m、下幅1.6 mを測る。土塁は、岩盤由来の細かい小礫の自然堆積層上に岩盤破碎疊混じりの褐色土で雑に盛土する(第44・52図)。

2号土塁の先端部は丸く收束して途切れる。この付近は2号塙の底面も途切れ落差1 m以上の斜面となる。この付近が谷筋からの入り口部と考えられる。つまり、1号土塁と2号塙および2号土塁による構成は虎口状構造と理解される。しかし、2号土塁より谷側(西側)は調査区外および市道敷下となるため、構造は不明である。

**SS1の機能** SS1はその構造上、大きく二つの機能的側面を有していたと考えられる。一つは、石積みによる土留め壁又は擁壁状の遺構であることから、曲輪面(第V期面)造成に伴う盛土の押圧や地下水圧による曲輪面の地崩れを防ぐ機能である。二つ目は、塙と土塁や柵列等を有機的に組み合わせる構造から、曲輪内を外部から遮断する防御的機能である。

#### (7) 第V期面とSS1の出土遺物

第V期面盛土内(第44図第26・33層)からは、漳州窯系青花皿(281)、景德鎮窯白磁、備前焼甕・擂鉢、土師器皿(585・603)が出土した。

SS1石積部では、検出面より備前焼甕(419・432・437)や平瓦(700)、盛土面(第50図第19-20層)では福建・広東窯白磁、漳州窯・景德鎮窯青花皿、青磁(205)等、石積み壁体の第3列間より褐釉陶器の天目碗(307)が出土した。また、スロープ部の第4層(第53図)では埴(905)がある。

SS1(II期)の1号塙内では、邵武四都窯白磁、景德鎮窯白磁小坏類(44・63)、福建・広東窯白磁碗(9)、漳州窯・景德鎮窯青花皿、褐釉陶器の四耳壺、土師質擂鉢(654)等が出土した。9a層の備前焼甕(414)や景德鎮窯青花皿、11層の瀬戸美濃焼天目碗(479)もある(第44図)。2号塙内では、景德鎮窯白磁皿、福建・広東窯白磁碗、青磁、備前焼擂鉢(371)等が出土した。

#### (8) 1号溝状遺構(SE1)

**位置** SF1(c期)に接続する溝状遺構である。切岸3に向けて緩やかにカーブを描いて調査区を東西に横断し、石積遺構(SS1)内を通って曲輪外へ到る。

**規模と構造** 全長は、現存長で34.4 mを測る。開渠部と暗渠部による構造である。開渠部は盛土面を掘り込み、暗渠部はSS1と連動して構築される。

SE1をSF1側からA～D区と平面的に区分した上で、各区の構造的特徴を報告する(第54図)。

**A区の構造** SF1(c期)との接続部分から6.8 mを測る。直線的に延びる開渠構造の区間である。溝の下幅は0.6 mだが上幅はSF1との接続部で1.2 m、コーナー部(B区)付近で0.9 mとすばまる。断面形は逆台形である。

SF1との接続部は、北側の壁面に石積護岸が設けられ、東・南側は壁面と底面との境にL字状の列石が巡る。底面には石敷が施され、SB4の柱穴に挟まれた範囲に拳大の礫が敷かれる。

SB4は1×2間(1.2 m×1.2 m)の規模で、SE1を直角に横切る。また、SF1の出入り口部とも方向が一致するので木橋と考えられる。このSB4の柱穴出土の備前焼擂鉢(末掲載)は、重根分類のVBに相当し、16世紀中頃～17世紀初頭の年代に該当する。

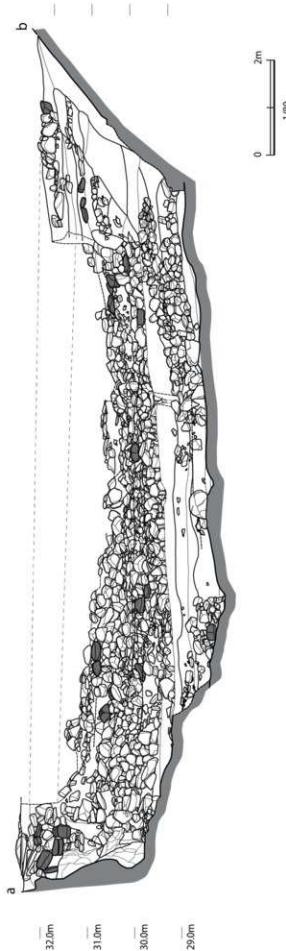
石積護岸は長さ2 m、高さ0.45 mで2段の石積みである。0.3 m×0.7 m大の大きい川原石や0.3 m大の割石を溝底面に据え、その上に小さめの割石や川原石を積み上げて壁面となす(第45図)。

石積護岸の東側延長方向はSF1外区の列石が連なる。この列石の0.3 m西側下面がSE1の始点である。

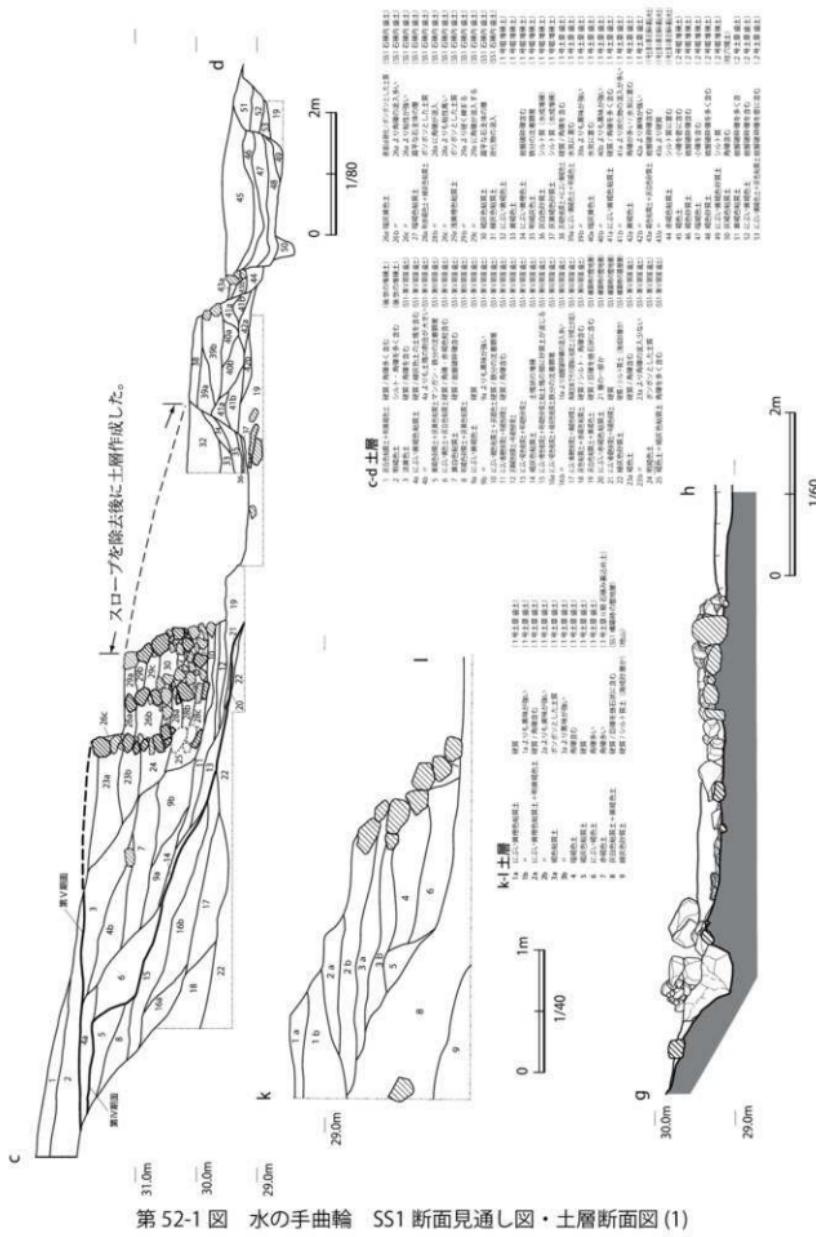
テラス面(石敷面)はSE1(A・B区)北側には幅0.9 mで連なる。このテラス面は扁平な岩盤破碎疊主体の石敷面である。途中で台形状に石敷面が途切れる箇所があり、この箇所はテラス面背面の段差も途切ることから通路面と解釈される(第54図)。

**B区の構造** 緩やかにカーブを描く開渠構造の区間で12.6 mを測る。溝の上幅は、壁面の崩壊で一定しない。壁面は両側とも塊石を乱雜に積み上げる石積護岸だが、部分的にしか遺存していない。部分的な護岸であった可能性もある。底面は平坦面が階段状に連続する構造である。

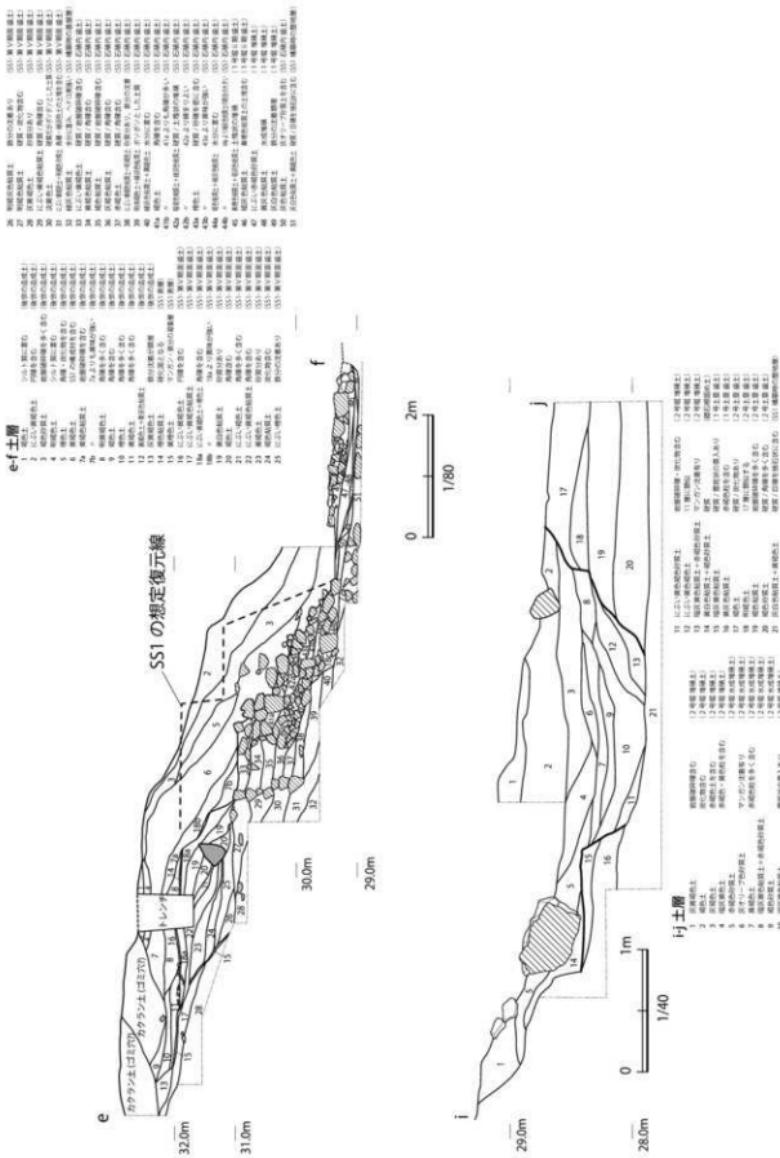
なお、B区の起点には、一辺3.6 m×1.8 mの平行四辺形の掘り込みがある。一見して溜め桟様である(第54図)。



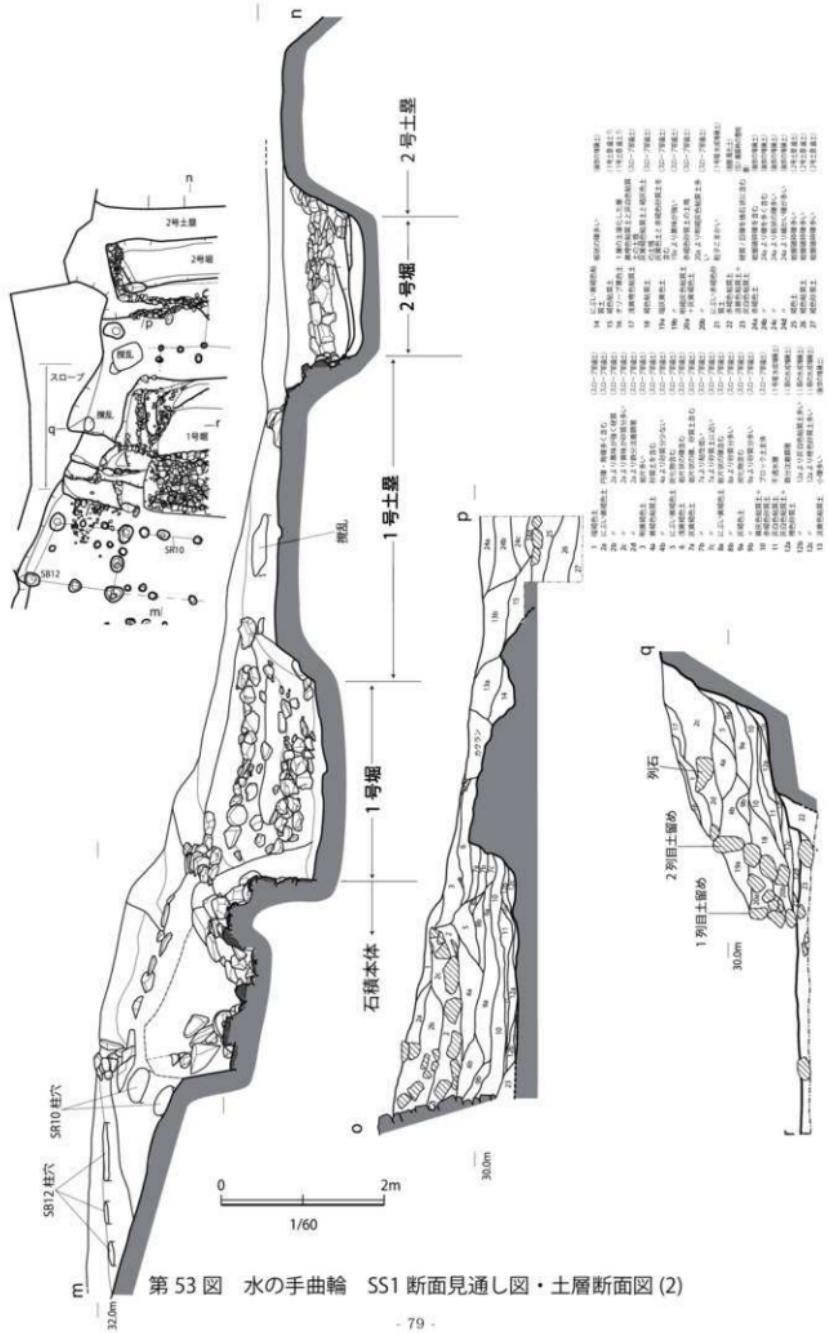
第51図 水の手曲輪 SS1(ii)期実測図



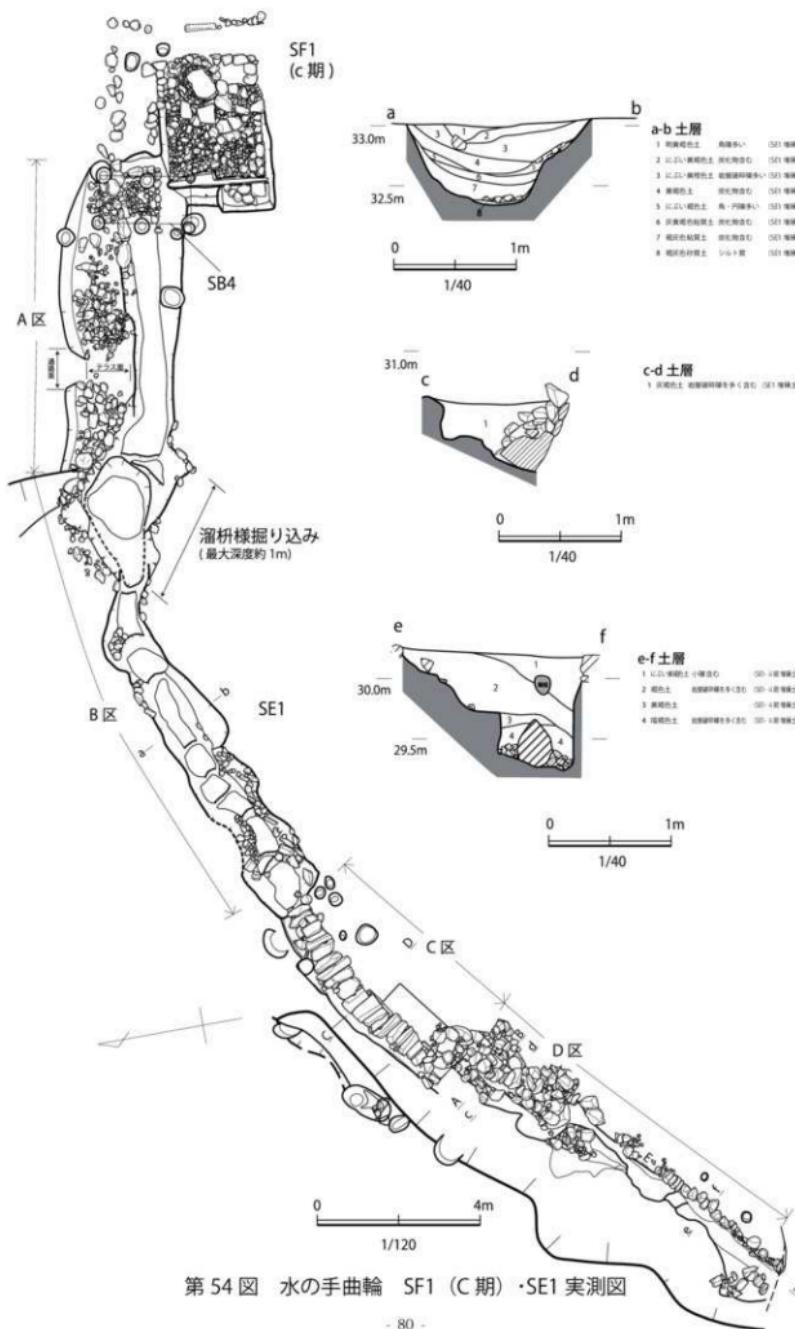
第52-1図 水の手曲輪 SS1断面見通し図・土層断面図(1)

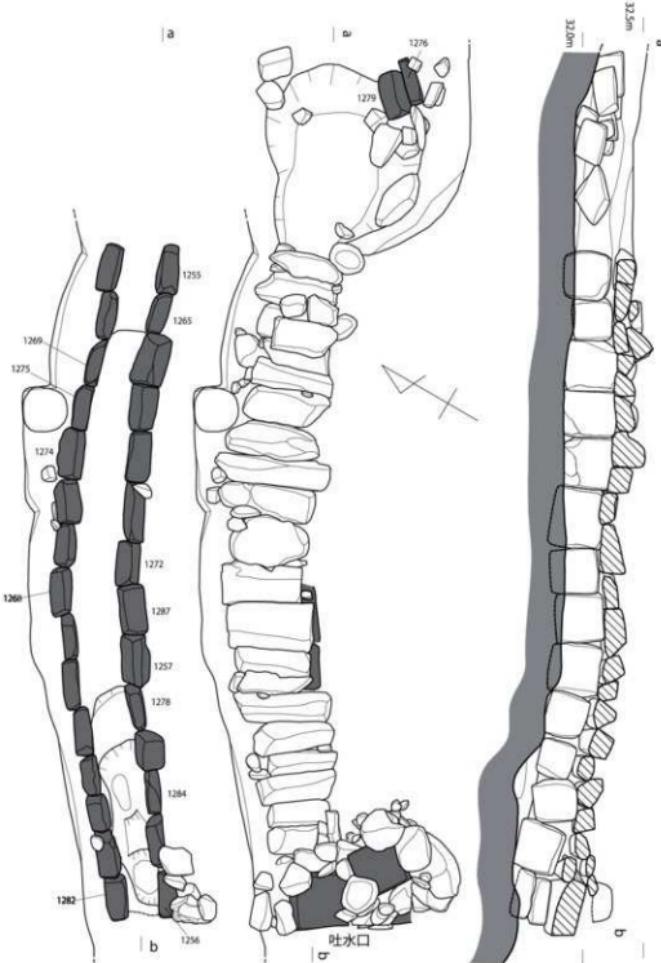


第52-2図 水の手曲輪 SS1 土層断面図(1)

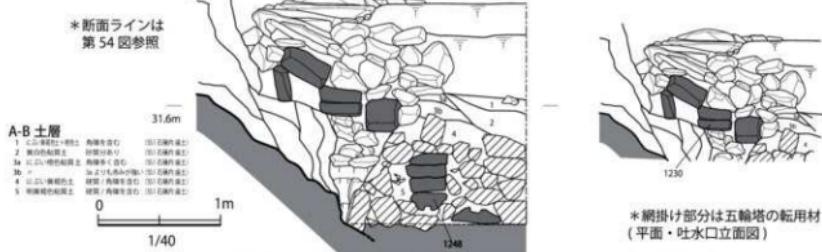


第53図 水の手曲輪 SS1 断面見通し図・土層断面図(2)



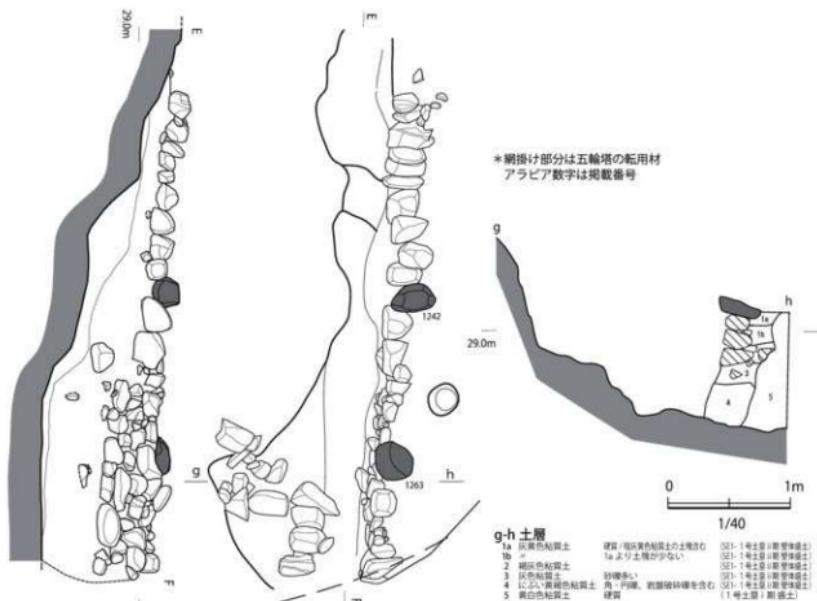
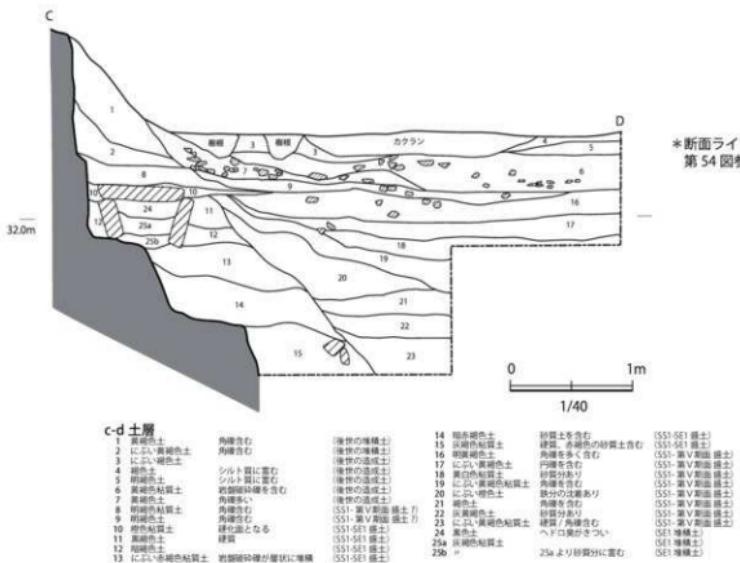


\*断面ラインは  
第54図参照

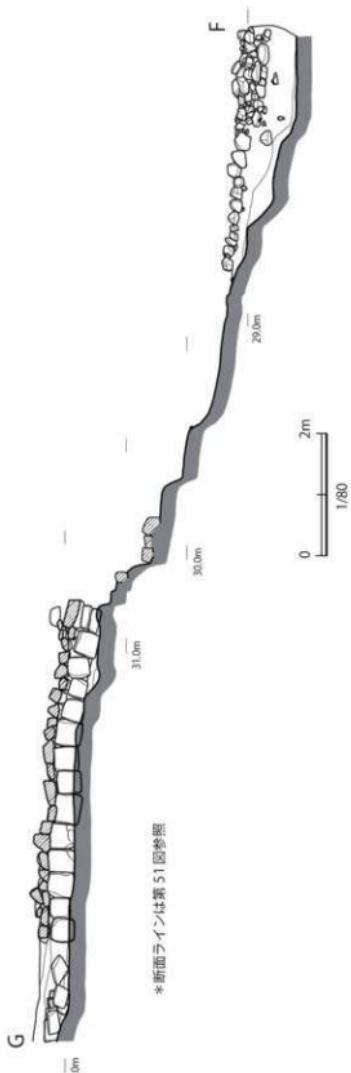


第55図 水の手曲輪 SE1 C区（暗渠部）及びD区 A-B立・断面実測図

\*網掛け部分は五輪塔の転用材  
(平面・吐水口立面図)



第56図 水の手曲輪 SE1 D区(開渠部) 実測図



第 57 図 水の手曲輪 SE1 D 区断面図

**C区の構造** 切岸 3 の直下に位置し、石積遺構 (SS1) と一体化する暗渠構造の区間である。吐水口までの長さは 5.6 m である (第 54・55 図)。

暗渠部構造は溝部分と吐水口からなる。底面の幅は 0.3 m、側壁の高さ 0.35 ~ 0.5 m を測る。暗渠部の断面形は箱型で、底面は緩やかな下り勾配が続き、吐水口付近で段差がついて平坦面となる。両側壁側に屋根部を削り落とされた火輪や地輪の五輪塔部材、計 27 枚を立位に並べて側壁とし、その上に火成岩の柱状剝石 21 枚を横位に置いて蓋とする。

吐水口は、南側壁側は地輪を 2 枚横位に、北側壁は地輪を 1 枚立位に用いて側壁に、地輪 1 枚で蓋とする。南側壁側には地輪 2 枚を含む控え積みがある。SE1 の暗渠部は、この SS1 部分のみである。SS1 に伴う上部構造 (土塁) の存在が想定される。

暗渠部の構築は、SS1 の石積み壁体 (第 1 図目) の東側から始まる (第 47 図)。SE1 暗渠部と SS1 の構築、および曲輪面の造成は一体的・連続的な土木作業であったと読み取れる (第 56 図 C-D)。

**D区の構造** SS1 の石積部と土塁を縱断して虎口部に到る、現存長 9.4 m の開渠区間である。吐水口から石積部底面までの落差は 1.8 m で、水は勢いよく流下する。溝は SS1 石積部と岩盤面との境を沿う構造で、溝の底面は 3 段構造で、吐水口前面では SS1 の石積み壁体最上段の石積みを露出させ、それより西側は岩盤を削り出して溝底とする。

D 区は、SS1 の i 期と ii 期で構造に差異がある。

SS1 (i 期) では、水は吐水口からそのまま直進して 1 号堀の内部へと導かれる。堀への導水部分は、隅角部や堀底を浅く掘り抜かれる (第 47 図)。

SS1 (ii 期) では、1 号堀の埋め戻された部分と 1 号土塁を縱断する構造となる。SS1 石積部の前面に到ると、一旦 1 m ほど南側へ直角に折れ、梢円形に側石を配す水溜部に接続する。この水溜部を起点とする溝は、南西側の虎口部に向けて直進する (第 51 図)。

直進部の溝は、断面箱形で、調査区内での最深部は標高 28.2 m である。底面は 3 段の平坦面からなり、末端部側ほど広くなる。

南側壁は 1 号土塁を切り通した壁面である。この壁面の下部は盛土、上部は石積みで、鉢巻状の石積護岸となる。五輪塔の水輪も使用される (第 56 図)。

北側壁は溝の末端部分のみが石積護岸となる。岩盤面からの湧水が溝内に流入する箇所でもある。

**出土遺物と年代** SE1 床面より邵武四都窯白磁皿、景德鎮窯青花皿や平瓦（701）等が出土した。溝内の堆積土中より、邵武四都窯白磁皿や景德鎮窯青花皿（239・248）、盤（262）、漳州窯系青花碗（268）、褐釉陶器四耳壺、備前焼擂鉢・甕（411）、瓦質土器火鉢（666）等が得られた。

A区の石敷面では備前焼甕（411）が岩盤破碎に混入していた。これら遺物の年代は、13世紀後半～16世紀後半と幅広いが、16世紀代が中心となる。

#### （9）掘立柱建物跡と柵列（第42図）

**規模と性格** 掘立柱建物跡は、桁梁行が1×2間・2×2間・2×3間の側柱建物である。

**身舎面積** SB1は二面庇付の建物跡で身舎面積は約11.4m<sup>2</sup>ある。SB2（約15m<sup>2</sup>）とSB5（約18m<sup>2</sup>）が大きいクラスとなり、20m超は認められなかった。

**掘立柱建物跡群** 主軸方向から3つの小群に分離できる。その内訳は、①群N-68～73°・E・N-12°・Wの一群（SB2・4・11・17・18・20）、②群N-55～60°・E・N-26～30°・Wの群（SB1・3・5・6・9・14・16・19）、③群N-32°・E・N-49°・Wの群（SB7・8・10・12・13・15）となる。

このうち、SB1・13はSS1（II期）の「門」、SB4はSF1・SE1に伴う「橋」と捉えられる。SF1や切岸2付近には1×1間の建物跡（SB6・8・11）があるが、これら3棟は調査区の両端に偏った位置にある。

**出土遺物** 掘立柱建物跡に伴う遺物は僅少である。SB1柱穴より景德鎮窯青花碗（226）が出土し、16世紀中頃の年代である。SB5身舎内では香炉（482）が認められた。瀬戸美濃窯の大窯3期後半にあたる。

**柵列との関係** SF1を囲むSR3と掘立柱建物跡の①群とは方向性が揃う。SE1の方向性にも沿う建物と柵列の配置である。SR12・15は②群の梁・桁方向と揃うので、建物群に付随すると考えられる。SR12は第V期面のテラス面に沿う。そのテラス面の東端は途切れるので、この部分は門にあたると解釈される。SS1内を東西に横断する柵列群（SR5～10）と掘立柱建物跡群③群は方向性が揃う。SS1の遺構軸線に規制された柵列と掘立柱建物跡群とみなされる。

**掘立柱建物跡の変遷** 掘立柱建物跡は切り合い関係から①→②群となる。③群はSB12・13の存在からSS2 II期に伴うものと考えられる。建物跡の時期はSB5出土の香炉（482）の年代から②群は16世紀末葉と考えられる。

#### （10）切岸と柵列

調査区内では、3箇所の切岸が確認された。曲輪B群裾部際に設けられる（第42～60図）。一方、曲輪A群側は削平を受けた箇所や調査区外になる部分があり、切岸の存在は確認できなかった。

切岸1は、切岸3から調査区外に続く。壁面は垂直に切り立てる構造ではなく、曲輪平坦面より2m付近を約1m削り立てただけで、あとは岩盤面を露出させる程度の造作である。

切岸2は、切岸1の下段に位置する。切岸1を掘り込んで1.6～2m×6mの不整形な平坦面とする。切岸よりも帶曲輪的な意味合いが強い。この平坦面の南側隅部にある割石や角礫の集積部は、SB11柱穴の根固め石である。

切岸3は、SB8付近からSS1内の吐水口（SE1）まで約7.2mの範囲である。壁面は垂直に近く、第V期面では最大高1.2mを測る。さらに壁面の下端部には犬走り状の段差が2段つく（第56図）。その幅は0.4mと0.6mである。このように第V期面下にも壁面は続くことから、切岸3は、第V期面よりも古い段階に構築されたとみてよい。残念ながら、この犬走り状の段差面の平面構造は追えていない。

なお、SE1暗渠部の上面付近は小さな段差があり、再度壁面を切り立てたようである。

切岸の出土遺物の多くは、曲輪B群からの流れ込みである。出土遺物の詳細は第7表を参照されたい。

切岸に伴う柵列は、切岸1・2付近に集中する。柱穴間距離は0.6mと2mがある。SR2は切岸1の裾部に沿って切岸3の境まで続く。SR1・14は切岸1の傾斜面上にある。切岸2の平坦面にあるSR13は、SR14と対になると考えられる。

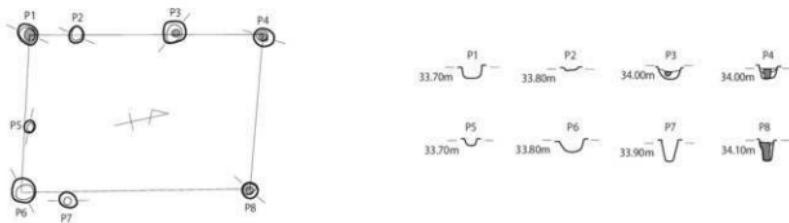
このように切岸1は、切岸3のような垂直壁を持たない代わりに、裾部や傾斜面に柵列を三重に配することで防御性を補完させる意図が感じられる。

#### （11）炉跡

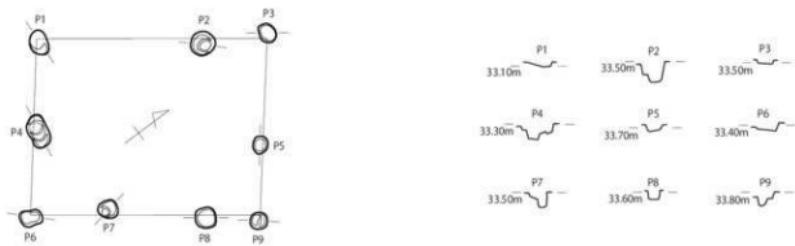
燒土や炭化物の集中する箇所を炉跡とする。第V期面で3箇所検出された（第42図）。

1号炉跡（歩跡1）はSB10の身舎内に位置するので、掘立柱建物跡の火處であった可能性がある。炉跡2はSB18に伴う可能性がある。炉跡3は親指大のガラス質や多孔質の鉄滓が数点含まれていた。このため鍛冶関係の炉であった可能性が高い。

水の手-SB2



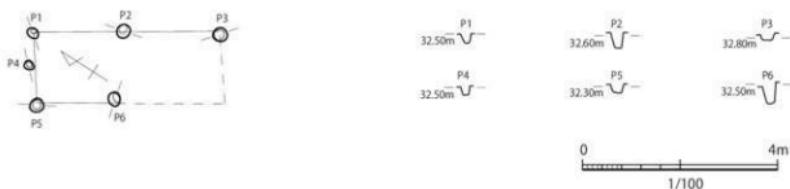
水の手-SB5



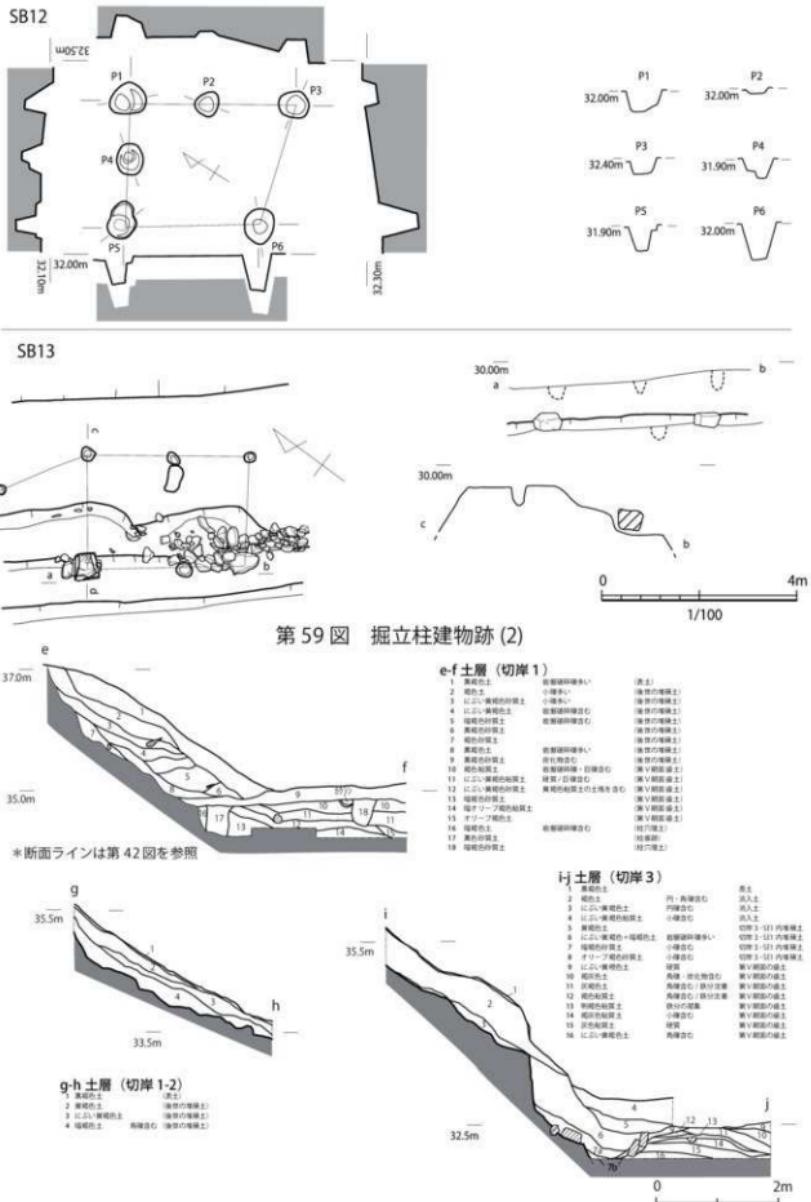
水の手-SB6



水の手-SB10



第 58 図 掘立柱建物跡実測図 (1)



## (12) 第V期面の時期

第V期面の構築時期を探る手掛かりとしてSB5身舎内で出土した瀬戸美濃焼の香炉（482）が挙げられる。この年代観は1575～1590年と時間幅が短い。また、SF1（c期）の石敷部下面出土の土師器皿（618）を島津氏による塩見城支配（1580年代）に伴うものとみれば、482の年代観と整合的である。

従って、第V期面は16世紀後半代でも末葉（1580～90年代）に造成された生活面と導かれる。

## 7 小結

水の手曲輪では都合5面の遺構面を確認できた。各遺構面の変遷は、下記のようにまとめられる。

第I期・少なくとも14世紀前半段階には人間活動の痕跡を認めることが出来る。

第II期・自然地形の改変が行われるのは16世紀初頃頃で窪地状遺構の護岸として石積遺構（SS2）が構築される等、この空間が重視され始める。

第III期・窪地状遺構の護岸は改修を受ける（古段階）が、16世紀中頃には埋没に近い状態となり井戸（SF1）と排水施設（SE3）が構築されて（新段階）、曲輪が水場としての性格をより強く示す。

第IV期・16世紀後半代には、曲輪面の造成に伴って、井戸枠の嵩上げと排水施設（SE2）が設けられる。井戸前面に石敷面が伴うのが特徴的である。

第V期・16世紀後半代でも末葉に入ると大規模な造成工事が成される。曲輪面は一挙に拡大して水場的空間を保持しつつも、防御的施設（SS1）に護られた生活空間が出現する（SS1Ⅰ期）。域内における曲輪の位置付けが大きく変わったことを示す。

SS1は、さらにスロープ部や掘と土塁が追加されて、虎口状構造に変化を遂げる。防御施設から城門への転換である（SS1Ⅱ期）。この転換は17世紀初頭段階までに生じたと考えられる。

曲輪の終焉時期は、17世紀初頭よりも下る遺物は皆無に近いので、17世紀初頭頃とみられる。

なお、第I期の間、第II期面と第III期面及び第IV期面と第V期面の境には、部分的な検出ではあったが、焼土・炭化物層の存在や木杭の被熱・炭化の現象が認められた。その原因は不明とせざるを得ないが、戦災や火災の可能性は十分考慮される。

（今塙屋）

## 第7節 西側谷部

位置と構造 南側曲輪群の東西には谷地形が深く入り込む。このうち西側の谷地形を西側谷部として調査した。谷底北西側に比留巻神社が鎮座し、谷の南東側に参道が通じている。

現況では谷底に3段の平坦面が形成され、畑地等に利用されていたので、曲輪の存在が想定された。

調査により東西の斜面裾に平坦面が確認された。東西共に最大幅約2.5mで、東側の平坦面際には幅0.2m程の溝が検出された（第61図a-b）。

層位 谷中央部の表土下は褐色系粘質土が層厚1m前後と厚い。現地形の平坦面に由来する堆積土である。近世以降の遺物を多く含む。この堆積土より下層は東西斜面からの崩落土及び流入土の堆積層で、谷部が自然埋没していく状況が把握される。

東西の岩盤削り出しによる平坦面は、褐色系粘質土の上端ラインに一致する。平坦面上にも崩落土、および流入土が堆積する（第62図a-b～e-f）。

一方、比留巻神社西側では凹凸に富む層（第5層）がある（第62図g-h）。凹凸は神社の斜面部分にあることから、九十九折の旧参道の断面と考えられる。

遺物 崩落土中より白磁（62）や青磁（98）、瀬戸・美濃（468）、褐色系粘質土や崩落土から近世肥前系陶磁器（489～496・499・500・504～508・510・511・514・516・520・526・541・542）、萩焼系杯（544）、近世瓦（705・707～709・711・714～715・717）等が出土した。

遺構 遺構は岩盤削りだし平坦面上より柱穴3基を検出した。柱穴から遺物の出土はない。

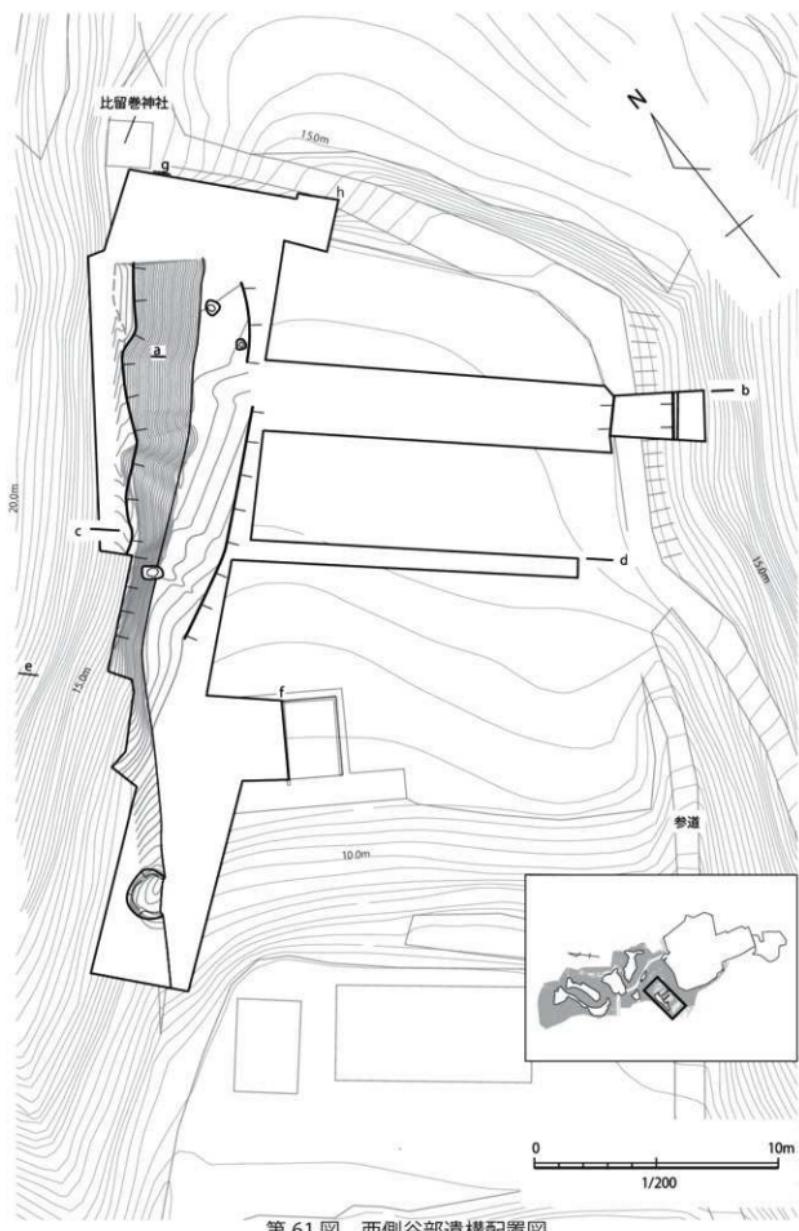
曲輪面の有無 褐色系粘質土は、堆積状況から谷部における現況の地形（3段の平坦面）を形成する際の造成土と判断される。造成時期は、造成土出土の遺物から近世後半以降であると考えられる。

岩盤削り出しの平坦面についても造成時に斜面を削平したものと考えられる。

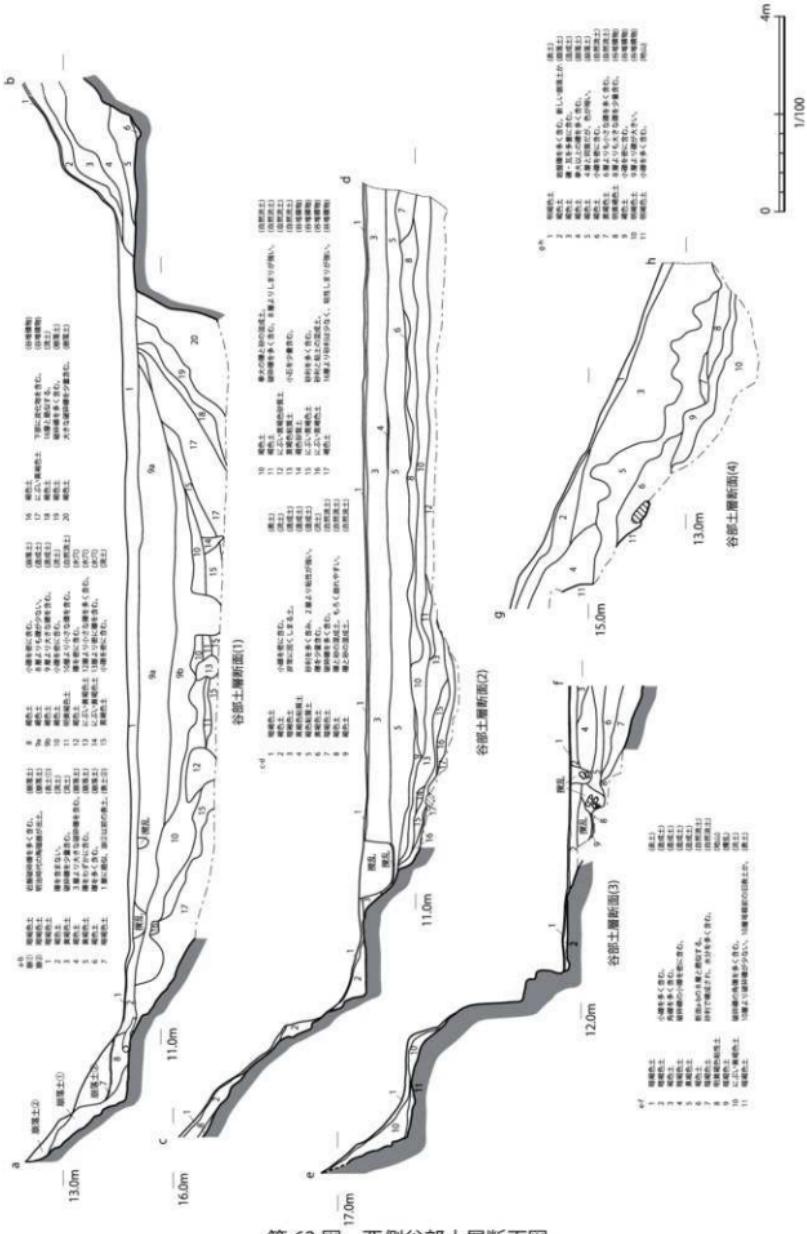
造成土より下層の自然堆積土層出土の遺物。特に貿易陶磁器に関しては、周辺の曲輪群出土遺物と種別や年代等整合するものが多い。これは、曲輪群から谷部へと遺物が流れ込んだ結果と考えられる。

谷部は、帶曲輪などの遺構の存在が想定された。しかし、調査の結果から判断すると、自然地形の状態であった。また、水田等の耕作地として利用されていた可能性も考慮される。

（田中達）



第61図 西側谷部遺構配置図



第62図 西側谷部土層断面図

第3表 西側曲輪群 曲輪(平坦面)面積

曲輪名	面積
曲輪 A1	115.7m <sup>2</sup> + α
曲輪 A2	70.0m <sup>2</sup>
曲輪 A3	202.1m <sup>2</sup> + α
曲輪 A4	38.3m <sup>2</sup> + α
等高輪 A3a	17.8m <sup>2</sup>
等高輪 A3b	35.1m <sup>2</sup> + α
等高輪 A4	3.4m <sup>2</sup> + α
曲輪 A 総 小計	482.3m <sup>2</sup> + α

曲輪名	面積
曲輪 B1	83.5m <sup>2</sup>
曲輪 B2	117.0m <sup>2</sup>
曲輪 B3	203.5m <sup>2</sup> + α
等高輪 B3a	23.5m <sup>2</sup> + α
等高輪 B3b	21.8m <sup>2</sup> + α
曲輪 B4	91.6m <sup>2</sup> + α
曲輪 B 群 小計	540.1m <sup>2</sup> + α
西側谷部	63.7m <sup>2</sup> + α

第4表-1 西側曲輪群掘立柱建物跡一覧表

位番	番号	種別	規模		棟行	桁行	柱穴	出土遺物	復元作業	備考	切り合い		
			方丈	柱間									
A1	S81	側壁 2×1	1.48	7.4	23.3	23.3	N 0° E	3.45	4+ α	30~40	50~70	○ 行の中央の柱はなし。	
	S82	側壁 1×2	1.23	1.82	1.41	N 1° W	4.86	6+ α	30~40	5~50	土壁/747	○ 西面に延びる可能性あり	
	S83	側壁 1×1	1.30	1.30	20.4	20.4	N 72° W	2.66	4	30~40	50~70	○ 門跡の可能性あり	
	S84	側壁 1×1	1.86	1.86	2.15	2.15	N 0° W	4.00	4+ α	30~40	5~60	○ 門跡の可能性あり	
A2	S81	側壁 1×2 北面	3.03	3.03	3.95	1.97	N 11° N	1.97	8	20~40	10~70	青花 磁器焼成系/210, 214	○
	S82	側壁 2×1 北面	1.00	1.00	1.66	1.97	N 13° E	19.11	12	20~70	70~75	青花 磁器焼成系/734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 753, 755, 756	○
	S83	側壁 1×1	1.44	1.44	1.52	1.52	N 38° W	2.39	4	30~20	50~70	土壁/748	○
	S84	側壁 1×2 北面	3.59	3.59	4.06	2.61	N 3° E	14.58	7+ α	25~60	60~66	四脚 弦纹/25	○
A3	S81	側壁 2×3	4.19	2.10	7.03	2.35	N 13° W	29.92	9	30~60	50~90	○ ATB1を含む。	○
	S82	側壁 1×3 北面	416	416	540	1.80	N 6° W	22.49	9+ α	30~50	25~50	中国陶磁器 西/337	ATB1を含む。
	S83	側壁 3×2	1.44	1.15	3.07	1.53	N 99° E	10.56	7+ α	20~40	5~60	○ 廻の方へ延びる可能性あり	○
	S84	側壁 1×2	1.49	1.49	3.08	1.54	N 64° E	4.59	4+ α	20~30	5~30	○ 廻の方へ延びる可能性あり	ATB1に切られ。
A4	S85	側壁 1×1	1.62	1.62	4.98	4.98	N 7° W	8.07	3+ α	40~50	10~60	○ 廻の方へ延びる可能性あり	ATB1に切られ。
	S86	側壁 1×2 北面	1.88	1.88	3.92	1.96	N 9° W	7.36	8+ α	30~70	20~66	○ ATB1に切られ。	○
	S87	側壁 1×3	1.61	1.61	3.35	1.12	N 80° W	5.39	5+ α	30~40	10~30	○ ATB1に切られ。	○
	S88	側壁 1×2	1.31	1.31	2.88	1.45	N 71° E	3.88	5+ α	20~45	20~60	○	○
A5	S89	側壁 1×2	2.06	2.06	3.35	1.67	N 75° W	6.96	5+ α	20~30	15~45	○	○
	S90	側壁 1×2	1.97	1.97	3.36	1.68	N 57° E	6.68	5+ α	20~60	15~30	青花 唐物焼成系/243	ATB1に切られ。
	S91	側壁 2×4	5.05	2.83	8.10	2.00	N 8° W	40.91	14	30~50	10~70	青花 磁器焼成系/402, 403	ATB1を含む。
	S92	側壁 3×3	5.82	1.94	6.15	2.05	N 7° W	35.79	16	30~60	20~70	青花 磁器焼成系/245	ATB1を含む。
A6	S93	側壁 2×3	3.83	1.83	5.83	1.96	N 23° W	22.33	12	20~50	29~60	石砾/1199	○ 開口仕切り
	S94	側壁 1×2	2.42	2.42	3.91	1.85	N 88° E	9.46	6	30~50	35~55	青花 磁器/123	ATB1に切られ。北面に延びる可能性あり。
	S95	側壁 2×3	2.46	1.23	6.46	2.15	N 9° W	15.89	10	20~60	20~66	土壁/766	○
	S96	側壁 2×4	4.04	2.02	7.01	1.75	N 87° E	28.32	12	20~60	30~70	○	ATB1に切られ。ATB1に切られ。
B1	S97	側壁 1×3	2.72	2.72	3.93	1.81	N 88° E	10.69	6+ α	20~30	15~50	○	○
	S98	側壁 1×2	1.74	1.74	6.37	2.33	N 79° E	23.76	10	20~50	20~60	○	ATB1に切られ。
	S99	側壁 2×3	4.01	2.00	6.41	2.34	N 88° E	25.98	8+ α	20~40	20~50	○	ATB1に切られ。
	S100	側壁 2×2	3.61	1.90	5.09	2.34	N 57° E	18.37	7+ α	20~45	15~90	○ 鋼と鍔	ATB1に切られ。
B2	S101	側壁 1×2	2.45	2.45	3.49	1.74	N 43° E	8.55	5+ α	30~40	20~80	○	○
	S102	側壁 1×2	1.23	1.23	3.08	1.54	N 62° W	3.79	5+ α	20~40	15~40	○	ATB1に切られ。
	S103	側壁 1×3	2.76	1.38	3.02	3.02	N 7° W	8.34	8+ α	20~30	10~45	○	○
	S104	側壁 1×2	3.63	1.83	3.95	1.32	N 21° W	14.34	12+ α	15~35	10~70	○	○
B3	S105	側壁 1×2 西面	3.59	3.59	4.39	2.20	N 68° E	15.96	6+ α	15~30	30~50	○	ATB1に切られ。
	S106	側壁 1×2 北面	1.39	1.39	4.49	2.25	N 15° W	6.24	7+ α	20~40	10~25	○	○
	S107	側壁 3×2	3.05	1.02	3.72	1.86	N 70° E	11.35	12	10~40	5~60	○	ATB1に切られ。
	S108	側壁 2×2	1.82	0.91	4.05	2.61	N 74° E	7.37	8	40~50	40~80	○ 鋼と鍔	ATB1に切られ。
B4	S109	側壁 2×1	1.99	0.99	4.00	4.00	N 72° E	7.96	6+ α	20~50	30~66	四脚 弦纹/1199	○ 開口仕切り
	S110	側壁 2×2	2.53	1.26	4.47	2.33	N 79° E	11.82	7	30~50	5~30	○	○
	S111	側壁 2×3	4.80	2.40	5.93	1.86	N 77° E	28.46	10	20~50	10~70	青花 磁器/189	○
	S112	側壁 1×2	1.31	1.31	2.77	1.39	N 1° W	3.63	5+ α	30~40	15~25	○	○
B5	S113	側壁 1×1 東面	2.70	2.70	4.56	4.56	N 96° E	12.31	6	30~50	5~50	○	○
	S114	側壁 2×2 西面	4.00	2.00	4.00	2.00	N 64° E	16.00	11	20~80	20~90	青花 唐物焼成系、青花 磁器焼成系、白磁、磁器/1199	○
	S115	側壁 1×2	3.00	3.00	4.00	2.00	N 30° W	12.00	6	30~50	50~70	○	○
	S116	側壁 1×2	3.50	3.50	4.50	2.25	N 22° W	15.75	6	20~40	20~66	四脚 弦紋/1199	○
B6	S117	側壁 2×2	2.81	1.40	3.67	1.83	N 36° W	10.31	6	30~40	0~66	○	ATB1に切られ。
	S118	側壁 1×1	2.83	1.41	3.95	3.95	N 44° E	11.18	6	20~50	5~30	○	○ 行の中央の柱はなし。
	S119	側壁 1×3	2.13	2.13	4.43	1.48	N 38° E	9.44	5+ α	20~35	15~70	○	○
	S120	側壁 2×2	2.92	2.92	3.47	1.98	N 14° W	10.13	5+ α	30~40	5~40	白磁 磁器焼成系/69	○
B7	S121	側壁 1×2	3.32	3.32	5.89	2.95	N 45° W	19.55	5+ α	20~40	5~30	○	○
	S122	側壁 2×2	2.62	2.62	4.77	2.38	N 33° E	12.50	5+ α	20~40	20~40	○	○
	S123	側壁 1×1	1.73	1.73	2.86	2.86	N 85° W	5.01	3+ α	40~50	20~30	○	○
	S124	側壁 2×2	2.99	1.45	4.84	2.42	N 80° E	14.04	5+ α	20~25	5~20	○	○
B8	S125	側壁 1×2	1.95	1.95	3.81	1.91	N 74° E	2.59	4+ α	40~60	10~50	○	○ 門跡の可能性あり
	S126	側壁 1×3 東面	2.23	2.23	4.06	1.81	N 44° E	20.26	16+ α	20~50	20~70	○	○
	S127	側壁 1×3	2.72	2.72	5.88	1.96	N 35° E	15.96	5+ α	20~35	40~80	土壁/597	○
	S128	側壁 2×2 西面	3.19	1.57	3.63	1.81	N 26° W	11.36	11+ α	30~50	10~30	青花 磁器焼成系/226	○
B9	S129	側壁 2×3	3.17	1.28	1.22	1.22	N 27° W	12.06	6+ α	25~50	5~40	青花 磁器焼成系/233, 灰化石/1221	○
	S130	側壁 1×1	1.28	1.28	1.22	1.22	N 27° W	1.57	1+ α	30~35	5~60	○	○ 北側側に延びる可能性あり。
	S131	側壁 1×2	1.18	1.18	1.22	2.20	N 11° W	2.06	6	20~55	20~40	青花 磁器焼成系/233, 灰化石/1221	○
	S132	側壁 2×3	3.74	1.87	4.79	1.80	N 30° W	17.92	9+ α	30~70	10~70	青花 磁器焼成系/482	○
水の手	S133	側壁 1×2	1.24	1.24	2.77	1.18	N 30° W	3.43	4	30~70	5~20	○	○
	S134	側壁 2×2	2.15	1.07	2.87	1.43	N 49° W	6.15	5+ α	30~50	10~30	○	○

第4表 -2 西側曲輪群掘立柱建物跡一覧表

位置 (面積)	番号	種別	規模	梁行	軒行	方位	寄食面積 (m <sup>2</sup> )	柱数	柱径 (cm)	柱深 (cm)	出土遺物	復元作業 ①	備考	切り合い	測定値
			間	付高 (m)	梁高 (m)										
S88	倒柱	1×1	1.39	1.39	1.34	1.34	N 65°W	1.87	3+α	35~40	10~20		○	北西側に延びる可能性あり	
S89	倒柱	1×2	1.86	1.86	4.01	2.00	N 66°E	7.46	4+α	20~40	10~20		○		
S90	倒柱	2×2	1.44	0.72	3.88	1.94	N 32°E	5.60	6+α	20~30	20~40		○		
S91	倒柱	α×1	1.47	1.47	N 68°E			2+α	20~35	10~35			○		
S92	倒柱	2×2	2.58	1.29	3.28	1.64	N 32°E	8.47	6	40~70	20~70		○	門跡の可能性あり	
S93	倒柱	1×1	2.32	2.32	3.32	3.32	N 35°E	7.70	4	20~25	20		○	遺石有り、門跡の可能性あり	
S94	倒柱	2×2	5.27	5.27	N 26°W			3+α	30~35	7~32			○	北東側に延びる可能性あり	
S95	倒柱	1×3	2.18	2.18	7.90	2.63	N 36°E	17.20	6+α	25~50	10~25		○		
S96	倒柱	1×2	1.79	1.79	2.18	2.18	N 55°E	3.90	4+α	25~35	10~35		○		
S97	倒柱	1×3	2.38	1.79	4.09	1.36	N 73°E	9.73	5+α	25~50	10~28		○		
S98	倒柱	1×1	2.30	2.30	2.43	2.43	N 15°W	5.58	3+α	20~45	7~30		○		
S99	倒柱	1×1	2.38	2.38	2.25	2.25	N 58°E	5.35	3+α	20~50	10~25		○		
S100	倒柱	1×3	3.80	3.80	5.59	1.86	N 22°W	21.20	6+α	30~45	20~35		○	SBSを切る。	

※ 1 掘立柱建物跡の復元作業の中で、現地で確認を行ったものは○、図上で復元を行ったものは○とする。

第5表 西側曲輪群柵列一覧表

位置 (面積)	番号	実長 (m)	柱数	方位	出土遺物	切り合い	復元作業①	備考	測定値
A1	SR1	6.30+α	5+α	N 47°W				○	
	SR2	3.11+α	6.94+α	4+α	6+α	N 48°E		○	
	SR3	4.24+α	3+α	N 18°W				○	
	SR4	5.93+α	5+α	N 9°E				○	
	SR5	1.69+α	3+α	N 10°W				○	
	SR1	12.37+α	7+α	N 10°E				○	
	SR2	5.94+α	4+α	N 82°W 遺石 回 破				○	
	SR3	9.03+α	7+α	N 64°E				○	
A2	SR4	6.83+α	6+α	N 9°E				○	
	SRS	5.60+α	4+α	N 17°E				○	
	SRE	4.23+α	3+α	N 63°E				○	
	SRT	1.95+α	3+α	N 5°W				○	
	SRI	6.25+α	18+α	N 5°W				○	
	SR2	12.65+α	9+α	N 4°E				○	
	SR3	4.60+α	3+α	N 61°E				○	
B1	SRI	6.78+α	6+α	N 35°E				○	
	SR2	4.80+α	4+α	N 24°W				○	
	SRI	3.59+α	4+α	N 13°W				○	
B2	SR2	7.59+α	7+α	N 14°W				○	
	SRS	4.34+α	4+α	N 49°W				○	
	SRE	3.68+α	5+α	N 21°W				○	
	SRI	17.29+α	11+α	N 16°W 南端 輪枕石/159、荷花、唐物鏡架系				○	
	SR2	16.99+α	11+α	N 0°W 白磁罐・広葉瓶系/54L、青磁碗、罐底・広葉瓶系				○	
	SRI	11.10+α	10+α	N 11°W				SB5B2に切られる。	
B3	SRS	5.31+α	4+α	N 17°W				○	
	SRE	4.64+α	5+α	N 20°W				○	
	SRI	3.82+α	3+α	N 57°E				○	
	SRT	8.92+α	6+α	N 13°E				○	
	SRI	1.00+α	2+α	N 32°E				○	門跡の可能性あり
B4	SRI	6.73+α	6+α	N 65°W 土跡西面/5/53				○	
	SRI	10.71+α	8+α	N 19°W				○	
	SRI	14.56+α	8+α	N 17°W 白磁 輪枕石系				○	
	SRI	14.89+α	8+α	N 60°W				○	
	SRI	17.67+α	8+α	N 32°E				○	
	SRI	17.75+α	4+α	N 36°E				○	
	SRI	10.46+α	10+α	N 41°E				○	
	SRI	12.51+α	14+α	N 36°E				○	
	SRI	11.00+α	4+α	N 43°E				○	
	SRI	15.83+α	5+α	N 34°E				○	
	SRI	15.76+α	4+α	N 24°E				○	
	SRI	2.76+α	2+α	N 37°E				○	
	SRI	17.43+α	8+α	N 34°E				○	
	SRI	3.92+α	4+α	N 29°W				○	
	SRI	2.45+α	3+α	N 12°W				○	
	SRI	8.13+α	6+α	N 81°W				○	
	SRI	3.38+α	4+α	N 74°W				○	

※ 1 掘立柱建物跡の復元作業の中で、現地で確認を行ったものは○、図上で復元を行ったものは○とする。

第6表 炉跡計測表

遺構名	位置	平面形	基軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	出土遺物	備考
炉跡 1	水の手	円形	40				
炉跡 2	水の手	55					
炉跡 3	水の手	楕丸形	40	30	5 (30)	鉄滓	

※ ( ) は推定深度

第7表の凡例

※1 遺構出土遺物については、瓦、土器、鉄製品、銅製品、木製品、石製品を除く、中近世陶磁器、中世土器、土製聖人像のみを掲載する。

## ※2 表記の体裁

## 掲載分

(例) 青花 景徳鎮窯系碗 /208 (B)

種類 器種 (レイアウト番号) (分類)

## 未掲載分

(例) 白磁 景徳鎮窯系皿 (E-2b)

種類 器種 (分類)

※3 分類については、以下の分類を援用した

(出典文献はP.250 参照)

白磁 山本(2000)、森田(1982)、新垣・瀬戸(2005)

青磁 上田(1982)

青花 小野(1982)

偏前焼 重根(2005)、乗岡(2000)

瀬戸美濃焼 藤澤(2008)

常滑焼 中野(1995)

近世陶磁器 大橋(2004)

土器類 本報告分類 (第VI章第2節1参照)

瓦質土器 和泉河内型糞便:森島(2007)、椎葉型糞便:長谷川(2008)、

防長型糞便:西原・佐藤(2007)、瓦質糞便B:鈴木(1996)、

防長型糞便:岩崎(1990)、火鉢:藤原(2005)

石臼 桐山(1996)

第7表-1 西側曲輪群遺構出土遺物一覧表

出土地点	開闢分	未開闢分
西側曲輪群 一帯	偏前焼 磐鉢 /349 (B II)	
	白磁 景徳鎮窯系皿 (E-2b)	
	白磁 福建・広東窯系碗 (D)	
	青磁 内溝皿 /141	
	白磁口白 /1154 (C)	
曲輪 A群 一帯	偏前焼 磐 (山土)	
	白磁 福建・広東窯系 /6 (C)	
曲輪 A1	白磁 福建・広東窯系 /6 (C) 偏前焼 磐鉢 /393 (V B)	
	白磁 磐 (D)、偏前焼 磐 (B II)、D、輪花皿、 青磁 磐 (D)	
	偏前焼 磐 (山土、田土)	
2帯	偏前焼 磐鉢 /582 (E-3)	
	偏前焼 磐 (山土)	
3帯 土器類 皿	白磁 福建・広東窯系 /775 (新垣・ 吉原三丁目)	
寶塚 A1	青磁 磐 or 皿	
	土器類 皿	
	白磁 福建・広東窯系 /106, 110 (C II)	
	青磁 磐 (B II, B IV)	
曲輪 A2	青花 景徳鎮窯系碗 (C)、瀬戸 窯系碗 (C)	
	偏前焼 磐 (山土)	
	白磁 武式四都窯系 /22 (D)	
	青磁 磐 (B II)、青花 /196	
	青花 景徳鎮窯系碗 (C)、瀬戸 窯系碗 (C)、輪花皿	
	偏前焼 瓜口壺 /457 (V)	
	偏前焼 磐 (山土)	
	青磁 磐 (B II, E)	
高須川 直堤	白磁 景徳鎮窯系碗 (C)	
	青花 景徳鎮窯系碗 (E)	
	瓦質土器 /661	
	白磁 武式四都窯系 /25 (D)	
曲輪 A3	青磁 磐 or 皿	
	白磁 景徳鎮窯系 /角舟 (D)、武式四都窯系 青磁 磐 (B IV)	
	青花 景徳鎮窯系碗 (C)、皿 (B I)	
	偏前焼 磐鉢 (山土、田土)	
	白磁 景徳鎮窯系小舟 (D)、武式四 都窯系 /12 (C)、 景徳鎮窯系 /43 (E-2b)	
	青磁 口折皿 /148	
	青花 景徳鎮窯系碗 (B, C)、皿 (B1, B2, C)	

第7表-2 西側曲輪群遺構出土遺物一覧表

出土地点	開闢分	未開闢分
2帯	瓦質土器 瓢印 /658、器種不明 6559	偏前焼 磐鉢 (IV A, V A)、甕 (V B、山土)
A1付	青花上口 /1152 (C)	
A1付	青磁 花口皿 /163	
A2	中國陶器 甕 /337	
曲輪 A3	青花 景徳鎮窯系碗 /243 (C) 偏前焼 磐鉢 /405 (V B)	
	白磁 景徳鎮窯系 /41 (E-2b)	
	白磁 武式四都窯系 /56 (E-3)	
	青花 景徳鎮窯系碗 /236 (B1)	
	青磁 甕 /123 (D)	
	青花 景徳鎮窯系小舟 /299、景德鎮 窯系碗 /208 (B)	
等曲輪 A3	中國陶器 甕 /336	
	土器類 甕 /615 (無)	
	白磁 景徳鎮窯系 /2 (大宰府V Ab)	
等曲輪 A3b		偏前焼 磐 (山土、田土)
土器類 甕 /592 (F)		
古墳	青花 景徳鎮窯系碗 /16, 19, 29 (D)、小瓶 /36, 37、景德鎮 窯系 /47 (E)、福建・広東窯系 碗 /10, (C)	
	青花 景徳鎮窯系碗 /83 (B II), 121, 122 (D), 器種不明 /203, 亂 /201	
切跡 A3	青花 景徳鎮窯系碗 (C, E)	
	偏前焼 磐鉢 /387 (V A)	
	王器類 甕 /563 (C), 590 (F), 614 (無), 608	
	青花下口 /1151(B)	
	偏前焼 磐 (山土)	
	偏前焼 甕 天目碗	
	白磁 武式四都窯系皿	
1層	青磁 磐 (C II), 131 (E)	
	青磁 磐 (D)	
	青花 景徳鎮窯系皿 (O)	
	偏前焼 甕 (山土)、壺鉢 (山土)	
	瓦質土器 双耳釜 /645	
	偏前焼 染付 盆 /512 (V)	
曲輪 A4	白磁 武式四都窯系 /27 (D)	
	瓦質土器 双耳釜 /639	
	青磁 瓶 (99, 101) (IV)	
	圓盤・萬葉鏡 亂絹大面 /472 (復 刻V古)	
3層	偏前焼 甕 天目碗 /306	
8層	青磁 磐 /124 (D)	
10層	偏前焼 磐 (山土)	

第7表-3 西側谷輪群及び西側谷部遺構出土遺物一覧表

出土地点	発見分類	未収載分
曲輪群 1号	白磁 漳州窯系高足 /34 (D)	白磁 福建窯系小杯
	青磁 磁 (E)、碗 or 盆	
	備前焼 錠 (IV A)	
	青花 漳州窯系盤 (C)	
	備前焼 錠 (IV B)	
1層 西側 谷部	土師器 盆 /564, 565 (C)	白磁 福建・広東窯系碗
2層	青磁 磁 /128 (D)	青磁 碗 or 盆
	備前焼 錠 (山土)	
	白磁 漳州窯系皿	
82 潤屋	雪花 漳州窯系高足 /286 (C)	
潤屋	細釉陶器 天目碗 /304	
	土師器 瓢 /555 (B)	
1層 西側 谷部	白磁 廣德鎮窯系高足 (D)、莎莎瓦窯系高足 青磁 磁 /132 (E) 雪花 漳州窯系高足 /258, 260 (E)、漳州窯系高足 (C)、盤 /29, (G), 26	白磁 廣德鎮窯系高足 (D)、碗 or 盆 青花 廣德鎮窯系 (C)、盤 /81, C 細釉陶器 四耳壺 /315
	備前焼 錠 (IV B)、錠 (田土)	備前焼 錠 (IV B)、錠 (田土)
2層	白磁 漳州窯系高足 /13 (D)、 盤 /30 (D)、廣德鎮窯系高足 /59 (E)	白磁 八角杯 (D)、廣德鎮窯系高足 (E)、 青花 廣德鎮窯系高足 /211 (C) 細釉陶器 四耳壺 /312
	備前焼 錠 (B-3)	備前焼 錠 (山土、田土)
	土師器 盆 /573 (D)	
3層 西側 谷部	白磁 廣德鎮窯系高足 (D)	白磁 廣德鎮窯系高足 (D)
	青花 漳州窯系盤 (C)	
	備前焼 錠 (田土)	
5層 P-14	土師器 瓢 /587 (D)	土師器杯 /587 (D)
	白磁 廣德鎮窯系高足 (E)	白磁 廣德鎮窯系高足 (E)
SRA-1	青磁 盆 /189	
SRA-2	青花 廣德鎮窯系高足 (C)	
	細釉陶器 四耳壺	
	白磁 福建・広東窯系碗	
	青花 廣德鎮窯系高足 (C)	
SRA-3	白磁 福建・広東窯系高足 /69 (E II)	
SRA-4	青磁 轉花皿 /159	
SRA-5	青花 廣德鎮窯系高足 (E)	
SRA-6	白磁 福建・広東窯系高足 /54 (E)	
西側 谷部 SRA-7	青磁 磁 (E)	
	青磁 盘 /112 (C II)	
	白磁 福建・広東窯系高足 /68 (E I)	
-1号	青磁 磁 or 盆	
	青花 廣德鎮窯系高足 (C)	
	土師器 盆 /575 (D)、小皿 /596 (A)、瓢 /531 (B)	
84 4層 西側 谷部	白磁 廣德鎮窯系小杯 /67	
	青磁 轉花皿 /165	
11層	青磁 磁 (D)	
17層 土師器	小皿 /599 (A)	
SRA-2	土師器 小皿 /597 (A)	
SRA-3	土師器 盆 /583 (E-3)	
	白磁 横尾・広東窯系高足 /74 (F)	
	青磁 磁 /109 (C II)、盤 /190、 青花 盆 /195、青花高足 /206	
	青花 盆 /210 (D)、青花高足 /246 (C)、252 (E)、青花高足 /268	
	青花 廣德鎮窯系高足 (C, E)、盤 (B)	
	備前焼 錠 /248 (IV B)、盤 /351 (IV B)、 青花 廣德鎮窯系高足 /213, 216 (C)	
	白磁 漳州窯系高足 /24 (D)	
	細釉陶器 四耳壺 /314	
1号/C1	白磁 廣德鎮窯系高足 (E-2b)	
	青磁 磁 /109 (C II)、盤 /190、 青磁 磁 (B II)、轉花皿	
	青花 盆 /195、青花高足 /206	
	青花 盆 /210 (D)、青花高足 /246 (C)、252 (E)、青花高足 /268	
	青花 廣德鎮窯系高足 (C, E)、盤 (B)	
	備前焼 錠 /248 (IV B)、盤 /351 (IV B)、 青花 廣德鎮窯系高足 (IV A, 山土、田土)、 A-1)、369 (IV B-1)、380 (IV B-3)、 青 (田土)	
	蓮戶、美濃燒 四耳壺 /476	
	細釉陶器 直 /129	
	土師器 盆 /561 (C)、591, 593 (F)、574, 575, 576 (D)	
	土師質 錠 /653	
	瓦質土器 裸種不明 /660	

第7表-4 西側谷部及び水の手曲輪遺構出土遺物一覧表

出土地点	発見分類	未収載分
1層 西側 谷部	白磁 廣德鎮窯系高足 (D)、 青花 廣德鎮窯系高足 (E)、 備前焼 錠 (IV A)	白磁 精進窯行 (大和里) /1 備前焼 錠 (IV A)、精進窯行 /493, 500 (V)、肥前燒 /499、 500 (V)、仙花瓶 /520
	青花 磁 /544	青花 八角杯 (D)、廣德鎮窯系高足 (E)、小杯
2層	青花 磁 /98 (B IV)	青花 廣德鎮窯系 (C)
	青花 廣德鎮窯系 錠 /541, 542	備前焼 錠 (田土)
	瓦質土器 瓢 /630、双耳釜 /638	
4層	肥前系 くらわんか碗 /491 (IV)	白磁 漳州窯系高足 (IV)、八角杯 白磁 廣德鎮窯系高足 (IV)、小杯 白磁 廣德鎮窯系高足 (V)、精進窯系高足 青花 轉花皿 (D)、輪 (IV)、盤 (IV)
	白磁 廣德鎮窯系高足 (IV, 57) (E)、 青花 廣德鎮窯系高足 (V)、盤 (IV)	白磁 廣德鎮窯系高足 (IV)、盤 (IV)
	青花 轉花皿 (D)、輪 (IV)、盤 (IV)	青花 轉花皿 (D)、輪 (IV)、盤 (IV)
	青花 廣德鎮窯系高足 (C, B)、 青花 廣德鎮窯系高足 (C)、盤 (C)、碗 (C)	青花 轉花皿 (D)、輪 (IV)、盤 (IV)
	備前焼 錠 /359 (IV A-2)、381 (IV B-3)、386 (IV B)、408 (V B)	青花 轉花皿 (D)、輪 (IV)、盤 (IV)
	備前焼 錠 /415, 420, 421, 424 (V B)	備前焼 錠 (田土)
	蓮戶、美濃燒 天目碗 /478 (大葉第 2 重)	
	瓦質土器 錠 /648	細釉陶器 四耳壺
	土師器 盆 /581 (F)、616 (糸)	土師器 盆 /581 (F)、616 (糸)
	前馬頭形 錠 /535	
5層 水の手曲輪	青磁 内湾窯 /138, 139	白磁 廣德鎮窯系高足 (473)、 青花 廣德鎮窯系高足 (477)、 肥前燒 (V A)
	青磁 磁 /94 (B III)	
30V P-135	白磁 莎莎瓦窯系八角杯 /38, 39 (D)	
	瓦質土器 瓢 /662	
	備前焼 錠 (田土)	
SRA-1	青花 廣德鎮窯系高足 /226 (E)	青磁 磁 or 盆
SRA-2	青花 廣德鎮窯系高足 /233 (BII)	
SRA-5	蓮戶、美濃燒 瓷炉 /482 (大葉第 2 重)	
SRA-2	白磁 廣德鎮窯系高足 (E-2b)	白磁 廣德鎮窯系高足 (E-2b)
	青磁 磁 (D)	
	白磁 廣德鎮窯系八角杯 (D)、盤 (E)	
	細釉陶器 四耳壺	
P-135 B-1 B-2 B-3	青磁 磁 /93 (B IV)	青花 廣德鎮窯系 (B1)
	青磁 磁 or 盘 /172	
	青花 廣德鎮窯系高足 (B1)	
I 区	青磁 磁種不明 /204	備前焼 錠 (V A)、錠 (山土、田土)
	青磁 磁 (D)	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
H 区 上層	白磁 廣德鎮窯系高足 /42 (E-2b)	白磁 福建・広東窯系 (E-2b)
	青磁 磁 or 盘 /184	
	青磁 磁 (B IV)	
	青花 廣德鎮窯系高足 (B)	
	細釉陶器 四耳壺	
	備前焼 錠 /374 (IV B-2)	備前焼 錠 (V A, 山土、田土)
	青磁 磁 (D)	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
H 区 下層	白磁 廣德鎮窯系高足 /42 (E-2b)	白磁 福建・広東窯系 (E-2b)
	青磁 磁 or 盘 /184	
	青花 廣德鎮窯系高足 (B)	
	細釉陶器 四耳壺	
	備前焼 錠 /374 (IV B-2)	備前焼 錠 (V A, 山土、田土)
	青磁 磁 (D)	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
H 区 中層 下層	青花 廣德鎮窯系高足 /254 (E)	青磁 磁 or 盆、皿
	青花 廣德鎮窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
	備前焼 錠 (V A, 山土、田土)	
	青磁 磁 or 盆、皿	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
II 反中 下層	青花 漳州窯系高足 /297	白磁 福建・広東窯系 (E-2b)
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
	備前焼 錠 (V A, 山土、田土)	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
	備前焼 錠 (V A, 山土、田土)	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
	備前焼 錠 (V A, 山土、田土)	
	青花 漳州窯系高足 (C)、盤 or 盆	
	細釉陶器 四耳壺	
	備前焼 錠 (V A, 山土、田土)	

第7表-5 水の手曲輪遺構出土遺物一覧表

出土地名	部類分	未記載分	
		区分	区分
田原城 田中下層	白磁 唐武西窯系系属、景徳鎮窯 青磁 磁 or 四、内溝皿		
御陶器	四耳壺 /330		
青磁	口折皿 /150		
青花	景德鎮窯系属 (C)		
褐釉陶器	四耳壺		
備前焼	壺 (IV B、山土)		
備前焼	壺 (山土、田土)		
SE1-A区 1級	備前焼 壺 /375 (IV B-2)、401 (V B) 白磁 唐武西窯系属 /45、(E-2b)		
白磁	唐武西窯系属		
青磁	碗 (B II、B IV、D)、碗 or 盆		
青花	景德鎮窯系属 (E)		
褐釉陶器	四耳壺		
備前焼	壺 (V B)		
SE1-B区 1級	瓦質土器 火跡 /666 (防長型?)		
青花	景德鎮窯系属		
褐釉陶器	四耳壺		
備前焼	壺 (山土)		
瓦質土器	火跡 /411 (III B)		
青花	景德鎮窯系属 /239 (B2)		
青磁	碗 /80 (B I)		
青花	景德鎮窯系属 /248 (C)		
備前焼	壺 (山土)		
備前焼	壺 (山土)		
SE1-C区 1級	備前焼 壺 /459 (V)		
備前焼	壺 (田土)		
備前焼	壺 (山土)		
SE1-D区 上層	備前焼 壺 /466 (中期)		
青花	景德鎮窯系属 /282 (B2)		
青磁	碗 /465 (防長型?)		
青花	景德鎮窯系属 /283 (B2)		
備前焼	壺 (III B)		
SE2 上層	備前焼 壺 /7357 (IV A-2)、 373 (IV B-2)		
備前焼	壺 (山土)		
備前焼	壺 (田土)		
青花	景德鎮窯系属 /290 (C)		
青磁	碗 /169		
青磁	碗 (C II、D)、内溝皿、青 or 盆		
青花	景德鎮窯系属 (C)		
青磁	碗 (E-1)、584 (E-3)、577 (E-1)		
瓦質土器	羽釜 /620 (和泉河内型)		
備前焼	壺 (山土、田土)、壺 (田土)		
備前焼	壺 (IV A-2)		
備前焼	壺 (IV B-2)		
青花	景德鎮窯系属 (C)、壺 (E-2b)		
褐釉陶器	四耳壺		
備前焼	壺 (V A)、壺 (山土、田土)		
褐釉陶器	天目窓 /300、四耳壺 /311		
備前焼	壺 (山土)		
青花	景德鎮窯系属 (C)、壺 (E)		
褐釉陶器	四耳壺		
備前焼	壺 (山土)		
SE2 中層	青花	景德鎮窯系属 (C)、壺 (E)	
青花	景德鎮窯系属 /281 (B2)		
褐釉陶器	四耳壺		
備前焼	壺 (V A)、壺 (山土)		
瓦質土器	壺 /647		
土器群	壺 /585 (E-2)、小皿 /603 (B)		
青磁	器種不明 /205		
青花	漳州窑系属		
褐釉陶器	天目窓 /307		
青磁	碗 (D)		
備前焼	壺 /392 (V B)		
青磁	碗 /100 (B IV)		
備前焼	壺 (V A、V B、田土)		
備前焼	壺 (山土)		
備前焼	壺 (山土、田土)		
SE3 下層	青花	景德鎮窯系属 (B I)	
青花	景德鎮窯系属 /44 (E-2b)		
褐釉陶器	天目窓 /307		
青磁	碗 (D)		
備前焼	壺 /414 (V A)		
備前焼	壺 (山土)		
備前焼	壺 (山土、田土)		
備前焼	壺 (V A)		
備前焼	壺 (山土)		
SE4 9-10層	青花	景德鎮窯系属 (B I)	
青花	景德鎮窯系属 /44 (E-2b)		
白磁	邵武西窯系属、廣東窯系属		
白磁	景德鎮窯系属 /9 (C)		
白磁	景德鎮窯系属 /63		
青花	景德鎮窯系属、漳州窑系属 (C)		
褐釉陶器	四耳壺		
備前焼	壺 (山土、田土)		
備前焼	壺 (山土)		
SE5 1-3号層	青磁	碗 /96 (IV IV)、輪花皿 /161	
青磁	碗 (B I)、碗 or 盆		
褐色陶器	四耳壺 /654		
SS1 1号層	青花 景徳鎮窯系属 (E)		
青花	景德鎮窯系属 (E)		
備前焼	壺 (山土)		
14層	白磁 景徳鎮窯系属 (E-2b)		
備前焼	壺 /371 (IV B-1)		
備前焼	壺 (山土、田土)		
SE5 2号層	白磁 景徳鎮窯系属 (D)、福建窯系属 (C)		
青磁	碗 (D)、碗 or 盆		
白磁	景德鎮窯系属 (E)		
青花	景德鎮窯系属 (C, E)		
青磁	碗 /180、186		
褐色陶器	四耳壺 /325		
瀬戸焼	片口 /543		
-5E	瓦質土器 壺 /651、浅鉢 /656		
土師器	壺 (E-2)、瓶 (E-2)、瓶 (E-2)		
瓦質土器 小鉢 /665 (防長型?)			
備前焼	壺 /370 (IV B-1)		
備前焼	壺 (山土)、壺 (山土)		
切削 1	陶製 瓦 /807		
1層	褐色陶器 壺 /338		
白磁	景德鎮窯系属 /64		
青花 景徳鎮窯系属 /237 (B1)、 245 (C)、碗 /309 (B)			
瀬戸・美濃皿 /466 (中期)			
備前焼	壺 (山土、田土)		
14層	青花 景徳鎮窯系属 /257 (E)		
青磁	輪花壺 /160		
青花	景德鎮窯系属 /232、238 (C)、前/27 (C)		
瀬戸・美濃皿 /466 (中期)			
備前焼	壺 (山土、田土)		
切削 2	1-6 層	青磁	輪花壺 /160
2層	青花	景德鎮窯系属 /232、238 (C)、前/27 (C)	
青花	景德鎮窯系属 /293 (B2)、青花 景徳鎮窯系属		
青磁	碗 (B I)、299 (B)、瀬戸窯系属 /293 (B2)		
備前焼	壺 (山土)		
切削 3	2層	白磁	邵武西窯系
2層	青花	漳州窯系属 or 盆	
褐色陶器	天日窓		
切削 4	1層	備前焼	壺 /383 (V A)
1層	備前焼	壺 (V A)	
1層	青花	景德鎮窯系属 (B1、C)	
備前焼	碗 (V A) /455 (V)		
5-8層	青花	景德鎮窯系属 (E-3)、 青花	
青花	景德鎮窯系属 (E)		
備前焼	壺 (V A、V B、山土)		
C層	瓦質土器	瓦耳壺 /646	
2層	備前焼	壺 /423 (IV B)	
1層	青花	景德鎮窯系属 (B1)	
備前焼	碗 (V A) /586 (E-3)、 青花		
6層下層	青花	景德鎮窯系属 (C)	
瀬戸美濃皿	丸皿 /481 (大室第2告半)		
褐色陶器	四耳壺 /316		
備前焼	壺 (V B)		
褐色陶器	壺 /328		
13層	備前焼	壺 (山土)	
青磁	碗 or 盆		
青花	景德鎮窯系属 (E)		
青磁	碗 (B I) /231 (B1)		
青花	景德鎮窯系属 (E)		
青花	景德鎮窯系属 (C)		
6層下層	瀬戸美濃皿	丸皿 /481 (大室第2告半)	
褐色陶器	四耳壺 /316		
備前焼	壺 (V B)		
褐色陶器	壺 /328		
13層	備前焼	壺 (山土)	
青磁	碗 or 盆		
青花	景德鎮窯系属 (E)		
青磁	碗 (B I) /231 (B1)		
青花	景德鎮窯系属 (E)		
青花	景德鎮窯系属 (C)		
SE SF	瀬戸・美濃皿	丸皿 /481 (大室第2告半)	
褐色陶器	四耳壺 /316		
備前焼	壺 (V B)		
褐色陶器	壺 /328		
14層	備前焼	壺 (山土)	
青磁	碗 or 盆		
青花	景德鎮窯系属 (E)		
青磁	碗 (D) /394 (V B)		
備前焼	壺 /404 (V A)		
備前焼	壺 (V B、田土)		
18層	白磁	景德鎮窯系属 (E-2b)	
青磁	碗 or 盆		
備前焼	壺 (V B)		
備前焼	壺 (V A)		
備前焼	壺 (V B)		
21層	褐色陶器	壺 /326-327	
土師器	皿 /610-618		
24.b 層	備前焼	壺 (山土)	
35層	青磁	碗 or 盆	
36層	青磁	碗 /194	
37層	青磁	碗 /108 (C II)	
38層	備前焼	壺 /358 (IV A-2)	
39層	備前焼	壺 (V A) /1159 (C)	

第7表-6 水の手曲輪遺構出土遺物一覧表

出土地名	部類分	未記載分	
		区分	区分
青磁 瓢 /96 (IV IV)、輪花皿 /161	青磁 瓢 (B I)、碗 or 盆		
褐色陶器	四耳壺		
SS1 1号層	土師質土器		
10層	青花 景徳鎮窯系属 (E)		
11層	瀬戸美濃皿	天目 /479 (大室第3告半)	
14層	白磁 景徳鎮窯系属 (E-2b)		
15層	備前焼	壺 /371 (IV B-1)	
15層	備前焼	壺 (山土、田土)	
15層	褐色陶器	四耳壺 /654	
16層	青花 景徳鎮窯系属 (E)		
17層	青花 景徳鎮窯系属 (E)		
18層	青花 景徳鎮窯系属 (E)		
19層	青花 景徳鎮窯系属 (E)		
20層	青花 景徳鎮窯系属 (E)		
21層	褐色陶器	四耳壺 /316	
21層	褐色陶器	四耳壺 /316	
22層	褐色陶器	四耳壺 /316	
23層	褐色陶器	四耳壺 /316	
24層	褐色陶器	四耳壺 /316	
25層	褐色陶器	四耳壺 /316	
26層	褐色陶器	四耳壺 /316	
27層	褐色陶器	四耳壺 /316	
28層	褐色陶器	四耳壺 /316	
29層	褐色陶器	四耳壺 /316	
30層	褐色陶器	四耳壺 /316	
31層	褐色陶器	四耳壺 /316	
32層	褐色陶器	四耳壺 /316	
33層	褐色陶器	四耳壺 /316	
34層	褐色陶器	四耳壺 /316	
35層	褐色陶器	四耳壺 /316	
36層	褐色陶器	四耳壺 /316	
37層	褐色陶器	四耳壺 /316	
38層	褐色陶器	四耳壺 /316	
39層	褐色陶器	四耳壺 /316	
40層	褐色陶器	四耳壺 /316	
41層	褐色陶器	四耳壺 /316	
42層	褐色陶器	四耳壺 /316	
43層	褐色陶器	四耳壺 /316	
44層	褐色陶器	四耳壺 /316	
45層	褐色陶器	四耳壺 /316	
46層	褐色陶器	四耳壺 /316	
47層	褐色陶器	四耳壺 /316	
48層	褐色陶器	四耳壺 /316	
49層	褐色陶器	四耳壺 /316	
50層	褐色陶器	四耳壺 /316	
51層	褐色陶器	四耳壺 /316	
52層	褐色陶器	四耳壺 /316	
53層	褐色陶器	四耳壺 /316	
54層	褐色陶器	四耳壺 /316	
55層	褐色陶器	四耳壺 /316	
56層	褐色陶器	四耳壺 /316	
57層	褐色陶器	四耳壺 /316	
58層	褐色陶器	四耳壺 /316	
59層	褐色陶器	四耳壺 /316	
60層	褐色陶器	四耳壺 /316	
61層	褐色陶器	四耳壺 /316	
62層	褐色陶器	四耳壺 /316	
63層	褐色陶器	四耳壺 /316	
64層	褐色陶器	四耳壺 /316	
65層	褐色陶器	四耳壺 /316	
66層	褐色陶器	四耳壺 /316	
67層	褐色陶器	四耳壺 /316	
68層	褐色陶器	四耳壺 /316	
69層	褐色陶器	四耳壺 /316	
70層	褐色陶器	四耳壺 /316	
71層	褐色陶器	四耳壺 /316	
72層	褐色陶器	四耳壺 /316	
73層	褐色陶器	四耳壺 /316	
74層	褐色陶器	四耳壺 /316	
75層	褐色陶器	四耳壺 /316	
76層	褐色陶器	四耳壺 /316	
77層	褐色陶器	四耳壺 /316	
78層	褐色陶器	四耳壺 /316	
79層	褐色陶器	四耳壺 /316	
80層	褐色陶器	四耳壺 /316	
81層	褐色陶器	四耳壺 /316	
82層	褐色陶器	四耳壺 /316	
83層	褐色陶器	四耳壺 /316	
84層	褐色陶器	四耳壺 /316	
85層	褐色陶器	四耳壺 /316	
86層	褐色陶器	四耳壺 /316	
87層	褐色陶器	四耳壺 /316	
88層	褐色陶器	四耳壺 /316	
89層	褐色陶器	四耳壺 /316	
90層	褐色陶器	四耳壺 /316	
91層	褐色陶器	四耳壺 /316	
92層	褐色陶器	四耳壺 /316	
93層	褐色陶器	四耳壺 /316	
94層	褐色陶器	四耳壺 /316	
95層	褐色陶器	四耳壺 /316	
96層	褐色陶器	四耳壺 /316	
97層	褐色陶器	四耳壺 /316	
98層	褐色陶器	四耳壺 /316	
99層	褐色陶器	四耳壺 /316	
100層	褐色陶器	四耳壺 /316	
101層	褐色陶器	四耳壺 /316	
102層	褐色陶器	四耳壺 /316	
103層	褐色陶器	四耳壺 /316	
104層	褐色陶器	四耳壺 /316	
105層	褐色陶器	四耳壺 /316	
106層	褐色陶器	四耳壺 /316	
107層	褐色陶器	四耳壺 /316	
108層	褐色陶器	四耳壺 /316	
109層	褐色陶器	四耳壺 /316	
110層	褐色陶器	四耳壺 /316	
111層	褐色陶器	四耳壺 /316	
112層	褐色陶器	四耳壺 /316	
113層	褐色陶器	四耳壺 /316	
114層	褐色陶器	四耳壺 /316	
115層	褐色陶器	四耳壺 /316	
116層	褐色陶器	四耳壺 /316	
117層	褐色陶器	四耳壺 /316	
118層	褐色陶器	四耳壺 /316	
119層	褐色陶器	四耳壺 /316	
120層	褐色陶器	四耳壺 /316	
121層	褐色陶器	四耳壺 /316	
122層	褐色陶器	四耳壺 /316	
123層	褐色陶器	四耳壺 /316	
124層	褐色陶器	四耳壺 /316	
125層	褐色陶器	四耳壺 /316	
126層	褐色陶器	四耳壺 /316	
127層	褐色陶器	四耳壺 /316	
128層	褐色陶器	四耳壺 /316	
129層	褐色陶器	四耳壺 /316	
130層	褐色陶器	四耳壺 /316	
131層	褐色陶器	四耳壺 /316	
132層	褐色陶器	四耳壺 /316	
133層	褐色陶器	四耳壺 /316	
134層	褐色陶器	四耳壺 /316	
135層	褐色陶器	四耳壺 /316	
136層	褐色陶器	四耳壺 /316	
137層	褐色陶器	四耳壺 /316	

# 第Ⅳ章 南側曲輪群(中山遺跡)の調査

## 第1節 調査の概要

**曲輪群の位置** 南側曲輪群(曲輪D～M群)は、主郭部(城山公園)から南側に派生する緩やかな尾根上に位置する。また、曲輪群の東側には「谷部」(東側谷部)が位置する。

これらの曲輪群は、それぞれの面積が広く、尾根の中心を貫く道路状遺構の東西に配されている。第Ⅲ章で報告した西側曲輪群とは様相が異なる。

**調査の概要** 曲輪D群(D1・D2)は、近年の造成によって大きく削平されており、D1では南側縁辺部にのみ遺構を確認することができた。三方を帯曲輪が取り巻き、北側には堀切が検出された。

曲輪E群(E1・E2)は、大きく2段の平坦面で構成されており、東側に帯曲輪が配されている。

曲輪F群(F1～F3)は、面積の広いF1に帯曲輪的な意味合いのF2・F3で構成されている。

曲輪G群は、道路状遺構I-3の東側に位置し、比較的面積の広い曲輪であるが、北側の一部だけの調査となった。東側も近年の造成により一部削平されている。

曲輪H群(H1～H3)は、3段の平坦面で構成され、H2・H3はH1の帯曲輪的な意味合いが強い。また、西側には、谷部の等高線に並行する細長い平坦面が

3条確認された。

曲輪Iは、曲輪の西側と北東部の一部だけ調査をしたが、遺構等は検出されなかった。

曲輪J群(J1・J2)は、曲輪面中央のスロープを境に2段の平坦面から構成されている。南側の曲輪J2では、堅穴建物跡1軒を検出した。

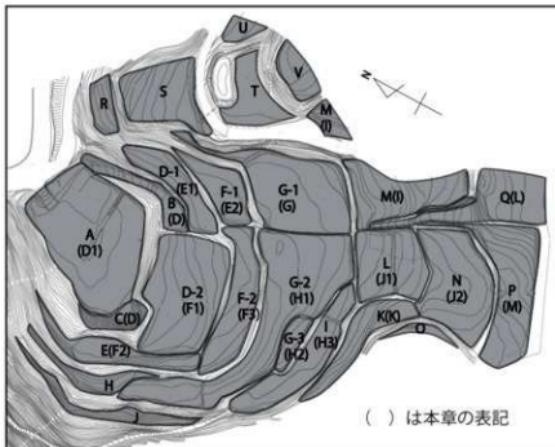
曲輪Kは、東側の一部の調査を行った。盛土上面で遺構を検出した。調査区外に当たる西側の谷に向かって階段状に下っていくと思われる。

曲輪Lは、曲輪の西側の一部の調査を行った。調査面積も狭かったが、遺構等は確認されなかった。

曲輪Mは、平成14年度調査の「中山遺跡」の北端部の平坦面と接続し、同じ曲輪面として捉えられる。堅穴建物跡2軒を検出した。

東側谷部は、現況で4つの平坦面(R・S・T・U区)が確認されていた。重機によるトレーニング調査(R・S・T区)と人力掘削によるトレーニング調査(U・V区)により、近代以降の造成に伴う造成土が厚く堆積しており、人工的な曲輪の造成や遺構も確認されなかっただため、自然の谷地形であると判断した。

なお、各曲輪の面積、遺構の一覧については、表9～15を参照されたい。(田中敏)



第8表 調査区対照表

調査時区割り表記	本章表記
A・B・C区	曲輪D
D1・F1区	曲輪E
D2・F2・E区	曲輪F
G1区	曲輪G
G2・G3・I・J区	曲輪H
M区	曲輪I
L・N区	曲輪J
K区	曲輪K
Q区	曲輪L
P区	曲輪M
R・S・T・U・V区	東側谷部

第63図 南側曲輪群 調査区区割り模式図

## 第2節 曲輪D群

### 概要

曲輪D群は南側曲輪群の北端に位置する。曲輪面は塙見城主郭部から南に延びる尾根筋の根元にあたり、その東西からは谷が派生する。

曲輪D群は、曲輪2面（曲輪D1～D2）と帶曲輪4面（帶曲輪D1a～D1d）と堀切1条（堀切D1）で構成される。その位置関係は曲輪D1の東西南の三方を帶曲輪が取り巻き、曲輪D1の南西方向に曲輪D2が張り出す。北側の堀切（堀切D1）で尾根線を断ち切って西側曲輪群との境となす。

### 曲輪D1（第65図）

**位置と構造** 曲輪D1は、曲輪D群の中央部にあり南側曲輪群中の最高所（標高40m）である。北側に堀切D1、西と南側は帶曲輪を配し、東側は道路状遺構1に面する。曲輪の南西隅に曲輪D2が位置する。

**遺構** 通路状遺構1（通路1）のみである。曲輪の平坦面には重機のパケット痕が多数認められたが、柱穴等の遺構や遺物は皆無であった。現状は資材置き場となっており、重機で著しい削平を受けていた。

**通路状遺構** 通路状遺構1（通路1）は、曲輪D1の東縁中央部に位置する。道路状遺構1から曲輪面に直角に分岐する出入り口と見られる。現存部分は幅1mで2段の階段が認められるが、削平により上部の構造等は不明である。遺物の出土はない。

### 曲輪D2（第65図）

**位置と構造** 曲輪D2は、曲輪D1から南西隅方向に張り出す平坦面である。曲輪D2は曲輪D1より2mほど下面に位置する。曲輪D1との境には帶曲輪D1dが入るが、曲輪の3方に曲輪Fに囲まれて浮島状となる。曲輪面は全長12m、幅10mを測り、南端部分では一段幅狭い平坦面がつく構造である。

**層序** 耕作土及び後世の造成土が1m近く堆積するが、その下面是岩盤を割り出した平坦面となる。この平坦面は後世の造成や削平は及んでいない。

**遺構** 柱穴44基と土坑1基が検出された。柱穴からは掘立柱建物跡3棟、柵列1条が復元された。

**土坑（SC1）（第68図）** 曲輪D2の北東隅付近で検出された。長辺1.8m、短辺1.5mを測る隅丸方形の土坑である。土坑主軸は曲輪面の軸線に直交方向に描う。検出面からの深さは0.3mで、底面は西側から東側に向かって緩く傾斜する。このため西側

の壁面は浅いが東側は深い。なお、遺物は出土しなかった。

SC1は、曲輪内での位置関係を鑑みると、曲輪F2方向からの出入り口であったとも考えられる。

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡は3棟で全て側柱建物である。南側に2棟（SB2・3）、北よりに1棟（SB1）あり、曲輪面の北東部分はSC1を残して空間となる。

SB1の建物主軸は南北方向、SB2・3は南東方向で、曲輪の軸線に平行か直交する。身舎面積は15m<sup>2</sup>（SB1）と7～8m<sup>2</sup>（SB2・3）で、SB3は張り出し部（庇）がつく。各建物跡とも遺物は出土していない。

**柵列（SR4）** 曲輪D2の南端付近にあり、SB3の東・南側をL字形に囲む。遺物の出土は認められなかった。なお、SB1とSC1の間にある柱穴は、柵列なしSB1の板塀を、SB2・3内にある柱穴はL字形の柵列なし掘立柱建物跡を想定できるが確証がない。

**遺物** 曲輪面より邵武四都窯系白磁、青磁（171）、常滑焼甕（483）、褐釉陶器蓋（332）、火打金（901）等が出土した。483は14世紀中葉の遺物である。

### 帶曲輪D1a（第65図）

**位置と構造** 曲輪D1の東側に位置し、全長30m、幅1.5～5.0mを測る。2段の平坦面で構成される。曲輪D1よりも1.3m下面に位置する。上段（北側）の平坦面の南側は後世の削平を大きく受けている。

また、曲輪D1と帶曲輪D1aの間には道路状遺構1が堀切D1に向かって延び、帶曲輪の東側は曲輪E1aと谷地形の頂部付近に面する。

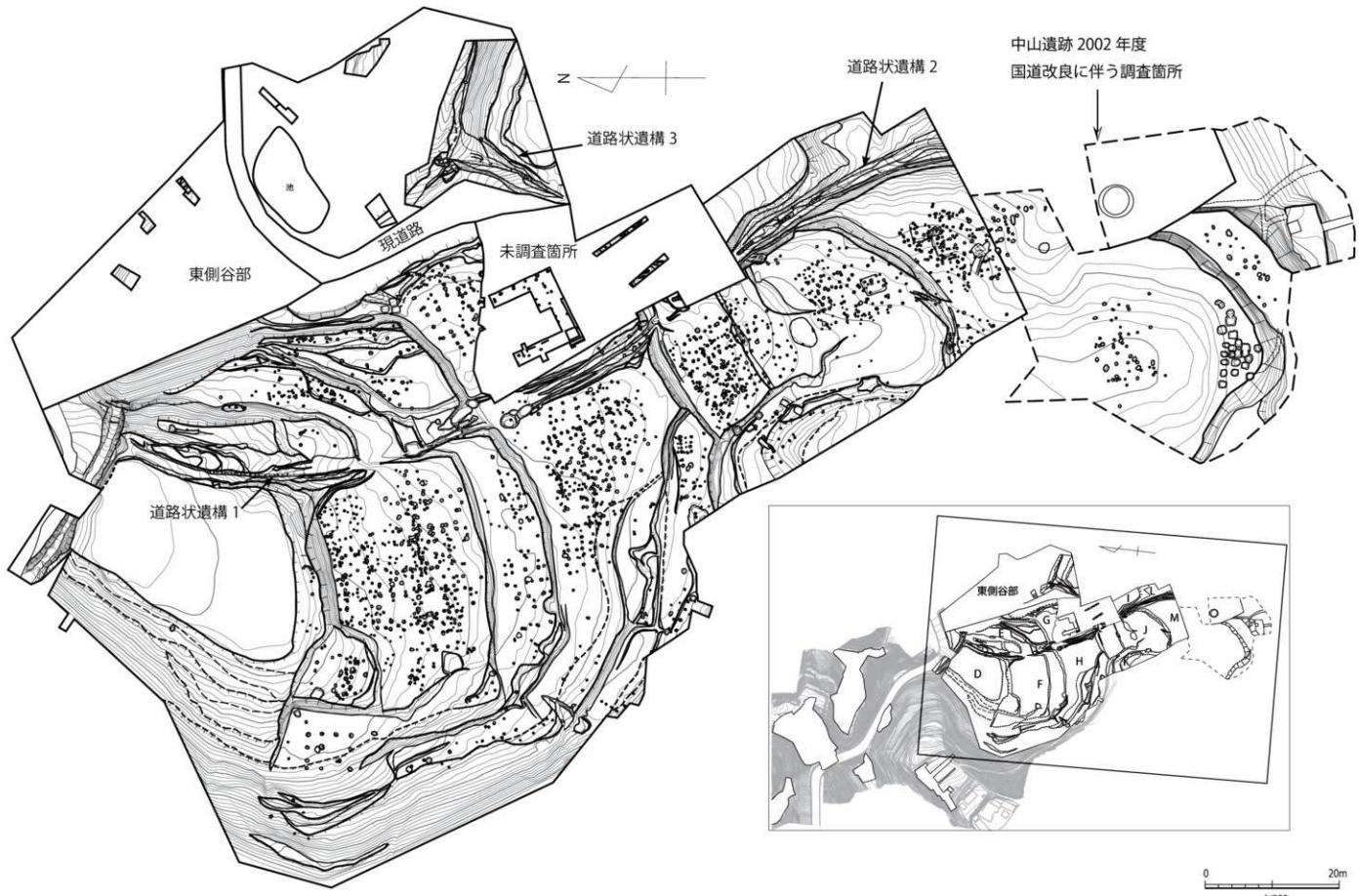
なお、帶曲輪上段と道路状遺構1の比高差は0.4m程度で上り下り可能な高さである（第65図）。

**遺構** 上段の曲輪面で溝状遺構1条（SE1）、柵列1条（SR3）、下段の曲輪面で掘立柱建物跡1棟（SB4）が確認された。帶曲輪D1a全体では、柱穴10基が検出されている。

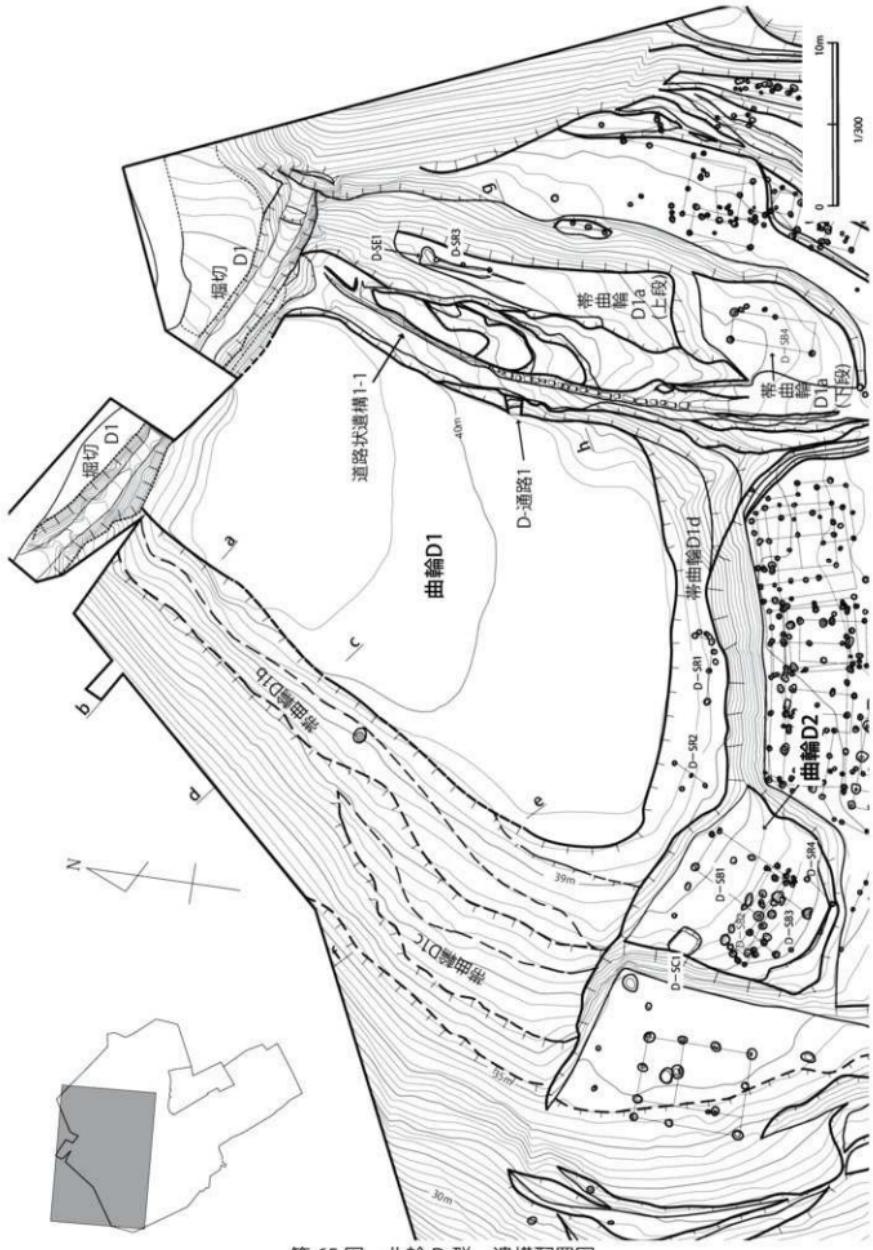
**溝状遺構（SE1）** SE1は長さ4m、幅0.5m、深さ0.3mを測るが、並走するSR3との関連は不明である。遺物の出土はない。

**掘立柱建物跡** SB4の建物主軸は、南北方向で曲輪の軸線に平行である。身舎面積は約9m<sup>2</sup>である。なお、遺物の出土はない。

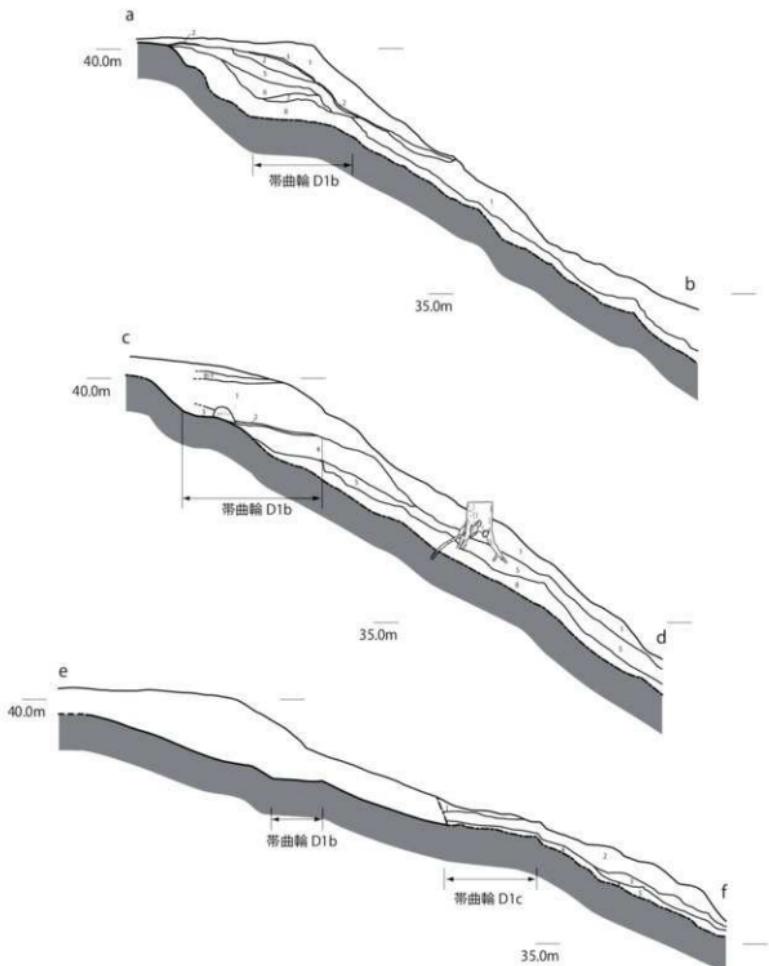
**遺物** 曲輪面および堆積土中より、白磁、青磁、青花碗、備前焼甕などが出土した。概ね15世紀～16世紀代にあたる。



第 64 図 南側曲輪群遺構配置図



第 65 図 曲輪 D 群 遺構配置図



- a-b、c-d、e-f
- 1 棕色土 砂石を多く含む砂礫層 (表土)
  - 2 黑褐色土 有機物含み砂礫層 (旧表土)
  - 3 棕褐色土 有機物含み (木や根も含む) 砂質 (旧表土)
  - 4 明褐色土 小石を含む。粒子の細かいさらさらした砂質 (表土)
  - 5 にじみ 4層より大きい小石を多く含む。全体的にしまりが強い。粒子が細かい (表土)
  - 6 黄褐色土 さらさらした砂質
  - 6 明黄褐色土 大きい小石が混じり、粒子の細かいさらさらした砂質 (アカチヤ富じり?) (表土)
  - 7 にじみ 小石を含む。1層と同時に粒子の細かいさらさらした砂質。全体的に上層 (表土)
  - 7 黄褐色土 より細めになる (地山)
  - 8 明黄褐色土 砂質ブロックと砂石を多く含む岩盤面。

0 4m  
1/100

第66図 曲輪D群 土層断面図(1)

### 帶曲輪 D1b-D1c (第 65 ~ 66 図)

**位置と構造** 曲輪 D1 の西側の谷部斜面上に位置する帶曲輪群である。しかし、帯曲輪面の幅は総じて狭く、盛土を平坦面とする箇所もあったので、面的に検出することは困難であった。そのため、帯曲輪面の範囲は推定した部分がある(第 66 図)。

帯曲輪 D1b は、標高 37.5 ~ 38.5 m、全長 24 m、最大幅 3 m で曲輪 D1 の西縁全体を巡る。平坦面は岩盤を削り出すが、帯曲輪中央部付近では一部が盛土(第 4 層)となる。第 2 層は硬化面である(第 66 図 c-d)。この平坦面の南端は曲輪 F2 との境で収束するが、北端部分と堀切 D1 の接続関係は不明である。

帯曲輪 D1c は、標高 34.3 ~ 36.3 m、全長 15 m 程度、最大幅は 2 m で曲輪 D1 の中央付近で収束すると考えられる。南側曲輪 F2 との接続関係は不明である。

### 帶曲輪 D1d (第 65 図)

**位置と構造** 帯曲輪 D1d は、曲輪 D1 の南縁に沿う、幅約 1 ~ 1.5 m の平坦面である。ただし、帯曲輪としては平坦面の傾斜がきついので、曲輪 D1 の緩やかな南側法面に過ぎないのかもしれない。

**遺構** 南側のほぼ中央部分では、約 6 m の範囲に柱穴が 13 基集中して検出された。そのうち柵列 2 条が復元された(SR 1・2)。

**帯曲輪 D1b ~ D1d 出土の遺物** 堆積土(曲輪 D1 削平時の耕土: 第 66 図 a-b 第 1 層)からは多くの遺物が得られた。そのうち陶器・掲載した遺物は、福建・広東窯系白磁碗(5)、邵武四都窯系白磁皿(35)、褐釉陶器天目碗(301・309)、土師器壺・皿(556・594・595)等である。特に、土師器壺や皿は帯曲輪 D1d で比較的多く出土した。

### 堀切 D1 (第 65・68 図)

**位置と構造** 堀切 D1 は曲輪 D1 の北端に位置する。塩見城跡主郭部と南側曲輪群を区画する堀切である。堀切の東側は道路状遺構の最北端と接続する。

平面形は直線的で両端は東西の谷部に開口する。壁面の上部は後世の造成で削平を受ける。全長 29 m、上幅の最大幅は現存部分で 3 m、下幅は 0.8 ~ 1.4 m、深さは検出面から 1.2 ~ 3 m である。堀切北側の主郭部側の曲輪面と堀切底面との比高差は最大 7.3 m となる。

横断面形は、逆台形で「箱掘」といえる。堀切中央部分は程面や底面は丁寧に岩盤を削り出すが、両端付近になると粗雑となる。

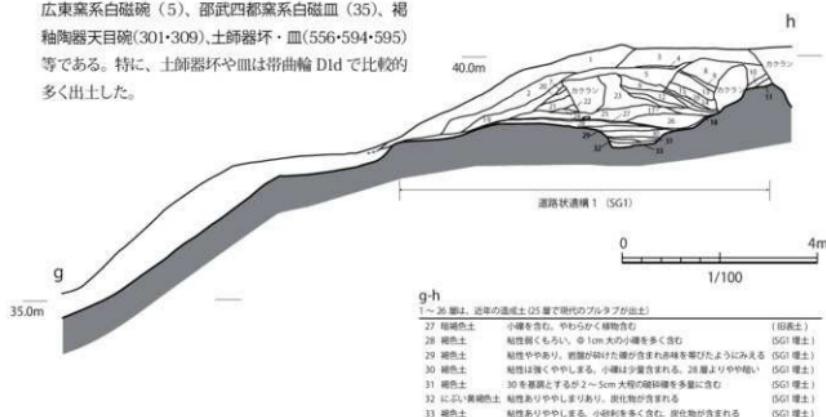
縱断方向の底面は堀切の中央付近が最高所で、東西に向かって緩やかに下る構造となる。東端部の底面は緩く傾斜し、谷部側の段状の狭小な平坦面に接続する。西端部より西側は調査区外となるが、帯曲輪 A3b や堅壠 A1 に続くものと考えられる。

堀切内は岩盤破碎礫を含む流入土がレンズ状に堆積していた。検出面付近は近年の造成土となる。

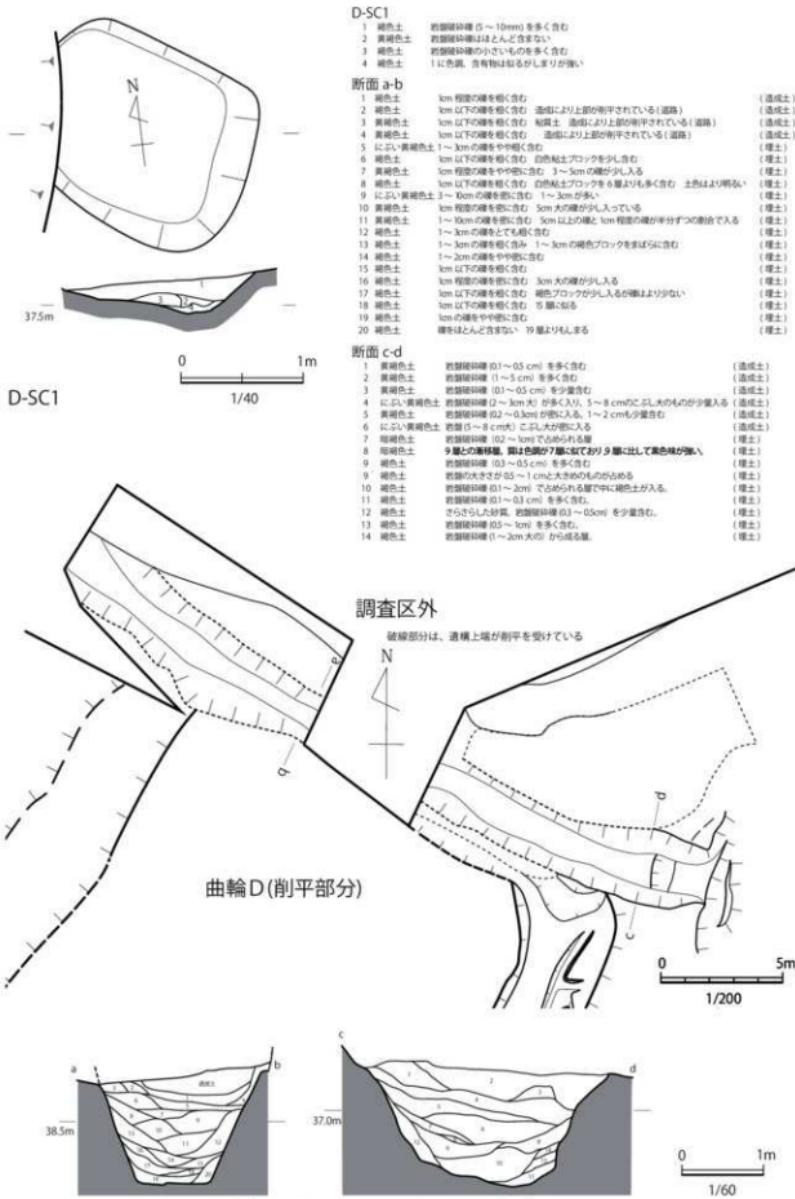
**遺物** 堆積土中から福建・広東窯系白磁皿(70)、青磁、景德鎮窯系青花皿、備前焼鑄鉢・壺、環金具(869)、煙管(871) 等がある。

概ね 15 世紀 ~ 16 世紀代の遺物が多く、近世にはほぼ埋没したものと考えられる。

(今塩屋・田中敏)



第 67 図 曲輪 D 群 土層断面図(2)



第 68 図 D-SC1 堀切 D1 実測図

### 第3節 曲輪E群

**概要** 曲輪E群は曲輪D群と曲輪Gに南北を挟まれた位置にあり、東側は谷地形の斜面、西側は道路状遺構1（SG1）に面する。

曲輪E群の曲輪面は大きく2段の平坦面で構成され、北側から曲輪E1・E2と呼称する。曲輪間の比高差は1.5mを測る。曲輪E1と曲輪E2とは溝状遺構（SE1）が境界となる。

曲輪E群では曲輪2箇所、帯曲輪1箇所、掘立柱建物跡7棟、柵列8条や溝状遺構1条、曲輪E1と曲輪E2を結ぶ階段状の平坦面列も認められた。

#### 曲輪E1（第69図）

**位置と構造** 曲輪E1は曲輪E群の北端に位置し、標高は34mで、帯曲輪D1a上段より3.3m、同下段より1m下面にある。全長36m、最大幅6mで南北に長い曲輪面である。帯曲輪とも捉えられるが、幅は広いので曲輪としておく。

曲輪面はさらに3段の平坦面に区分されるので、面積の広い順に曲輪E1a・E1b・E1cとした。曲輪E1aと曲輪E1bとの比高差は0.8m、曲輪E1cとは0.3mである。曲輪E1a・E1bは道路状遺構1に接する。

また、曲輪E1aと曲輪E2aとの境にある、北側の法面には狭小な平坦面が2段認められた。この平坦面群は、曲輪E1aから曲輪E2aへと降りる通路状遺構1（通路1）とする。さらに、曲輪E1aと帯曲輪D1a上段との境にある法面にも狭小な平坦面がある。この平坦面には柱穴3基が並び、柵列（SR6）とした。

**層序と盛土** 曲輪面は基本的に岩盤を削り出して平坦面とする。曲輪E1a北側部分の第3～5層（第70図a-b）は岩盤の破碎礫を含み、炭化物も含む。曲輪E1の平坦面を造成する際、旧表土や岩盤層を掘削した堆土で盛土した層である。なお、曲輪E1aの北側は後世の削平を受けた部分が多い。

曲輪E1cでは、岩盤を削り出した平坦面上に第10～11層の堆積層が認められ、第10層面からは掘立柱建物跡の柱穴が掘り込まれる（第70図c-d）。この第10層上面は曲輪E1aの上面に揃うので、掘立柱建物跡が建てられる際に、曲輪面を盛土して曲輪E1aとE1cを一体化したと判断される。

**遺構** 通路状遺構1箇所（通路1）、柱穴60基が検出された。柱穴群のうち、掘立柱建物跡は6棟、柵列は3条復元された。

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡7棟（SB1～7）は全て側柱建物である。曲輪E1c付近を中心、曲輪E1aの北側にも分布する。本来は曲輪E1aのさらに北側まで建物跡が展開した可能性が高い。また、曲輪E1cの建物跡建築の際には盛土造成されていたことも認められた。

SB1の梁・桁行は2×2間だが、それ以外は1×1間である。身舎面積は、12m<sup>2</sup>（SB1）、8m<sup>2</sup>（SB5・6）、5～7m<sup>2</sup>（SB2・3）、2m<sup>2</sup>以下（SB4）の順となる。建物主軸は①群：曲輪面の軸線にほぼ揃う（SB1・3・6）、②群：やや斜する（SB2・4・5）がある。

これらの建物主軸の違いは、時期差を反映するものと考えられるが、柱穴の切り合い関係等の手掛かりがなく、変遷は導き難い。

ただし、建物主軸の方向性から①群は、曲輪F1の帯曲輪D1aの掘立柱建物跡や後述の④・⑤・⑥群と主軸方向が近しい。さらに②群のSB2は曲輪F1の①・②群と主軸方向が近しい。このように建物主軸が同一の建物群が近辺の曲輪に林立していたと考えられる。

SB1の柱穴からは邵武四都窯系白磁皿、SB3からは邵武四都窯系白磁皿（20）と備前焼甕（446）等が出土した。446の編年観から、SB3（①群）は、15世紀中葉～16世紀初頭または16世紀初頭以降に建てられたものと考えられる。

**柵列** 柵列は3条（SR4～6）である。SR4～6も含めた周辺一帯は、削平を受けて本来の曲輪面を失っているので、既に柱穴が失われている箇所がある。ここでは現存する柱穴の位置関係から柵列と認定した。

SR4・5は通路状遺構1の上段部分から曲輪E1aにまたぐ走行を示す。SR4・5の柱穴の切り合いから、両者は建て替えの関係にある。なお、各柵列の柱穴からは遺物の出土はなかった。

（川俣・田中敏）

**遺物** 曲輪E1の柱穴（掘立柱建物跡・柵列等以外）からは、中世の平瓦（698）が出土した。曲輪面やその堆積土からは邵武四都窯系白磁皿・福建広東系白磁碗、青磁碗（89）、輪花皿（151）、景德鎮窯系・漳州窯系青花、瀬戸美濃焼水滴（467）、備前焼擂鉢・甕、土師質土器双耳釜（634）等が出土した。遺物の主体は15世紀中葉～16世紀後半と考えられる。

## 曲輪E2・帯曲輪E2 (第69図)

**位置と構造** 曲輪E2と帯曲輪E2の標高は33m前後で、2つの曲輪をあわせると、全長31.5m、最大幅8.5mを測る南北に長い紡錘形の曲輪面である。

曲輪E2は2段の平坦面に区分され、曲輪E2a・E2bとした。曲輪E2aは曲輪E1aより1.5m下面にあり、曲輪E2aと曲輪E2bとの比高差は0.3mである。

帶曲輪E2は長さ23m、最大幅3mの細長い平坦面である。曲輪E2bより0.5m下面にある。(今塩屋)

**層序と盛土** 曲輪面は、曲輪E1同様に岩盤を削り出して平坦面とする。曲輪E2a北側部分の第6～7層(第70図a-b)は岩盤の破碎砕を含み、炭化物も含む。旧表土や岩盤層を掘削した堆土で盛土して平坦面を確保した層群と考えられる。

曲輪E2bと帯曲輪E2の中央部分では、岩盤を削り出した平坦面上に、岩盤破碎砕や褐色ブロック土による盛土を造成して曲輪E2aの上面の高さに揃えられていた。この盛土面にSB7が建てられる(第70図c-dの第10-11層、第71図e-fの第3～7層)。

つまり、SB7が建てられる際には、曲輪E2bと帯曲輪E2との段差を盛土して平坦化したと判断される。

盛土内出土遺物は、青磁碗(126)・皿(149)や茶白の下白(1150)等がある。これらは土層断面図(第70図c-d)の第11層から出土した。126は上田D類に相当し、14世紀中葉～15世紀初頭にあたる。1150は15世紀後半以降に盛行する形態を示す。

**遺構** 溝状遺構1条(SE1)、柱穴71基が検出された。掘立柱建物跡は1棟、柵列は5条復元された。

**溝状遺構(SE1)** 曲輪E1と曲輪E2aの間にある溝状遺構である。長さ30m、幅1m、深さは0.3mを測る。曲輪E2aの西縁を取り巻くように大きくカーブする。断面形は逆台形や浅い皿状で、底面は中央部分の標高が最も高く。南北に向かって緩やかに下る。曲輪E2aの雨水の排水施設と考えられる。

遺物は、瓦質土器の双耳壺(640)等が出土した。

**掘立柱建物跡** SB7は、谷部の西側斜面に面し、1×3間の梁桁行で間仕切りを持つ。身舎面積は23m<sup>2</sup>である。曲輪E2bと帯曲輪E2を跨ぐ配置形態だが、盛土造成で段差を平坦化された後で建てられる。なお、柱穴内からの出土遺物はなかった。

SB7付近からは、谷部の対岸にある曲輪群のみならず、日向市街地や塩見川や石櫃山の山麓を見渡すことができた。

SB7の曲輪F1を介して正反対の位置に曲輪F2のSB30が位置する。曲輪E2のSB7と曲輪F2のSB30は身舎面積等の差異はあるが、柱穴は深めで間仕切りもあり、建物主軸も同方向を指向しており、且つ単独立地という類似点がある。

従って、SB7は曲輪F2のSB30と同じく、谷部方面を意識した権状の建物であったと考えられる。

**柵列** 柵列は5条(SR1～3-7-8)である。曲輪E2aにSR7-8、曲輪E2bにSR1が位置する。SR1の柱穴内より土器器坏(547-554-557-559)等が出土した。

SR2-3は帯曲輪E2の東縁に沿って18mも長い柱穴を連ねる。溝状遺構1(SE1)付近では直角に折れて、溝状遺構1を斜めに横断して収束する構造である。直線距離20mを測る長い柵列であることから、帯曲輪E2は東側に控える谷部から防護する役割が担わされたと考えられる。なお、対面する位置にあるSR4-5との関係は不明である。

SRI以外は柱穴内の遺物に乏しい。ただ、層位的所見からSR1-3は曲輪E2bと帯曲輪E2に盛土される以前の柵列、SR2は盛土後の柵列と考えられる(第70-71図a-b-c-d・e-f参照)。

(川俣・田中敏)

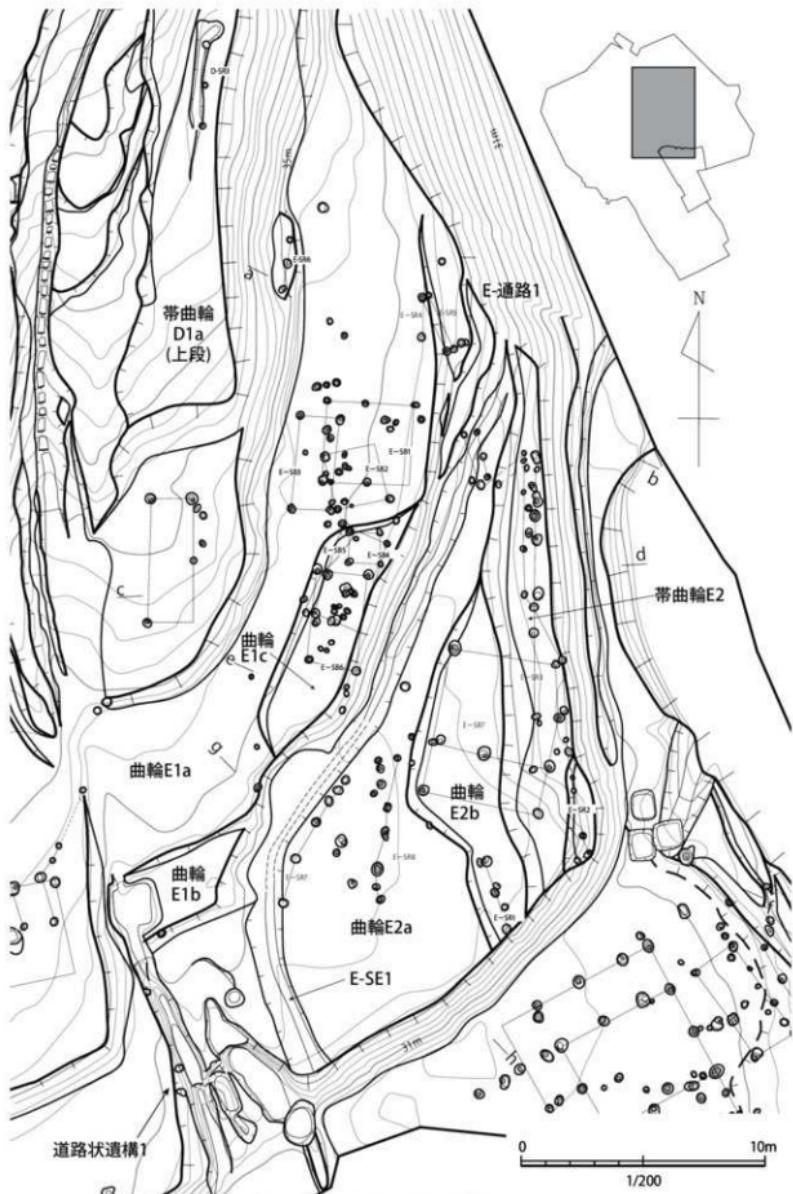
**遺物** 曲輪E2の柱穴(掘立柱建物跡・柵列等以外)からは、邵武四都窯系白磁皿(28)、福建広東系白磁皿(77)、青磁の玉縁無文皿(144)、土器器坏(550)等が出土した。14世紀後半～16世紀代の遺物である。

一方、曲輪面や流土層からは、景德鎮窯系白磁皿(23)・小杯・八角杯、邵武四都窯系白磁、福建・広東系白磁碗・皿(77)、青磁皿(146)、景德鎮窯系・漳州窯系青花皿、瀬戸美濃焼絞折深皿(474)、備前焼擂鉢・甕、土鍤(728-732-733)等が出土した。14世紀後半～16世紀後半にかけての遺物が多い。

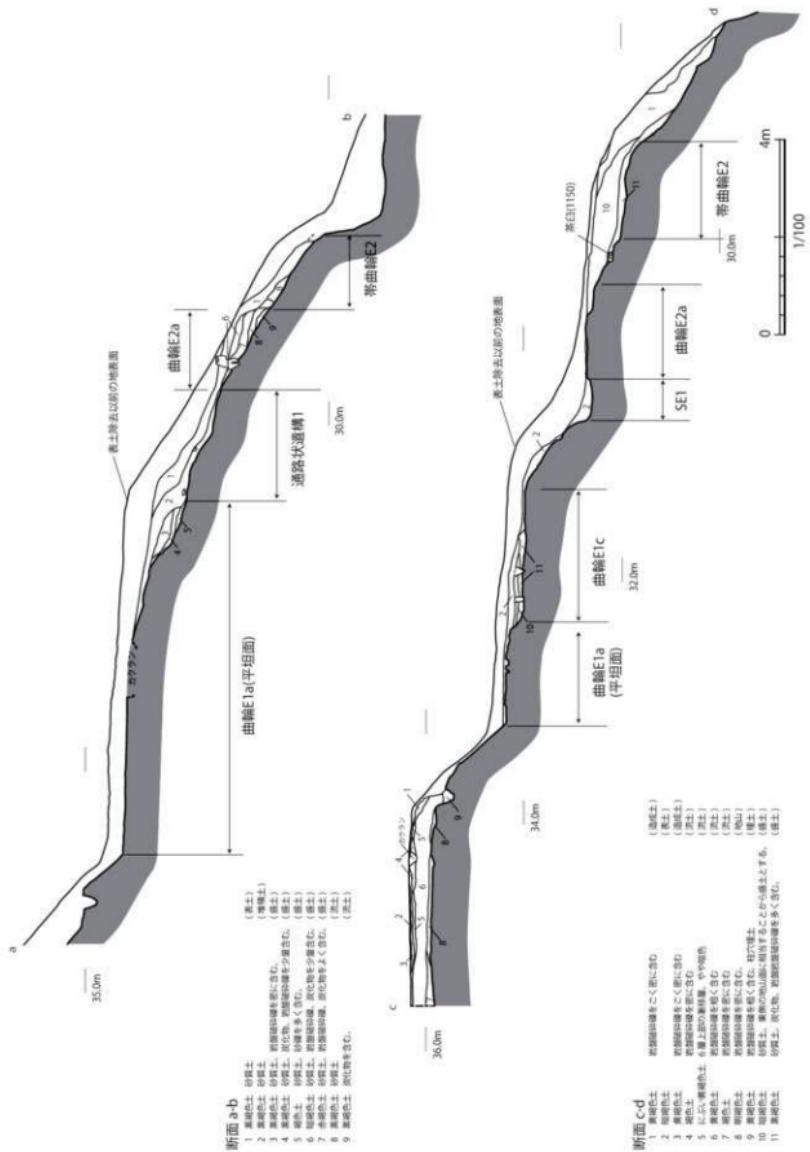
**盛土の時期** 曲輪E2bと帯曲輪E2との段差を埋め立てて盛土層から、青磁碗(126)等が少ないながら出土した。126の年代は14世紀中葉～15世紀初頭、1150は15世紀後半以降と位置付けられる。他方、盛土後の構築物はSB7やSR2があるが、遺物は得られず構築時期の検討が困難である。

出土遺物から勘案するならば、曲輪E2bと帯曲輪E2の段差を埋め立てて盛土造成は、15世紀後半から16世紀代と考えられる。

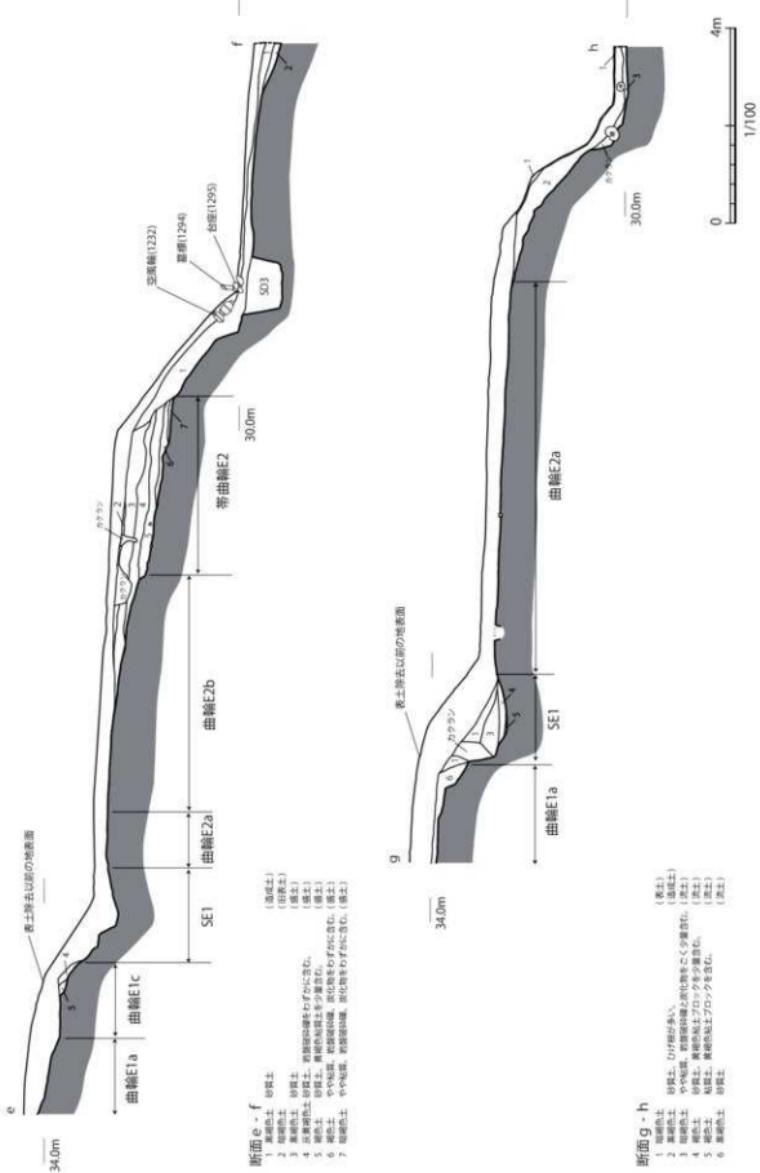
(今塩屋・田中敏)



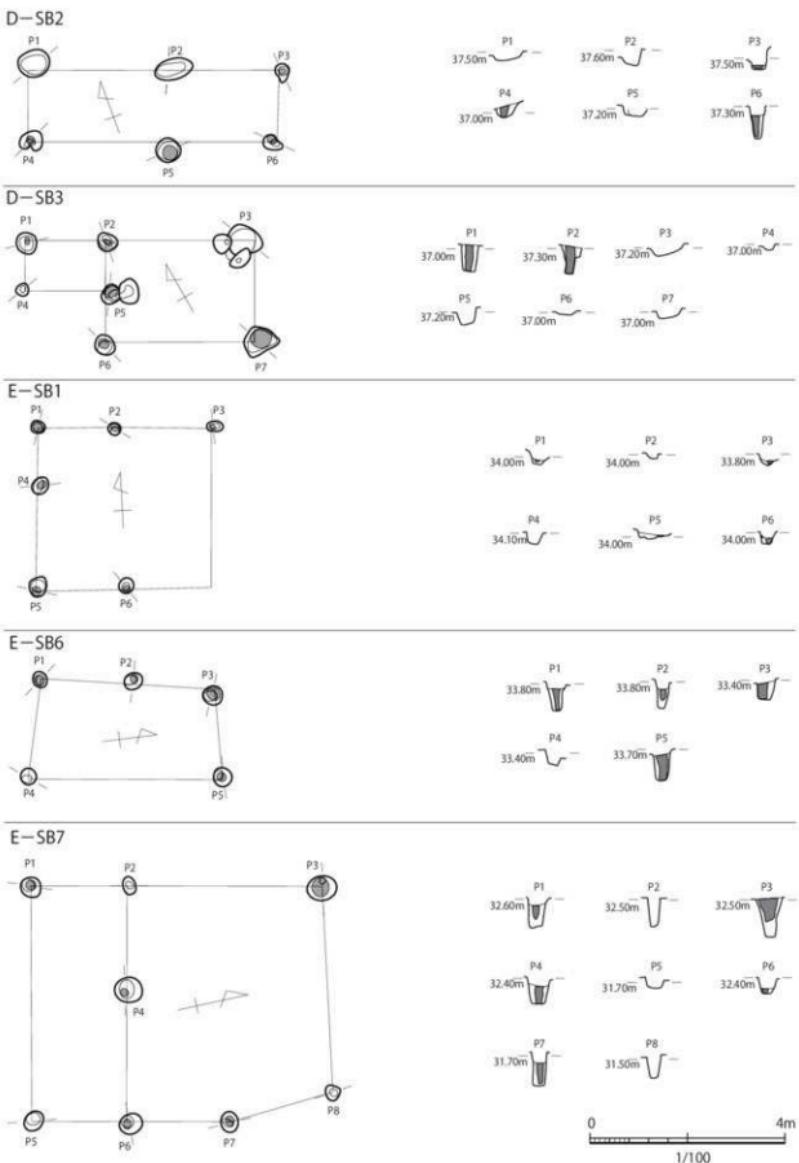
第69図 曲輪E群 遺構配置図



第 70 図 曲輪 E 群 土層断面図(1)



第 71 図 曲輪 E 群 土層断面図 (2)



第72図 掘立柱建物跡実測図(1)

## 第4節 曲輪F群

**概要** 曲輪F群は曲輪D1の南側に位置する。東側を道路状遺構1、西側を曲輪H1に囲まれる。

曲輪F群の曲輪面は3段の平坦面で構成される。これを曲輪F1・F2・F3と小区分した。曲輪F2・F3は曲輪F1の帶曲輪的な意味合いが強い。

遺構は、曲輪3箇所、溝状遺構1条、集石遺構3基、掘立柱建物跡34棟、柵列16条である。

### 曲輪F1（第73図）

**位置と構造** 曲輪D1南側に位置する横長長方形の平坦面である。標高は36～35m、全長36m、幅24mを測る。曲輪面東側は道路状遺構1、西側は曲輪D2・F2に面する。曲輪D2との比高差は2mである。

**層序** 北から西側は岩盤、南側はK-Ahを含む褐色粘土質の自然堆積層を削り出して平坦面とする。

**遺構** 集石遺構1基、溝状遺構1条、土坑1基、柱穴571基が検出された。柱穴群のうち、掘立柱建物跡29棟と柵列11条が復元された。

**集石遺構(S1)** S1は曲輪面の南東隅付近にありS88の中央部に位置する。

掘り込みは梢円形で、長径11m、短径0.8m、深さは0.12mで極めて浅い。埋土には細かい岩盤破碎礫を含むが、遺物は出土しなかった。SIIの時期は、岩盤面を深さ2m近く水平に削り取った平坦面で検出されたので中世としておきたい。(今塙屋・田中敏)

**溝状遺構(SE1)** 曲輪面の北東隅に位置し、曲輪D1の法面際に沿って道路状遺構1へ抜ける。

全長10m、上幅0.9m、下幅0.3m、深さ0.2mを測る。雨水の排水施設と考えられる。遺物は邵武四都窯系白磁皿(32)が出土している。

**掘立柱建物跡** 総柱建物1棟(SB13)と側柱建物28棟である。掘立柱建物跡群は柵列群(SR9～11)と道路状遺構1に挟まれた空間で群在する。SR9～11の周辺やSB3・SB9の間は建物跡の希薄な空間となる。

建物跡の身合面積は、最大で40m<sup>2</sup>前後(SB10・17)で33m<sup>2</sup>(SB7)、24m<sup>2</sup>(SB1・15)、21m<sup>2</sup>(SB27・28)の順となる。20m<sup>2</sup>以下は、18m<sup>2</sup>(SB12・19)、17m<sup>2</sup>(SB20)、16m<sup>2</sup>(SB2・4・5・8・11・13・14・18)、14m<sup>2</sup>(SB9)、10～12m<sup>2</sup>(SB16・23・24)、6～9m<sup>2</sup>未満(SB3・6・22・25)と続く。4m<sup>2</sup>未満という小型建物(SB21・26・29)もある。面積が15m<sup>2</sup>以上の建物跡は庇がつく場合が多く、40m<sup>2</sup>前後になると二面庇となる。SB7・12は間仕切りのある建物跡である。

また、建物主軸方向から、大きく6群に大別できる。①群(N-15°・E:SB1・4・26)、②群(N-74°・W/N-12°・E:SB2・3・5・9)、③群(N-80°・W/N-10°・E:SB8・11・16・19・21・23・27)、④群(N-83°・W/N-5°・E:SB7・10・18・24・28)、⑤群(N-89°・W/N-2°・E:SB6・22)、⑥群(N-3°・W:SB17・25・29)である。なお、①・②群と⑤・④群の建物主軸は互いに近似する。④・⑥群には30～40mの庇付大型建物(SB7・10・17)が含まれる。庇付建物は曲輪F1の中核的な建物跡であったといえる。

掘立柱建物跡群の変遷は、柱穴の切り合い関係から、⑥群→④群→②群→①群および⑥群→③群の順と導き出せる。ただし、柱穴の切り合い関係からは⑤群を相対的な時間軸上に把握はしづらい。

遺物はSB7・12・13・17・20・21・22等の柱穴から出土した程度である。このうち図化掲載したものは、SB7(④群)の青磁皿(143)、SB13(③群)の備前焼甕(429)、SB17(⑥群)の青磁碗(120)・盤(192)と土師器皿(601)、SB20(③群)の青磁輪花皿(167)、SB21(③群)の備前焼鑄鉢(356)等である。概ね14世紀中葉～16世紀代の年代幅に収まる。なお、SB17の肥前系小坯(502)は柱穴検出面で出土した遺物である。(今塙屋・川俣)

**掘立柱建物跡の時期** 時期推定の手掛かりに乏しいが、出土遺物の年代から③群は16世紀代、⑤・⑥群は15世紀代かそれ以前の掘立柱建物跡群と考えられる。

なお、柱穴(掘立柱建物跡・柵列等以外)出土分も含めて14世紀中葉～15世紀初頭頃の遺物が比較的多いので、15世紀前後には掘立柱建物跡群が存在したようである。

**柵列** 曲輪面では11条の柵列(SR1～11)がある。

SR3とSB20、SR5とSB17、SR6とSB15は対になる関係と捉えられる。一方、曲輪面西側は柵列が集中し、掘立柱建物跡の希薄な空間である。この部分は曲輪F2との境に面するので、防御性や遮蔽性を高めた結果と考えられる。SR7・9は掘立柱建物跡の⑥群、SR8は③～⑤群、SR10・11は①・②群の建物主軸方向に沿う関係にある。なお、遺物の出土はない。

**出入り口部の想定** 曲輪の東縁中央には幅3mの段差が途切れる箇所がある。北側は溝状遺構(SE1)の終点、南側にはSR1が位置する。この箇所は、道路状遺構1に向かって緩いスロープ状となり、それより西側は掘立柱建物跡のない空間が広がる。

従って、この段差が途切れる箇所は、曲輪と道路状遺構1を結ぶ出入り口と考えられる。出入り口部の平坦面上では邵武四都窯系白磁皿(31)が出土した。

**遺物** 曲輪F1の柱穴(掘立柱建物跡・柵列等以外)からは、福建・広東窯系白磁碗(11)、青磁各種(177・181・192・202)、土師器壺・皿(569・580)等が出土した。14世紀中葉～15世紀初頭前後の年代幅に収まる。

曲輪面や堆積土中からは、景德鎮窯系白磁碗(1)、福建・広東窯系皿・碗(16)、青磁碗(90・115・130)・皿(140・145)・壺(189)・瓶(200)、中世の平瓦(698)、景德鎮窯系・漳州窯系青花、備前焼擂鉢・甕(416・427・428)・鉢(461)、瀬戸美濃焼綠釉小皿(469)・天目碗(480)、常滑焼甕・壺(485・486)、土師器壺・皿(549・560)等が出土した。1は11世紀後半～12世紀後半の最古相の年代を示すが、14世紀後半～16世紀前半代の遺物が主体である。

### 曲輪F2 (第73図)

**位置と構造** 曲輪F2は、曲輪F1の西側に位置する縱長の平坦面である。標高は35m、全長34m、最大幅9mを測る。曲輪面は、曲輪D2より2m、曲輪F1より1m下面に位置している。

曲輪面北側のSB30付近は方形の平坦面となる。曲輪面南側のSR12付近は一段下がって狭い平坦面となる。曲輪面の西縁付近は緩やかに傾斜するが、後世の削平を受けた結果である。本来は、SB30の底面よりも西側まで平坦面が続くと考えられる。

**層序** 曲輪面は岩盤を削りだして平坦面とする。

**遺構** 柱穴26基が検出された。このうち掘立柱建物跡1棟(SB30)と柵列1条(SR12)が復元された。  
**掘立柱建物跡** 曲輪F2ではSB301棟のみが単独で立地する。2×3間の側柱建物で、西側に底を有する間仕切りのある建物跡と考えられる。身舎面積は34m<sup>2</sup>である。建物主軸は曲輪F1の掘立柱建物跡⑥群にほぼ揃う。柱穴の掘り方は直径0.7mで最深は0.9mである。また、建物跡周囲は曲輪法面との間に3.5～5mの空間が確保されていた。

SB30は、西側の谷部や曲輪A群を見渡せ、遠くは集落や水田地帯を眼下に置く立地にあることから、檜といった階層構造のある建物跡が想定される。

**柵列** SR12は、曲輪面の隅角を斜めに一段欠き取ったような狭い平坦面に位置する。曲輪の軸線に沿って逆L字形に柱穴が並ぶ。遺物は得られなかった。

**出入り口部の想定** SC1とSR12の間の平坦面は、幅が急に狭くなっているロープ状となるので、曲輪F1への出入り口部分と解釈される。この部分か

らSB30方面との行き来は可能である。

さらに、SR12の立地に着目すると、その下段には柵列(H-SR4-F-SR16)に挟まれた曲輪F3の平面台形の凹部、さらに下段に柵列(H-SR3+9+10)に挟まれた曲輪H1の通路状遺構1が位置する。SR12を起点とする段状の平坦面が谷部斜面に向けて連続していることが読み取れる。

従って、H-通路1から段状の平坦面をたどって曲輪F3、さらに曲輪F2へ続くルートを設定でき、SR12は城戸とみなすことが可能である。そうすると曲輪F1は2箇所の出入り口部を有することになる。

**遺物** 曲輪F2の曲輪面や堆積土中から景德鎮窯系白磁皿、青磁碗(125)、備前焼擂鉢・甕・壺(434)等が出土した。遺物は14世紀前葉～15世紀中葉の年代を示すものが比較的多い。

### 曲輪F3 (第73～74図)

**位置と構造** 曲輪F3は曲輪F1の南に位置する横長方形の平坦面である。標高は33～33.5m、全長39m、最大幅8.5mを測る。曲輪面は、曲輪F1より3m下面に位置する。曲輪の東縁は道路状遺構1に、南側から西側にかけては曲輪H1に面する。

**層序と盛土** 曲輪面は基本的に岩盤を削りだして平坦面とするが、西側部分はさらず盛土を施して天端の高さを揃えた平坦面に造成されていた。これは、岩盤の削り出し面が南側に傾斜する凹凸面となったからと考えられる(第74図)。この盛土面上に掘立柱建物跡や柵列の柱穴が掘り込まれる。

なお、盛土層のうち、拳大の円碟を多く含む層が曲輪の南西側縁辺で確認できた(第74図a-bの第6層/c-dの第4層)。恐らく、円碟は盛土の崩壊を防ぐために土砂に混入されたものと考えられる。

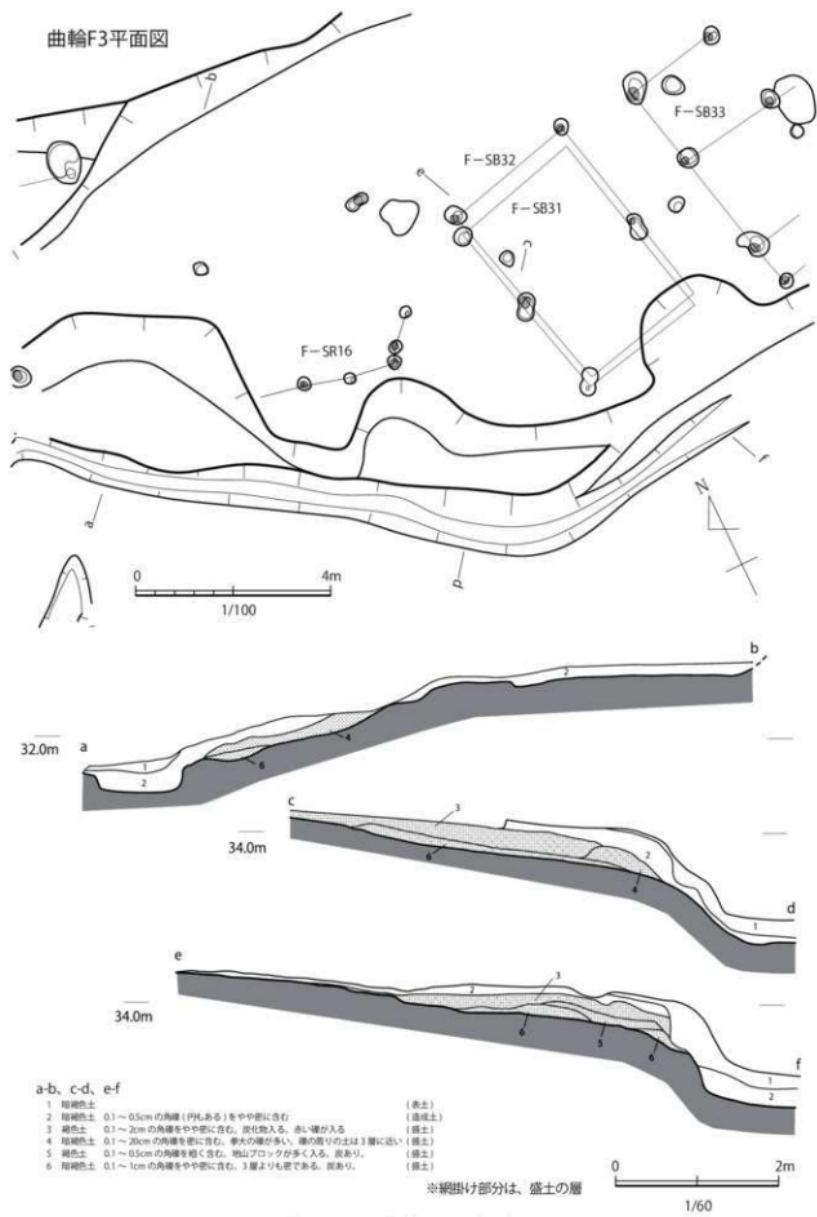
盛土層出土の遺物は備前焼擂鉢(355)等がある。355は重根分類のIV-A・2期に相当し、14世紀中葉～15世紀中葉の年代となることから、盛土された時期(曲輪F3の造成時期)は、14世紀中葉～15世紀中葉の間か、15世紀中葉以降と考えられる。

**遺構** 集石遺構2基、柱穴75基が検出され、掘立柱建物跡4棟、柵列4条が復元できた。

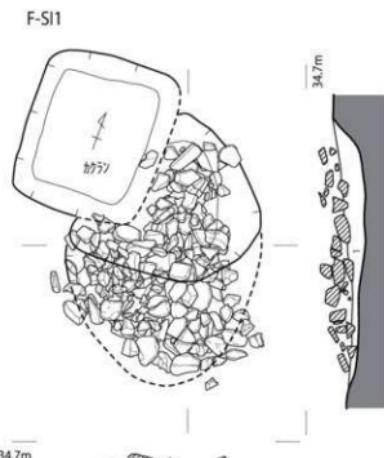
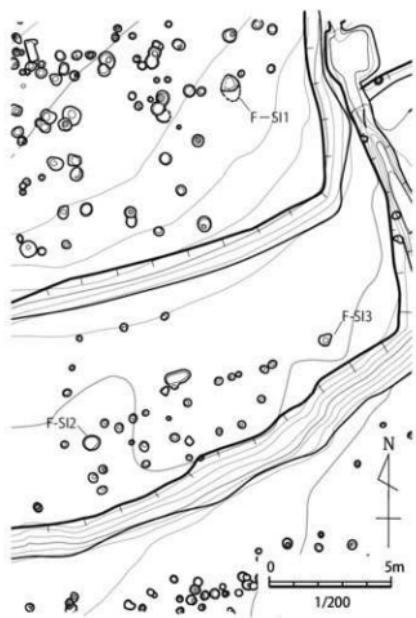
**集石遺構**(SI2・3) SI2は曲輪面のほぼ中央付近にある。掘り込みは梢円形で、長径0.55m、短径0.5mを測る。深さは0.15mで浅い。配石は扁平な平石を6個ほど壁面に張り巡らせる。遺物の出土はない。



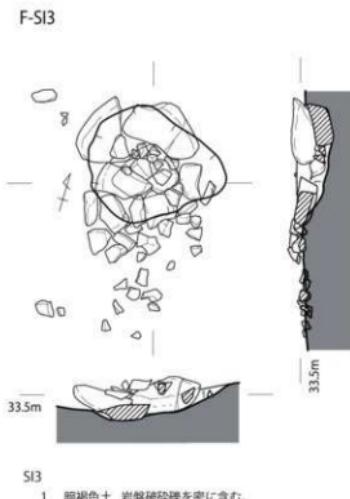
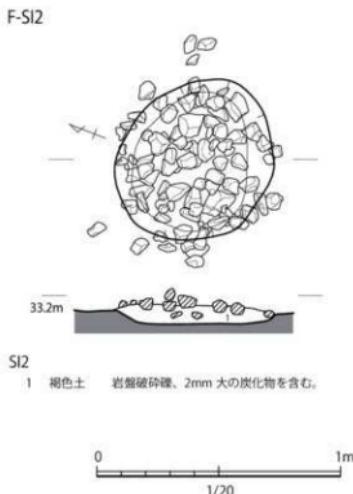
第73図 曲輪F群 遺構配置図



第74図 曲輪F3 実測図

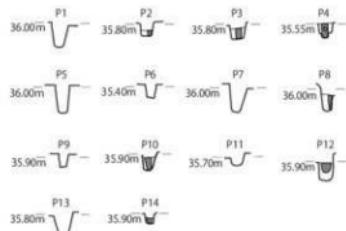
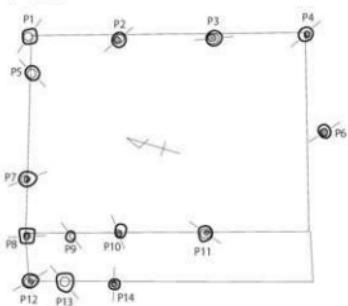


SI1  
1 暗褐色土 岩盤破砕縫を密に含む。

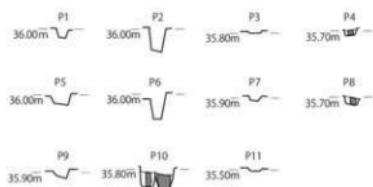
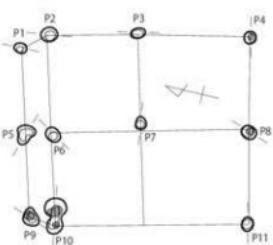


第 75 図 曲輪 F 集石遺構実測図

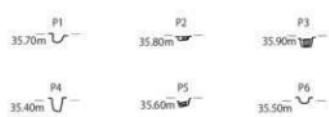
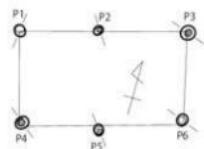
F-SB1



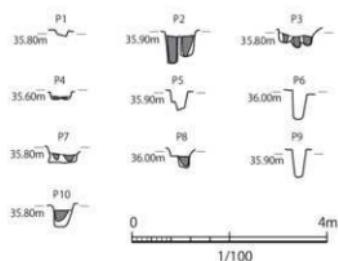
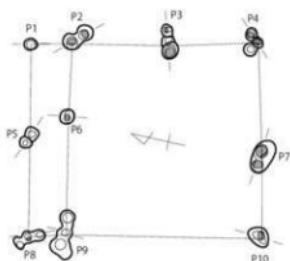
F-SB2



F-SB3



F-SB5

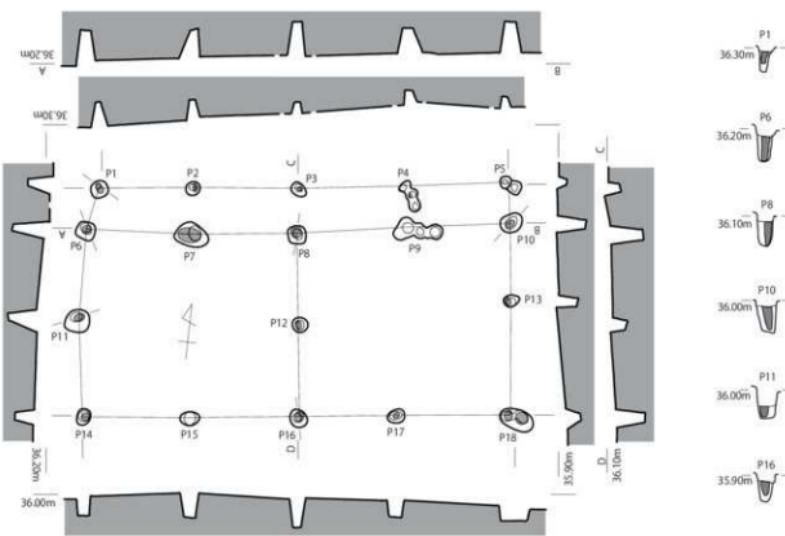


第 76 図 掘立柱建物跡実測図 (2)

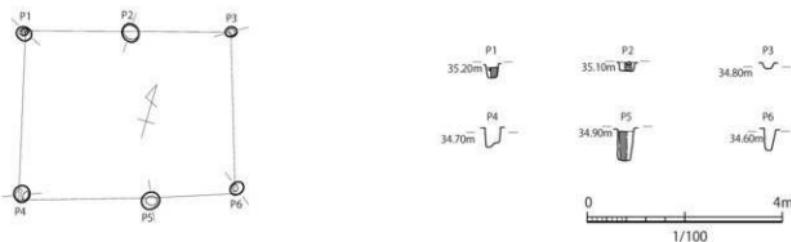
F-SB6



F-SB7

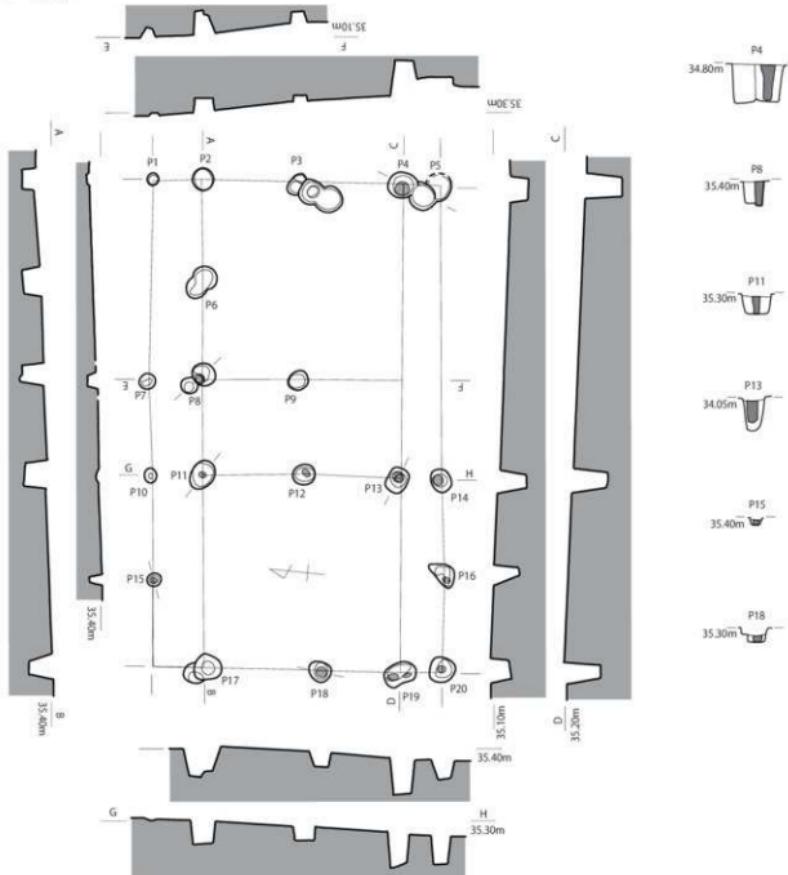


F-SB9

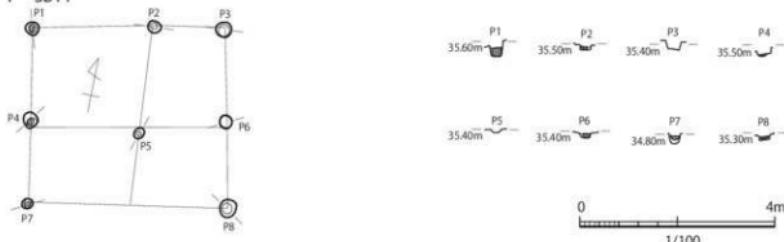


第 77 図 掘立柱建物跡実測図(3)

F-SB10

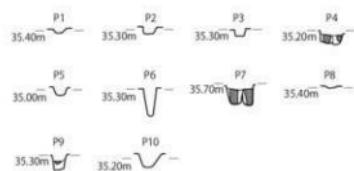
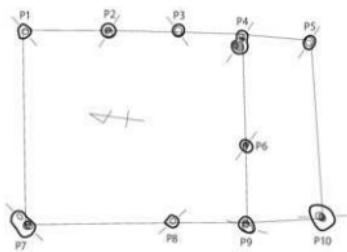


F-SB11

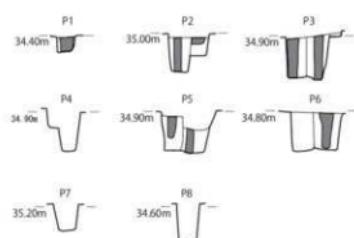
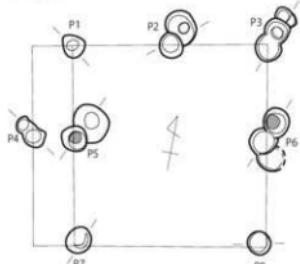


第78図 掘立柱建物跡実測図(4)

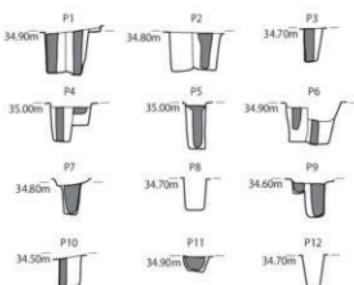
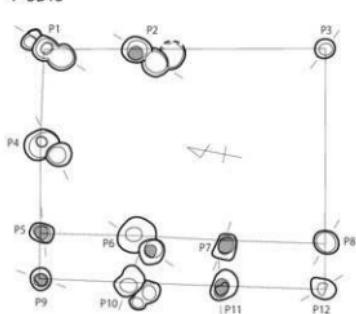
F-SB12



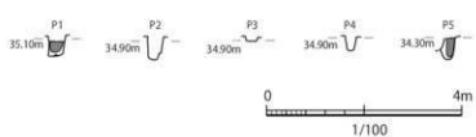
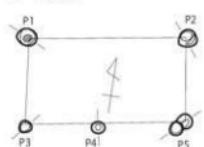
F-SB14



F-SB15

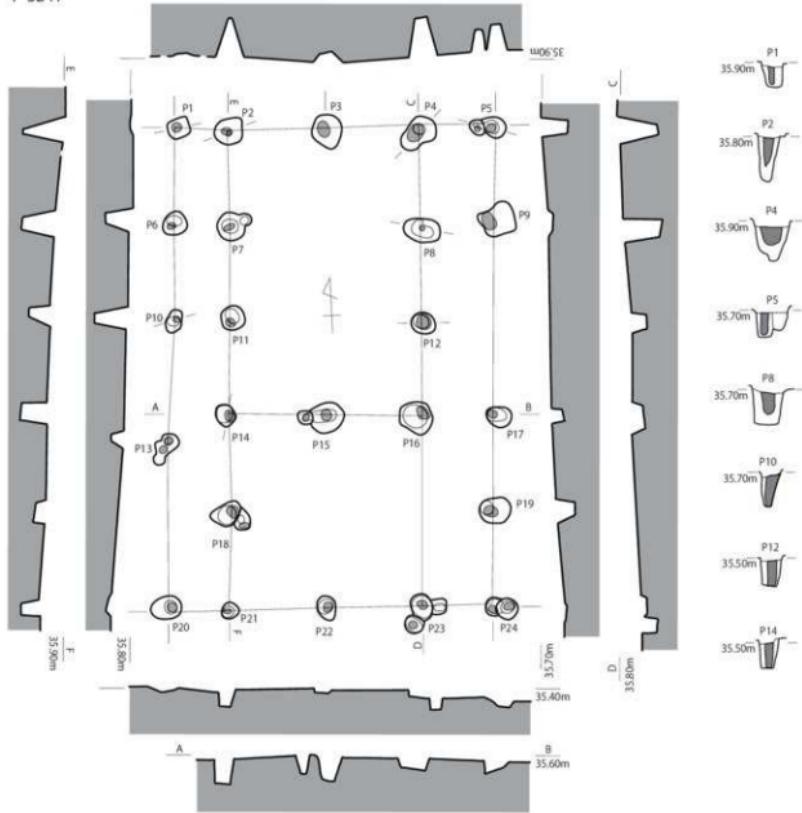


F-SB16

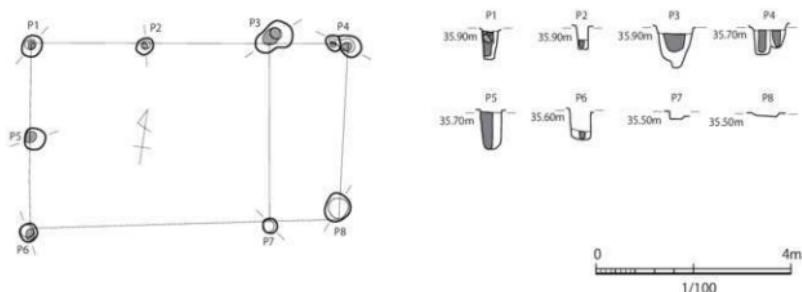


第79図 掘立柱建物跡実測図(5)

F-SB17

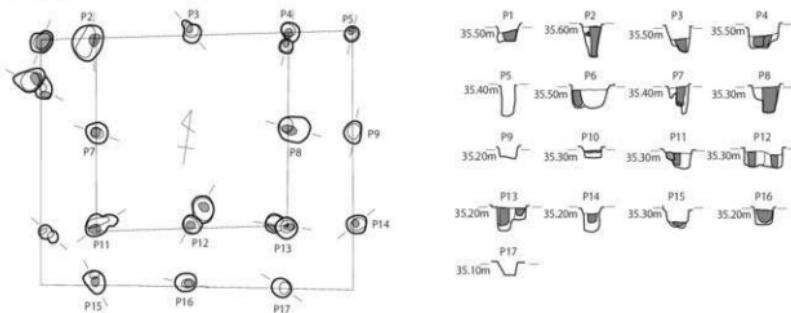


F-SB19

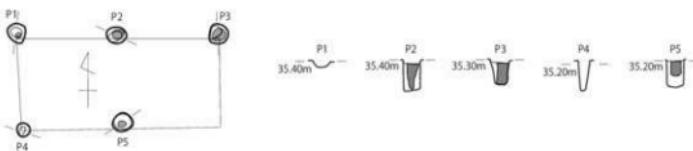


第80図 掘立柱建物跡実測図(6)

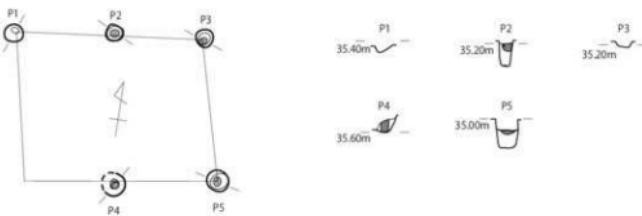
F-SB20



F-SB22



F-SB23



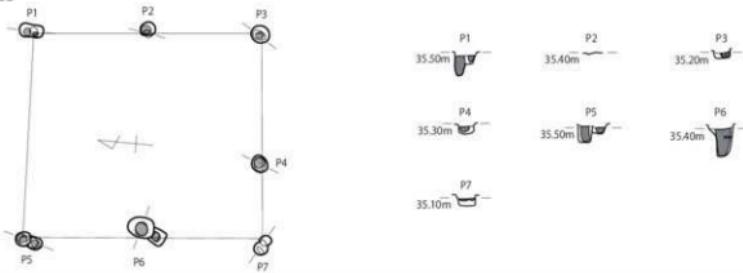
F-SB25



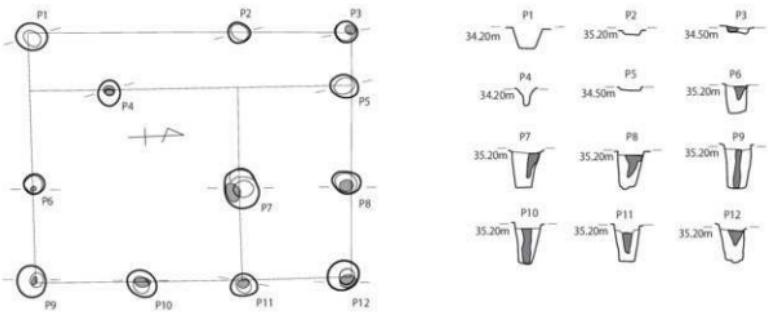
0 4m  
1/100

第 81 図 掘立柱建物跡実測図(7)

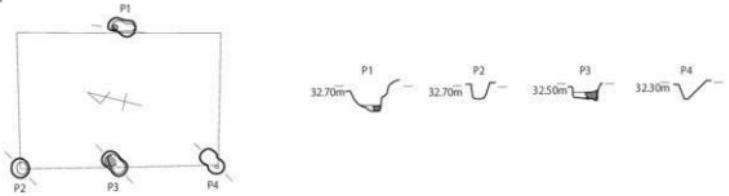
F-SB28



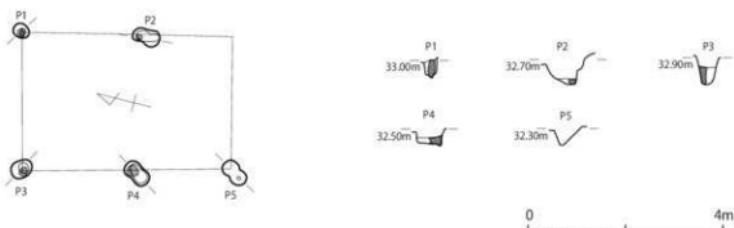
F-SB30



F-SB31



F-SB32



第 82 図 掘立柱建物跡実測図 (8)

SI3は曲輪面の南東隅付近で検出された。掘り込みは丸方形で、長径0.65m、短径0.5mを測る。深さは0.1mと浅い。配石や遺物の出土はない。

SI2-3はSI1同様に中世の時期と考えられるが、縄文時代早期の可能性も排除できない。

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡4棟は、総柱建物1棟(SB33)と側柱建物3棟(SB31-32-34)である。SB31～33は、曲輪F1の掘立柱建物跡②群、SB34は①群の建物主軸に当る。SB31～33は対になる建物跡の可能性がある。

SB31-32は、規模や建物主軸はほぼ同一で、位置関係や柱穴の切り合いで、建て替えの関係にある。

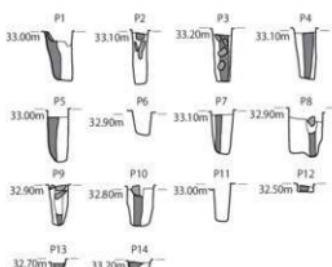
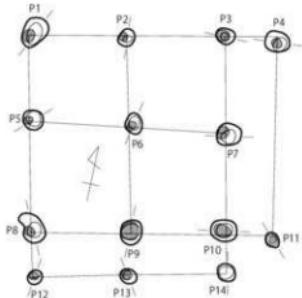
SB33は、身舎面積が16m<sup>2</sup>で南北两侧に庇を持つ総柱建物である。なお、SB31～34の出土遺物はない。

**柵列** 柵列は4条(SR13～16)ある。SR15はSB33を矩形に囲う。SR16とH-SR4は、曲輪の南西隅にある平面台形状の凹部を格護する位置関係にある。

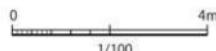
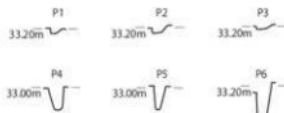
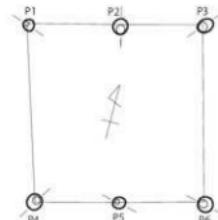
**遺物** 曲輪面や堆積土中から邵武四都窯系白磁皿、景德鎮窯系白磁皿・碗・八角杯、福建広東窯系白磁、青磁碗(105)・皿(164)・香炉、景德鎮窯系青花碗・皿・蓋、漳州窯系青花碗(278)、備前焼擂鉢(350)・甕、瓦質土器擂鉢(650)、土師器坏(568)、土師質土器(670)等が出土した。遺物の年代は14世紀後半～17世紀初頭までの幅に收まる。

(今塙屋・田中敏)

F-SB33



F-SB34



第83図 掘立柱建物跡実測図(9)

## 第5節 曲輪G 曲輪G（第84～85図）

**位置と構造** 曲輪Eの南側に位置し、最高所の標高305mを測る。曲輪Eとの比高差は25mである。曲輪面の東縁は谷部斜面や道路状遺構3、西縁は道路状遺構1、南縁は道路状遺構3に面する。

現地形や周辺の調査結果から、曲輪Gは全長23m、幅27mの平坦面と考えられるが、今回の調査では、平成17年度の調査部分と工事範囲内である東西22m、南北約25m～20mの北側部分のみの調査を行った（第84図）。

なお、上記部分以外については、協議の結果、当面は工事着手しないため、今回の調査対象からは除外した。現地表面に1mほど盛土して除外範囲を明示している。

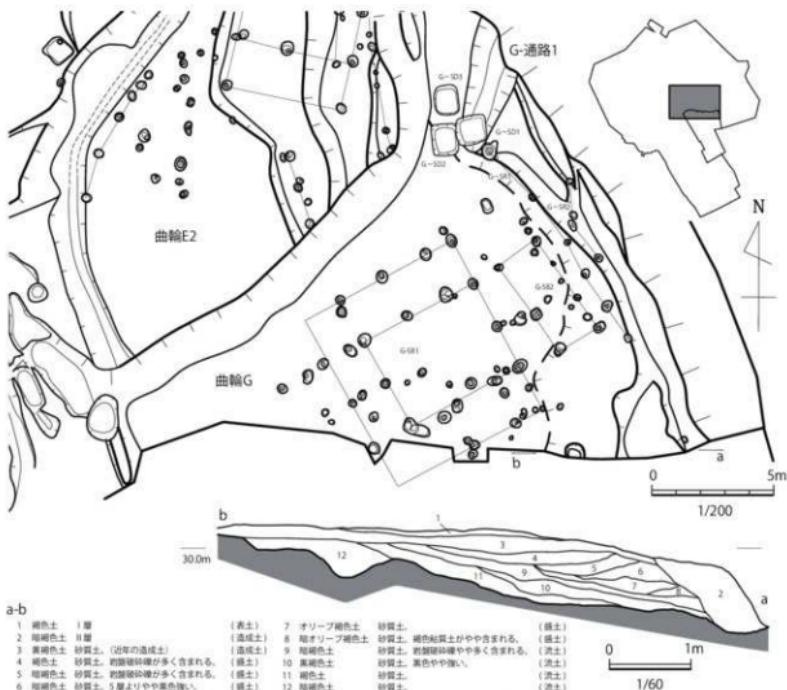
**曲輪面の形成** 曲輪面は岩盤を削り出して平坦面を形成するが、掘立柱建物跡（SBI）の東側には

盛土造成して平坦面を形成し、SB2や柵列（SRI・2）が構築されていた。

第9～12層は、岩盤面上に堆積するしまりの弱い褐色、暗褐色、黒褐色砂質土の流入土である。この上に第4～8層が堆積する。この堆積層は、しまりのやや強い土であることから盛土と判断した。盛土することによって平坦面を造り出し、曲輪の拡張をしていると考えられる。

なお、第3層は近年の造成土と考えられる。第2層は表土層であり、岩盤直上に堆積していることから、近年の造成（第3層）に伴って一部岩盤まで掘削されたと考えられる。

盛土内（第4～8層）の遺物は、福建廣東系白磁皿（72）、青磁碗等がある。白磁皿の年代は14世紀後半～16世紀代、青磁碗は上田分類のD類で年代は14世紀中葉～15世紀初頭に比定される。



第84図 曲輪G 遺構配置図・土層断面図

**遺構** 近世墓3基、通路状遺構1条、柱穴76基が検出された。柱穴群のうち、掘立柱建物跡2棟、柵列2条が復元された。近世墓については第V章にて報告する。なお、近世墓(SD3)の直上の現地表面に墓石と五輪塔部材の空風輪・火輪・地輪とがそれぞれ1基ずつ出土した。地元住民の話では、他所から動かされたようである。五輪塔部材は中世に属する。

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡は2棟(SB1・2)検出された。SB1の身舎は2間×3間の側柱建物で、北・南・西側の3面に庇を持つ構造となっている。身舎面積は、20m<sup>2</sup>である。柱穴は直径が0.2m～0.6m、深さが0.2m～0.7mである。北西の柱穴は擾乱で南西部は、未調査のため不明である。

SB1の柱穴出土遺物は、景德鎮窯系白磁皿(48)、青磁の輪花皿、備前焼甕(438)、景德鎮窯系の青磁小壺(521)等がある。遺物の最も新しい521は16世紀後半～17世紀初頭の年代が与えられるので、SB1は16世紀後半で掘立柱建物跡と考えられる。

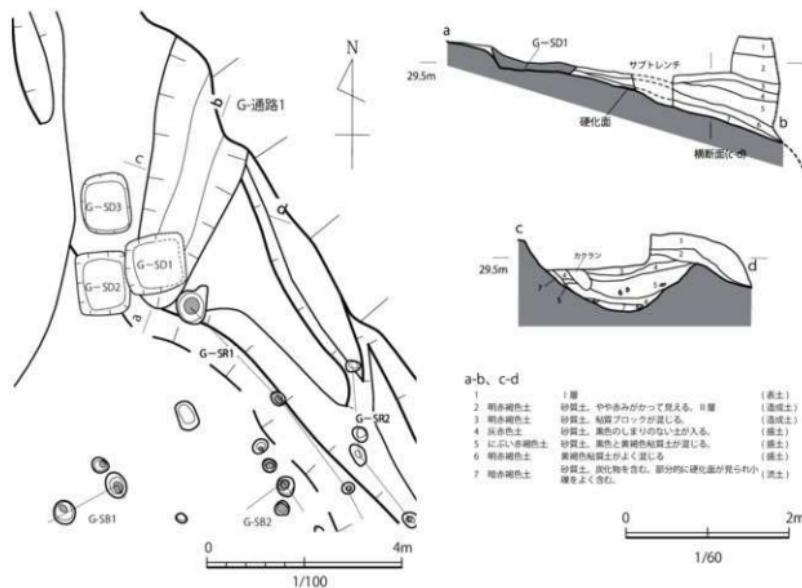
SB2はSB1の東側に位置する。1間×2間の規模で面積は約9m<sup>2</sup>と小型の側柱建物跡である。柱穴内によ

り京都系土器皿(617)が出土した。概ね16世紀代と年代が付与される。

**柵列** 柵列は2条(SR1・2)検出された。SR1は、1.6m～2.5mの間隔で柱穴6基が直線に並ぶ。北端の柱穴は、通路状遺構1の南端に位置するので門の柱穴の可能性もあるが、対になる柱穴がない。対になる柱穴が想定される位置には近世墓があるため、墓壙掘削の際に消失した可能性もある。

SR2はSR1の東側に位置する。部分的な検出なので全体構造は不明である。SR1とて東側斜面を二重に囲っていた可能性がある。SR1・2とも遺物はない。

**通路状遺構** 北東部には、通路状遺構1が検出された(通路1)。この通路状遺構1の曲輪面側は近世墓3基(SD1～3)が群在し、近世墓が通路状遺構1を切る関係にある。通路状遺構1は断面半円形で幅約1～2m、長さ約5mである。西側へ幅が狭まり、浅くなる構造である。東側の谷部との通路と考えられるが、東側は近年の造成により削平されているため詳細は確認できない状態である(第85図)。



第85図 曲輪G 通路状遺構実測図

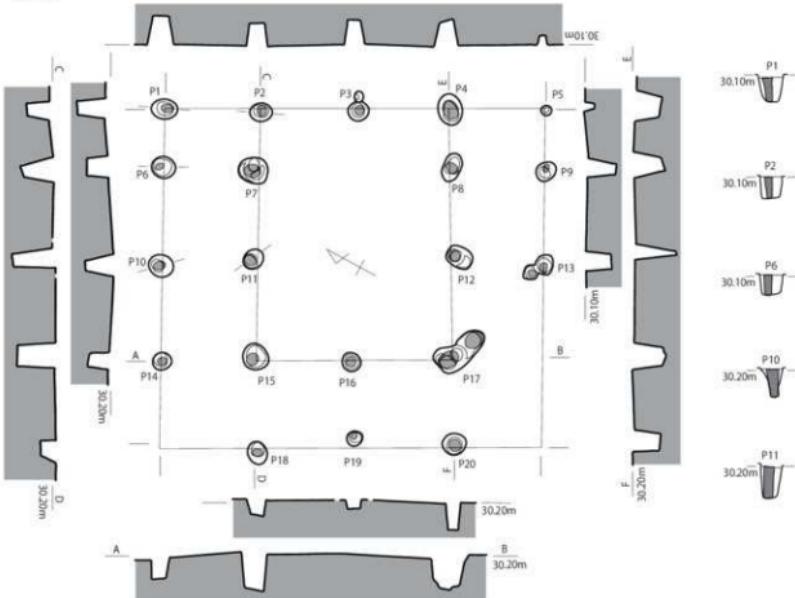
**遺物** 曲輪面や第1～3層（第84図）で出土した遺物は、邵武四都窯系白磁皿、景德鎮窯系白磁皿・八角杯・小杯、青磁碗・輪花皿、景德鎮窯系青花碗・皿（251）、漳州窯系青花、備前焼擂鉢・甕、瑠璃釉磁器（341）、醬釉染付小杯（343）、肥前系陶器皿、瓦質土器鍋（629）、錢貨（836）等がある。

**遺物** は、13世紀後半～14世紀前半頃の青磁碗以外は15世紀後半～16世紀後半の年代を示すものが主体である。肥前系陶器皿は1780～1860年代の製品で、近世墓が造営された時期よりも後出するようである。

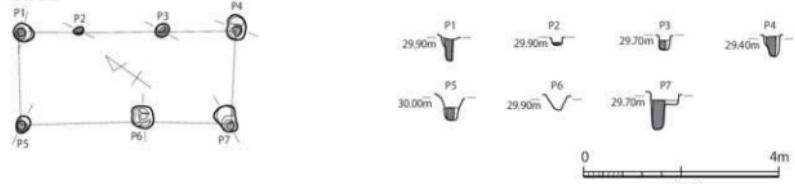
**盛土の時期** 盛土層（第84図 第4～8層）からは、14世紀後半～15世紀代の白磁皿や15世紀前半代の青磁碗が出土した。掘立柱建物跡（SB1）の柱穴からは、16世紀後半の青磁小瓶が出土した。上記の出土遺物の年代を考慮すると、少なくとも16世紀後半には盛土造成がなされ、その後掘立柱建物跡が建てられたと考えておきたい。

（田中敏）

G-SB1



G-SB2



第86図 掘立柱建物跡実測図(10)

## 第6節 曲輪H群

**概要** 曲輪H群は道路状遺構1の西側に位置し、曲輪Fを西から南に半周するように取り囲む。南側は曲輪Jに面する。東側は曲輪Cである。

曲輪H群の曲輪面は3段の平坦面で構成され、北側から曲輪H1・H2・H3とした。曲輪H2・H3は曲輪H1の帶曲輪的な意味合いが強い。

調査の結果、曲輪3箇所、土坑1基、掘立柱建物跡35棟、柵列10条、通路状遺構3条が検出された。

なお、曲輪F3の西側斜面および曲輪H3の北側延長上には、谷部の等高線に並行する細長い平坦面が3条確認された。この平坦面についても調査を実施し、その結果は本節にて報告する。

### 曲輪H1（第87-1、87-2図）

**位置と構造** 曲輪H1は曲輪F3の南からF2の西側を取り巻く弓形の平坦面である。曲輪面の東縁は道路状遺構1に面する。この東縁から曲輪F2との境（西縁）までの幅は約75m、最大長（北～南縁間）は約25mである。曲輪H2付近の奥行きは約9m、通路状遺構1より北側は3～5mと狭くなる。

なお、曲輪F3との境に沿って溝が巡るが、これは後世の造作によると考えられる（曲輪F3第73図）。

**層序** 曲輪面は岩盤を削りだして平坦面とする。その凹凸部分は岩盤破碎礫を密に含む褐色粘質土で充填されて整地される。

**遺構** 土坑1基、通路状遺構2条、柱穴158基が検出された。柱穴群のうち、掘立柱建物跡は31棟、柵列は6条復元された。

**土坑（SC1）** SC1はSB16に隣接した位置で検出された。平面形は梢円形で長軸長0.86m、短軸長0.56mである。深さは0.47mを測る（第90図）。

埋土は、0.05～0.25mの大角礫や円礫が密に入る層（第1層）と炭化物や焼土を多く含む層（第2層）に大きく区分された。礫は四壁に沿って敷き並べたような配置である。なお、第2層出土の炭化物をAMS年代測定分析した結果、15世紀前半～17世紀前半という年代が得られた（第VII章参照）。（今塙屋）

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡31棟の内訳は、総柱建物2棟（SB5・17）と側柱建物29棟である。SB1～30は群在し、SB31は通路状遺構1の東側に単独で所在する。

建物跡の身合面積は、最大で40m<sup>2</sup>（SB1）で、38m<sup>2</sup>（SB4・17）、33m<sup>2</sup>（SB8）、26m<sup>2</sup>（SB6・28）、24m<sup>2</sup>

（SB2・3・5・15・16）の順となる。20m<sup>2</sup>以下は、20m<sup>2</sup>（SB30）、15～17m<sup>2</sup>（SB9・19・25）、11～14m<sup>2</sup>（SB21・22・26）、10m<sup>2</sup>前後（SB7・20・23・24・29）、6～10m<sup>2</sup>未満（SB11・13・14・18・27）と続く。4m<sup>2</sup>未満という小型建物（SB10・12）もある。このように身合面積の大きさには規則性が感じられる。その面積の差異はおよそ2m<sup>2</sup>の倍数で序列化されているようである。

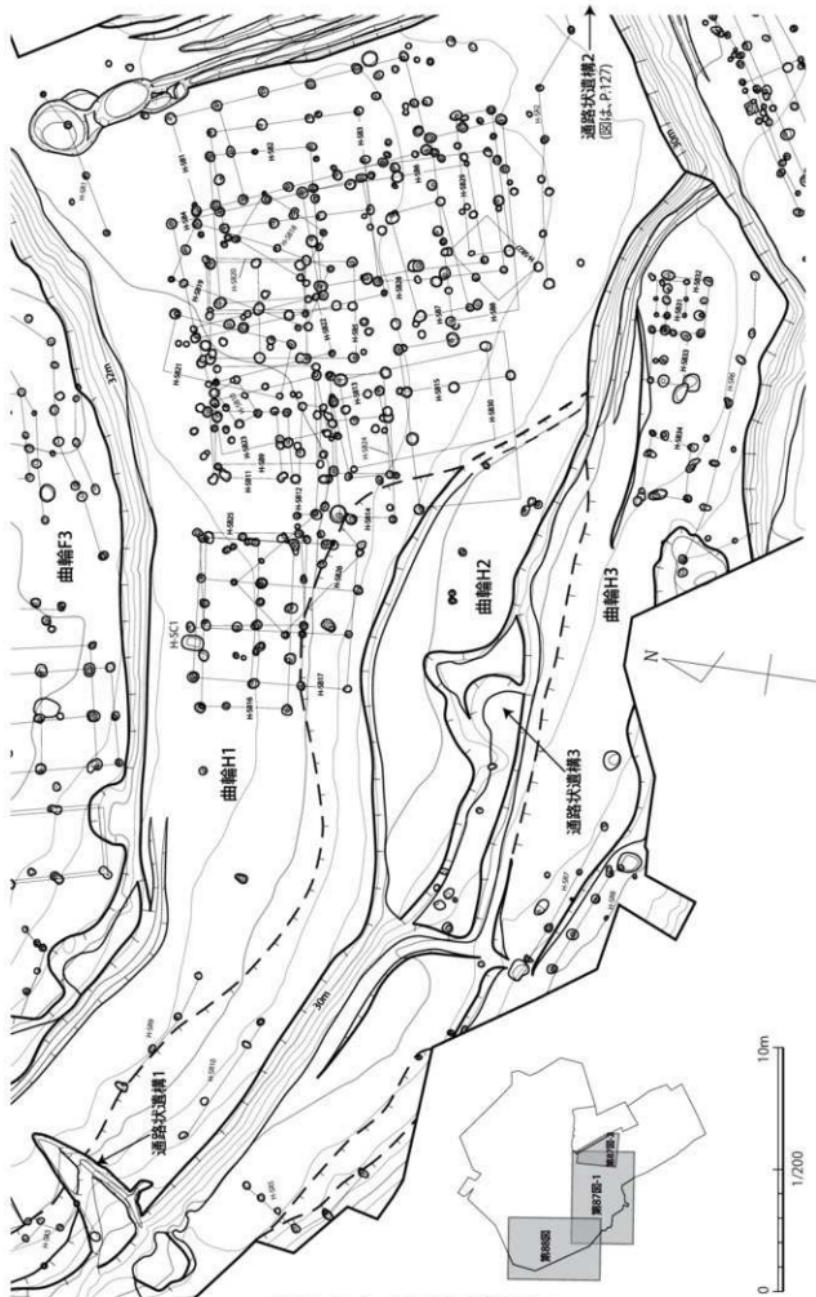
SB4・17は総柱建物で身合面積が38～40m<sup>2</sup>ある。同じ面積を誇るSB1を含めた3棟は、曲輪H1内の中核的な建物跡といえる。

また、建物主軸方向から、大きく6群に大別できる。①群（N-50°・W/N-48°・E: SB10・26）、②群（N-65～68°・W/N-21°・E: SB1・4・7・13・22・23・30）、③群（N-75°・W/N-17°・E: SB3・6・8・15・28・29）、④群（N-84(77)°・W/N-10°・E: SB2・5・9・11・12・14・16・17・20・24・25）、⑤群（N-10°・W: SB19・21）、⑥群（N-25～38°・W: SB18・27）である。掘立柱建物跡の柱穴の切りあい関係から、②群→④群の順となる。②～④群の建物主軸は、曲輪の輪線や道路状遺構1の主軸を意識している。①・⑤・⑥群の建物主軸は、曲輪や道路状遺構1とは大きく斜交し、このうち⑤群は曲輪F1の⑥群との主軸方向が違う。

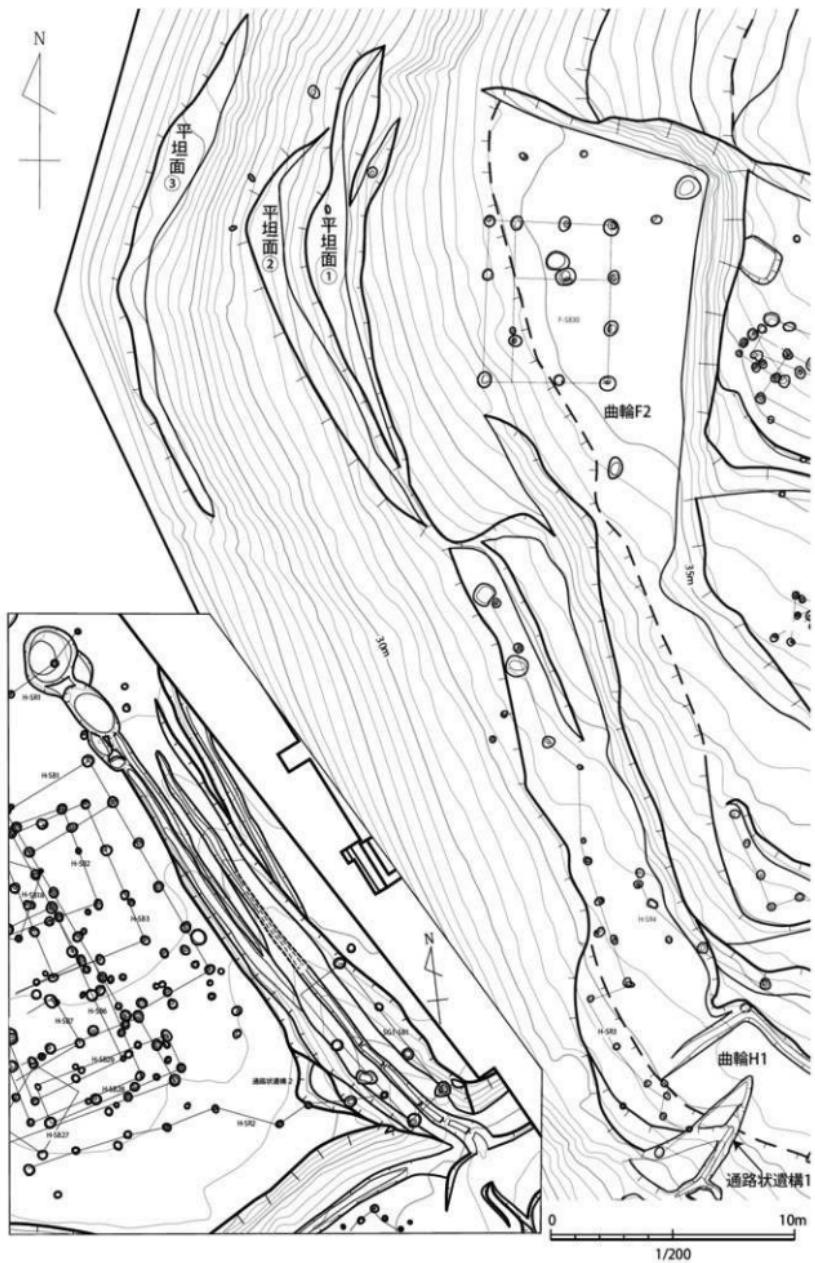
遺物は掘立柱建物跡については、SB1・3・4・5・6・8・9等の柱穴から出土した程度である。このうち図面掲載したものは、SB5の青磁碗（95）、褐釉陶器壺（334）、中世の平瓦（698）、SB6の景德鎮窯系白磁皿（52）、土師器皿（589）、SB9の邵武四都窯系白磁皿（33）、景德鎮窯系青花皿（232）等である。698の存在は瓦葺屋根の掘立柱建物跡が存在したことを示唆する。概ね15世紀後半～16世紀後半の年代幅である。なお、後述のように柱穴（掘立柱建物跡・柵列等、有機的な関連が把握できなかったもの）からは14世紀中葉～15世紀中葉頃の遺物も出土している。

**掘立柱建物跡の時期** 残念ながら個々の掘立柱建物跡や各群の時期は特定できないが、上記の出土遺物の年代から②～④群については、概ね15世紀後半～16世紀後半にかけて盛行した建物群と判断される。特に④群のSB5出土の備前焼播鉢は16世紀中葉～17世紀初頭の年代観が付与されるので、④群は16世紀後半代の建物群であった可能性が高い。なお、14世紀中葉～15世紀前半代の掘立柱建物跡が存在していた可能性も捨てきれない。

一方、①・⑥群は出土遺物や規模等から、近世に下る時期の建物跡となる可能性が高い。



第 87-1 図 曲輪 H 遺構配置図



第 87-2 図 曲輪 H 遺構配置図

第 88 図 曲輪 H 西側斜面部遺構配置図

**柵列** 柵列は6条確認された。SR1は曲輪H1の北東隅に位置し、道路状遺構1と曲輪面を横断する。この柵列と曲輪F法面との間が通路の空間となる。

SR2はSB8の南側に位置し、道路状遺構1の門状遺構(SG1-SB1)から曲輪面の境にある段差(通路状遺構2)を越えて、曲輪H2へと東西方向に直線的に延びる。この段差を曲輪面と道路状遺構1を結ぶ出入り口とみるならば、SR2は出入り口と掘立柱建物跡群を覆う目隠し柵様となる。SR3-4は通路状遺構1の北側にあり、先細りする曲輪面の縁に沿うため谷部方面から曲輪H1・F2を防護する柵列となる。

SR9・10は通路状遺構1の南に位置し、約3mの間隔を空けて並列する。曲輪H1方向への防護的な施設である。SR1～4・9・10の遺物はない。

(今塩屋・川俣)

**通路状遺構** 通路状遺構1は曲輪H1の西側平坦面の中程に位置する。平面形は二等辺三角形状で、最大幅2.5m、長さ6mを測り、法面から平坦面向かって収束する。断面形は、平坦面から法面向かって傾斜する。底面は2段の平坦面で構成され、また、溝底面の東側は深さ20～30cmの側溝となる。遺物の出土はない。

さらに段状の平坦面の下部には、壇状の平坦面(曲輪H3側)が接続する。この幅は2.3m、奥行き1.7m、曲輪H3平坦面との比高差は0.3～0.4mを測る。

これら一連の平坦面が段状に下る構造は、曲輪Jの通路状遺構4と共に通る所以、曲輪H1と曲輪H3を連絡する通路状遺構と捉えられる。

通路状遺構2は、曲輪H1南東隅に位置し、曲輪平坦面から道路状遺構1内のSB1に向けて、平面三角形に掘り込んだ構造である。長軸長は3m、曲輪面と道路状遺構1の底面との比高差は1.2mを測る。比高差の割に段状の平坦面が少ないことで、上り下りしにくいため、道路状遺構から曲輪面に引き込んだ形となるので通路状遺構とした。遺物等は出土していない。

**遺物** 曲輪H1の柱穴(掘立柱建物跡・柵列等以外)からは、邵武四都窯系白磁皿(33)、福建広東系白磁皿(78)、青磁碗、景德鎮窯系青花碗(249)、瀬戸美濃焼片口小瓶(471)、備前焼擂鉢、土師器皿(589)等が出土した。曲輪H1の曲輪面や堆積土層の遺物は、青磁皿(166)、景德鎮窯系青花碗(253)、備前焼擂鉢(400)等がある。

遺物は、13世紀後半～17世紀初頭までと年代幅は広いが、主体は14世紀後半～16世紀代である。

### 曲輪H2 (第87-1図)

**位置と構造** 曲輪H2は曲輪H1の南に位置する台形状の平坦面で、全長23m、幅7mを測る。

曲輪面は、曲輪H1より0.4～0.6mの下面に位置する。平坦面は西側に向かって中程から傾斜している。西側はさらに一段低い平坦面となる。

**層序** 曲輪面は岩盤を削りだして平坦面とする。

**遺構** 通路状遺構1条と柱穴14基が検出された。柱穴は直線的に並ぶので柵列の可能性がある。

**通路状遺構** 通路状遺構3は、曲輪面の南側縁辺中央に位置する。平面三角形で段状の掘り込みが認められる。段差は0.2～0.4m程度で容易に曲輪H2と曲輪H3側に出入りできる。壁面や段差の加工はやや雑である。なお、遺物の出土はない。

**遺物** 曲輪H2からは、邵武四都窯・景德鎮窯・福建広東系の白磁、景德鎮窯系青花碗・皿(238)、漳州窯系青花碗(278)、備前焼擂鉢・甕、瑠璃釉磁器(340)等が出土した。曲輪H1同様、遺物は、13世紀後半～17世紀初頭までと年代幅は広いが、主体は14世紀後半～16世紀代である。

### 曲輪H3 (第87-1図)

**位置と構造** 曲輪H3は曲輪H2の南に位置する長方形の平坦面である。東端は曲輪J1に接し、曲輪H1・H2を取り巻く。全長50m、幅8mを測る。曲輪の1.3m下に曲輪J1、2.3m下に曲輪Kが位置する。柵列(SR6)の西側には、さらに一段低い平坦面の一部が確認されたが、調査区の都合上、この部分のみに留めた。西側に向けて曲輪面が続くようである。

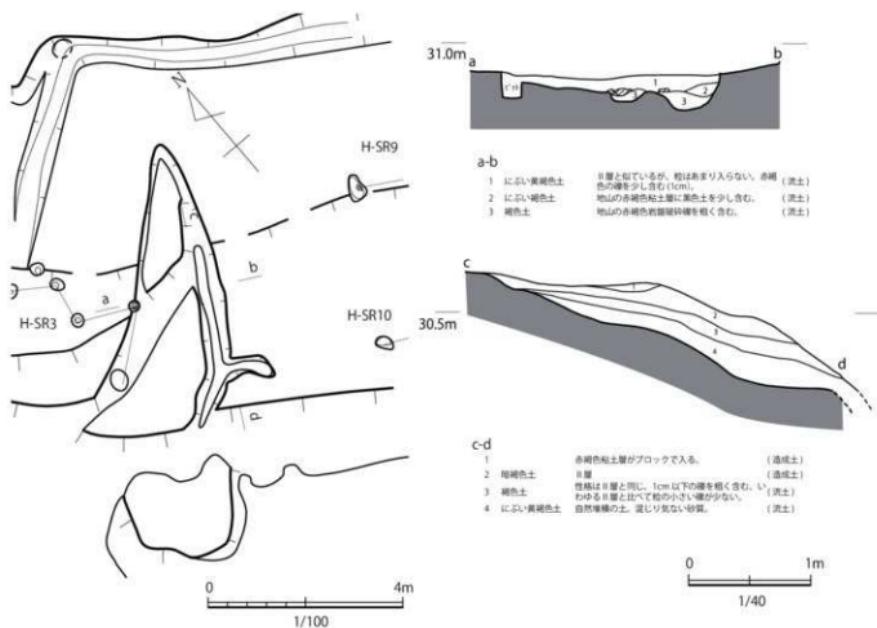
**層序** 曲輪面は岩盤を削りだして平坦面とする。平坦面上には最大1mの耕作土や表土が堆積する。

**遺構** 柱穴66基が検出された。このうち掘立柱建物跡4棟、柵列4条が復元された。

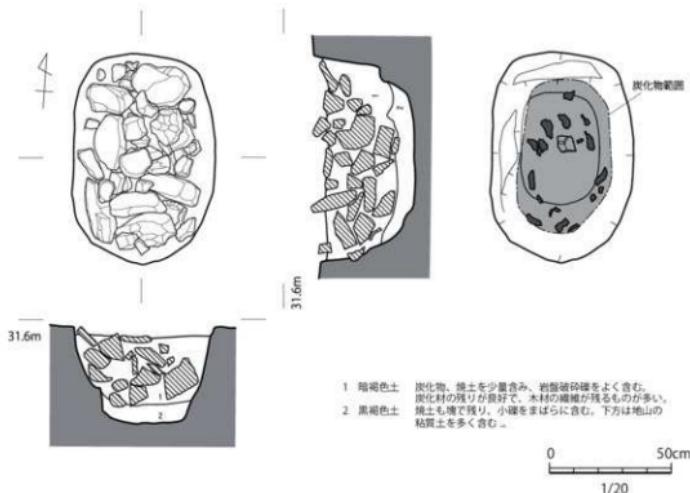
**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡は4棟(SB31～34)検出された。曲輪面の東側にあり、曲輪H1・2の法面と柵列(SR6)の間に東西方向に整然と建ち並ぶ。建物主軸もほぼ同一の側柱建物群である。

建物跡の身舎面積は、4m<sup>2</sup>大(SB32-34)と2m<sup>2</sup>大(SB31・33)と狭く、柱間距離は0.8m程度と他の掘立柱建物跡と比べて狭い。SB33のように建物規模にしては柱数が多い掘立柱建物跡もある。建物主軸は曲輪H1の掘立柱建物跡④群と類似している。

なお、掘立柱建物跡の柱穴からの出土遺物はない。



第 89 図 曲輪 H 通路状遺構 1 実測図



第 90 図 曲輪 H SC1 実測図

**柵列** 柵列は4条確認された。SR6は曲輪H3の南部に位置し、曲輪Kとの境に沿う。SR5は西端に位置し、曲輪面を矩形に囲む。SR7・8は曲輪H3の中央付近に位置する。曲輪面の縁と西側斜面に並列する。

これら4条の柵列は連携しあって西側谷部斜面方面に対する効果的な防御施設となっている。

**遺物** 曲輪H3の柱穴（掘立柱建物跡・柵列等以外）の出土遺物は土師器窯（567）がある。曲輪H3の曲輪面上や堆積土内からは、邵武四都窯・景德鎮窯・福建広東系の白磁、青磁碗（136）・輪花皿（162）、景德鎮窯系青花碗、漳州窯系青花、備前焼擂鉢・甕、土師器皿（602）、土師質土器の鍋（624）、土鍤（737）等が出土した。624は播磨型と呼称される鍋形土器である。遺物の年代は概ね14世紀後半～16世紀後半にあたる。

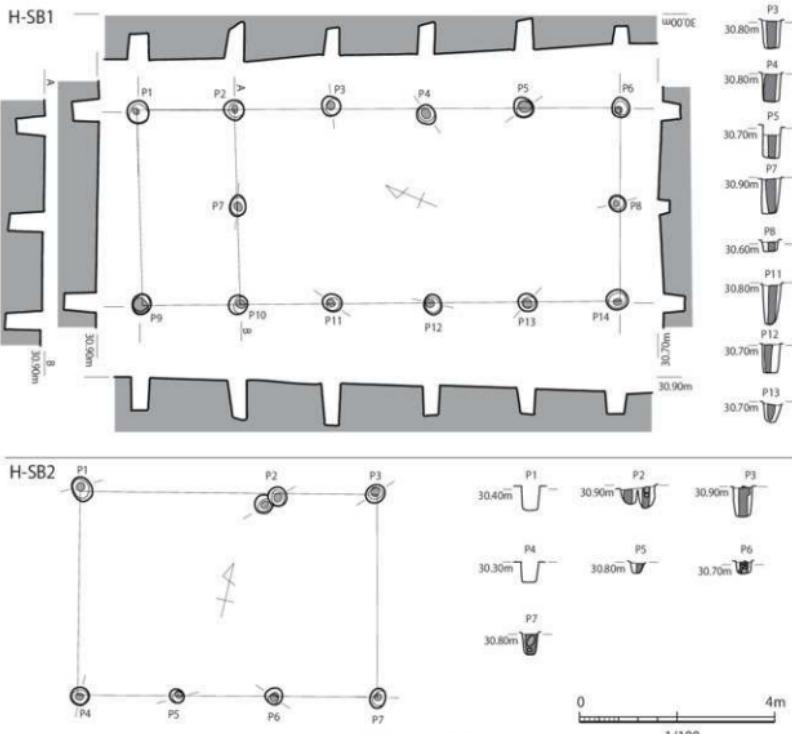
**西側斜面部の平坦面** 曲輪F2の西側斜面と曲輪H1の北側延長上には、細長い平坦面が3条確認された。それぞれ平坦面①～③とする（第88図）。

平坦面①は幅17m、奥行き最大1.6mである。平坦面②は幅16.7m、奥行き最大1.5mである。平坦面③は幅20.5m、奥行き最大1.9mである。標高は27.5m～32.75mで北から南にやや傾斜している。いずれの平坦面も地形に沿うように彎曲している。

このように3箇所の平坦面が確認できたが、遺構等は確認できず、人間がすれ違うことができないほど狭いため、帯曲輪と断定することはできない。機能についても検討し得るに至らなかった。

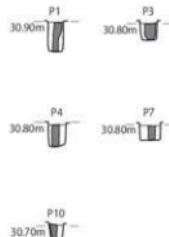
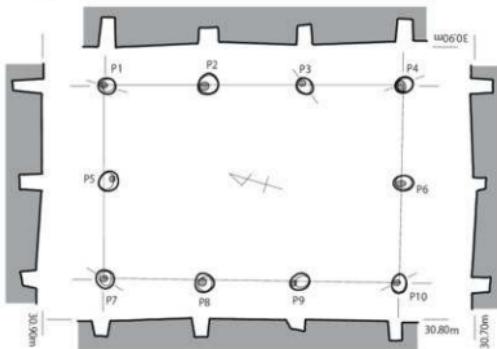
平坦面からは青磁碗と備前焼甕などが出土した。年代は14世紀後半～15世紀代にあたる。

（今塩屋）

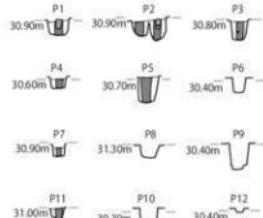
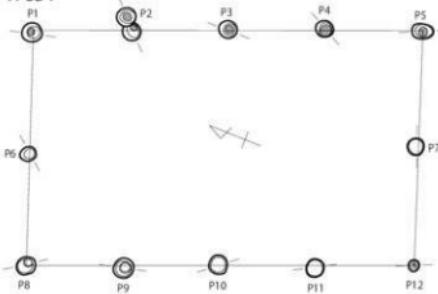


第91図 掘立柱建物跡実測図(11)

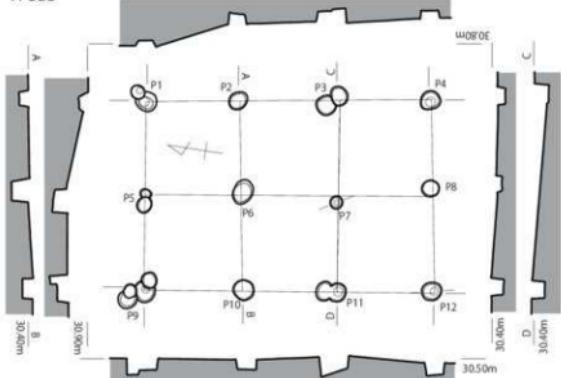
H-SB3



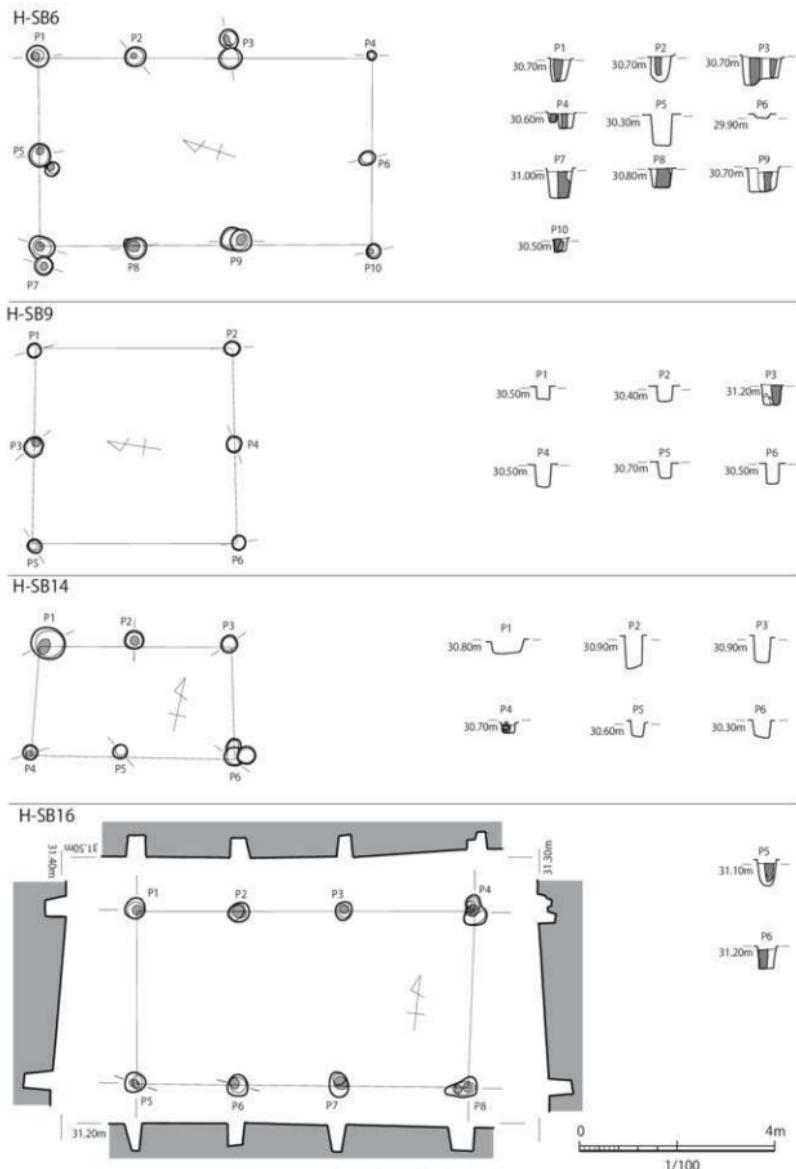
H-SB4



H-SB5

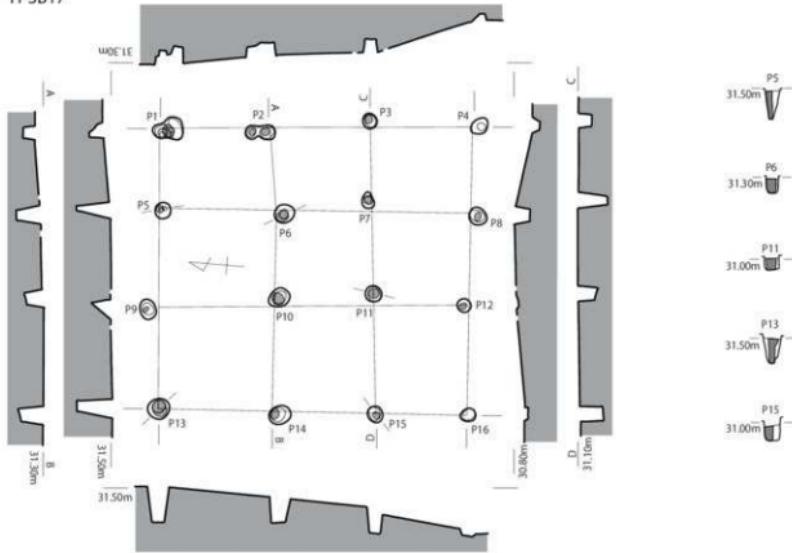


第92図 掘立柱建物跡実測図(12)

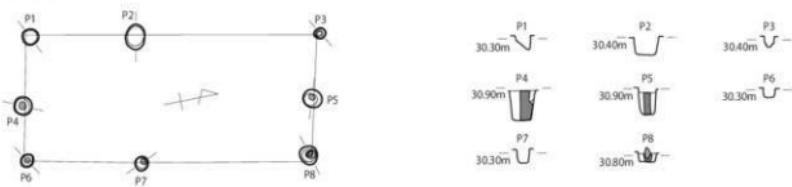


第93図 掘立柱建物跡実測図(13)

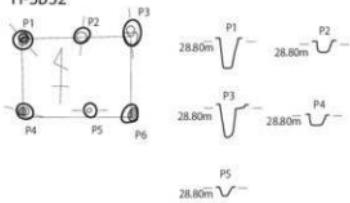
H-SB17



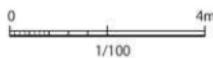
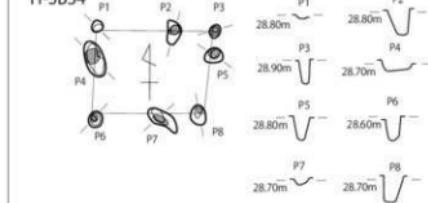
H-SB19



H-SB32



H-SB34



第94図 掘立柱建物跡実測図(14)

## 第7節 曲輪I・J・K群

### 1 曲輪I (第64図)

**位置と構造** 曲輪Iは道路状遺構2の東側にあり、未調査区を挟んで道路状遺構3の南側に面する平坦面が曲輪面の北東端と考えられる。

曲輪内には、鬼界アカホヤ火山灰層以下の自然堆積層が良好に遺存していた。

曲輪面は、他の曲輪と異なり岩盤を削り出して平坦面を造成するのではなく、アカホヤ火山灰層やその上位の自然堆積層を掘削して平坦面とする。

**遺構** 調査区内では、遺構は検出されていない。遺構は、削平されたましくは曲輪面の中心部に偏在しているようである。

**遺物** 青磁碗(86)・輪花皿(154)、漳州窯系青花皿(287)、褐釉陶器瓶(335)、備前焼鉢(462)、椀形の鍛冶津(930・932・933)等が出土した。遺物の年代は、15世紀初頭～17世紀初頭の幅に収まる。

### 2 曲輪J群 (第95～102図)

**位置と構造** 曲輪Jは道路状遺構1～3の交差地点に面し、3方を曲輪に囲まれる。曲輪面のほぼ全面が調査され全長30m、幅40mを測る。最高所は標高28m、北側の曲輪Hとの比高差は2mである。曲輪面中央のスロープ(通路状遺構5)を境に平坦面の北側を曲輪J1、南側を曲輪J2とする。

**曲輪面の造成** 曲輪J1は岩盤を削り出して平坦面とし、その凹凸部分は岩盤破碎礫を密に含む褐色粘質土で充填されて整地される。曲輪J2は岩盤やアカホヤ火山灰の自然堆積層を削り出して平坦面とする。

なお、曲輪面の中央より北側付近の段差や曲輪Hとの境に走行する溝は、後世の烟地造成による。

**遺構** 穴穴建物跡1軒、土坑1基、集石遺構1基、通路状遺構5箇所が検出された。451基の柱穴からは、掘立柱建物跡18棟、柵列12条が復元された。

**豊穴建物(SA1)** 曲輪面の南端付近に位置する。長辺3.0m、短辺2.6mの台形に近い平面形で、主柱穴は4本である。

柱穴(P2)出土の炭化物のAMS年代測定では、580-655calADの結果が得られている。しかし、豊穴部埋土とSB17-18の柱穴埋土が類似しているので、SA1の時期は、古墳時代後・終末期ではなく中世に属するとしておく。なお、豊穴建物跡は、今回の調査では曲輪J・Mの隣り合う曲輪において3軒のみが検出された。ほぼ同じ規模、同一の主軸方向の特徴を有する。

**土坑(SC1)** 曲輪J2南側法面の犬走り状の平坦面と上部の斜面にかけて、等高線に並行に掘り込まれる。

長軸長2m、短軸長1mを測り、平面形は楕円形である。断面形は深い皿状で深さは0.2mである。底面には2つの小穴が穿たれ、深さは0.1～0.2mと浅い。

遺物は、埋土中の邵武四都窯・景德鎮窯系白磁皿、漳州窯系青花碗、褐釉陶器四耳壺、土鍾(744)等がある。遺物は15世紀後半～16世紀後半の時期である。集石遺構(S11) SB12の中に位置する。掘り込み内には0.1m大の角礫が密に集中するが、それほど赤化していない。掘り込みの平面形は楕円形で長辺065m、短辺0.5m、深さ0.1mを測る。配石はない。掘り込みの埋土は掘立柱建物跡の柱穴埋土と類似する。S11は、形態的には、繩文時代早期の遺構に似ているが、検出面(礫集中部)は岩盤面まで削り出した平坦面上なので、中世の時期と捉えておく。

(今塙屋・松田)

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡18棟は、総柱建物1棟(SB18)と側柱建物17棟である。曲輪J1に10棟(SB1～10)、曲輪J2に8棟(SB11～18)分布する。

曲輪J1では、南北で建物跡の桁行方向が異なる。北側は東西、南側は南北方向の建物跡となる。

曲輪J2では、通路状遺構3と通路状遺構5を結ぶ軸線から東側に建物跡が群在する。

建物跡の身舎面積は、最大で42m<sup>2</sup>で(SB5)で30m<sup>2</sup>(SB2・9・13・17)、20m<sup>2</sup>(SB4・6・8・15・16)、16～17m<sup>2</sup>(SB14・18)、10m<sup>2</sup>前後(SB3・10・12)と続き、5m<sup>2</sup>前後という小型建物(SB7・11)もある。

桁行が東西方向の大型建物(40～30m)は曲輪J1に偏在し、桁行が南北方向となる建物跡の身舎面積は20～30m<sup>2</sup>で曲輪J1と曲輪J2にも分布する。

また、庇付建物は身舎面積が20m<sup>2</sup>を越える7棟が該当し、うち3棟(SB2・5・17)の庇は二面である。SB2・5は、曲輪J内の中核的な建物跡といえる。

さらに、建物主軸方向から、大きく5群に大別できた。①群(N-64°・E:SB7)、②群(N-47°・W/N-38°・E:SB3・4・8-11)、③群(N-53°・W/N-32°・E:SB1・2-13・16)、④群(N-57°・W/N-30°・E:SB5・6・9・10-12・14)、⑤群(N-75°・W:SB15-17・18)である。

②～④群は主軸方向が近しいが、①群のSB7は、他の群と建物主軸の向きが大きく異なる。むしろ曲輪Kに群在する近世墓群に相対した位置にある。

特に②・③群は、建物主軸方向の差異がわずかなので近接した時期が想定される。④群は、身舎面積が40～30m<sup>2</sup>の大型建物と10m<sup>2</sup>以下の小型建物がセットになる。⑤群は曲輪J2にのみ分布する建物跡である。

遺物は、SB1～3・5・8・13・14の柱穴から出土しており、SB3出土の褐釉四耳壺(313)、SB8出土の漳州窯系青花碗(270)を図化掲載した。

個々の建物跡の時期は、柱穴の切りあい関係や柱穴内出土遺物に乏しく、はっきりしない。少なくとも②・③・④群は、上述した遺物の年代から15世紀中葉～後半ないしそれ以降の時期となろう。(今塩屋・川俣)

**柵列** 柵列は12条確認され、柱間距離の平均は2.1mである。SR1～4は、曲輪J1の掘立柱建物群を囲繞するように配置され、SR4はスロープを横断する。

SR5・9・11・12は曲輪J2の曲輪際と法面下の曲輪Kとの境に沿って巡る。SR5・9の柱穴は後世の搅乱や削平で部分的に失っている。SR10は曲輪J2南側法面の中段を巡る。この部分は三重の柵列となる。

SR8とSR5の一部やSR6・7は、切り通しの通路やステップの両側面を護る柵列である。

遺物は、SR2の柱穴内より景德鎮窯系白磁皿、青磁碗(107)、景德鎮窯系青花碗(229)、土器器坏(571)等が出土した。229は16世紀中葉頃の遺物である。

**通路状遺構** 通路状遺構とは、道路状遺構と同じくモノやヒトの往来に資する平坦面や溝である。曲輪Jでは5箇所あり、曲輪J1-J2間をつなぐスロープの他に、曲輪と外部と連絡する通路状遺構が4箇所確認された。

曲輪J1の北東隅に通路状遺構1、曲輪J2の北東隅に通路状遺構2、南端中央部に通路状遺構3、曲輪Kとの境にある段状部分を通路状遺構4とし、曲輪J中央部のスロープは通路状遺構5とみなす。

このように曲輪J2は4方向から外部と連絡できる。

通路状遺構1・2は道路状遺構2から分岐して、曲輪Jへの出入り口となる。

通路状遺構1は道路状遺構1～3の交差部に接続し、幅1.7mの間口となる。

通路状遺構2は長軸長2.5m、幅1.5mで、曲輪面と道路状遺構2の比高差1.2mを結ぶ。溝状に掘られた底面は5～6段の階段で、その幅は0.2～0.7mを測る。曲輪面側はSR5と接し、このSR5と曲輪J1の南側法面下の空間が出入り口と考えられる。この空間は、南側法面が一部切り込まれて幅2.6mの間口となる。

通路状遺構3は、曲輪J2南端中央に位置し、曲輪Jと曲輪Mを南北に繋ぐ。両側はSR5・8で囲まれる。長軸長4m、幅0.5mを測り、法面を斜めに切り通して1.3mの比高差を下る。通路内は4段の階段で構成され、その段の幅は約0.2～1mである。曲輪南側法面の中段には幅狭な平坦面が犬走り状に西側へ延びているが、その起点は通路状遺構の最下段となる。

通路状遺構4は曲輪J2と曲輪Kを結ぶ幅広いステップ状である。比高差は1mで、他の通路状遺構に比べて勾配や段差が大きい。ステップ最大幅は3.4mでその両側には柵列(SR6・7)が並ぶ。

通路状遺構4の北側は、曲輪Kに向かう幅2mの平坦面の起点となる。また通路状遺構4と曲輪J2の掘立柱建物跡群の間は、遺構(柱穴)の希薄な空間である。遺構検出状況や掘立柱建物跡の配置関係を考慮すると後世の削平とするよりは、建物が存在しない空閑地であったと考えられる。

通路状遺構5は、曲輪J1-J2間を結ぶ緩やかなスロープ状である。SR4付近から傾斜が始まる。幅は6.4～10.4mだが、掘立柱建物跡等が位置する関係で、実際に通行可能な幅は2.2m程度である。

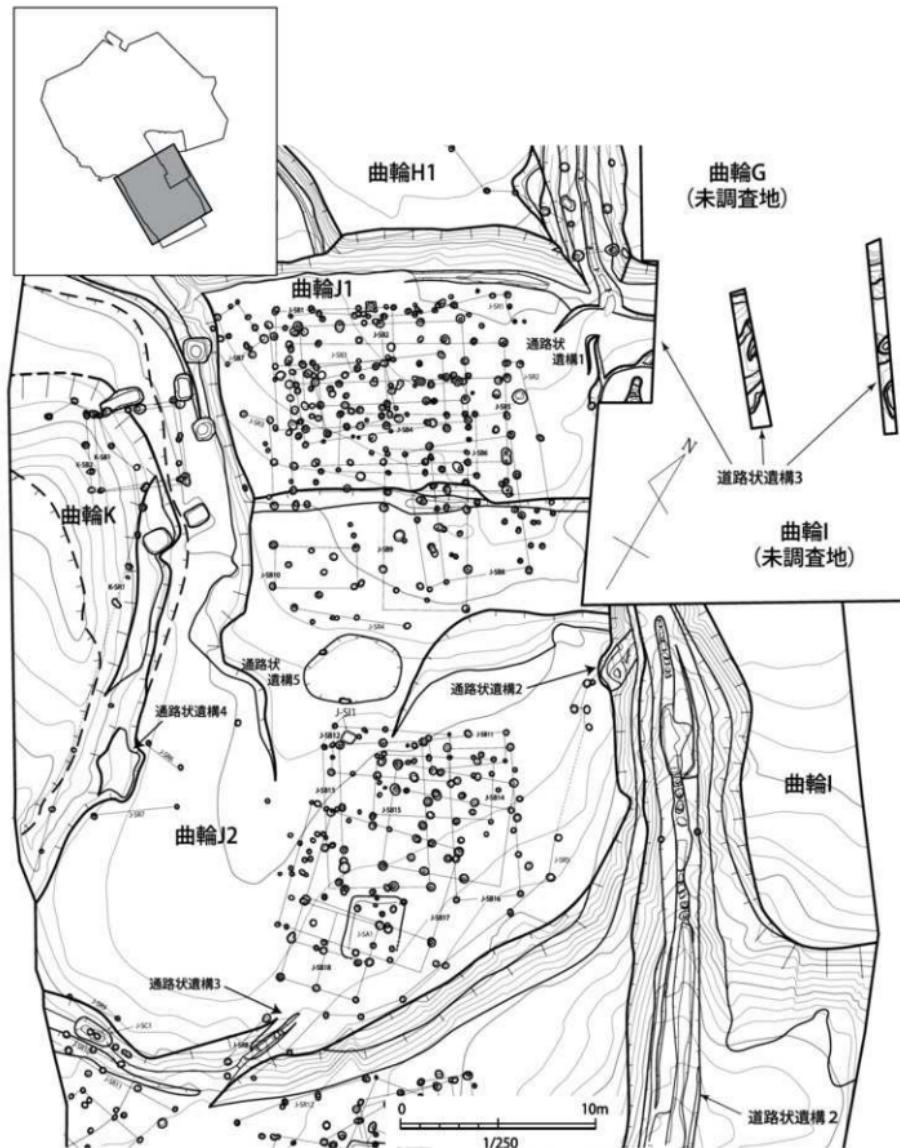
なお、SR4近くの土坑は、時期等は不明である。

**遺物** 曲輪J1の柱穴(掘立柱建物跡・柵列等、有機的な関連が把握できなかった柱穴をさす)の出土遺物は、青磁碗(81・82・91・119)、景德鎮窯系青花碗(228)・皿(247)、備前焼擂鉢(365)・四耳壺(442)等がある。14世紀中葉～15世紀初頭と15世紀中葉～16世紀初頭の年代を示す遺物が比較的多い。

曲輪J1の遺構検出面や堆積土層から、邵武四都窯系白磁八角杯(40)、景德鎮窯系・福建廣東系白磁皿、青磁碗(129)、景德鎮窯系青花碗(218・223・224)・皿(244)、漳州窯系青花、褐釉陶器小壺(333)、備前焼擂鉢(390)、肥前系磁器碗(497)・瓶(518)等が出土した。遺物の年代は14世紀後半～近世後半と幅広いが、14世紀後半～15世紀前半、15世紀後半～16世紀後半の遺物が比較的多い。

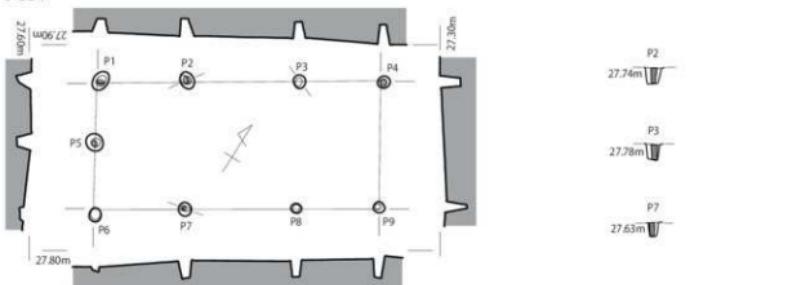
一方、曲輪J2の遺構検出面や堆積土層出土の遺物は、邵武四都窯系・景德鎮窯系・福建廣東系白磁皿や小杯、青磁碗・皿、景德鎮窯系・漳州窯系青花碗・皿、備前焼擂鉢(379)や壺、瓦質土器の双耳壺(644)等がある。青磁碗に13世紀後半の年代を示すものがあるが、少数である。14世紀後半～16世紀後半の遺物が主体となる。

(今塩屋・松田)

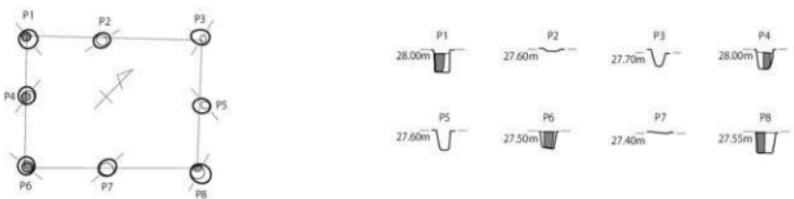


第95図 曲輪I・J・K群 遺構配置図

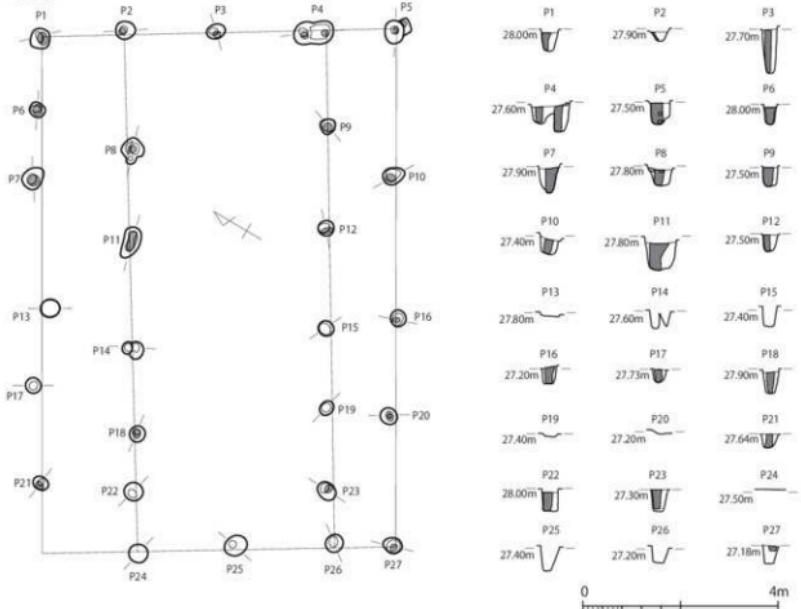
J-SB1



J-SB3

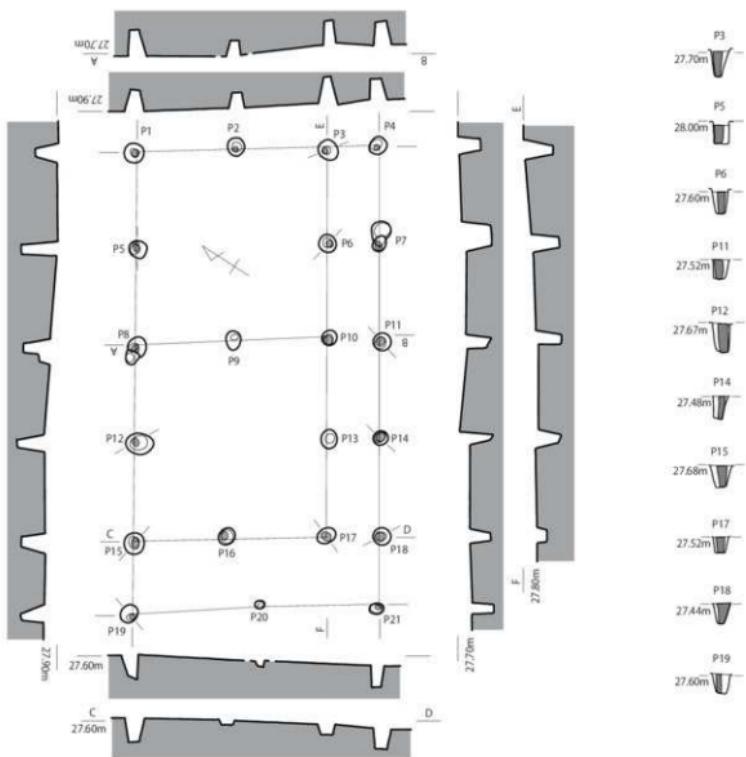


J-SB5

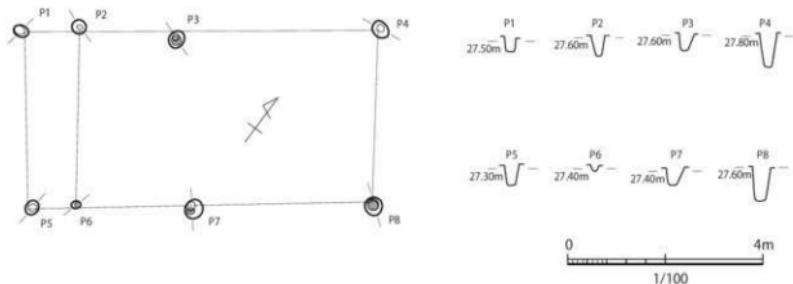


第 96 図 掘立柱建物跡実測図 (15)

J-SB2

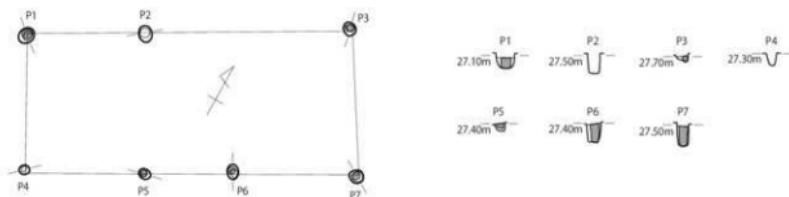


J-SB4

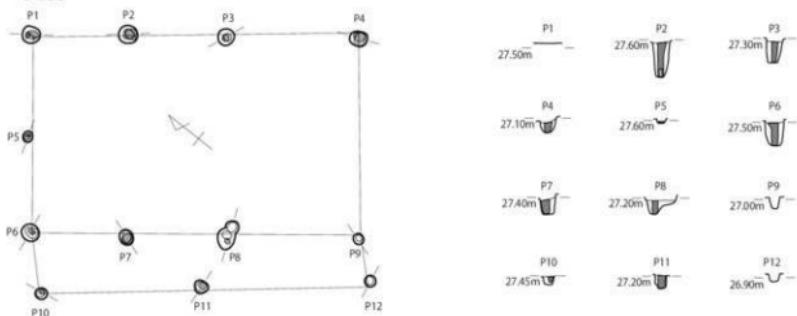


第 97 図 掘立柱建物跡実測図 (16)

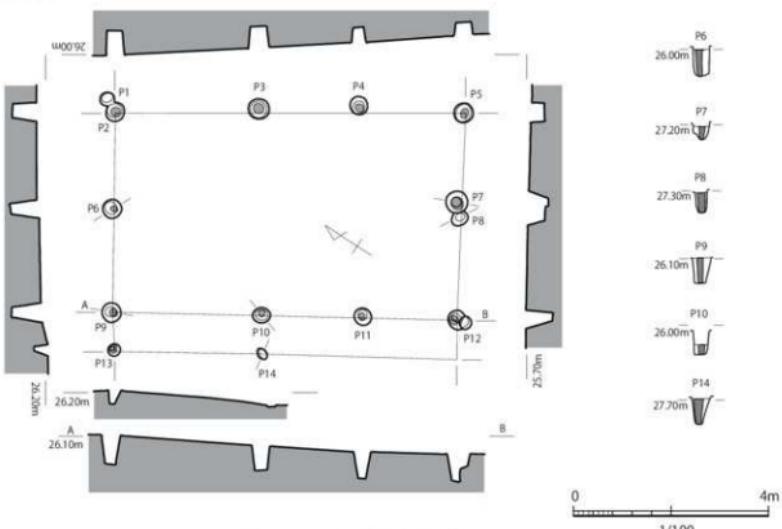
J-SB6



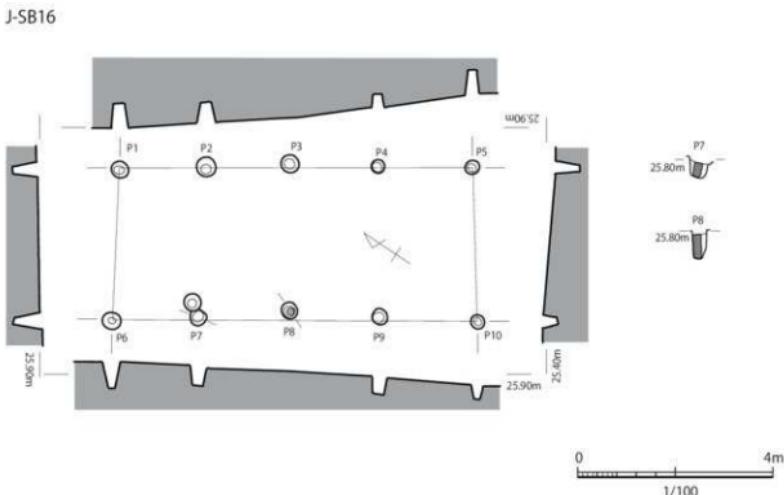
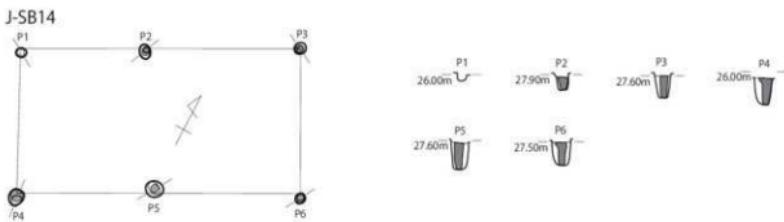
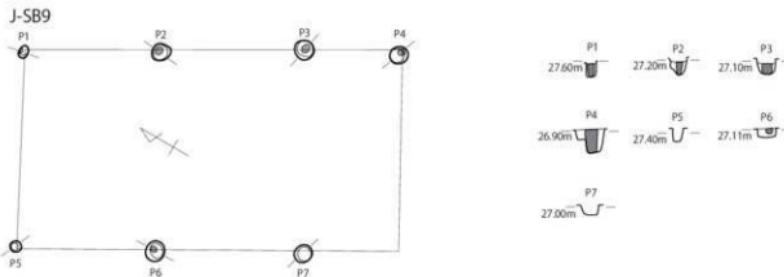
J-SB8



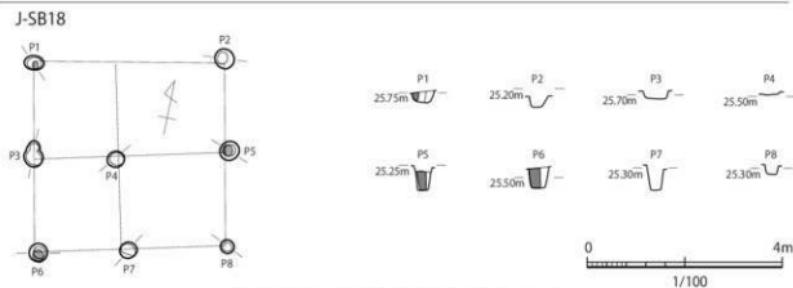
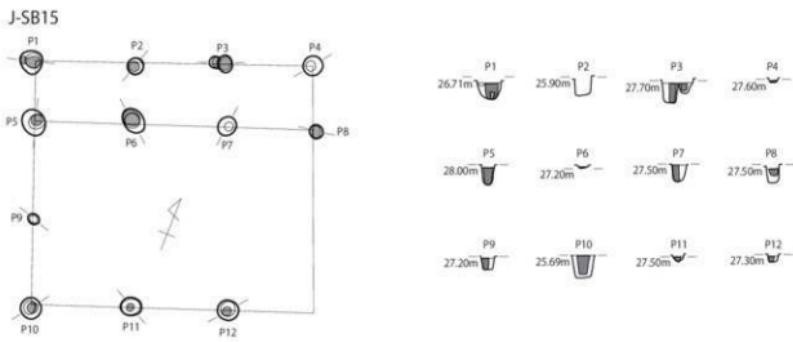
J-SB13



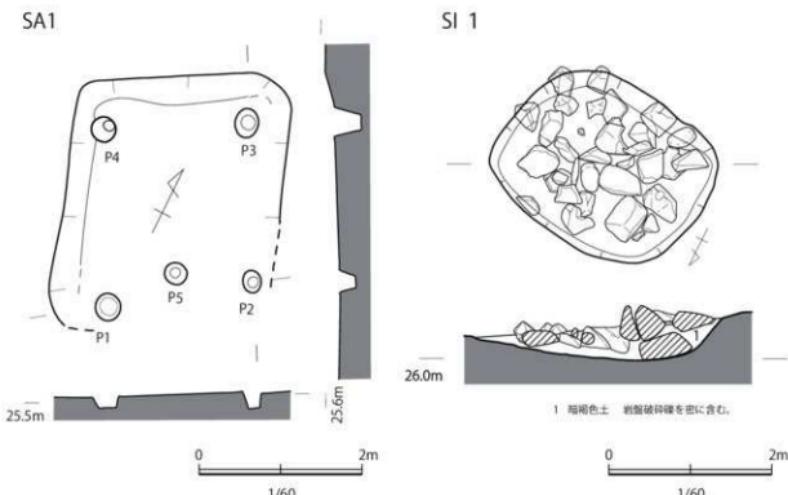
第 98 図 掘立柱建物跡実測図 (17)



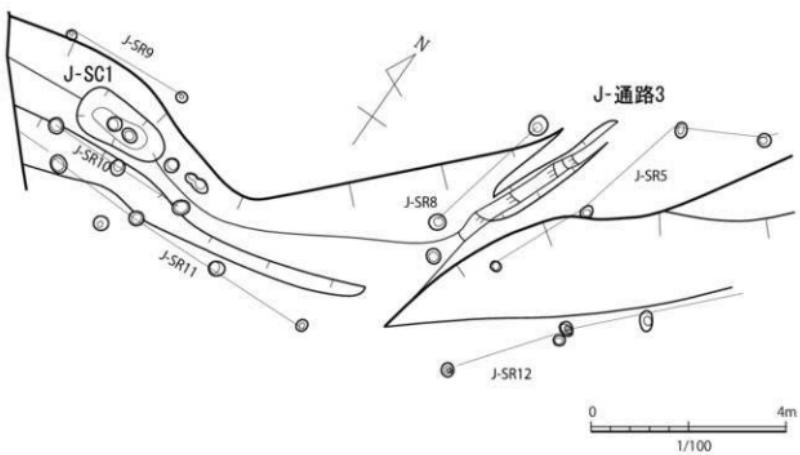
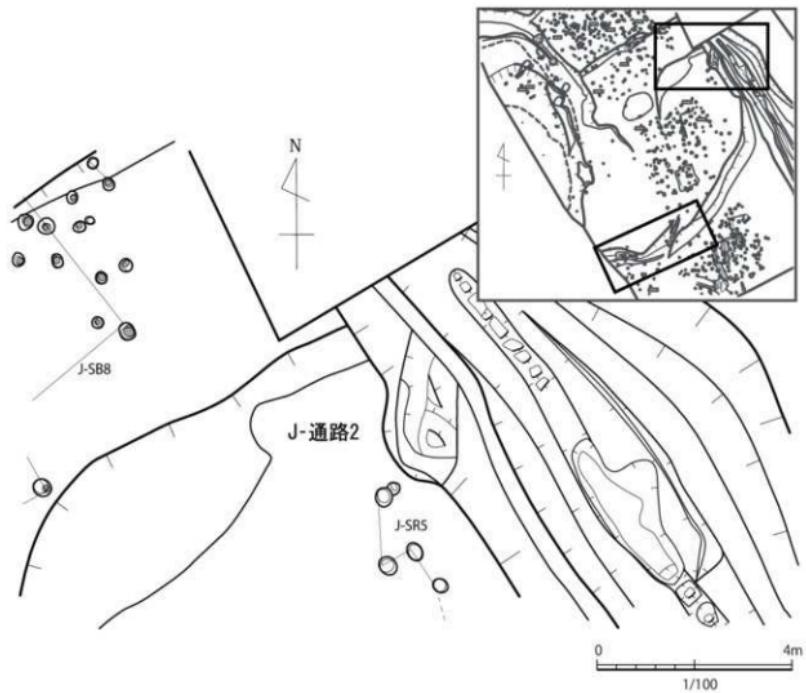
第99図 掘立柱建物跡実測図(18)



第100図 掘立柱建物跡実測図(19)



第101図 曲輪J群 遺構実測図



第 102 図 曲輪 J 群 通路 2・3 SC1 実測図

### 3 曲輪K（第95・103・104図）

**位置と構造** 曲輪Kは谷地形の頂部にあたり、曲輪Jの西側に位置する。曲輪面は曲輪Jから0.4～0.6mほど一段下がった、断面L字に岩盤を削り出した平坦面とそれに連なる第11・13層上面である（第103図）。やや谷部へ傾斜しているが、基本的には水平面となる。掘立柱建物跡や柵列、土坑墓はこの面で検出された。曲輪面は調査区外に向けて階段状に下ると思われる。

なお、第11～14層は基本土層II層由來の褐色土ブロックを多く含み、炭化物も混入するので、曲輪面造成時の盛土とも考えられる。遺物はほとんど含まない。

第11・13層上面に堆積する第7～10層は暗褐色・黒色土の自然堆積層で後述のように遺物の出土が多い。

さらに第4～6層は褐色土ブロックを多く含む堆積土である。第4層面で近世墓が検出された。堆積土の状況から、第4～6層は盛土と判断される（第103図）。

盛土は、谷地形を覆うように、谷への落ち込み際付近では浅く、標高の低い南西側で厚く堆積する。

**遺構** 土坑1基、土坑墓1基、さらに柱穴31基が検出され、掘立柱建物跡2棟と柵列1条が復元できた。削り出された岩盤面と第11・13層上面で検出された。

近世墓は4基（SD1・2・4・5）検出され、掘り込みは第4層面である。なお、近世墓は第V章にて報告する。

**土坑（SC1）** 曲輪Kの平坦面と法面裾との境にある。平面形は不整な方形で一辺11m、深さは0.32mを測る。埋土は概ね黒褐～暗褐色で、下の層が明るい色調となる。埋土上層には付近の岩盤由来とみられる0.1～0.3m大の角礫が多数含むが、明確な赤化はない。上層を中心にして炭化物や焼土も混入する（第104図）。

なお、埋土下層から出土した炭化材のAMS年代測定では、415-536calADとの結果が得られた。

遺物は、第3・4層より鉄滓（921）が、埋土中より景德鎮窯系青花皿が出土した。青花皿は小野B1類に相当し、15世紀後半～16世紀後半の年代にあたる。

SC1の時期は、測定結果よりは青花皿の年代もしくはそれ以降とするのが妥当と考えられる。

**土坑墓（SD3）** 残丸長方形の平面形で、長軸2.1m、短軸0.8mを測る。底面は水平ではなく、谷部方向へ傾斜する。西側上部が削平され遺存状態は悪い。

検出面では角礫の集中が認められた。遺物の出土はないが、平面形等から土坑墓とした。土坑墓の時期は近世墓4基（SD1・2・4・5）と検出層位と平面形等が異なるので中世に属するものとした（第104図）。

**掘立柱建物跡** SB1・2は2×2間の側柱建物で、主軸方向の位置が一致し、かつ曲輪Jの掘立柱建物跡の④群にほぼ揃う。柱穴の切りあい関係からSB1→2の順となる。またSB1の柱穴はSD2に切られる。SB1・SB2は西側に傾斜する地形に位置するため、高床の建物跡と考えられる。

遺物は、SB1柱穴出土の洪武通宝（812）等がある。

**柵列** SR1は、部分的に柱穴を失うが、谷地形の等高線に沿うように標高26m付近を逆C字形に巡る。

SB1の柱穴とSD3を切るので、SB1・2やSD3に後出する。柵列のみが単独で存在した時期があるようである。

（今塙屋・松田）

**遺物** 曲輪面の柱穴（掘立柱建物跡・柵列等、有機的な関連が把握できなかった柱穴）の出土遺物は、備前焼甕等がある。年代は15世紀中葉～16世紀初頭である。

曲輪面の上位に堆積する層（第7～10層：第103図）から出土した遺物は、福建広東系白磁皿（73）、碗（8）、青磁碗（118・127）・皿（142・147）、褐釉陶器天目碗（302）、無釉陶器（339）、備前焼擂鉢（352・385・396・402）・甕・壺（433）、瓦質土器風炉（668）等が出土した。遺物は、14世紀中葉から16世紀後葉にかけての年代幅におさまる。

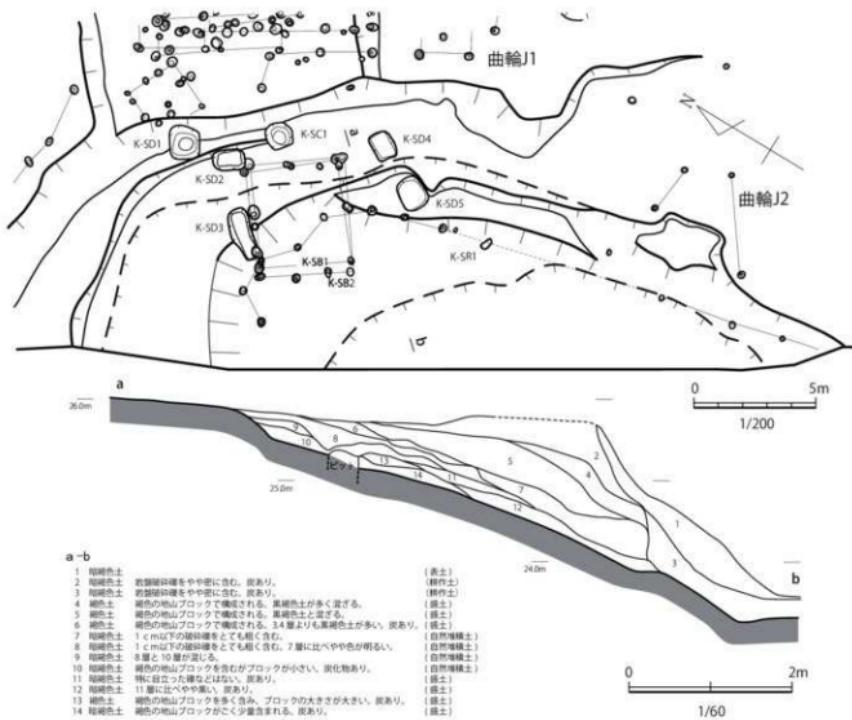
第4～6層（第103図）の出土遺物は、ペトナム産青花花瓶（346）等がある。また、第2層（耕作土）の出土遺物は、景德鎮窯系小杯（265・266）、肥前系磁器の紅皿（522）、瓦質土器双耳壺（643）、土師質土器の周防型甕（627）等がある。522は1780～1860年代の近世後半に位置付けられる。

**曲輪の時期** 曲輪面で検出された柱穴出土遺物の年代は15世紀中葉～16世紀初頭で、曲輪面上に堆積する第7～10層出土の遺物は14世紀中葉から16世紀後葉の年代幅で捉えられ、近世に下るものはない。従って、曲輪Kは遅くとも16世紀代には曲輪として成立したようである。

**盛土の時期** 盛土（第4～6層）出土の遺物には盛土の時期を推定できるものに乏しい。ただし、盛土面から掘り込まれる近世墓の埋葬年代は17世紀末が最古（第V章参照）と導かれるので、17世紀末には盛土されていたと考えたい。その契機として近世墓地としての曲輪の再造成が考えられる。

なお、南側曲輪群における近世墓群は、曲輪Gの東端にも認められ、谷部に面した崖際に位置する。曲輪Kの近世墓群と同様な墓域の選地形態である。

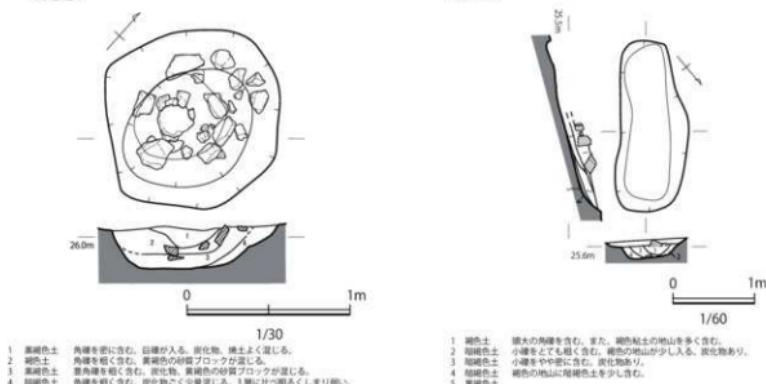
（今塙屋）



第103図 曲輪K 遺構配置図 土層断面図

K-SC1

K-SD3



第104図 曲輪K SC1 SD3 実測図

## 第8節 曲輪L・M

### 1 曲輪L（第64図・105図）

**位置と構造** 曲輪Lは道路状遺構2(SG2)の東側に位置する。北側は曲輪Iで、東・南側は調査区外となる。最高所は標高23m、曲輪Iとの比高差は4mである。曲輪面は岩盤を削り出して形成されたと考えられる。今回の調査では、曲輪面の一のみが対象となった。

**遺構** 調査区内では、遺構は検出されなかった。ただし、周辺の曲輪J・Mでは、SG2の肩部から5~7m離れた空間に掘立柱建物跡等の遺構が展開するので、調査区外に遺構が存在するものと想定される。

**遺物** 曲輪面や堆積土層より備前焼窯、褐釉陶器天目碗(305)、瓦質土器の羽釜(619・621)、双耳釜(633)等が出土した。621は和泉河内型にある。出土遺物の年代は15~16世紀代の幅におさまる。

### 2 曲輪M（第105~108図）

**位置と構造** 曲輪Mは、南側輪群のうち、今回の調査区の南端にある。SG2の西側に位置する。

曲輪Mの最高所は標高23m、北側にある曲輪Jとの比高差は5mである。曲輪Mの南側は平成14年度に調査された「中山遺跡」の調査地である。

曲輪Mと「中山遺跡」との間に深い谷筋があるが、基本的になだらかな尾根が続く地形となるので、「中山遺跡」の調査地も曲輪Mの曲輪面として捉えておきたい。遺構 穫穴建物跡2軒、土坑1基が検出された。柱穴は「中山遺跡」調査分と合わせて225基が検出され、掘立柱建物跡を16棟復元できた。また、曲輪面東側にある谷地形の外縁に直線的に並ぶ柱穴列は柵列の可能性がある。なお、不明遺構(SX1)は第V章にて報告する。

**竪穴建物跡(SA1)** SA1は一辺約2.7m（北辺の計測値）、深さ0.24m（残存部計測値）を測る。東・南側は大きく削平を受けるが、隅丸正方形ないし長方形の平面プランと考えられる。

主柱穴は4本と見られるが、確認できたのは3基である。SA1の南側のSA2との先後関係は不明である。SC1に切られている。

SA1の中央よりやや北東側の床面には、焼土層の広がりが見られた。焼土層は硬くしまり、炭化物を多く含んでいた。焼土層の炭化物のAMS年代測定結果は、1265~1302calADであった。一方、埋土

中の炭化物は、1400~1442calADの年代が得られている。なお、埋土および床面からは、土器や陶磁器等の出土はなかった。

**竪穴建物跡(SA2)** SA2は一辺約3.0m（北辺の計測値）、深さ0.4m（残存部計測値）を測り、SA1の南西側に隣接する。SA1との先後関係は不明だが、位置関係からは相互の関連性はあるように思われる。南・東側は削平を受けており、SA1同様に大きく損なわれていた。

平面形は方形または長方形で、1辺の長さは3m以上である。また、主柱穴とみられるピットを2基確認しており、その配置から4本柱の構造であったと考えられる。

なお、遺構検出面において、焼土層が認められた。長さ4m、幅1.2mでSA2の遺構主軸と沿うように縱長である。焼土層からは、焼土粒を多く含み、〔鉄塊系遺物（鍛冶原料鉄）(919~920)〕や鐵滓が出土地。邵武四都窯系白磁皿、青磁碗や鐵釘や砥石もある。青磁碗は上田BII類に相当し、14世紀後半~15世紀初頭の年代とされる。

**土坑(SC1)** SA1・2を切る遺構である。長軸1.6m、短軸1.1mを測る。やや歪な隅丸長方形の平面形である。

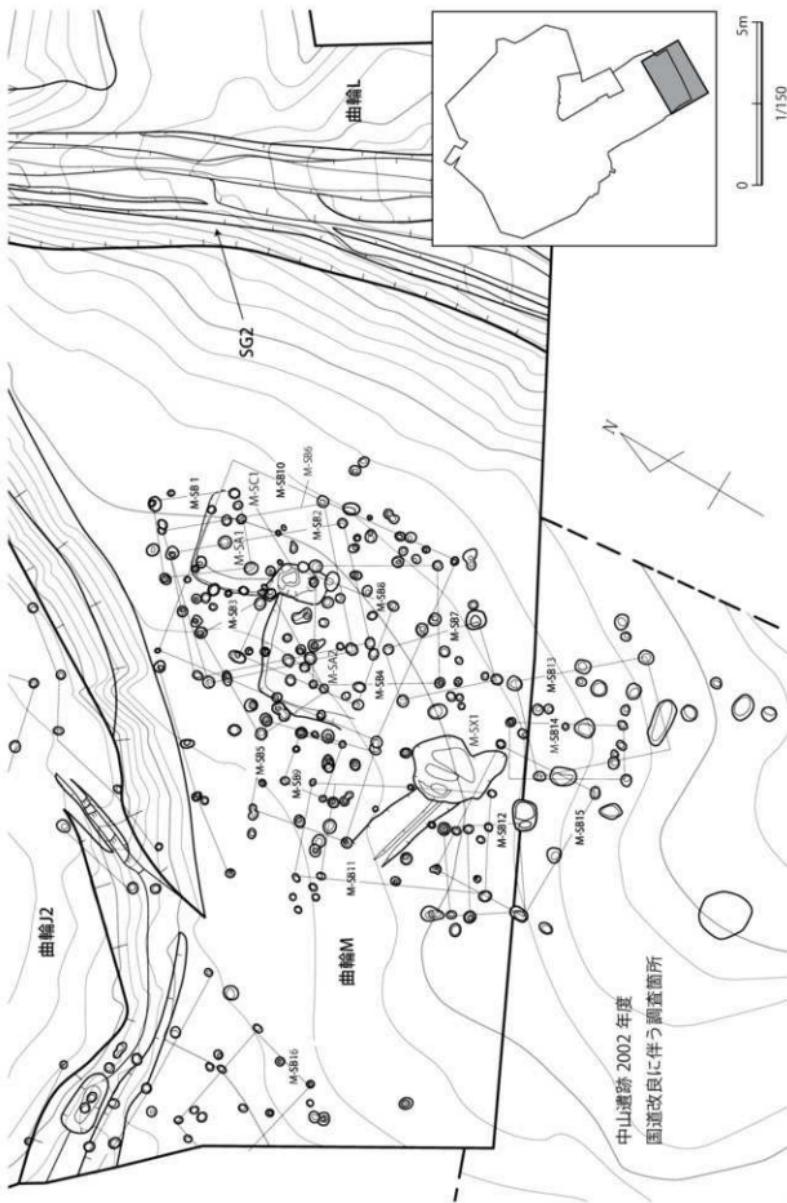
掘り方は、浅いすり鉢形の掘り込み中央にさらにピット状に掘り込まれる二段掘りである。掘り込み一段目の深さは0.2m、二段目は中央よりやや北側に偏った位置で深さ0.2m程掘り込まれる。遺構埋土は、SA1・2と類似するが、下層はより暗い色調となる。

遺物は、底面より鉄塊系遺物(918)、羽口(909)、埋土中より青磁碗等が出土した。埋土中出土の炭化材のAMS年代測定結果は、1399~1440calADという年代が得られた。上記の青磁碗は上田HD類に相当し、14世紀中葉~15世紀初頭にあたるので、測定結果と大きな齟齬はない。

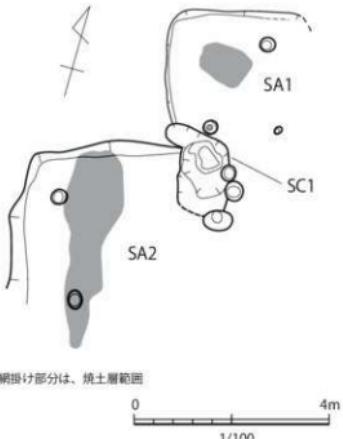
鉄塊系遺物は、金属分析の結果（第V章）、鍛冶原料のねずみ鉄と判明した。その結果を踏まえるとSC1は鍛冶遺構と考えられる。一方、SA2検出面の焼土層にも鍛冶原料鉄を含むので、SC1との関係性が強いと考えられる。共伴遺物の年代もSC1と近しい。（今塙屋）

**掘立柱建物跡** 掘立柱建物跡16棟は、全て側柱建物である。その分布は、西側(SB16)と東側(SB1~15)に大きく分離される。

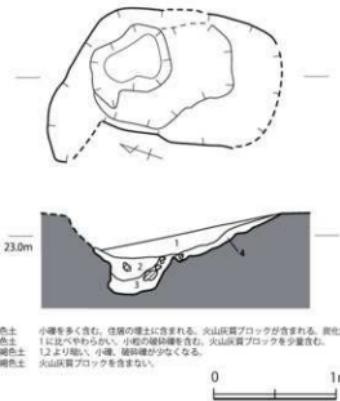
その間は4~5m幅の空白帶となり、北側の延長上には曲輪Jの通路状遺構3が位置する。通路状遺構と空白帶との位置関係から、この空白帶は恐らく、曲輪M内の通路にあたると考えられる。



第 105 図 曲輪 L・M 遺構配置図



第106図 曲輪M SA1・2 SC1 実測図



第107図 曲輪M SC1 実測図

身舎面積は、最大で 40m<sup>2</sup> (SB10) で、20m<sup>2</sup> (SB2・6)、11 ~ 15m<sup>2</sup> (SB4・8・11・13・15) と続き、残りの 8 棟は 10m<sup>2</sup>以下となる。SB11・12 は庇付きである。

建物主軸方向から、①西に振る (SB1・2・6・7・13)、②北方向 (SB4・11・12・14)、③南北・東西方向 (SB5・8・9・10・15・16)、④東方向に振る (SB3・16) の 4 群に大別することが可能である。

個々の建物跡の時期は、各群の柱穴の切り合い関係や柱穴内出土遺物に乏しいため不明である。ただし、②群 (SB8) と④群 (SB3) の柱穴は SC1 を切るので、SC1 より後出する時期の建物跡群といえる。①群 (SB6) の柱穴は SA2 檜検出後の焼土層上で検出されたので竪穴建物跡より後出すると考えられる。なお、①群の SB1・2 は建て替えの関係が想定される。(今塩屋・川俣)

**遺物** 曲輪面とそれを覆う堆積土中からは、景德鎮窯系・邵武四都窯系・福建広東窯系の白磁、青磁、景德鎮窯系や漳州窯系の青花皿 (261・293)、備前焼擂鉢・甕、瀬戸・美濃焼の片口小瓶 (470)、肥前系の水滴 (523) や碗 (487)、薩摩焼土瓶 (545)、瓦質土器甕 (669) 等が出土した。

年代的には、15世紀中葉～16世紀後半の遺物が主体となる。特に、487は1592～1610年の年代とされるので、塙見城跡が高橋元種による統治を受けた頃の遺物と位置付けられる。

注目される遺物としては、青白磁の龍首水注 (342) がある。注口部のみ遺存するが、今回の塙見城跡の調査で出土した遺物群中の白眉である。12 ~ 14世紀後半にかけて盛行した水注である。出土例は宮崎県えびの市竹之内遺跡がある。県外では、鹿児島県出水市木牟礼遺跡、和歌山県高野山奥之院や神奈川県鎌倉市二ノ鳥居西遺跡の出土例等がある。

#### 曲輪の時期と性格

堅穴建物群は、AMS 年代や SC1 の切り合い関係から 13 世紀後半～14 世紀代の時期が想定される。

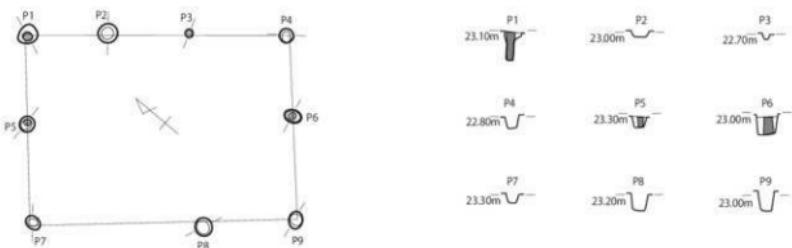
なお、堅穴建物跡が検出されたのは、曲輪 M と北側に位置する曲輪 J 群のみであり、掘立柱建物跡が卓越する他の曲輪とは性格が異なるようである。

その後、SC1 を施設とする鍛冶がなされる。AMS 年代や埋土中遺物から勘案すると、14世紀末～15世紀中葉頃には操業していたようである。この頃は、居住空間としてだけでなく、鍛冶工房的な性格を帯びた曲輪であったことが考えられる。

なお、掘立柱建物跡群の時期は特定できないが、切り合い関係から鑑みると、建物跡の多くは堅穴建物や SC1 よりも後出すると考えられる。曲輪面出土遺物の年代を鑑みると 15 世紀～16 世紀代の時期としておきたい。

(今塩屋・松田)

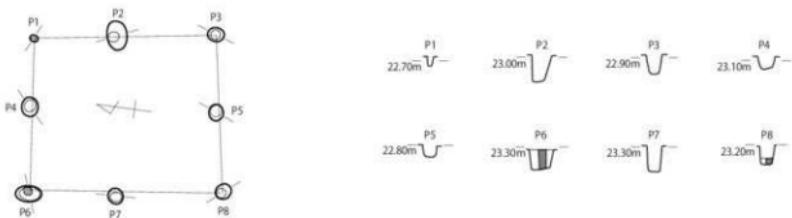
M-SB2



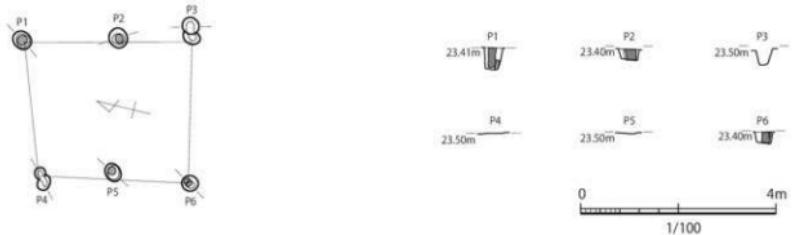
M-SB3



M-SB4



M-SB5



第 108 図 掘立柱建物跡実測図 (20)

## 第9節 道路状遺構(SG)

### 1 南側曲輪群を縦横断する遺構群

南側曲輪群においては、曲輪群を縦横断する長大な溝状遺構が3条検出された(第64図)。

一つは、堀切D1から曲輪Mに向けて、南側曲輪群をほぼ南北に縦断する溝状遺構2条の連続であり、もう一つは曲輪Iと曲輪Lを東西に分断する溝状遺構1条である。(田中敏・今塩屋)

**道路状遺構の認識** これららの溝状遺構は、いくつかの構造的特徴や機能、性格等を読み取れた。即ち、①南側曲輪群を縦横断して城域外(谷部)へ延びる直線的な平面形

②曲輪群の中心軸・基準線と位置付けられ、各曲輪は左右・上下対称の配置関係

③曲輪間を縦横に結束するような位置関係にあり、曲輪へ往来が可能

④底面の構造(段差の連続や波板状凹凸面や側溝)

⑤硬化面の存在

⑥各曲輪に分岐する小溝(通路状遺構)

等である。つまり、曲輪の区画や導排水の性格よりも、曲輪間や外部との往来路といった「道路」的性格がより強く示されていると考えられる。

本節では南側曲輪群の溝状遺構のうち、「道路」的な性状や機能を持つ遺構を特に「道路状遺構」(以下SGと略す)としSG1~3と呼称する。(潤ノ上)

**道路状遺構(SG)と通路状遺構** 通路状遺構とは、溝状遺構やスロープ面、狭小な平坦面をもつ階段状の段差等のうち、道路状遺構と曲輪および各曲輪間を結ぶ往来面と認められる遺構である。道路状遺構と同様な性状や機能を有するが、道路状遺構は主要幹線的な意味を持ち、規模も大きい点で区別される。

道路状遺構と曲輪を結ぶ通路状遺構は、①曲輪面の一部を下げ広げて段差のない間口状、②小規模な溝状遺構といった構造的特徴がある。

また、各曲輪間を個別に連絡する通路状遺構には、①遺構のない帯状の空間、②狭小な平坦面や曲輪を段状に配置する階段状、③小規模な溝状遺構、等の構造的特徴が認められた。

なお、通路状遺構は、曲輪間の連絡や曲輪内の掘立柱建物跡群等の遺構と密接に関連するので、各節(第Ⅲ章第2~4節、第Ⅳ章第2・6・7節)において個別に報告している。また、人工的作為の見られない出入入口についても同様である。

(今塩屋・田中敏)

### 2 概要

**道路状遺構1(SG1)** は、堀切D1と曲輪H・Gを結ぶ区間、**道路状遺構2(SG2)**はSG1より南側の曲輪I・L・Mに面し、両者で曲輪群を南北に貫く。**道路状遺構3(SG3)**は、曲輪Gと曲輪Lの東西方向の境にあり東側谷部に到る区間である。

SG1・2をあわせた全長は、調査区内で134mを測る。実際は調査区外の国道付近まで延伸するので、総延長距離は220m前後と想定される(第64図)。かなり長大な道路状遺構である。また、塙見川沖積面(国道327号線)とSG1の北端(堀切D1)との比高差は28mで、路面の傾斜角度は15°程度の上り勾配となる。

SG1・2・3は、曲輪H・G・J・Iの境目で交差する位置関係にあり、この部分はT字路状となる(第95図)。

道路状遺構の構造は、上幅は3~4mと広く、その路面(底面)は①階段状、②スロープ状、③溝状となる。さらに硬化面や波板状凹凸面も形成される。路面の中央や両端部分には導排水施設としての溝、集水施設の「溜柵状遺構」等が備えられる。(今塩屋)

**道路状遺構の硬化面** 通常、「道路」状遺構では、硬化面の顯著さが特徴的である。しかし、南側曲輪群の道路状遺構では硬化面の形成部分が少ない。道路状遺構の路面が岩盤面のためと考えられる。(潤ノ上)

### 3 道路状遺構1(SG1)(第109~114図)

**位置と概要** SG1は南側曲輪群が展開する尾根の中央部を南北方向に貫く遺構で総延長85.1mを測る。

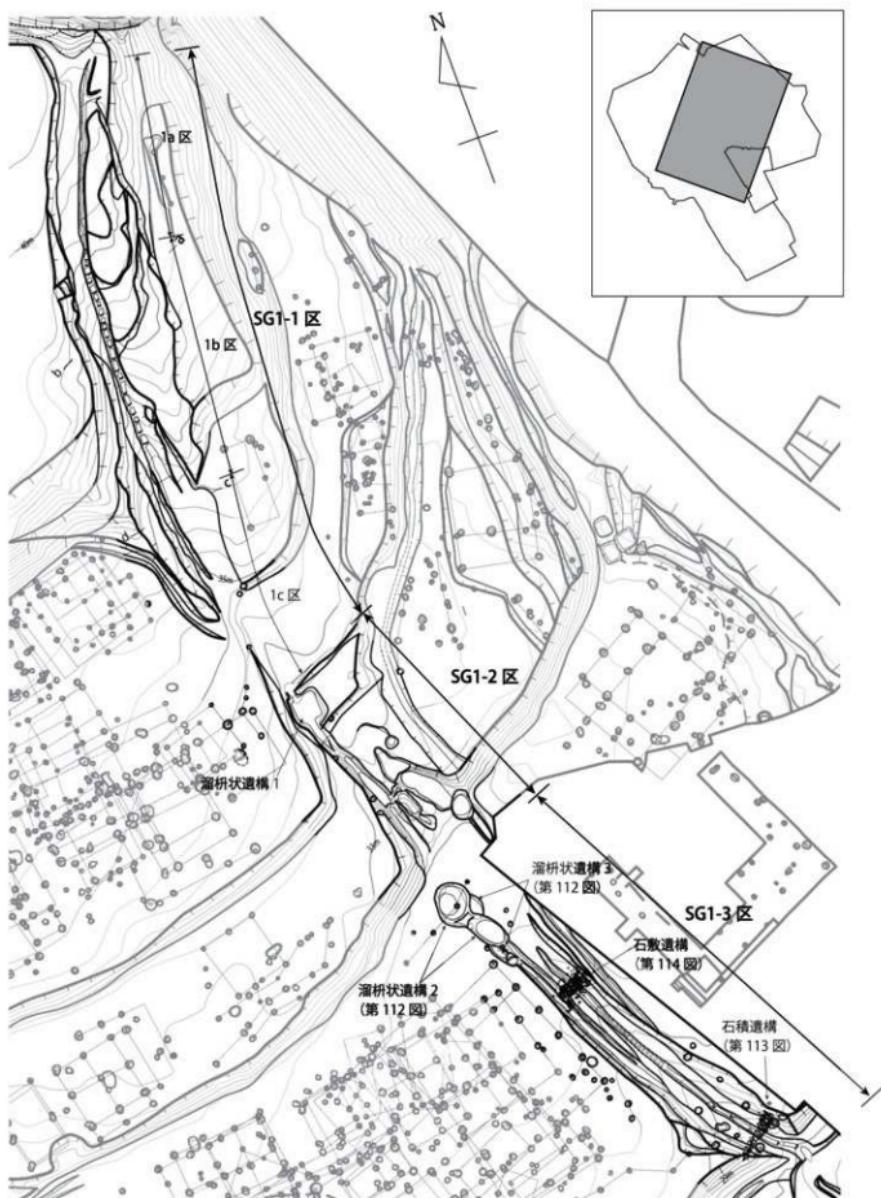
路面の状況や構造、配置などから大きく3区分されるので、北から順に1~3区とした。

#### (a) SG1-1区(第109・110図)

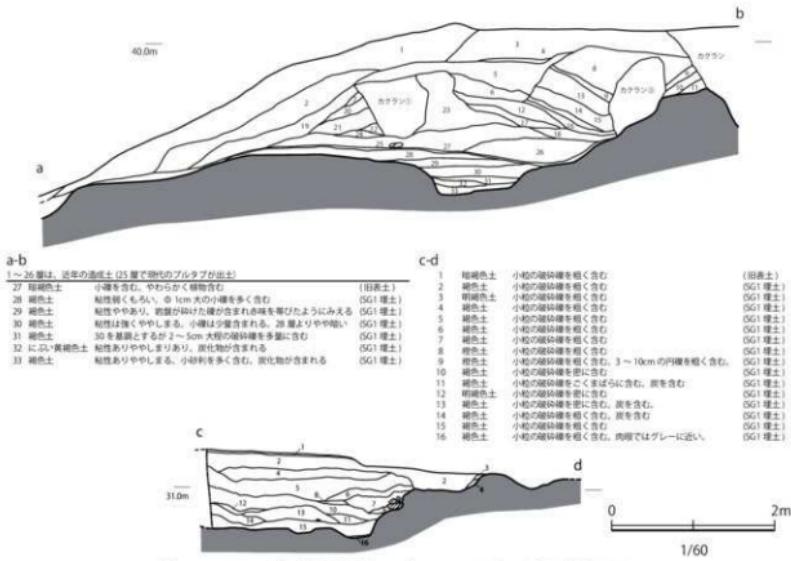
**1区の小区間** SG1-1区は、堀切D1とSG1-2区の溜柵状遺構とを結ぶ全長40mの区間である。底面の構造から3区分(1a区・1b区・1c区)される。つまり、1a区は素堀りの溝状、1b区の溝底面は小さな段の連続する構造、1c区は溝を伴わない小区間である。

**1a区** 全長11.5mを測り、直線的である。上幅4~5mを測る。1a区の北端部は堀切D1と接続し、底面を緩く円弧状に凹ませている。

また、路面(底面)中央には幅0.4~0.6m、深さ0.1~0.3mの溝状遺構が走行する。道路状遺構内の排水溝と考えられる。溝の底面は起伏もなく平坦で、その高低差は0.75m程度である。なお、溝の両側は1.8~2.3mの平坦面が沿う構造となる。



第 109 図 道路状遺構 1 (SG1) 遺構配置図



第110図 道路状遺構1 (SG1-1区) 土層断面図

1b区 全長15mを測り、上幅4~6mで断面逆台形を呈する。1a区から続く溝状遺構の底面は、1b区で小さな段状の連続となる。

溝状遺構の上幅は0.5~0.8m、深さ0.1~0.4mである。溝の東側は0.4~1.5m、西側は1.2~4mの平坦面が並行する。溝の底面は幅0.4~0.6m、長さ0.2~0.8m程度の段が連続する階段状となる。溝底面の高低差は2.5mで、仰角も23°を測り、道路状遺構の底面としては最も急角度である(第109図)。なお、1b区の北側付近では曲輪D1側に通路状遺構(D-通路1)が設けられている。

1b区内の堆積土のうち、第25層を含む上位層は現代の造成土、第27層は旧表土(造成直前の堆積層)、第28層以下は遺構内埋土である(第110図a-b)。

1a-b区の平坦面 1a-b区内の通行面は、溝状遺構の底面と考えられるが、溝の底面は狭いので身動きに不自由で、一方通行の往来しかできない。

一方、帯曲輪D1と間に幅1~4mの空間が広がり、東側には、4段の小さな平坦面が階段状に連続していた。実際に、SG1-1c区からこの平坦面を伝って堀切D1方向に向かうのは容易であった。従って、SG1-1a-b区部分の通行面は、溝状遺構の底

面および階段状の平坦面の2ルートが想定される。

1c区 全長14mの区間にあたる。路面幅は2.5mと一定で直線的である。路面は四十万層群の岩盤やその風化層の明赤褐色土面で、明確な掘り込みはない。断面皿状に浅く窪む程度であった。帯曲輪D1や曲輪E1内の平坦面をそのまま通行する形となる。

SG1-1b区までに認められた溝状遺構は途切れ、代わって路面の西端に深い溝状遺構が伴う。排水溝(側溝)と思われるが、SG1-1b区の溝とは筋違いである。溝の掘り込みは、曲輪F1北東側の出入口部付近に到ると、不明瞭になる。

1c区の土層堆積状況は、排水溝(側溝)底面付近にはマンガン層を含む灰褐色土層(第15層)が薄く堆積しており、水成層と考えられる。また、第7・9層部分の壁面は狭い段状となり、第2層の下面も段状に掘り込まれていた。後者については第2層が耕作土に類似するため、耕作時に西側肩部の壁面を開削されたためである(第110図c-d)。

遺物 表土・耕作土中より御武四都窯系白磁皿、青磁端反皿、備前焼擂鉢・甕、褐釉陶器天目茶碗等が出土したが、量的には少ない。

(今塩屋・田中敏)

### (b) SG1-2 区 (第 111 図)

**位置と概要** 全長 13.5 m、上幅 5 m を測り、曲輪 E・F 群に挟まれる。路面の北西側に方形土坑(溜柵状遺構)と溝状遺構(側溝)、南側に土坑状の掘り込み群がある。特に路面に盛土造成する改修の痕跡も確認された。つまり、路面には岩盤削り出しの平坦面(a期)と盛上面(b期)の2時期が存在する。

**路面の構造 (a期)** 岩盤面や自然堆積層を掘削して形成した最初期の路面である。路面は、上段部と下段部で構成され、水平な平坦面を持つ上段部に緩いスロープ(下段部)が接続する構造で、北端(SG1-1c 区)と南端(SG1-3 区)の比高差 2.7 m を結ぶ。

上段部は東西長 5 ~ 6 m、南北長 2.8 m を測る平面台形状の路面で、SG1-1c 区の路面より 0.4 m の段差がつく。下段部との境は傾斜面となり、その角度は 20°と勾配はきつい。

下段部は東西長 4.5 m、南北長 9.5 m、傾斜角は 7°を測る、緩やかな勾配のスロープ面である。南端部分 (SG1-2 区収束部分) は、高さ 0.7 m の法面となるが、岩盤面を切り立てて 3 段の階段としている。

また下段部の中央から東側寄りには楕円形や円形を呈する土坑の一群がある。最も大きい掘り込みは、長軸長 4 m、短軸長 1.5 m で深さは 0.4 m を測る。この北側は浅い窪みに、東側は曲輪 E の法面に接する。これら複数の掘り込みを介して路面上を伝うことは可能であるが、大きさや配置などに規則性が見られないことから、本来的に路面に作る施設かどうかは不明である(第 111 図 a-b)。

**方形溜柵状遺構と側溝** 路面の北西部には方形の土坑が位置し、それに続く溝状遺構は西端に沿う。

土坑は、形状と位置関係から雨水等を集水・湛水する機能が想定され、特に溜柵状遺構と呼称する(溜柵状遺構 1)。そこから派生する溝状遺構は側溝(排水溝)と解釈される。

溜柵状遺構 1 は一边 2 m の方形で、深さ 0.3 m を測る。北辺の中央部分が途切れで集水口となり、南端は側溝が接続する。方形土坑部は実際に湛水が可能であった。側溝は検出面での上幅 1 ~ 1.3 m、下幅は 0.8 m、深さ約 0.7 ~ 1 m と深く、断面形は箱型である。底面はほぼ水平であるが、段状の落差を 2 段持つ。水流を弱めつつ、南側へ流下する構造である。

なお、側溝は路面下段部の南端法面部分で収束し、SG1-3 区の溜柵状遺構には接続していないかった。

側溝の埋土中からは邵武四都窯系白磁皿(31)・景德鎮窯系白磁皿や八角壺・青磁碗・端反皿・輪花皿・漳州窯系青花、備前焼擂鉢・甕、瓦質土器の双耳釜(641)等が出土した。概ね 15 世紀後半 ~ 16 世紀前半の年代幅に収まる遺物群である。

**路面の構造 (b期)** 道路状遺構内の堆積層を掘り下げると、硬化面(層)が検出された(第 111 図)。

**(硬化面)** 硬化面は、a 期の路面よりも 0.6 ~ 0.8 m も上位に位置する。この硬化面をたどると緩やかなスロープ状となる。a 期の上段部と下段部の境となる段差は 0.2 m と縮まる。南端部分 (SG1-2 区収束部分) の、南側に傾く傾斜変換点付近で硬化面は途切れてしまう。この部分は縦まりのよい土質で形成された 5 段の階段面であったと認定される。硬化面と SG1-3 区の路面との比高差は 1.3 m で、階段の踊り場の奥行きは 0.5 m を測る(第 111 図)。このように階段面は土層断面では把握できたが、その平面的な検出はできなかった。

**硬化面(層)より青磁・備前焼甕が出土した(第 111 図 c-d)**。備前焼甕は形態的特徴から 14 世紀前葉 ~ 15 世紀中葉の年代に位置付けられる。

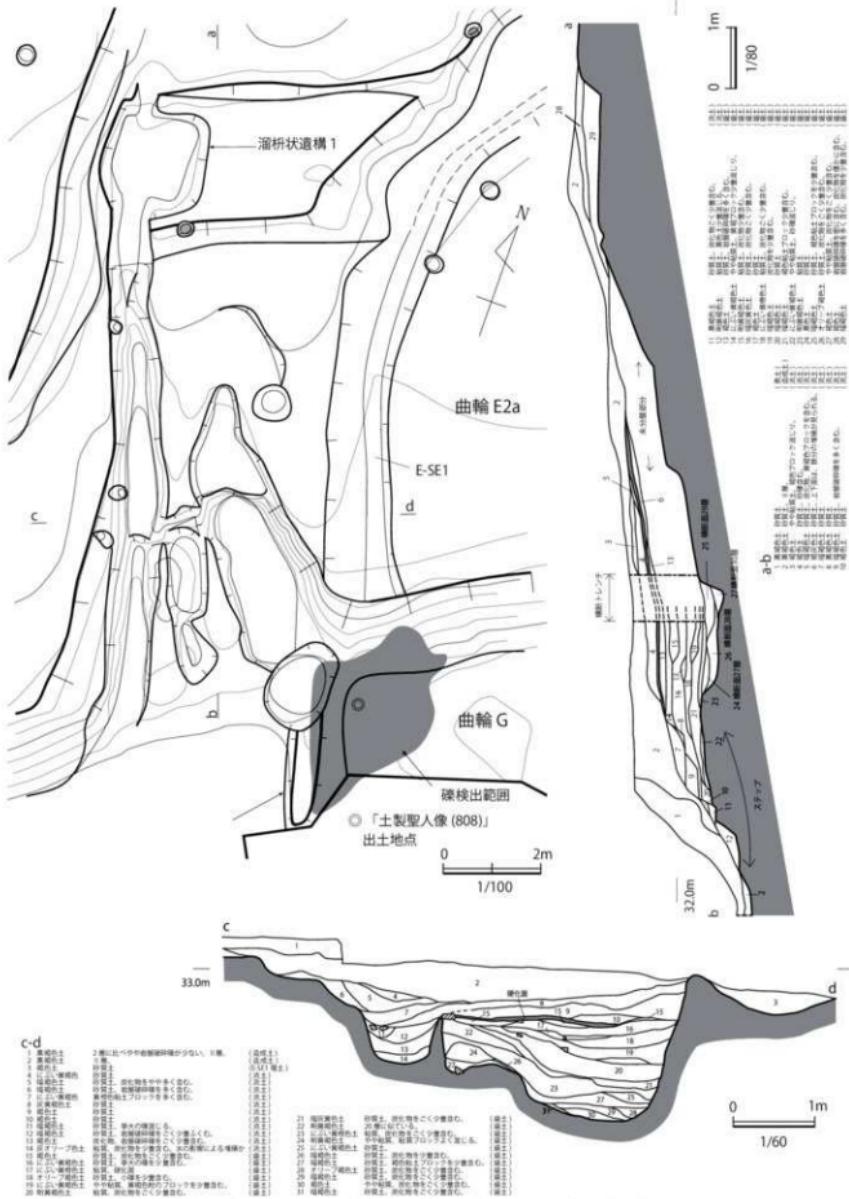
**(盛土)** 硬化面より下層(第 15 ~ 31 層)は、黄褐色・明褐色粘質土と黄褐色・褐色系の砂質土による交互層となる。掘り下げが困難なほど、硬く締まっているので、自然堆積(埋没)層の可能性は低い。

粘質土と砂質土の交互層(第 15 ~ 31 層)は、締まりの強さと堆積状況から版築状につき固めた盛土と判断される。つまり、a 期路面の下段部を盛土してスロープ状の路面に改造した行為と理解される。この盛土面上を通行する過程で硬化面が形成された。この二期を b 期とする(第 111 図 a-b, c-d)。

**溜柵状遺構の構築時期** 硬化面と溜柵状遺構 1 及び側溝の位置や遺構内堆積土との関係に着目すると、①硬化面が排水溝の掘り込み面の高さと一致する  
②排水溝内の堆積土には硬化面が生成しない  
③第 8 ~ 9 層は硬化面と側溝を覆う堆積を示すといった諸特徴が読み取れた。

これらの特徴から、硬化面(層)の形成時と溜柵状遺構 1・側溝は同時存在と理解されよう。つまり、溜柵状遺構 1・側溝は、b 期(盛土造成により路面がスロープ状に改変される時期)に構築されたといえる。

(今塩屋・田中敏)



第 111 図 道路状遺構 1 (SG1-2 区) 実測図

**袖状の張り出し部** SG1-2区の南東部には長さ2m、幅0.5mの袖状の張り出し部がある。本来はスロープ状の通路があり、削平を受けた結果として袖状の張り出しとして残した可能性が考えられる。

**近世以降の造成(スロープ)面** SG1-2区の南側法面では、曲輪Gに続く造成面があり、スロープ状の平坦面が検出された。この平坦面を断ち割ると拳大から人頭大の円礫を多く含む層が互層状に堆積していた(第III回・写真図版32右下)。遺物は、中世～近世前半の陶磁器類がほとんどで、上層と下層出土分で相互に接合するので、付近の遺物包含層を掘削後に一気に盛土造成したものと考えられる。遺物中には、土製聖人像(808)が出土している。

スロープの構築時期は、肥前系染付皿(509)の存在から17～18世紀代以降に造成されたものと考えられる。  
(測ノ上)

### (c)SG1-3区(第109図)

**位置と概要** 長さ30.6m、上幅3.6m、路面幅(下幅)1.7～2m、路面までの最大深1mを測る。

SG1-3区の両側は曲輪H・Gに挟まれる。路面より溜柵状遺構や側溝および柱穴群が検出された。

**遺構** SG1-3区内では、円形掘り込みが連結した土坑が2基、溝状遺構が5条、門跡と考えられる柱穴列(SB1)、路面に礫を敷く石敷遺構、道路状遺構の南端を封鎖するような石積遺構が検出された。

なお、南端部付近の西側壁面には曲輪Hに向かう通路状遺構(H-通路2)が検出されている。

**路面構造の変遷** SG1-2区と同じく、盛土による路面の改造が認められたのみならず、道路状遺構そのものを封鎖する遺構や盛土が確認された。

つまり、遺構と盛土の関係から、Ⅰ期(岩盤削り出しの路面)、Ⅱ期(門跡と石敷遺構が構築される)、Ⅲ期(石積遺構により道路状遺構が封鎖される)の3つの画期が見出された。

**Ⅰ期の路面構造** SG1-2区との境部分(始点)は、掘り込みのない路面となるが、路面中央に位置する溝状遺構の北端部から肩部が形成される。

上幅は北側の肩部で4mを測り、未広がり状となるが、収束部分(終点)では急にすぼまる。路面幅(下幅)は3mと一定で直線的である。溝状遺構は路面の両端や中央に数箇あり、南側へ走行する。路面の始点と終点の比高差は約3mを測るが、路面の傾斜角5°以下と勾配は緩い。

ただし、終点から北に4m付近からの路面は、南

側に傾斜する斜面となる。その傾斜角は10°と勾配はややきつくなる。

**溜柵状遺構と側溝** 路面の北西端には新旧の切り合い関係を示す、掘り込みの連結する土坑2基と土坑から派生する溝状遺構が検出された。

新しい方の円形の連結土坑は、SG1-2区における方形の溜柵状遺構1の構造に類似する。溜柵状遺構2とする(第112図)。

切られた土坑も同じ形状や規模と考えられ、これを溜柵状遺構3とする。2基の溜柵状遺構の南端からそれぞれ延伸する溝状遺構は、側溝とみなせる。

溜柵状遺構2の長軸長は5.5m、短軸の最大長は2.5mを測り円形と梢円形の掘り込みが連結した構造で、平面形は瓢箪形にも見える。検出面からの深さは0.35～0.55mで南側の掘り込み部分が深い。

また、この溜柵状遺構の埋没後に柵列(H-SR1)が構築されたようである(Ⅱ期)。排水溝は上幅0.6m、下幅0.2mで南へ12.5m地点で収束する。円形の溜柵状遺構2と対となる側溝は全長14mとやや長い。溜柵状遺構は2・3は切り合いの関係にあり、前者はⅠ期(新)、後者はⅠ期(旧)段階と捉えられる。

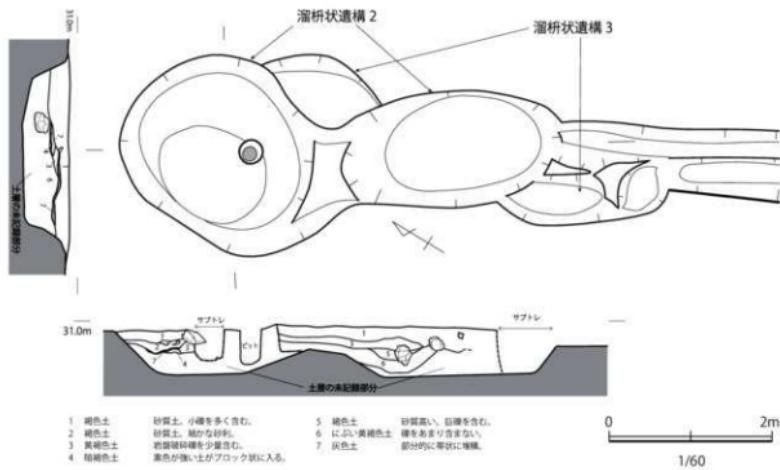
溜柵状遺構2の出土遺物は青磁や備前焼窯等があり、表は15世紀中葉～16世紀初頭の年代を示す。炭化物のAMS年代は、1430～1482年との結果が出ている。

側溝や路面上から出土した遺物は、福建・廣東窯系・景德鎮窯系白磁皿、青磁碗・輪花皿(153)、漳州窯系青花碗(269)、備前焼播鉢(364-366-367)、瓦質土器双耳釜(636)等がある。総じて15世紀代の年代を示す遺物が多い。

**排水溝** 路面の中央を走行する溝も排水溝と捉えられるが、深さは0.1m程度と極めて浅い。南半部では路面の傾斜が強くなるため、排水溝の底面は段状になる。その収束部分は曲輪H・Gの両法面を結ぶラインから突出しており、曲輪J1北東隅にある通路状遺構1から延びる掘り込み面で切られる(第95図)。

この排水溝は、収束部分の構造的特徴や、排水溝の深さは浅いこと、段状の底面構造であることから、排水を兼ねた通行面とも考えられる。

一方、路面東端曲輪上には溝状遺構が2条認められる。全体の規模や構造等は未調査部分が多いために不明確だが、排水溝と捉えられる。排水溝は、軸線を遠えずに重複するので、掘り直しの関係と考えられる。



第112図 溝橋状遺構2・3 実測図

この排水溝はSG1-3区の東側肩部に切られるこ  
とや、排水溝と東側の曲輪Gと位置関係が曲輪E2  
と排水溝(E-SE1)との関係に類似する。

従って、路面東端の排水溝群については、道路状  
造構内施設とみるよりも曲輪Gの遺構とすべきな  
のかもしれない。

**ii期の路面構造** i期の路面に盛土が施されて掘  
立柱建物跡や石敷遺構が構築される。

盛土は、SG1-3区の南側収束部分を中心に、岩盤面(i  
期の路面)上に第8層が堆積する(第113図a-b, c-d)。

この第8層は、岩盤破砕礫を密に含む赤褐色土で、  
層厚は0.2~0.5mである。その上面は緩やかなス  
ローブ状の平坦面となる。南端部分は第6層とで段  
差面を形成する。これら第6・8層は自然堆積土と  
するよりは、岩盤削り出しの路面をスローブ状に改  
修する際の盛土と捉えられる。

また、第8(g-h: 9層)層によって、i期の溜橋状  
遺構や側溝、排水溝群は一気に埋め戻されてその機  
能が停止されたようである。(第113図a-b, g-h)。

**門跡** 石積遺構と盛土層(第3層)直下で柱穴7  
基(SG-SB1)が検出された(第113図c-d)。柱穴(P7)  
は、i期の路面を覆う第6・8層を掘り込む。また、  
P4・P7は石積遺構に切られる前後関係を示す。

第8層面を掘り込む柱穴群は、道路状遺構内に構  
造物の存在を示す。柱穴のうち、明確な柱跡が確  
認できたのは南端側の柱穴2本のみで、この柱間距

離は2mである。柱穴の直径は、南側4本が0.5m、  
深さ0.7mと大きくて深い部類に入る。

北側の柱穴3基は小さめで浅いが、盛土を除去した  
岩盤面(路面)上における形状であって、本来は  
南側と同規模の柱穴と考えられる。P1の反対側にも  
柱穴が存在したとすると1×3間の柱穴配置となる。

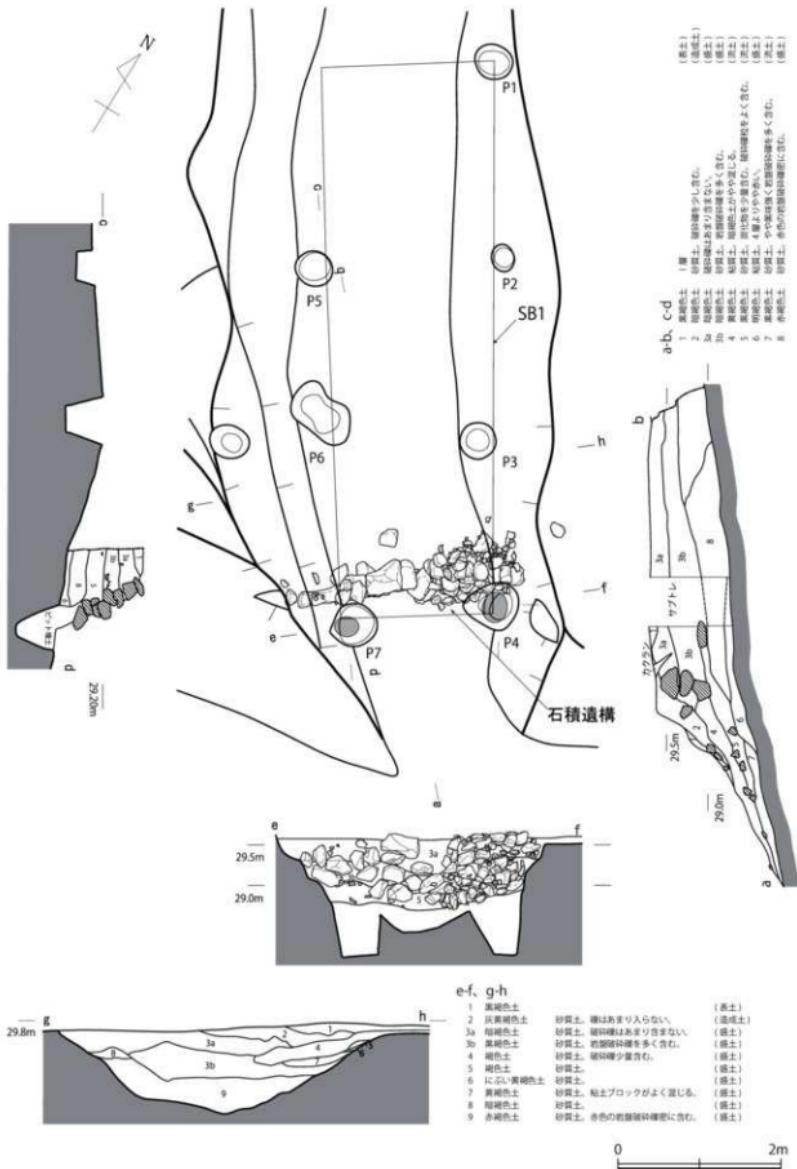
柱穴群は道路状遺構内にあることを重視すれば、  
上屋構造のある門跡と推定され、具体的には柵の  
建物と考えられる。

遺物は第7層【盛土層(第6・8層)以後の堆積  
層】より備前焼甕・擂鉢(406)等が出土した。16  
世紀中葉~17世紀初頭の遺物が下限となる。

**石敷遺構** 溝橋状遺構2の南端から約5mの路面  
上で、角礫や円礫の集中部が認められた。

理土である第1~3層を除去すると、礫は東西  
2.4m、南北1.8mの範囲で検出された。この部分は  
帯状の礫の広がりとなり、その断面形は台状となる。  
特に東西2.2m、南北0.8mの範囲は特に礫が密集  
してほぼ水平な石畳状となる。構成礫の大きさは、  
拳大から人頭大程度で、礫面の平らな面を上に向ける。  
その下面是第5-6層の堆積後の底地盤となる(第  
114図)。こうした礫の集中部を曲輪G-H1間を  
結ぶ施設として石敷遺構とした。

石敷遺構は、第5・6層が排水溝の流入土上に堆  
積するので、溜橋状遺構や側溝、排水溝が埋没た  
は埋め立てた後に構築されたと読み取れる。



第113図 道路状遺構1 (SG1) 石積遺構とSB1



第114図 道路状遺構 1 (SG1) 石敷遺構 実測図

石敷遺構は、道路状遺構内から直接曲輪H・G内へ出入りが可能で、曲輪H・G間を高低差もなく行き来できるので、渡り土手的な性格と理解される。

石敷遺構の検出面や第3層中には、土器・陶磁器等の遺物が絡む。景德鎮窯系白磁皿・青磁碗(104)・端反皿・景德鎮窯系青花碗(212)・漳州窯系青花皿・備前焼擂鉢(378)・甕等である。これら遺物の年代は、15世紀中葉～16世紀前葉の幅にほぼ集約される。

**iii期の路面構造**　Ⅲ期の盛土面上にさらに盛土を施し、石積遺構を構築して土留めとする。道路状遺構を完全封鎖して進入できない構造に作り変える。  
**石積遺構と盛土**　SG1-3区の南端において石積遺構が検出された(第113図)。石積みの幅2.9m、奥行き0.8m、高さ0.9mを測る。その前面は第5層によって緩やかな傾斜面となる(a-b)。石積遺構はⅢ期の門跡の柱穴を切る関係にある。

石積遺構は、岩盤削り出しの路面に堆積する第5層と第8層(盛土面)上に道路状遺構を塞ぐように構築され、その背面は第3層が堆積する(第113図a-b)。さらに石積遺構上端と第3層上面の高さは、両側の曲輪面の高さと一致する。

1	黒褐色土	砂質土。炭化物多く含む。	(洪土)
2	灰土	砂質土。粘土ブロック、炭化物を含む。	(洪土)
3	褐色土	砂質土。網目粘土ブロックが混じる。	(洪土)
4a	褐色土	砂質土。粘土ブロック、炭化物含む。	(洪土)
4b	藍褐色土	砂質土。	(洪土)
5	褐色土	砂質土。黄褐色粘土ブロックを少量含む。	(洪土)
6	黒褐色土	砂質土。岩盤破砕塊含む。	(洪土)
7	褐色土	砂質土。粘土ブロック混じり。	(洪土)
8	灰オリーブ色土	砂質土。炭化物少含む。	(洪土)

第3層は道路状遺構そのものを埋め立てる盛土層であり、曲輪H・Gを連結させて曲輪面を一体化するための地業である。第5層は、石積遺構の周間に限られるので、道路状遺構の収束部分全体を埋め戻して石積遺構の構築面とする盛土と解釈される。

さらに石積部は、第3層および第4～7層(第113図g-h)と高さを揃えながら石を積み上げられている。石積遺構は第3層の流出・崩壊を防ぐ土留めの擁壁であり、道路状遺構を閉鎖する施設と解釈される。

また、石積遺構の石積みは、東西で使用磯や積み方方が異なる。中央から東側部分では拳大から人頭大程度の角が丸くなった亜角礫を用いて、小口(短辺)側の面を向けて詰め込むように積み上げる。積み石どうしは噛み合っていて隙間は多くない。

西側部分は、やや人頭大かそれより大きな亜角礫を、長手(長辺)側の面を向ける石積み技法で壁体を構築する。積み石と積み石の間は隙間が多く、岩盤破砕塊を含む暗褐色砂質土(第3層)が漏出する。

このように東西で石積み技法に差が認められるが、積み石の前後関係や噛み合わせから、石積みの順序は西側部分が先で、その後に東側の空間を埋める様

に石を積み上げていると判断される。積み石には砂岩質の礫が使用されるが、凝灰岩質の礫も含まれる。

なお、東側部分の石積部前面にあるスロープ面(第5層上面)には、西側の石積みに使用できそうな人頭大の亜円礫が散乱していた。この状況から石積遺構東側部分は、一度は崩壊した可能性があり、その修復(積み直し)の結果、石積み技法の違いとなって反映されたと考えられる(第113図e-f)。

遺物は、石積遺構を前後に挟む堆積土層のうち、第2~7層で遺物が出土した(第113図)。石積遺構の構築面(第5層)からは、青磁、景德鎮窯系青花皿(240)、備前焼甕・擂鉢等が、石積遺構背面の盛土層(第3層)や石積部内から漳州窯系青花碗や備前焼甕・擂鉢(389)や挽臼下臼(1160~1164)等が出土した。16世紀中葉~17世紀初頭の遺物が下限となる。

**石敷遺構と盛土(Ⅲ期)** 石敷遺構(Ⅱ期)の上面には褐色土ブロックの混入する暗褐色土が厚く堆積していた。このブロック土の混入を評価すれば、石積遺構の構築とあわせて、石敷遺構の上面が埋め戻されたと考えられる。

**SG1の変遷** SG1各区間の変遷過程が見出せたが、SG1全体では下記の如く4つの画期を考えられる。

I期・岩盤面を掘削して路面を形成

[SG1-1・2区(a期)・3区(溜柵状遺構3:Ⅰ期田段階)]

II期・階段状の路面をスロープ面に改修

[SG1-2区(b期)・3区(溜柵状遺構2:Ⅰ期新段階)]

III期・門跡や石敷遺構の構築 [SG1-3区(Ⅱ期)]

IV期・石積遺構・盛土で道路状遺構を閉鎖・埋め戻す

[SG1-3区(Ⅲ期)]

なお、SG1-1区は盛土といった改修や改築の痕跡は確認されず、路面はそのまま自然埋没したようである。

II期はSG1-2区のスロープ面盛土層や2・3区の溜柵状遺構1~3からの出土遺物の年代から、16世紀初頭前後と考えられる。III期は、石敷遺構下面の出土遺物から16世紀中葉頃、IV期は石積遺構内遺物から17世紀初頭には形成されたと考えられる。

I期は、II期より古い15世紀中葉~後葉と考えておきたい。

(今塙屋・田中敏)

#### 4 道路状遺構2(SG2)(第115図)

**位置と構造** 曲輪J・I・L・Mを南北に貫く道路状遺構である。SG2はSG1と連続せず、2.5mほど空間を隔っている。SG3とは接続する可能性がある。

調査部分の全長は49m、上幅は3.4~5.8m、路面幅(下幅)は1.8~2.6mを測る。北端部は検出面から0.2m程の深い掘り込みだが、調査区南端では約2mと深い。平均傾斜角は5~10°前後で緩い。

路面は岩盤を断面逆台形の構造に掘り込んだ底面であり、さらに路面中央には溝状遺構が数条掘り込まれる。柱穴も2基検出された。

**SG2の細分** 路面の溝の位置や構造上の差異からSG2-1区(曲輪J・Iの間)とSG2-2区(曲輪L・Mの間)に区分される。

##### (a) SG2-1区(第115図)

**構造** SG2-1区は、全長30m、上幅2.6~5.8m、下幅(路面幅)1.8~2.4m、曲輪面からの深さ1.5~2mを測る。断面形は逆台形状を呈する。岩盤を削り出して路面とするが、硬化面は確認できない。曲輪J側の面には通路状遺構2がある。

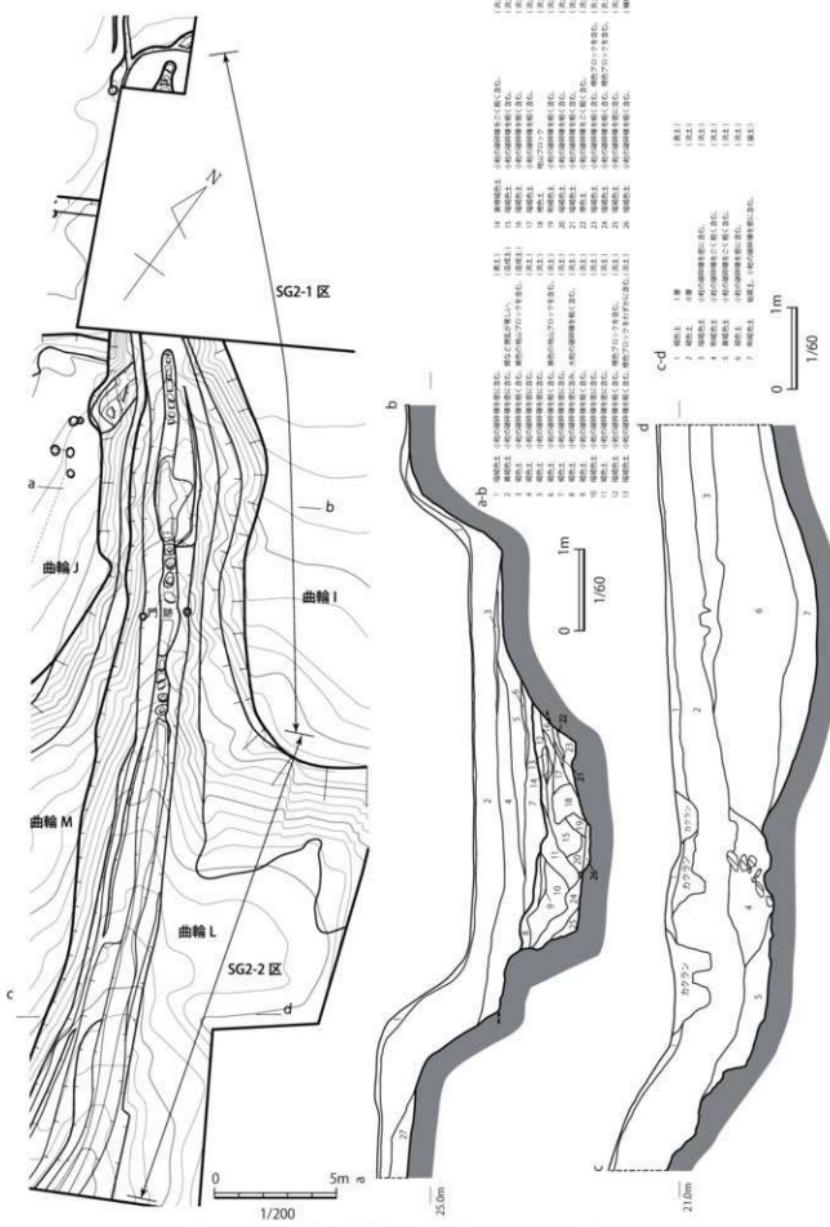
**路面内の溝** 路面の中央には溝状遺構が一条あり、上幅0.5~0.7m、下幅0.4~0.6m、路面からの深さ約0.1mを測る。溝底面には0.4cm程度の不整形の窪みが連続し、その断面形は椀状なので「波板状凹凸面」である。主に溝内を通行したものと考えられる。

また、溝理上下層(第115図a-bの第26層)には円礫を中心とする礫混じり土が固結して堆積していた。この礫混じり土は、路面の補修土とも考えられる。

**門跡** 柱穴2基がSG2-1区のほぼ中央部にて検出された。路面の両端を跨ぐ柱穴配置なので門跡の可能性が考えられる。門跡とするならば、SG1-3区の門跡と比べて構造が簡素となる。

**遺構内堆積層** 堆積土は、第115図a-bの第8~12層を結ぶラインより下層と第7層より上層に区分される。下層は東側法面の崩落に伴う流入土で、AT由来の黄褐色土塊の転落(第18層)もある。これは、東側法面にはK-Ah層以下の自然堆積層が露出していたためである。

なお、道路状遺構の両側壁面の中途には、幅0.8~1.2mの犬走り状の段がつく。この段は、近年の造成・整地に伴う改変によるものである(第115図a-b)。



第115図 道路状遺構2(SG2) 平面図・断面図

**遺物** 北端部の掘り込み内より景德鎮窯系青花皿(234)や備前焼甕、中央の溝底面付近(第26層)からは景德鎮窯系青花碗と備前焼甕、第17層からは備前焼甕等が出土した。遺物の年代は15世紀中葉～16世紀初頭とほぼ限られる。表土や造成土層(第115図a-bの第2・3層)から多くの遺物が出土した。

#### (b) SG2-2 区(第115図)

**構造** SG2-2区は、全長 $19 + \alpha$ m、上幅3.4～5.8m、下幅(路面幅)1.8～2.6m、曲輪面からの深さ1.5～2mを測る。断面形は緩い皿状を呈する。岩盤を削り出して路面とするが、硬化面は見出せない。

**路面内の溝** 路面内中央には、SG2-1区から連続する溝状遺構(通行面)、西側には曲輪Mの裾部に沿う溝状遺構(排水溝)が一条検出された。

中央を走行する溝状遺構は、SG2-1区と比べて平面形は不整形で掘り込みは浅くなる。また底面の窪みは顕著ではないが、通行面と考えられる。この上面には円礫を多く含む礫混じり土が堆積する。これには、SG2-1区と同じく路面の補修土とも考えられる。

西側の排水溝は、曲輪M東側裾部の中央付近から始まる。全長7m+ $\alpha$ 、上幅0.8m、下幅0.4mを測り、断面逆台形である。(田中敏・今塩屋)

**遺構内堆積層** 暗褐色土層を主体とする埋土で、細かな土層単位は認められない。道路状遺構の東側壁面から曲輪Lの法面にかけては、拳大から人頭大程度の円礫が多く偏在して出土した。これら礫の配置に規則性はないが、曲輪法面の補強のための石積み、もしくは積み石を伴う土堤状の施設の痕跡とも考えられるが、確証はない。(潤ノ上)

**遺物** 道路状遺構の路面直上より青磁と備前焼甕、中央の溝内からは、青磁碗、褐釉陶器四耳壺(319)、備前焼甕(412)、西側の排水溝からは備前焼擂鉢(348)等が出土した。これらの遺物は15世紀中葉～16世紀初頭の年代を示す。また、路面上に堆積する第7層内や表土層等(第1～3層)からは中世～近世にかけて遺物が多く出土した(第115図c-d)。瓦質土器の羽釜(622)は形態的特徴から、いわゆる「和泉河内型」に相当する。

**SG2の時期** 路面上や溝内出土の遺物から、SG2の構築時期は15世紀後半代と考えられる。また、第7層は17世紀初頭段階には既に堆積していたようだ。

(今塩屋・田中敏)

#### 5 道路状遺構3(SG3)(第116図)

**位置と概要** 南側曲輪群の南東に位置する東側谷部に面した箇所に位置する道路状遺構である。

道路状遺構の一部のみを調査したに過ぎず、大部分が未調査箇所となるため全貌は不明確である。

**構造** SG3は、SG1・2の接点から東側の谷部に向けて直進する部分と谷部の縁辺に沿う部分で構成される。その平面形は北に向かって開く撥形となる。東側谷部までの長さは39m、下幅(路面幅)5m程度を測る。東側谷部部分では路面幅は0.8～1.8mと極端に狭くなり犬走り状となる。また、SG1・2の接点部分とSG3の最底面との比高差は約5m、曲輪Gとは約7m、曲輪Iとは約1mとなる。

なお、南北側については、先行トレンドで部分的に検出されたのみで、全面的な調査を受けていない。SG1・2との接続関係も不明である。

路面(底面)は、東側谷部から曲輪J方向に向かって緩やかに傾斜し、平均傾斜角は10°前後である。

路面の中央部分では溝状遺構が検出され、他の道路状遺構と同様な構造である。一部底面が段状に成形されていた。上幅は0.5～1m、下幅0.4mを測る。路面と同様に北側で大きく広がり、平面形がややあいまいになる。溝の両側には0.8～1.5mの平坦面が沿う。

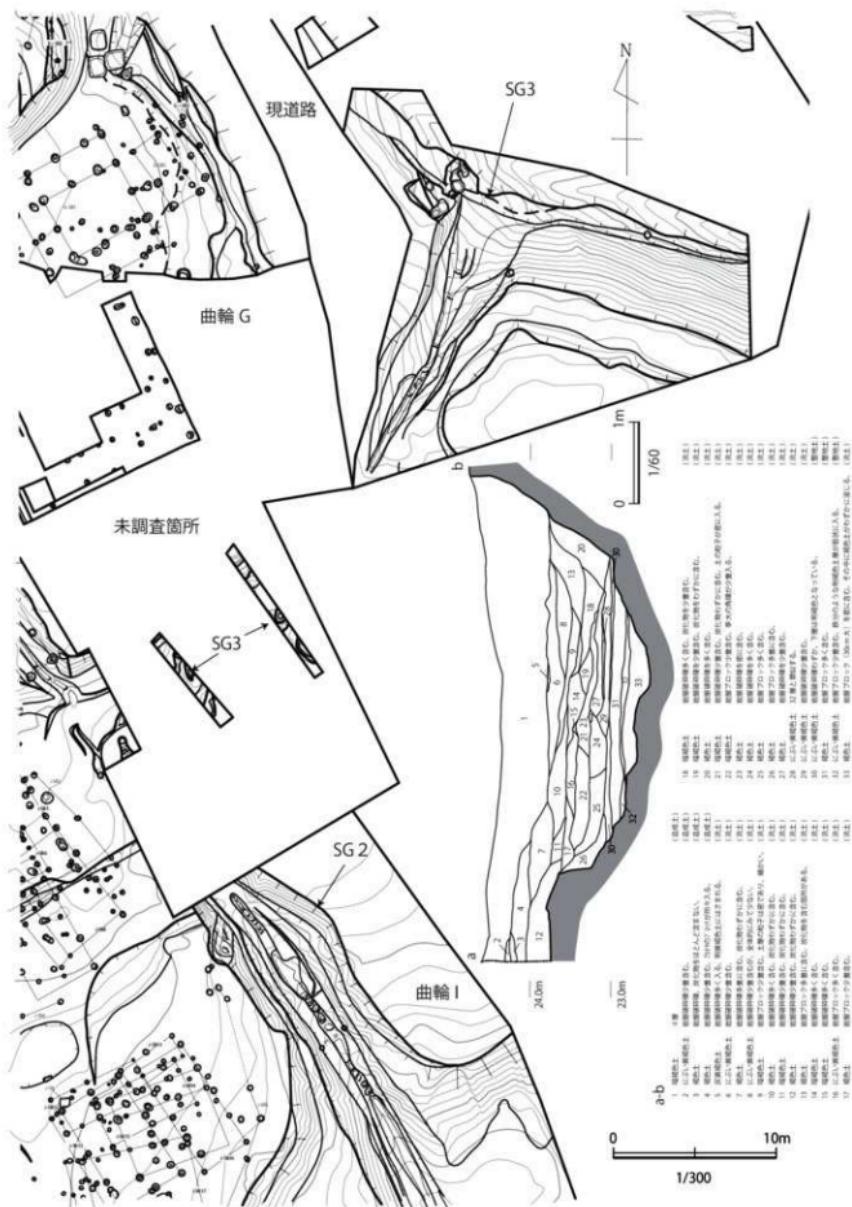
**遺構内堆積層** 第116図a-bの溝底面直上の第33層は、溝全体が埋没するような堆積状況を示す。第30～32層は、層厚が薄い水平堆積である。この第30～32層については、第33層による溝の埋没後、路面の使用に伴う整地面が累積したものとも解釈される。

**柱穴群** SG3の北側コーナー付近に、径約0.4～0.6mの柱穴群が検出された。路面(平坦面)を遮断する配置となるので門状の遺構になる可能性があるが、柱穴内に常に水が溜まる状態であったことを考慮すると、溜池のような水場として利用されていた可能性もある。

**遺物** 表土・耕作土中から多く出土したが、第32層より青磁碗(133)、景德鎮窯系青花皿、備前焼甕・擂鉢(376)、第33層より備前焼甕などが得られた。

**SG3の時期** 第32・33層出土遺物の年代幅は、15世紀中葉～16世紀初頭にほぼ限定される。したがって、SG3の構築時期は、15世紀後半と導かれる。

(今塩屋・田中敏)



第116図 道路状遺構3 (SG3) 平面図・土層断面図

第 10 表 南側曲輪群 面積

曲輪名	面積	曲輪名	面積	曲輪名	面積	曲輪名	面積	曲輪名	面積
曲輪 D1	645.0m <sup>2</sup>	曲輪 E1a	155.3m <sup>2</sup>	曲輪 F1	669.3m <sup>2</sup>	曲輪 H2	67.0m <sup>2</sup>	曲輪 J2	554.1m <sup>2</sup>
曲輪 D2	97.7m <sup>2</sup>	曲輪 E1b	7.9m <sup>2</sup>	曲輪 F2	281.0m <sup>2</sup>	曲輪 H3	136.1m <sup>2</sup>	曲輪 J3	738.4m <sup>2</sup>
帶曲輪 D1a	47.4m <sup>2</sup>	曲輪 E1c	20.4m <sup>2</sup>	曲輪 F3	283.5m <sup>2</sup>	曲輪 H 群 小計	850.7m <sup>2</sup>	曲輪 K	51.0m <sup>2</sup>
帶曲輪 D1b	130.1m <sup>2</sup>	曲輪 E2a	89.7m <sup>2</sup>	曲輪 F 群 小計	1233.8m <sup>2</sup>				
帶曲輪 D1c	25.7m <sup>2</sup>	曲輪 E2b	31.8m <sup>2</sup>	曲輪 G	165.4m <sup>2</sup>	曲輪 I	95.3m <sup>2</sup>	曲輪 L	79.3m <sup>2</sup>
帶曲輪 D1d	93.0m <sup>2</sup>	曲輪 E2	30.6m <sup>2</sup>	曲輪 H1	647.6m <sup>2</sup>	曲輪 J	184.4m <sup>2</sup>	曲輪 M	342.7m <sup>2</sup>
曲輪 D 群 小計	1038.9m <sup>2</sup>	曲輪 E 群 小計	335.9m <sup>2</sup>						

第 10 表-1 南側曲輪群掘立柱建物跡一覧表

位置 (地點)	番号 (標高)	樹種	直径 (mm)	開溝 幅(前) (mm)	開溝 幅(後) (mm)	深度 (mm)	行 距 (mm)	行 距 (mm)	身着樹洞 (mm)	柱穴 (mm)	柱深 (mm)	出土遺物	復元 作業 なしもの 未掲載	備考	切り合い	因由 別類
D	S81	側柱	1 × 1	300	300	500	500	27 W	15.0	4+ a	30 ~ 60	20 ~ 70		○		
	S82	側柱	1 × 2	1.46	1.46	5.11	2.55	65° E	7.46	6	30 ~ 70	15 ~ 70		○		
	S83	側柱	1 × 1 西柱	202	202	32.0	32.0	N 60° E	6.46	7	30 ~ 70	20 ~ 60		○		
	S84	側柱	1 × 2	1.72	1.72	503	2.51	N 37° W	8.65	4+ a	25 ~ 40	40 ~ 70				
E	S81	側柱	2 × 2	332	166	3.56	1.76	N 37° W	11.83	6+ a	20 ~ 35	10 ~ 30	白磁 部武御室系皿	○		
	S82	側柱	1 × 1	2.15	2.15	2.31	2.31	N 13° E	4.97	3+ a	30 ~ 40	15 ~ 35		○		
	S83	側柱	1 × 1	1.70	1.70	1.80	1.90	N 3° W	6.46	4+ a	30 ~ 40	20 ~ 40	削削跡/446, 百葉扇形 部武御室系/20	○		
	S84	側柱	1 × 1	1.23	1.23	1.27	1.27	N 2° W	1.56	4	30 ~ 40	15 ~ 45		○		
F	S85	側柱	1 × 1	207	203	3.76	3.76	N 16° W	7.63	3+ a	30 ~ 35	20 ~ 30		○		
	S86	側柱	1 × 1	2.00	2.00	3.72	2.72	N 3° W	7.44	5+ a	30 ~ 40	30 ~ 60		○		
	S87	側柱	1 × 3	4.77	4.77	6.04	2.01	N 20° W	28.89	8	30 ~ 50	30 ~ 80	削削跡/446, 百葉扇形 部武御室系/20	○	開仕切り	
	S88	側柱	2 × 3 西柱	403	201	5.80	1.93	N 15° E	23.37	14+ a	20 ~ 35	20 ~ 60		○		
G	S89	側柱	2 × 2 北柱	400	200	3.90	1.95	N 12° E	15.60	11+ a	25 ~ 30	5 ~ 35		○		
	S90	側柱	1 × 2	1.95	1.95	3.34	1.67	N 74° W	6.51	6	15 ~ 30	10 ~ 30		○		
	S91	側柱	2 × 2	1.95	1.98	4.10	2.05	N 15° E	16.20	6+ a	20 ~ 50	0 ~ 60		○	S85 を切る。	
	S92	側柱	2 × 2 北柱	3.06	1.95	4.00	2.06	N 20° E	15.60	10+ a	30 ~ 50	10 ~ 55		○	887 を切る。S84 に切 る。585。	
H	S96	側柱	1 × 2	2.33	2.33	3.80	1.90	N 2° W	8.85	5+ a	30 ~ 50	20 ~ 70		○		
	S97	側柱	2 × 4 北柱	3.82	1.91	8.75	2.19	N 84° W	33.43	18	20 ~ 70	20 ~ 70	削削跡/446, 長口直筒型/43, 長口直筒型/43	○	開仕切り	
	S98	側柱	2 × 2	400	200	4.00	2.00	N 10° E	16.00	5+ a	45 ~ 60	20 ~ 80		○	S85 に切られる。	
	S99	側柱	2 × 3	331	331	4.22	2.11	N 74° W	13.97	6+ a	20 ~ 35	15 ~ 70		○	南東側斜面の 可能性あり	
I	S100	側柱	2 × 4 正北	400	200	9.93	1.99	N 82° W	39.72	20+ a	25 ~ 65	10 ~ 110		○	開仕切り	S82 に切られる。
	S101	側柱	2 × 2	373	186	3.90	1.95	N 10° E	15.60	8+ a	20 ~ 30	10 ~ 40		○		
	S102	側柱	2 × 3 廊柱	400	200	4.51	1.90	N 9° E	18.04	10+ a	20 ~ 45	15 ~ 50	白磁罐・広口直筒	○	○	S813 に切る。
	S103	側柱	2 × 2	3.58	1.79	4.29	2.15	N 10° E	15.36	8	30 ~ 40	25 ~ 80	青磁罐・文様、削削跡/A29	○	○	S812 に切られる。
J	S104	側柱	2 × 2 西柱	400	200	4.00	2.00	N 10° E	16.00	8+ a	50 ~ 55	30 ~ 95		○		
	S105	側柱	2 × 3 西柱	400	200	5.80	1.93	N 10° E	23.26	12+ a	40 ~ 60	30 ~ 80		○		
	S106	側柱	2 × 2	3.57	1.79	3.28	1.84	N 80° W	11.71	5+ a	20 ~ 40	10 ~ 50		○		S86 に切られる。
	S107	側柱	2 × 5 西柱	200	400	9.80	1.95	N 3° W	39.20	24	30 ~ 70	40 ~ 100	青磁罐/120, 廊・土槽直 接/660, 廊柱系/502	○	開仕切り	S820 に切られる。
K	S108	側柱	1 × 4	2.90	2.90	5.52	1.34	N 87° W	16.01	9+ a	25 ~ 40	10 ~ 30		○		
	S109	側柱	2 × 2 廊柱	3.76	1.88	4.84	2.46	N 79° W	18.33	8+ a	30 ~ 60	10 ~ 85		○		
	S110	側柱	2 × 2	396	196	4.19	2.10	N 79° W	16.59	17+ a	30 ~ 60	20 ~ 65	青磁輪花皿	○	○	S817 を切る。
	S111	側柱	1 × 1	1.45	1.45	1.93	1.93	N 87° W	2.80	4	30 ~ 40	10 ~ 15	削削跡/502	○		
L	S112	側柱	1 × 2	1.91	1.91	4.15	2.07	N 89° W	7.93	5+ a	30 ~ 40	10 ~ 60	削削跡	○		
	S113	側柱	2 × 1	2.91	2.91	3.80	1.90	N 85° W	11.06	5+ a	35 ~ 45	20 ~ 60		○		
	S114	側柱	1 × 2	2.68	2.68	4.00	2.00	N 3° E	10.72	5+ a	25 ~ 50	20 ~ 50		○		
	S115	側柱	2 × 2	2.36	1.18	2.55	1.33	N 3° W	6.03	6+ a	20 ~ 35	10 ~ 30		○		S810 に切る。
M	S116	側柱	1 × 2	1.14	1.14	2.93	1.46	N 10° E	3.34	5+ a	20 ~ 35	5 ~ 40		○		
	S117	側柱	2 × 2	4.14	2.07	4.07	2.48	N 80° W	20.58	3+ a	25 ~ 30	20 ~ 40		○		
	S118	側柱	2 × 2	4.30	2.15	4.90	2.45	N 5° E	21.03	7+ a	30 ~ 40	5 ~ 70		○		
	S119	側柱	1 × 1	1.31	1.31	1.95	1.95	N 4° W	2.55	4	30 ~ 35	25 ~ 60		○		
N	S120	側柱	2 × 3 西柱	400	200	5.00	1.60	N 3° E	20.00	20+ a	20 ~ 60	20 ~ 70	青磁輪花皿	○		
	S121	側柱	1 × 2	2.00	4.35	4.35	2.18	N 32° E	8.70	7+ a	20 ~ 45	15 ~ 75	京都灰土土器系/617	○		
	S122	側柱	2 × 5	400	200	10.00	2.00	N 27° E	40.00	14	30 ~ 40	20 ~ 70	青磁罐・文様系/43	○		
	S123	側柱	1 × 3	4.00	4.00	6.00	2.00	N 77° W	24.00	7+ a	30 ~ 40	20 ~ 50		○		
O	S124	側柱	2 × 3	4.00	200	6.00	2.00	N 17° E	24.00	10	35 ~ 40	20 ~ 60	病弱拂摸	○		
	S125	側柱	1 × 2	4.77	2.39	8.01	2.00	N 21° E	38.21	12	30 ~ 40	10 ~ 35	青磁罐・文	○		S811 に切られる。
	S126	側柱	2 × 3	4.00	200	6.00	2.00	N 9° E	24.00	12	30 ~ 40	15 ~ 30	青磁輪花皿	○		S820 に切られる。
	S127	側柱	1 × 2	4.00	200	6.00	2.00	N 15° E	12.96	6+ a	20 ~ 40	10 ~ 70	青磁罐・文	○		

第10表-2 南側曲輪群掘立柱建物跡一覧表

位置 (周辺)	番号 (種別)	規模	東行 間	西行 間	柱行 間	柱行 間	方位	身寄面積 (m <sup>2</sup> )	柱穴 (m)	柱数 (根)	柱徑 (cm)	柱高 (cm)	出土遺物	復元 作業 件数 ①	備考	切り扱い	図面 記載
			柱間	間隔	梁高	梁幅	梁間	柱間	柱行	柱数	柱徑	柱高	柱間				
S66	側柱	2×3	3.80	1.90	6.60	2.27	N 19° E	25.08	10	20~50	10~60	日暮遺跡系、青花瓦、白瓦、筒瓦、瓦当、土器類、刀劍	○	S622に切られる。	○		
S67	側柱	1×1	2.11	2.11	4.39	4.39	N 65° W	9.26	4+α	30~40	0~30	筒瓦、瓦当、土器類、刀劍	○	柱行の内側のみ 柱はなし	○		
S68	側柱	2×4	3.00	1.50	7.60	1.90	N 75° W	22.80	8+α	20~40	20~50	筒瓦、瓦当	○				
S69	側柱	1×2	4.00	4.00	4.00	2.00	N 9° E	16.00	6+α	30~40	25~80	白堀遺跡武西都窯瓦灰/73、 青花唐草模様瓦灰/232	○				
S70	側柱	1×2	0.98	0.98	1.59	0.80	N 50° W	1.56	6	30~40	20~90		○				
S71	側柱	2×1	2.75	1.38	2.75	2.75	N 6° E	7.56	7+α	30~50	30~55		○	S623を切る。			
S72	側柱	1×3	0.76	0.76	4.48	1.49	N 83° W	3.40	8	30~40	55~60		○				
S73	側柱	1×1	1.89	1.89	3.23	3.23	N 68° W	6.10	4+α	20~40	10~45		○	断行の中間の 柱はなし	○		
S74	側柱	1×2	2.25	2.25	3.88	1.94	N 78° W	8.73	6	30~70	20~65		○				
S75	側柱	2×3	4.12	2.06	6.50	2.16	N 74° W	26.78	7+α	30~40	10~40		○	隣仕切り			
S76	側柱	1×3	3.60	3.60	6.80	2.28	N 84° W	24.48	8	40~60	30~55		○	S625を切る。	○		
S77	組柱	3×3	5.90	1.96	6.30	2.10	N 5° E	37.17	16	30~50	10~50		○	S625を切る。			
S78	側柱	1×2	2.18	2.18	2.99	1.50	N 25° W	6.52	5+α	15~30	20~50		○				
S79	側柱	2×2	2.61	1.31	3.80	2.99	N 12° W	15.14	7+α	25~50	20~60		○				
S80	側柱	1×1	2.38	2.38	3.99	3.99	N 7° E	9.50	4+α	20~25	25~30		○	S65を切る。			
S81	側柱	1×2	2.27	2.27	4.85	2.43	N 7° E	11.01	5+α	20~40	30~50		○	S622を切る。	○		
S82	側柱	2×2	2.39	1.20	5.14	2.57	N 21° E	12.28	4+α	35~50	10~30		○	S66を切る。			
S83	側柱	1×2	2.36	1.18	4.34	2.17	N 21° E	10.24	5+α	20~30	20~70		○	S611に切られる。	○		
S84	側柱	1×2	2.29	2.29	4.15	2.07	N 78° W	9.50	6	30~40	30~50		○	S612を切る。	○		
S85	側柱	1×2	3.88	3.88	4.00	2.00	N 6° E	15.52	5+α	30~40	10~60		○	S616,5817に切られる。			
S86	側柱	1×3	2.88	2.88	4.83	1.61	N 48° E	13.91	6+α	20~30	20~60		○				
S87	側柱	1×2	2.17	2.17	2.79	1.40	N 18° W	6.05	4+α	30~35	20~40		○				
S88	側柱	2×2	4.93	2.45	5.25	2.62	N 12° E	25.88	5+α	20~30	10~80		○				
S89	側柱	1×3	1.80	1.80	5.80	1.90	N 70° W	10.44	5+α	25~40	15~40		○				
S90	側柱	1×2	3.56	3.56	6.17	3.09	N 21° E	21.96	3+α	20~60	30~70		○				
S91	側柱	1×2	1.20	1.20	1.44	0.72	N 82° W	1.73	5+α	15~20	10~25		○				
S92	側柱	1×2	1.80	1.80	2.22	0.74	N 87° W	4.00	6	25~40	20~70		○				
S93	側柱	1×1	0.83	0.83	2.09	2.09	N 87° W	1.73	4	20~40	10~70		○				
S94	側柱	2×2	1.66	0.83	2.31	1.16	N 87° W	3.83	8	20~70	10~60		○				
S95	側柱	2×3	2.64	1.32	5.76	1.92	N 57° W	15.21	9+α	20~40	10~40	青花唐草模様瓦灰/40	○				
S96	側柱	2×4	3.92	1.96	7.97	1.99	N 57° W	31.24	22	20~50	10~60	百済遺跡後継室系瓦灰、青花 唐草模様瓦灰、筒瓦、瓦当	○	百済遺跡後継室系瓦灰、青花 唐草模様瓦灰、筒瓦、瓦当	○		
S97	側柱	2×2	2.70	1.35	3.61	1.81	N 47° W	9.75	8	30~40	5~40	筒瓦、瓦当	○	筒瓦、瓦当	○		
S98	側柱	1×2	3.55	3.55	6.13	3.05	N 33° W	21.76	8+α	20~40	10~70	四耳壺/313、筒瓦	○	四耳壺/313、筒瓦	○		
S99	側柱	2×6	4.01	2.01	10.33	1.75	N 57° W	42.23	27+α	30~60	5~90	青花唐草模様瓦灰系	○				
S100	側柱	1×3	4.04	4.04	5.83	1.94	N 30° W	23.55	7+α	10~40	20~40		○				
S101	側柱	2×3	2.15	1.05	2.24	0.75	N 64° E	4.70	6+α	20~40	10~30		○				
S102	側柱	2×3	4.01	2.01	5.60	2.30	N 38° E	22.46	12+α	20~40	0~80	青花唐草模様瓦灰/270	○				
S103	側柱	1×3	4.04	4.04	7.81	2.60	N 30° E	31.55	7+α	20~40	20~50		○				
S104	側柱	1×1	1.96	1.96	4.10	4.10	N 51° W	8.04	4+α	30~40	10~40		○				
S105	側柱	1×2	1.47	1.47	3.88	1.93	N 55° W	5.70	5+α	15~40	10~50		○				
S106	側柱	1×3	2.12	2.12	5.78	1.92	N 54° W	12.25	6+α	15~45	10~50		○				
S107	側柱	2×3	4.02	2.02	7.21	1.96	N 32° E	29.06	14	15~40	10~55	筒瓦	○				
S108	側柱	2×2	2.97	2.97	5.78	2.89	N 63° W	17.17	6	15~40	15~60	筒瓦	○				
S109	側柱	2×3	3.81	1.91	5.84	1.95	N 71° W	23.31	12+α	20~50	10~45		○				
S110	側柱	1×4	3.00	3.00	7.30	1.82	N 33° E	21.90	10	30~40	20~60		○				
S111	側柱	1×3	4.60	2.30	6.66	2.26	N 75° W	30.64	13+α	20~40	0~50		○				
S112	組柱	2×2	4.00	2.00	4.00	2.06	N 78° E	16.00	8+α	30~40	5~50		○				
K	S81	側柱	2×2	3.57	1.78	4.31	2.18	N 59° W	15.39	7+α	30~60	20~60	吉野(洪武通鑑)/812	○	S62, S81に切られる。 S615に切られる。		
M	S82	側柱	2×2	4.35	2.18	4.16	2.08	N 55° W	18.10	8+α	30~40	0~50		○	S61を切る。		
S83	側柱	1×1	2.39	2.39	2.64	2.64	N 37° E	6.31	4	30~40	10~45		○				
S84	側柱	2×3	3.88	1.93	5.58	1.79	N 39° E	20.77	9+α	20~40	10~60		○				
S85	側柱	1×2	1.91	1.91	2.96	1.48	N 30° W	5.65	6	30~45	10~60		○	SC1を切る。	○		
S86	側柱	2×2	3.12	1.56	3.73	1.86	N 8° E	11.64	8	10~50	20~50		○	SC1を切る。	○		
S87	側柱	1×2	2.75	2.75	3.44	1.72	N 13° E	9.46	6	30~40	0~45		○				
S88	側柱	2×2	4.65	2.32	4.49	2.24	N 43° E	20.88	7+α	30~40	10~60		○				
S89	側柱	1×1	1.66	1.66	2.99	2.99	N 47° E	9.46	4	30~60	40~75		○				
S90	側柱	2×2	3.64	1.82	3.91	1.95	N 31° E	14.23	7+α	20~40	20~60		○	SC1を切る。			
S91	側柱	1×1	1.33	1.33	1.59	1.59	N 29° W	2.11	4	20~30	5~70		○				
S92	側柱	3×4	6.05	2.02	6.67	1.67	N 8° E	40.35	11+α	20~50	10~60		○				
S93	側柱	2×2	2.95	1.49	5.11	1.28	N 25° W	15.07	9	20~35	10~80		○				
S94	側柱	1×1	1.69	1.69	2.76	2.76	N 33° W	4.66	5+α	20~30	40~70		○				
S95	側柱	2×2	2.99	1.49	4.18	2.09	N 42° E	12.50	6+α	30~40	—		○				
S96	側柱	1×1	1.66	1.66	2.99	2.99	N 47° E	9.46	4	30~60	40~75		○				
S97	側柱	2×2	3.74	1.72	3.56	1.78	N 30° E	16.82	12.12	4	20~30	—	○				
S98	側柱	2×2	3.10	3.10	4.29	2.15	N 56° W	13.30	6	25~40	50~70		○				
S99	側柱	2×2	2.37	1.39	3.71	1.86	N 79° E	8.79	5+α	25~30	10~40		○				
SG1-3	S81	側柱	1×3	2.04	2.04	6.80	2.27	N 32° E	13.87	7	30~30	10~80	門跡の可逆性あり	○			

※1 側立柱跡の後元作業の中で、現地で確認を行ったものは○、図上のみで復元を行ったものは○とする。

第 11 表 南側曲輪群柵列一覧表

位置 (柵列)	番号	実長(m)	柱数	方位	出土遺物	切り合い	復元 作業 区分
	SR1	4.88+α	2+α	N 71°W		○	
D	SR2	2.33+α	3+α	N 27°W		○	
	SR3	3.30+α	3+α	N 2°W		○	
	SR4	4.18+α	3+α	N 67°W		○	
	SR1	2.94+α	3+α	N 19°E	玉頭鏡环/547,	○	
	SR2	21.43+α	15+α	N 117°E	514, 557, 559	○	
E	SR3	17.17+α	13+α	N 9°E		○	
	SR5	3.15+α	3+α	N 42°E	E-SG5を切る。	○	
	SR6	2.98+α	3+α	N 37°E	E-SG6を切る。	○	
	SR6	2.12+α	3+α	N 8°W		○	
	SR7	5.79+α	6+α	N 27°W		○	
	SR8	5.88+α	5+α	N 6°W		○	
	SR1	6.02+α	5+α	N 11°W		○	
	SR2	5.64+α	5+α	N 16°E		○	
	SR3	7.52+α	5+α	N 81°W		○	
F	SR4	3.21+α	3+α	N 84°E		○	
	SR5	15.85+α	11+α	N 78°W		○	
	SR6	9.81+α	5+α	N 77°E	E-SG6を切る。	○	
	SR7	5.93+α	5+α	N 5°W		○	
	SR8	3.76+α	4+α	N 1°W		○	
	SR9	7.00+α	5+α	N 8°W		○	
	SR10	4.76+α	4+α	N 40°E		○	
	SR11	1.289+α	7+α	N 37°E		○	
	SR12	6.56+α	6+α	N 54°E		○	
	SR13	7.09+α	4+α	N 69°W		○	
	SR14	12.00+α	6+α	N 58°W		○	
	SR15	8.34+α	5+α	N 58°E		○	

※ 1 桁列の復元作業の中で、図上で復元を行ったものは○とする。

第 12 表 土坑計測表

遺構名	位置 (柵列)	位置 (柵列)	柵区番号	神田番号	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
D-SC1	D	I	第 68 国	正方形	1.6	1.6	0.30			
F-SC1	F1	III		楕円	3.1	3.0	0.76			
H-SC1	H	V	第 90 国	楕円形	0.96	0.56	0.47			
J-SC1	J	VII	第 102 国	楕円形	2.0	1.0	(0.20)	白磁器四都窯系系、青磁鏡系系(E-26), 青花 磁器系系(1), 銀鏡器四都窯系、土被(7/44)		
K-SC1	K	VII	第 104 国	円形	1.0		0.25	青花墨書き鏡系系(1), 銀津(8/12)		
M-SC1	M	X	第 107 国	楕円形	1.6	1.1	0.20	青磁鏡(1), 銀鏡系系(9/18), 銀口(9/99)	M-SA1, SA2 を切る。 SB3 - Bに切られる。	
SG1-2・柵机 1	SG1-2	II	第 111 国	方形	2.0	2.0	0.30			
SG1-3・柵机 2	SG1-3	G-III	第 112 国	円形	2.5			0.35-0.55 青磁器等(不詳), 銀鏡系系(IV-V)		

第 13 表 肩穴建物跡計測表

遺構名	位置 (柵列)	位置 (柵列)	柵区番号	神田番号	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	出土遺物	備考
SA1	J	VI	第 101 国	楕円正方形	3.0	2.6 ~ 3.0	0.05			
M-SA1	M	X	第 106 国	方形	2.7 + α					M-SC1 に切られる。
M-SA2	M	X	第 106 国	方形	3.0 + α			白磁器四都窯系系, 青磁鏡(3 II), 銀石, 灰石, 銀鏡系系(9/99, 9/20)	M-SC1 に切られる。	

第 14 表 集石造構計測表

遺構名	位置 (柵列)	位置 (柵列)	柵区番号	神田番号	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	配石	出土遺物	備考
F-S1	F	II	第 75 国	楕円	1.10	0.80	0.12	—			
F-S2	F	II	第 75 国	楕円	0.55	0.50	0.15	○			
F-S3	F	II	第 75 国	円形	0.65	0.50	0.10	—			
J-S1	J	VII	第 101 国	円形	0.65	0.50	0.10	—			

第 15 表 土坑墓計測表

遺構名	位置 (柵列)	位置 (柵列)	柵区番号	神田番号	法面			人骨			出土遺物	備考	
					高さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	平面形	埋葬形態	有機	頭位	その他	
SD1	K	SC7	第 104 国	2.18	0.87	0.63		楕円	不明	無	不明		K-SB1 に切られる。

### 第16表の凡例

\*1 遺構出土遺物については、瓦、土錘、鉄製品、銅製品、木製品、石製品を除く、中近世陶磁器、中世土器、土製聖人像のみを掲載する。

## ※2 表記の体裁

總計分

- (例) 青花 景徳鎮窯系碗 /208 (B)  
種類 器種 (レイアウト番号) (分類)

第 16 表 -1 南側曲輪群遺構出土遺物一覽表

出土地点	断面分類	未開分類
南の山地群 一級		
白磁 景德鎮窯系 /V-761, 福建-廣東窯系 /V-75 (C-?) 青花 景德鎮窯系 /V-15 (C) 偏頭燒 小口 /458 (V) 五彩 瓶 /344	白磁 青磁 黑磁 山土 粉山土 E-V	
白磁 福建-廣東窯系 /V-15 (D)		
白磁 景德鎮窯系 /V-75 (D)		
白磁 景德鎮窯系 /D-1-2b) 青磁 瓶 (B-1, B-II, H-I, D), 碗 or 盘, 白口器, 为反扣。 青花 景德鎮窯系 /D, 漳州窯系 /D 偏頭燒 瓶 (IV-A, IV-B, 山土, 田土)		
土器皿 瓶 /556 (E), 594, 595 (F) 泥輪陶器 天平黑瓶 /301, 309 肥前系染付 碗 /488 (III)		
青磁 田口区	白磁 福建-廣東窯系 青磁 瓶 or 盘 青花 景德鎮窯系 /D, 瓷 or 盘 偏頭燒 瓶 (山土)	
白磁 景德鎮窯系 /171 常滑燒 瓶 /483 (6b形式) 泥輪陶器 盆 /332	白磁 泉州四都系皿	
白磁 瓶-景德鎮窯系 /10 (新店窯主)		
青磁 瓶 or 盘 (B-1) 青花 景德鎮窯系 /B1 泥輪陶器 天目茶碗 /306		
田口区	白磁 福建-廣東窯系 白磁 泉州四都系皿 青磁 瓶 /511 青花 景德鎮窯系 /C, 漳州窯系 /D 偏頭燒 瓶 (IV-B-1, 山土)	
白磁 瓶 /79 (B-II), 口折盘 /511 青花 景德鎮窯系 /C, 漳州窯系 /D 偏頭燒 瓶 (IV-B-1, 山土)		
湖美-美濃燒 水滴 /467 (中期) 土器質器 双耳釜 /634		
E1-P10	白磁 泉州四都系皿 白磁 景德鎮窯系 /D (A) 白磁 景德鎮窯系 /D (B), 八角口 (D), 泉州四都系皿 白磁 福建-廣東窯系 青磁 瓶 /102 (B-N), 外反扣 /146 青花 景德鎮窯系 /C, 瓷 or 盘, 青 花 漳州窯系 /C 偏頭燒 瓶 (IV-A-2-B-1), 漳州窯, 山土	
狂引区	湖美-美濃燒 盒盖深盆 /474 (後期N) 肥前系陶器 盘 /597 (1-1) 土器皿 小口 /596 (F), 600 (A)	
土口 土口 4号 茶子口 /150 (B)	白磁 廣建-廣東窯系 /77 (新店窯主F) 青磁 瓶 /506 (D), 口折盘 /149 青花 漳州窯系 /C 偏頭燒 瓶 (IV-A-2-B-1), 漳州窯, 山土	
SE1 E2-P9 2-44 2-45 2-96	瓦質土器 双耳釜 /640 青磁 瓶 or 盘 青磁 玉蝶盘 /144 土器质器 瓶 /550 (B) 邵武窑系 /V-15 (D)	

※3 分類については、以下の分類を援用した

(出典文献は P.250 参照)

白磁 山本(2000)、森田(1982)、新垣・瀬戸(2005)

青磁 上田 (1982)

青花 小野(1982)

備前焼 重根(2005)、耳

瀬戸美濃焼 藤澤 (2008)

常滑焼 中野(1995)

近世陶磁器 大橋 (2004)

### 土師器 本報告分類（第VI章第2節1参照）

瓦質土器 和歌河内型羽茎：森島（2007）、播磨型缺：長谷川（2008）。

附錄二：西長門型號：西崎（2007）、玉葉土

防長製造

石臼 桐山(1996)

第 16 表 -2 南側曲輪群遺構出土遺物一覽表

第 16 表 -3 南側曲輪群遺構出土遺物一覽表

出土地点	層範分	未確定分
白堜	白堜 景德鎮窯系 (E-2b), 八角 碗 (D), 小杯	白堜 須武四都系系統
白堜 福建 - 広東系窯系 / 72 (新 娘瀬 F)	白堜 須武四都系系統	
青花	青花 (B 1, B 4, D), 碗或皿	
青花	青花 景德鎮窯系 (C, E), 盆 (B 1, B 2, C), 碗或皿	
青花	青花 漳州窑系窯 (C), 碗或皿	
青花	青花 花口 (V), 肥 前燒 磁鉢 (山土)	
青花	青花 瓦質器 庫 (629 (西長門型))	肥前燒 磁鉢 (山土)
SE1	青磁 碗或皿	
S03	白堜	白堜 福建 - 広東系、青磁
白堜	白堜 景德鎮窯系 / 48 (E-2b)	
S81	青磁	青磁 輪花皿
S81	肥前燒 甕, / 438 (IV B)	
S82	青磁	青磁 景德鎮窯系 / 521
S82	土師器 京都系盆 / 617	
SB 1	青花 景德鎮窯系 (C)	
S83	青磁	肥前燒 甕 (山土)
S84	青磁 碗或皿	
青磁	青磁 / 95 (B IV)	
S85	青磁陶器 盆 / 334	
S86	白堜 景德鎮窯系 / 52 (E)	肥前燒 磁鉢 (V B)
S86	青花 景德鎮窯系 (C)	
S88	土師器 盆 / 589 (F)	肥前燒 甕 (田土)
S89	白堜 座式武都窯系 / 33 (D)	
S89	青花 景德鎮窯系 / 232 (B1)	
白堜	白堜 景德鎮窯系 (E-2b, E-3, D), 碗 (C), 八角舟 (D), 碗或皿, 須武四都系系統	
白堜	白堜 福建 - 広東系系統	
青磁	青磁 (B 1, B 2, B 3, B 4, C, H, D), 碗或皿, 輪花皿, 青磁, 盆	
青花	青花 景德鎮窯系 (C, 盆 (B 1, C, E), 碗或皿)	
青花	青花 景德鎮窯系 (C), 盆 (C), 盆 或皿	
肥前燒 磁鉢 (400) (IV B)	肥前燒 磁鉢 (IV A-1, V B, 田土)	
肥前燒 磁鉢 (460) (V)	肥前燒 甕 (IV A, IV B, 山土)	
H-1-P16	青花 景德鎮窯系 / 249 (C)	
H-1-P16	白堜 福建 - 広東系窯系 / 78 (新 娘瀬 F)	
H-1-P16	青花 景德鎮窯系 / 233 (E)	
H-1-P17	白堜 景德鎮窯系 / 51 (E-2b)	肥前燒 磁鉢 (田土)
H-1-409	白堜 景德鎮窯系 (D)	
H-1-P5	青磁 碗 (D)	
H-1-P7	白堜 景德鎮窯系 / 八角舟 (D)	
H-1-P7	白堜 須武四都系系統	
瀬戸美濃道 片口小瓶 / 471 (後 期 IV, 5)	白堜 景德鎮窯系 (E-2b), 瓷 皿 (D)	
青磁	青磁 景德鎮窯系、須武四 都系系統	
青磁 碗 / 79 (B 1)	青磁 (B II, B III, D), 碗或皿, 輪花皿	
青花	青花 景德鎮窯系 (C), 盆 (C, E), 碗 (C)	
青花	青花 漳州窑系 (C), 盆 (C)	
青花	青花 小口器皿 (D)	
青花	青花 磁鉢 (V B), 甕 (山土, 田土)	
磁項珠 瓶 or 皿 / 340	白堜 景德鎮窯系 (E-2b), 小杯, 碗 (D)	
	白堜 福建 - 広東系系統	
青磁	青磁 (B II, B III, D, E)	
青花	青花 景德鎮窯系 (C), 盆 (B 2, C), 碗 (D)	
青花	青花 漳州窑系 (C)	
青花	青花 小口器皿 (D)	
青花	青花 磁鉢 (V B), 甕 (山土, 田土)	
H-3-P9	青花 景德鎮窯系 (E-2b)	
H-3-P9	白堜 景德鎮窯系 (C), 盆 (C)	
H-3-P9	白堜 福建 - 広東系系統	
H-3-P9	青花 景德鎮窯系 (C), 盆 (C)	
H-3-P9	青花 漳州窑系 (C)	
H-3-P9	青花 小口器皿 (D)	
H-3-P9	青花 磁鉢 (V B), 甕 (山土, 田土)	

第 16 表 -4 南側曲輪群遺構出土遺物一覽表

出土地点	揭取分	年代判断
新石器时代 田J区	青磁 瓶 (B II)	
	暗前施 镶 (山土)	
	白磁 善德鎮窯系盤 (E-3)	
	青磁 瓶 (B IV, E), 瓶 or 盆	
	青花 善德鎮窯系碗 or 盆	
	暗前施 檻蚌 (IV B-1, 山土), 莺 (山土+)	
	白磁 善德鎮窯系八角瓶 (D), 盆 (E-2b)	
新石器时代 田V区	青磁 瓶 /86 (E), 花口盘 /154	白磁 瓶 (B II, B IV, D), 瓶 or 盆
	青花 善德鎮窯系碗 (C)	
	青花 漳州窑系盒 /287 (C)	
	暗前施 镶 (IV B)	
	暗前施 瓶 (IV B)	
	土罐器 瓶 /548 (A)	
	暗胎陶器 瓶 /335	
	瓦質土器 瓶 /631 (瓦質土器類)	
JII-P28	暗前施 镶 (山土)	
JII-P36	青花 善德鎮窯系盒 (C)	
JII-P78	暗前施 镶 (山土)	
JII-P29 青磁 瓶 or 盆 /183	暗前施 镶 (IV B)	
JII-P81	暗前施 镶 (IV B)	
JII-P20 青磁 瓶 /91 (B III)		
JII-P21 青磁 瓶 /119 (D)		
JII-P22 青磁 瓶 /81 (B II)		
JII-P38	暗前施 镶 (IV B)	
JII-P345	白磁 式武四瓣盒系盒	
	青磁 瓶 or 盆	
JII-P43	白磁 善德鎮窯系盒 (E-2b)	
JII-P47 青磁 瓶 /82(B II)	白磁 善德鎮窯系盒 (E-2b)	
JII-P47 青磁 瓶 (D)	青磁 瓶 (D)	
JII-P51 暗前施 四耳壺 /442 (IV B)	暗前施 镶 (IV B)	
JII-P53 青花 善德鎮窯系盒 /228 (E), 盆 /247 (C)	暗前施 镶 (IV B)	
SC1	白磁 式武四瓣盒系盒、善德鎮窯系盒 (E-2b)	
	青花 漳州窑系碗 (C)	
	暗胎陶器 四耳壺 (C)	
S81	青花 善德鎮窯系碗 or 盆	
S82	白磁 善德鎮窯系盒 (E-2b)	
	青花 善德鎮窯系碗 (C)	
	暗前施 镶 (山土)	
S83 暗胎陶器 四耳壺 /313	中国宋代器	
S85	暗前施 镶 (IV B)	
S88 青花 漳州窑系碗 /270 (C)	青磁 瓶 (B III)	
	白磁 善德鎮窯系盒 (E-2b)	
	青磁 瓶 /107 (C III)	
S92 土罐器 瓶 /571		
	青花 善德鎮窯系盒 /229 (E)	
	青花 善德鎮窯系盒 (D)	
	中国宋代器	
	白磁 善德鎮窯系茶葉 (E, D), 小杯、式武四瓣盒系盒、福建建窑系盒	
	青磁 瓶 (B I, B II, B IV, C II, D, E), 瓶 or 盆、花口盆 (E-2b)	
	青花 善德鎮窯系碗 (C), 盆 (B II, B IV, C II, D, E), 瓶 or 盆、漳州窑系盒 (C), 盆 (C), 瓷 or 皿	
	暗前施 檻蚌 (IV B-3)	
	暗前施 檻蚌 (IV B-1), 鳜 (山土)	
S813	暗前施 镶 (山土)	
S814	暗前施 镶 (山土)	
	白磁 式武四瓣盒系八角瓶 /40 (D)	
	青花 善德鎮窯系盒 (E-2b), 小杯、式武四瓣盒系盒 (E-2b), 花口盆 (C), 瓷 or 皿	
	青花 善德鎮窯系碗 (E-2b), E II, E III, 盒 (C), 瓷 or 皿	
	青花 善德鎮窯系盒 (E-2b), E II, E III, 盒 (C), 瓷 or 皿	
	暗前施 檻蚌 (IV A-1, V A, 山土)	
	暗前施 镶 (III B, IV B, 山土)	
	暗胎陶器 小匣 /333	

第16表-5 南側曲輪群遺構出土遺物一覧表

出土地点	南側分	未明分
田1 田2 J1 J1-P15	肥前系染付 瓶/518、肥前系青磁 染付 瓶/497 (IV) 備前燒 櫻鉢/365 (IV B-1) 青磁 破 (B IV)	
	白磁 墨德鎮窯系小杯/65、66 西磁 福建弘德堂系白磁/73 (新 潟口)、白磁/80 (C)、 青磁 瓶/142 (C)、118、 127 (D)、碗 or 盆/175、182、 玉皿皿/142、外反唇/147 青花 潤德鎮窯系小杯/265、 266 青花 漳州窑系碗/279 (C) 青花 漳州窑系盒 (O)、碗 or 盆/280 384 (V A)、398 (V B)、402 (V B) 備前燒 櫻鉢 (IV B-1、山土、田土) 備前燒 麵鉢 (V A、V B) 土鍋器 瓶/552 (B)、572 (D), 皿/605、606 無釉陶器 瓷 or 盆/339	
田3 K SC1 K-P10 S02 S04 S05 S06 S07 L 田Q-区	青花墨德鎮窯系盒 (B) 備前燒 麵鉢 (IV B) 青磁 墨德鎮窯系盒/26 (D) 備前燒 櫻鉢/397 (IV B) 青花墨德鎮窯系盒 (C)、碗 or 盆 青磁 瓶/117 (D) 肥前系陶器 鉢/534 (IV) 洪武通寶/812 白磁 墨德鎮窯系八角杯 (D)、皿 白磁 墨德西都窯系盒、福建弘德 堂系盒 青磁 瓶 (B IV)、C II、D、E)、碗 X型 (C)、青花 墨德鎮窯系盒、 青花 墨德鎮窯系盒、皿、碗 or 盆、 青花墨德鎮窯系盒 (O)、 備前燒 櫻鉢 (V A、山土、田土)、 甕 (山土、田土) 無釉陶器 天目碗/305 瓦質土器 羽釜/619、621 (和 原河内型)、623、双耳釜/633	
M 田P-区	白磁 墨德西都窯系盒、福建弘德 堂系盒、碗 白磁 墨德鎮窯系盒 (D)、E) 青磁 瓶 (B IV)、D)、碗 or 盆、 青花 墨德鎮窯系盒 (E)、碗 or 盆、 青花 墨德鎮窯系盒 (C)、皿 (B I)、 碗/255 青花 漳州窑系盒 (C)、碗 or 盆 備前燒 櫻鉢 (V A-2、IV B-2、IV B-3、V A、田土) 備前燒 麵鉢 (IV B、山土) 東戶萬葉燒 片口小瓶/470 (後 期IV古) 青白磁 龍首水注/342 肥前系染付 水滴/523、青磁 染付 瓶/487 (碗/1-2)、肥前 系陶器 瓶/524 (II) 薩摩燒土 甕/545 瓦質土器 甕/669	
M-P10	白磁 墨德鎮窯系盒/46 (E-2b)	
S02 SC1 S01		
S01	備前燒 櫻鉢/403 (V A) 肥前系染付小瓶/501、503 (IV)	

第16表-6 南側曲輪群遺構出土遺物一覧表

出土地点	南側分	未明分	
田S-区		白磁 墨德鎮窯系盒 (E) 青磁 瓷 or 盆 備前燒 櫻鉢 (山土) 青磁 外反唇	
田T-区		青花 墨德鎮窯系盒 (C, E) 白磁 墨德西都窯系盒 青磁 瓷 or 盆、外反唇 備前燒 櫻鉢 (IV B)、甕 (IV B) 無釉陶器 天目碗破 白磁 墨德西都窯系盒 青磁 瓷 or 盆 (B IV)、C II、D)、 碗 or 盆 青花 漳州窑系盒/285 (C) 青花 墨德鎮窯系盒 (B I)、碗 或盆、漳州窑系盒 (C)、碗 or 盆 無釉陶器 四耳壺、中國周代陶器 備前燒 櫻鉢 (V A、V B)、甕 (V A、IV B)、甕 (田土)	
S01-1 区	表土	瓦質土器 穀糠/655 茶臼下白/1143 (B) 茶臼下白/302 青花 べトナム花瓶/346 肥前系白磁碗/521 (V) 土師質土器 瓷/627 (防燃型?) 瓦質土器 瓶/632 (瓦質土器類) 双耳釜/643、火鉢/664 (防燃 型?)、瓦器/7/668	白磁 墨德西都窯系盒、八角杯 (D) 青磁 瓷 or 盆/176 青花 墨德鎮窯系盒 (C)、皿 or 盆 中國周代陶器 備前燒 櫻鉢 (IV B) 甕 (IV A、IV B)
田T-区	上层	常滑燒 甕/484 (10型式) 茶臼下白/1143 (B) 茶臼下白/808	備前燒 櫻鉢 (V A)、甕 (IV B)
田U-区	下层	白磁 墨德西都窯系盒/21 (D) 青磁 瓶/63 (B前)、碗 or 盆 青磁 瓷 (B IV)、E)、碗 or 盆、瓶 173 (I)、199 (I) 青花 漳州窑系盒/298、碗 (273 (C)) 無釉陶器 茶臼/303、320 ~ 324、 326 常滑燒 櫻鉢/347 (III B) 353 (IV A-2) 361 (IV B) 407、409 (V B) A)、398 (V B) 407、409 (V B) 備前燒 甕/417 (IV A)、431 (V)、439 (V B)、甕/435、436 (IV 甕 (V B)、甕 or 盆/447 (V B) 土師質土器 瓶/611 (A) 瓦質土器 火鉢/663 (防燃型 II b)、667 (防燃型?)、足鍋 火鉢 (V A-2)、瓦器/1149 (B)、 茶臼下白/1156 (C) 肥前系船形器皿/509 (IV)、肥前系 陶器 盒/528 (I-1)、531 (III)、 532 (III)、甕/533 (IV) 備前燒 京都燒 瓶/540	青磁 瓷 (E) 備前燒 甕 (V A、山土) 青磁 瓷 or 盆
田V-区	上层	白磁 墨德西都窯系盒/31 (D) 青磁 瓷 or 盆/106、185、櫻花 皿/156 青花 漳州窑系盒 (C) 備前燒 櫻鉢 (IV B)、甕 (山土、 田土) 瓦質土器 双耳釜/641	白磁 墨德鎮窯系盒、八角杯 (D) 青磁 瓷 (B II、B IV、D) 青花 漳州窑系盒 (C) 備前燒 櫻鉢 (IV B)、甕 (山土、 田土)

第 16 表-7 南側曲輪群構造出土遺物一覧表

出土地点	規範分	未規範分
表土	白磁 青花	青花 景德鎮窯系皿 /49 (E)
	青花	白磁 邵武都窯系皿、景德鎮窯系碗 (C)、盤 (E-B)、福建・廣東窯系盤 (B-A)、碗 (A-C)、碟 or 盤、花口盤、青花、景德鎮窯系碗 (C)、盤 (B)、碟 (C)、碗 or 盤
	青花	青花 漳州窯系碗 /271、275 (C-E)
	青花	白磁、盤、碗 or 盤、漳州窯系碗 (C)、盤 (C)、碗 or 盤
	中國產陶器	中國產陶器
	鐵筋錠	鐵錠 /377 (IV B-3)、鐵錠
	鐵錠	鐵錠 /444 (IV B)
	土師器	土師器 盒 /612 (系)
	土師器	新臼上白 /1142 (B)、新臼上白 /1153、1157、1162、1169、1166 (C)
	土師器	白磁 邵武都窯系皿
耕作土	青花	青花 景德鎮窯系碗 (C)、盤 (C)、碟 or 盘、漳州窯系碗 (C)、盤 (C)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 (C)、盤 (C)、碟 or 盘、漳州窯系碗 (C)、盤 (C)
	土師器	土師器 盒 /613 (系)
	石軸 No.1	青磁
	石軸	青磁 碗 or 盘
	石軸 No.2	鐵前燒 豪 (IV B)
	石軸 No.3	鐵前燒 鐵錠 (IV B-1)
	石軸 No.4	白磁 景德鎮窯系碗 (E-2b)
	石軸 No.5	圓前燒 鐵錠 /378 (IV B-3)
	石軸 No.6	鐵前燒 豪 (IV B)
SG1-Ⅱ	青花	青花 碗 /104 (B IV)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /212 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	圓前燒 鐵錠 (IV B-1)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	白磁 景德鎮窯系皿 (C)
	青花	青花 漳州窯系碗 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	圓前燒 鐵錠 (IV B-1)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
SG2-Ⅱ	青花	青花 景德鎮窯系皿 /240 (B2)
	青花	圓前燒 豪 (IV B-V B)、林 (田土)、鐵錠 (IV B-1)、V A-V B)
	青花	鐵錠 盒 /188
	青花	圓前燒 豪 (IV B-V B)、鐵錠 (IV B-1)、V A-V B)
	青花	圓前燒 豪 (IV A)
	青花	圓前燒 鐵錠 (V A)、豪 (IV B-V A)
	青花	新臼下白 /1160、1164 (C)
	圓前燒	圓前燒 鐵錠 /367 (IV B-1)
	圓前燒	白磁 福建・廣東窯系皿、景德鎮窯系皿 (E-B)、D)
	圓前燒	青花 (B II)、碗 or 盘
SG2-Ⅲ	青花	青花 漳州窯系碗 /269 (C)
	青花	圓前燒 鐵錠 /364、366 (IV B-1)
	青花	圓前燒 豪 (IV A)
	青花	圓前燒 鐵錠 (V A)、豪 (IV B-V A)
	青花	新臼下白 /1160、1164 (C)
	圓前燒	圓前燒 鐵錠 /367 (IV B-1)
	圓前燒	白磁 福建・廣東窯系皿、景德鎮窯系皿 (E-B)、D)
	圓前燒	青花 (B II)、碗 or 盘
	圓前燒	青花 漳州窯系碗 /269 (C)
	圓前燒	圓前燒 鐵錠 /364、366 (IV B-1)
SG2-Ⅳ	青花	青花 漳州窯系碗 /291 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	青花 漳州窯系碗 /291 (C)
	青花	中國產陶器
	青花	圓前燒 豪 (IV S-V B)
	青花	白磁 福建・廣東窯系皿
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	青花 漳州窯系碗 /291 (C)
	青花	中國產陶器
SG3-Ⅱ	青花	青花 漳州窯系碗 /234 (B1)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (B1, C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	青花 漳州窯系碗 /291 (C)
	青花	中國產陶器
	青花	圓前燒 豪 (IV S-V B)
	青花	白磁 福建・廣東窯系皿
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	青花 漳州窯系碗 /291 (C)
	青花	中國產陶器
SG3-Ⅲ	青花	青花 漳州窯系碗 /360 (IV B-1)、鐵
	青花	圓前燒 豪 (IV B-V B)、水屋甕 /450 ~452 (V)、鐵利 /453, 454 (V)
	青花	瓦質土器 双耳釜 /637
	青花	肥前系染付 伝仏器 /519 (V)、肥前系陶器 碗 /525 (IV)、京焼系陶器付 /546
	青花	白磁 邵武都窯系皿
	青花	青花 碗 (B I, B II, B IV, D)、碗 or 盘
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C, E)、碗 or 盘、漳州市窯系 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A)、鐵錠 (III B)
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	土師器	土師器 盒 /558 (C)
SG3-Ⅳ	青花	青花 碗 (B I, B II, B IV, D)、碗 or 盘、輪花盤
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B-3)、鐵錠 (IV B-3, V B)
	青花	青花 漳州窯系碗 /291 (C)
	青花	中國產陶器
	青花	圓前燒 豪 (IV S-V B)
	青花	白磁 福建・廣東窯系皿
	青花	圓前燒 豪 (IV B)
	青花	青花 漳州窯系碗 /291 (C)
	青花	中國產陶器

第 16 表-8 南側曲輪群構造出土遺物一覧表

出土地点	規範分	未規範分
表土	白磁	白磁 景德鎮窯系皿 (E-V B)、鐵
	青花	青花 福建・廣東窯系皿、鐵
	青花	青花 漳州窯系碗 /220 (C)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 or 盘、漳州窯系碗 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B, IV B)、鐵錠 (IV B-2)、鉢 /464 (V)
	瓦質土器	瓦質土器 双耳釜 /642
	瓦質土器	瓦質土器 双耳釜 /642
	肥前系染付	肥前系染付 盒 /498 (V)
	青花	青花 碗 (IV B, D, C II)、碗 or 盘、輪花盤、外反盤
	青花	青花 景德鎮窯系皿 or 盘、漳州窯系碗 (C)
耕作土	青花	圓前燒 鐵錠 /413 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B, IV A, IV B)、鐵錠 (IV B-2)、鉢 /464 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B, IV A, IV B)、鐵錠 (IV B-2)
	青花	青花 碗 /193
	青花	圓前燒 豪 (IV B, IV, D, E, 鐵 or 盘)、外反盤
	青花	青花 景德鎮窯系皿 or 盘、漳州窯系碗 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV B, IV A, IV B)、鐵錠 (IV B-2)、鉢 /464 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 (C)
SG1-Ⅱ	青花	圓前燒 豪 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (E-B)、福建・廣東窯系皿 (A1)、新潟・湯巴 E II)
	青花	青花 碗 (B II)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /272 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
SG2-Ⅱ	青花	圓前燒 豪 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (E-B)、福建・廣東窯系皿 (A1)、新潟・湯巴 E II)
	青花	青花 碗 (B II)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /272 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
SG2-Ⅲ	青花	圓前燒 豪 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (E-B)、福建・廣東窯系皿 (A1)、新潟・湯巴 E II)
	青花	青花 碗 (B II)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /272 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
SG2-Ⅳ	青花	圓前燒 豪 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (E-B)、福建・廣東窯系皿 (A1)、新潟・湯巴 E II)
	青花	青花 碗 (B II)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /272 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
SG3-Ⅱ	青花	圓前燒 豪 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (E-B)、福建・廣東窯系皿 (A1)、新潟・湯巴 E II)
	青花	青花 碗 (B II)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /272 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
SG3-Ⅲ	青花	圓前燒 豪 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (E-B)、福建・廣東窯系皿 (A1)、新潟・湯巴 E II)
	青花	青花 碗 (B II)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /272 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
SG3-Ⅳ	青花	圓前燒 豪 (IV B)、鐵錠
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (E-B)、福建・廣東窯系皿 (A1)、新潟・湯巴 E II)
	青花	青花 碗 (B II)
	青花	青花 景德鎮窯系碗 /272 (C)
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘
	青花	圓前燒 豪 (IV A, IV B, V B)、鐵錠 (V)
	青花	青花 景德鎮窯系皿 (C)、盤 or 盘

## 第V章 近世の遺構

**概要** 曲輪Gで近世墓が3基、曲輪Kで4基、曲輪Mで不明遺構1基が検出された。各遺構の計測値等は第17表を参照されたい。

### 1 曲輪Gの近世墓 (第117・118図)

**位置と概要** 曲輪Gの東端に位置する。土壇(SD1～3)3基が検出された。SD1～3は求心的に集合した位置関係である。平面形は一辺1～1.3mの方形である。深さは0.25～0.85mと深浅がある。これは、後世の削平等による残深の計測値である。

**近世墓の認定** SD1は人の骨、SD2は人骨と銭貨(六道銭)が出土したので近世墓とした。SD3は銭貨(六道銭)の出土と木棺の痕跡が認められることから近世墓とする。

**棺の構造** SD1の埋土は、第1層の両端が直立する分層線となるので、棺による埋葬と推測される。上肢骨の位置関係から、頭位は北東と思われる。

SD2の埋土は、平面的に隅角と直線的な分層線が入り、断面方向でも第5層の両端が直立する。底面付近では木質が一部残存し、釘が1点出土しているので方形の木棺と考えられる(第118図)。

人骨は、頭蓋骨と大腿骨の一部が残存する。人骨の鑑定結果(第VII章第6節)では、強屈状態の仰臥屈葬であったという。頭位は北と考えられる。

副葬品は寛永通宝2枚(822・834)である。

SD3は、埋土下層において泥土化した棺の痕跡が平面的に確認され、断面方向でも第2～6層の両端で直立した分層線となるため、長軸0.92m、短軸0.8mの方形木棺であると考えられる(第118図)。

副葬品は寛永通宝8枚(843～850)である。

**近世の墓石と石塔** 曲輪Gでは、近世の墓石(台座を含む)1基、中世の石塔(地輪1・火輪1・空輪1)が原位置を移動した状態で検出された。

墓石(1294)と台座(1295)は、SD3検出時に出土したが、SD3自体が掘り込み上部を失った状態なので伴うかは不明である。1294は凝灰岩製で、元文四年(1739年)に没した男性の墓碑銘が刻まれる。1295は花崗岩製なので墓石に伴うかは疑わしい。

### 2 曲輪Kの近世墓 (第117・119図)

**位置と概要** 曲輪Kの西端に位置する。落ち込み部分の盛土面で土壇(SD1・2・4・5)4基が検出された。SD1とSD2、SD4とSD5は一对になる配置である。

平面形は一辺1.1～1.4mの方形である。深さは0.32～1.4mと深浅がある。これは、盛土除去後に精査したことによる残深の計測値であって、本来は1.5m程の深さであったと考えられる。

**近世墓の認定** SD1・2・4は、人骨及び副葬品もないが、後述するSD5の構造等から墓壙である可能性は十分にあるので近世墓とした。SD2出土の15世紀の白磁皿(26)は副葬品とは言い難い。SD4の埋土中より備前焼擂鉢(397)が出土しているが、遺構に伴うかは不明である。

**SD5の調査** SD5は人骨と豊富な副葬品が検出された遺構である。木棺の痕跡も確認されたので、特に調査結果を下記に列挙する(第119図)。

木棺の構造は、泥土化した痕跡から長軸0.9m、短軸0.45mの長方形と推測される。鉄釘は、四隅に偏った位置で出土するので、木棺に伴うものと考えられる。鉄釘に付着した木質織維の方向性から、板材の厚さは1cm程度で、鉄釘は側板方向から打ち込まれたと推測できる。

遺物は、底面に近い第3層中から人骨、鉄釘、副葬品が出土した。人骨は頭蓋骨と大腿骨、骨盤の一部が残存し、成人女性の鑑定結果が得られている。また、頭位は北東方向で、仰臥屈葬のことである。

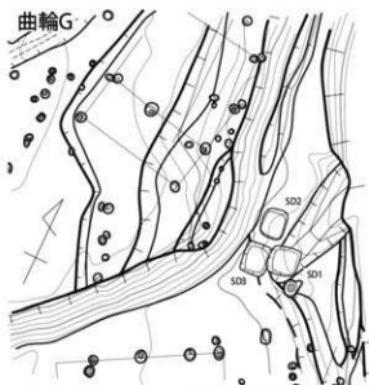
副葬品は金銅製飾り鉢6点(864～868)、洪武通宝2、永楽通宝1枚(856～858)、寛永通宝(古寛永)6枚(851～855)、ガラス製の数珠1点(1225)である。鉄釘は23点で、木質が付着した状態で出土した。なお、飾り鉢1点は取り上げ段階で破損してしまった。

飾り鉢は表面に菊花状の文様が彫金されたものである。頭蓋骨周辺に集中して出土したことから頭部に纏うものを想定したが、その数と形状から修驗者が着用する袈裟の金具の可能性も考えられる。

埋土中から青花皿、青磁碗(117)、土錘(741)、肥前系陶器鉢(534)等が出土したが、副葬品ではなく、混入品と考えられる。

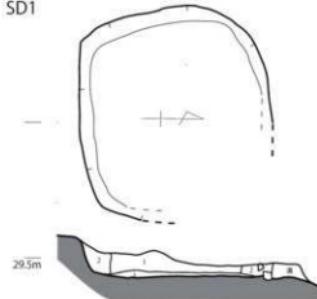
### 3 曲輪Mの遺構 (第105図、写真図版37)

**不明遺構(M-SX1)** 不整円形の土坑に布掘り状の溝が接続する。土坑には角礫が集積した状況であった。SB15の柱穴を切る。備前焼擂鉢(403)や肥前系小杯(501)等が出土した。遺構の時期は501から17世紀末～18世紀末の間かそれ以降と考えられる。(今塩屋・柳田)



第117図 近世墓の配置図（曲輪G・曲輪K）

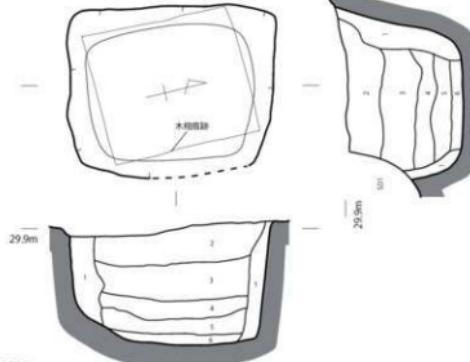
SD1



SD2



SD3



SD1

1黄褐色土 岩盤破砕块や多く含む  
2褐色土 岩盤破砕块多く含む  
3赤褐色土 粘質土

SD2

1黄褐色土 やや褐色土が混じる  
2に少し黒褐色土 1より多く黒褐色土が混じる  
3褐色土 やや褐色土が混じる

4に少し黒褐色土 岩盤破砕块が多く入る（岩の隙縫と共に上の土が堆積した）

5褐色土 砂質でやや褐色土が混じる

6に少し黒褐色土 (木棺の内に洗土した結果流土)

7褐色土 岩盤記憶でやや褐色土

8褐色土 木程が粘化したものと思われる。一部に木質が残る（古跡があつたため）

SD3

1褐色土 粘質性の明赤褐色ブロックを多量に含む

2褐色土 明赤褐色ブロックを多量に含む

3褐色土 粘質性の褐色土ブロックを少量含む

4明褐色土 粘質性の明赤褐色ブロックを少量含む

5褐色土 粒状の明赤褐色粒子を少量含む

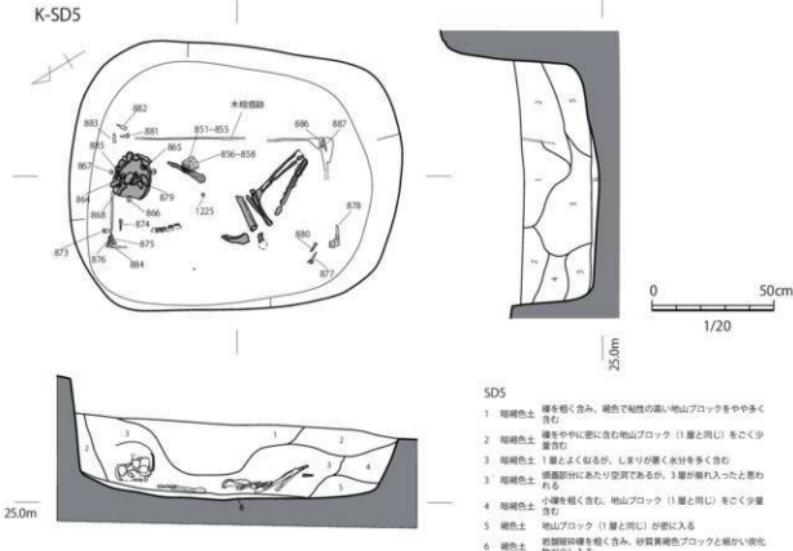
6黄褐色土 小礫を含み、粒状の明赤褐色粒子を少量含む

木棺ライン

0 1m

1/30

第118図 曲輪G 近世墓（SD1~3）実測図



第119図 曲輪K 近世墓 (SD5) 実測図

第17表 近世墓一覧表

遺構名	所在	法量			埋葬形態	人骨			出土遺物	備考
		長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)		有無	頭位	その他		
SD1	G	1.3	1.15	0.25	楕円方形	不明	有	北西 成人		SD3を切る。
SD2	G	1.15	1	0.4	楕丸方形	方形棺	有	北西 成人女性 古銭(貞永通寶)/822、834、町		
SD3	G	1.25	1	0.85	楕丸方形	方形棺	無	不明 古銭(貞永通寶)/843～850、白磁皿、青磁碗		SD1に切られる。
SD1	K	1.4	1.2	1～1.4	楕丸方形	不明	無	不明	白磁皿726	K-SB1を切る。
SD2	K	1.3	0.85	0.7	楕丸方形	不明	無	不明	圓削頂擂鍊7397	
SD4	K	1.2	0.9	0.32	楕丸方形	不明	無	不明	古銭(貞永通寶)/851～855、(共武通寶、永楽通寶)/856～860、駒金具/B64～B68、数珠玉/1225、青花磁、青磁碗/117、土鍬/741、肥前系海器鉢/S34	
SD5	K	1.4	1.1	0.7	楕丸方形	方形棺	有	北東 成人女性 B56、町、駒金具/B64～B68、数珠玉/1225、青花磁、青磁碗/117、土鍬/741、肥前系海器鉢/S34		

第18表 近世墓時期と出土錢貨の組合せ (南側曲輪群 + 平成14年度中山遺跡調査分)

時期／銭種	明銭 + 古寛永	古寛永のみ	新寛永のみ	新寛永 + 古寛永	新寛永 + 元文	鉄銭のみ	鉄銭 + 古寛永
中 山 遺 跡	17世紀後半	SX9、SX19					
	18世紀前半						
	18世紀後半						
	19世紀前半		SX15	SX7		SX2	SX17
	19世紀後半			SX11	SX4		
南側曲輪群	K-SD5		G-SD3				G-SD2

※中山遺跡は錢貨5枚以上の出土及び銭種判別可能な遺構のみ選出。

#### 4 近世墓の時期について

**塩見城跡内の近世墓** 塩見城跡南側曲輪群の南端部は、既に「中山遺跡」として発掘調査されている(宮崎県埋蔵文化財センター第93集「中山遺跡」2004)。

近世墓23基や墓道等の墓地関連施設が検出され、墓石と墓壇のセット関係などから、調査対象地は17世紀後半から19世紀末の間に形成された墓地空間であったことが判明した。

今回の南側曲輪群の調査では、曲輪Gで墓壇3基、墓石1基、曲輪Kで墓壇4基が検出された。「中山遺跡」同様に近世墓群と判断される。

**近世墓の造営時期** 墓壇出土の銭貨（六道銭）から探ることにしたい。曲輪Gでは3基中2基より銭貨が出土した。SD2は鉄寛永1・古寛永通宝1の2枚一组、SD3は古寛永6・新寛永2の8枚一组である。曲輪Kでは4基中SD5のみ銭貨が出土した。洪武通宝2と永楽通宝1・古寛永6の9枚一组である。

上記の六道銭のセット関係を、鈴木公雄氏の時期区分と対照すると、G-SD2はV期（1739年以降）、G-SD3はIV期（1697年～1739年）、K-SD5はII期（1636年～1668年）となる。ただし、あくまでも全国的な傾向による区分なので、さらに検討の余地を残している。

そこで、墓壇と墓石とのセット関係の把握ができる「中山遺跡」の調査成果を援用する。

六道銭が出土した墓壇は23基中12基である。そのうち出土銭数が5枚以上、銭種が判別可能で紀年銘や他の遺物とのセット関係より年代が推察できる9基より、各時期の六道銭の銭種を検討する（第18表）。

第18表のとおり、六道銭に古寛永を用いるのは、少なくとも19世紀後半でも続いている。また、古寛永のみの六道銭使用は遅くとも17世紀末～18世紀前半の段階で終了しているようだ。

一方、曲輪G・Kの近世墓の六道銭は、洪武通宝等の渡来銭と寛永通宝とセットである。本県では渡来銭を含む六道銭を持つ墓壇は中世に位置づけられる場合が多く、近世墓からの出土は県内では稀であることから、K-SD5は近世墓の中でも比較的古い時期となる。

上記の検討の結果、G-SD2は1739年以降、G-SD3は1697年以降の所産となる。K-SD5は六道銭からは1636年～17世紀末の時期幅があるが、埋土出土の534は混入品としても1690～1780年の製造年代が特定されるから、17世紀末までに葬られたと引き出せる。他方、六道銭を持たないG-SD1、K-SD1・2は、G-SD2・3、K-SD5と併行か前後する時期であろう。

**墓域について** 南側曲輪群では「中山遺跡」調査分も含めて、近世墓の墓域は大きく3群存在すると見える。「中山遺跡」の集中墓域群と、曲輪G・Kにおける散在墓域群2群である。

これら二種類の墓域の違いは、「中山遺跡」は居住区域から脱して墓域として独立した空間だが、曲輪G・Kでは、いずれも数基で居住空間と思われる掘立柱建物跡に近接している。

近世墓の集中・散在構造について、例えば、長佐古真也氏（長佐古2004）は、東京都多摩丘陵周辺の遺跡事例をもとに散在墓域群は居住空間に近接している事例が多いとの見解を示されている。この見解は塩見城南側曲輪群における近世墓群遺跡にも当てはまるといえよう。

県内での近世墓検出例は集中墓域のみ、散在墓群のみの検出例が多く、この2タイプの墓域が同一遺跡で存在した遺跡は類例に乏しい。

南側曲輪群における散在墓群、すなわち居住空間と近世墓との関係性については、曲輪GのSD1、2の頭位や主軸方向は北東で、付近の掘立柱建物跡の主軸と類似する点が注意される。同様に曲輪KのSD5の頭位方向は、墓壇の北側に所在する掘立柱建物跡群の主軸と似ているので、埋葬方向は、建物の主軸を意識しているように伺える。

しかし、埋葬方向と主軸方向が類似する掘立柱建物跡の出土遺物の年代的下限は、16世紀後半～17世紀初頭なので、近世墓が造営される17世紀後半以降に存在していたかは不明である。

**金銅製飾り鉢について** 曲輪KのSD5より金銅製飾り鉢が6点出土した。この飾り鉢は修驗者が着用する袈裟の金具の可能性がある。同様に修驗者の存在を伺わせる事例は「中山遺跡」のSX19出土の錫杖である。いずれの近世墓も埋葬年代は、1636～17世紀末と近世前期に該当する。

澤武人氏によれば、塩見地域は中世より修驗者の所在が「上井覺軒日記」等にて確認されるという。近世には「内藤家文書」の文政元年（1818）12月提出の「白杵群宮崎郡修驗書上帳」の文中に、天領塩見村は当山派光明寺（延岡市所在）配下修驗者が2名存在していたことが記載されている。

飾り鉢と錫杖の存在は、少なくとも近世前期において、塩見城跡周辺に修驗者が存在したことを裏付けている。そのことは修驗の場となっていた可能性も示唆しているよう。

（柳田）

# 第VI章 遺物

## 第1節 陶磁器

### 1 中世貿易陶磁 (第120～134図)

**概要** 塩見城跡では多くの貿易陶磁器が出土し、その内容は多岐にわたる。遺物の年代は13世紀から17世紀初頭までであるが、特に15世紀から16世紀代が主体である。白磁、青磁、青花、褐釉陶器などをはじめ、青白磁水注、色絵碗、瑠璃釉碗・瓶、三彩瓶などが出土している。東南アジア産の陶磁器が1点あるが、これ以外はすべて中国産である。

#### 1-1 白磁 (第120～122図: 1～78)

**概要と分類** 碗・皿・杯があり、破片数は703点である。分類は、主に太宰府分類及び森田勉氏ならびに新垣力・瀬戸哲也両氏の分類に基づいて報告する。(山本2000、森田1982、新垣・瀬戸2005)。なお、森田D群の生産地は邵武四都窯とされる(田中2002)。森田E群のほとんどは景德鎮窯産である。

**太宰府IV類**: 11世紀後半～12世紀後半(1)

厚めの玉縁口縁となる碗で、釉は厚めでムラがあり、表面に気泡が生じる。

**太宰府V類**: 11世紀後半～12世紀後半(2・3)

細くまっすぐ立ち上がる高台を特徴とし、2は高台外面まで施釉し、内面に櫛目文を有するV-4 b類である。3は胴部を意図的に打ち欠いたと思われ、二次利用の可能性がある。また高台内は摩耗して滑らかである。

**森田C群**: 15世紀前後(4～17)

すべて碗であり、口縁形態により細分される。灰色の素地に透明釉を施釉するものが多く、全体に調整も粗く輪郭が明瞭である。中には見込みに印花文や線刻文を施すもの(14・16)もある。4～8は端反碗であり、端部にかけて器壁は薄い。9・10も端反碗であるが、端部まで器厚は一定で断面が方形となり端反りもやや弱い。11～13は口縁部が内湾する。

15～17については底部のみだが、素地や釉調が4～14と共に通するためC群とした。いずれも断面方形の低い高台であり、高台内を浅く削る。また高台は露胎である。15は高台際を水平に削り込む。

**森田D群**: 14世紀後半～16世紀代(18～40)

皿・小碗・八角杯であり、邵武四都窯で生産されたものである。高台裏に墨書を施すものもある(28・30・37・38)。

18～33は胴部が大きく開き口縁部が内湾する皿である。高台内に兜巾状を呈するものが多くみられる。素地は磁器とは認識し難いほど軟質で粗いものと精緻なものがある。29・31は内外全面施釉されている。34・35は腰で折れて外反する杯である。出土数は少なく、素地はいずれも粗い。

36・37は腰部から緩く立ち上がって直口縁となる小碗である。36は外面下部から内面まで透明釉を施釉後、見込みを蛇の目釉剥ぎする。

38～40は八角杯である。素地はいずれも粗く、腰部から内面に白色釉を施釉する。40はやや青白色味を帯びている。38・39は高台内兜巾状で、40は4箇所の抉り高台である。

**森田E群**: 15世紀後半～16世紀代(41～67)

皿・小杯・菊皿が出土しており、ほとんどが景德鎮窯産である。41～55は腰から緩く立ち上がって端反るE-2類である。41～52は器壁が薄く、高台も小さく鋭い。素地は概して精緻であり、白色釉を全面に施釉後、費付のみ釉剥ぎする。47は高台内に呉須で「福」を描く。また46・52は高台径が10cm以上の大型品である。53・54は粗い素地に白色釉と透明釉を高台外側から内面に二重施釉する。高台内はやや兜巾状を呈し、赤色化する。50・54は費付に離れ砂が熔着する。55は精緻な素地に白色釉を外面下部から内面に施釉する。高台はやや高く、断面は細い方形である。

56～58は底部甚苟底で口縁部が内湾するE-3類である。56は軟質な素地に乳白色の釉を外面下部から内面に施釉する。素地や釉調はD群と酷似しており、邵武四都窯産であると思われる。露胎の高台内に墨書がある。57・58は精緻な素地に透明釉を全面施釉し、費付を釉剥ぎする。

59はE-4類の菊皿である。内外面を削って菊弁を表現する。口縁端部は輪花状である。やや粗いが硬質な素地に透明釉を費付から内面まで施釉する。

61～67は小杯である。61～64は腰部から緩く立ち上がり、やや外反して口縁に延びる器形である。器壁は大変薄く灰白色に近い白色釉を施釉する。65・66は高台際から開き気味に立ち上がって内湾する。ややガラス質の白色釉を施釉し、費付と見込みを蛇の目釉剥ぎする。65は皿状の高台内に朱書きがある。

67は腰がなく、「ハ」の字形に疊付から口縁部に外反する。白色釉を全面施釉し、疊付を釉剥ぎする。

#### 福建・広東産白磁E類

皿I:14世紀後半~16世紀代、皿II:16世紀代(68~71)

新垣・瀬戸両氏による皿の分類案にあたる一群の皿である。68は、直線的だがやや丸みを持った器形で、見込みを円形に釉剥ぎする。高台外側際は、水平気味に削られる。皿Iに相当する。69~71は、全体にやや外反し、胴部から底部の器厚は厚い。高台内の抉りは深いが、高台外側は抉りが浅く、沈線を刻んでいる印象である。口縁部から胴部に漬け掛けにより施釉する。いずれも見込みは滑らかである。皿IIに相当する。

#### 福建・広東産白磁F類:14世紀後半~16世紀代(72~78)

すべて腰部で屈曲し、大きく外反する皿である。

灰色を呈する粗い素地に透明釉を外面下部から内面に施釉し、見込みを蛇の目釉剥ぎする。

腹部内面には明瞭に屈曲点が見られるが、腹部外側では丸みをもっている。高台外側際を水平気味に強く削り、高台内側際をやや抉り込む。

### 1-2 青磁(第122~127図:79~207)

**概要と分類** 瓢・皿・盤・瓶・壺・香炉が出土しており、総数は1841点である。碗については上田氏の分類(上田1982)を援用した。皿については口縁部形態により分類した。同一分類でも素地や釉調に精粗が見られる。詳細は観察表を参照されたい。

#### (a) 瓢類(79~137)

上田B I類:13世紀後半~14世紀前半(79~80)

外面に片切彫籠蓮弁文を施文する。79は複弁を持ち、器形はやや端反り状となっている。

上田B II類:14世紀後半~15世紀初頭(81~85・87~89)

外面に片切彫もしくは線刻蓮弁文を施文し、蓮弁には大小見られる。81~85は直口縁であり、片切彫の大きな蓮弁文を施文する。81は上田B II-b類にあたり、全面施釉後、高台内の釉を輪状に削り取っている。88は線刻により粗略な蓮弁文を施し、暗オリーブ色釉を施釉する。

上田B III類:15世紀中葉(90~94)

外面にヘラ描き、線描きによって剣頭のあるやや細い蓮弁文を施文する。90~92は内面に刻花文を施文する。92はB III-b類に該当する。93はB III-a類に該当する。全体的に赤色化しており、素地は粗い。

漆黒の痕跡があり、重宝されていたのであろう。

上田B IV類:15世紀後半~16世紀前半(95~105)

外面に線刻によって細い蓮弁文を施す。粗いものから密なものまである。95~100は剣頭を持つが、96~97~99は蓮弁の単位が剣頭と一致し、95~98~100は一致しない。

剣頭が尖るもののがほとんどであるが、95~96は弧状である。101~105は剣頭を省略しランダムに蓮弁文を施す。95~98~105は櫛状工具を使用したと考えられ、とくに105は約10条の櫛状工具で密に施文しており、他に類を見ない。

上田C II類:14世紀後半~15世紀前半(106~113)

口縁部外面に線刻雷文帯、胴部に片切彫ラマ式蓮弁文を施文する。106~107は粗略である。内面に刻花文を施すものが多く、112~113は見込みに印花文を押す。器形は概して直口縁だが、107~109はやや玉縁状の口縁となる。

上田C III類:16世紀代(114)

口縁部外面に簡略化した雷文帯を施文する。雷文帯の形跡はほとんどなく、線刻で波のように描き、釉調も粗く、釉色は灰色に近い。

上田D類:14世紀中葉~15世紀初頭(115~130)

内外面ともに無文で、見込みに印花文を施すものもある。体部が丸みを持ち、口縁部端反りの器形であるが、端反りの手法により分類できる。115~117は口縁外側を削って玉縁状となり、118~126は折れて端部の器壁が薄くなり、127~130はやや端反る。

上田E類:14世紀後半~16世紀初頭(86~131~134)

内外面ともに無文で、内面に刻花文を施すものもある。体部が丸みを持ち、口縁は内湾する。

その他(135~137)

135は口縁端反りの碗で、外面に櫛描きにより施文し、釉色は灰色を呈する。

136~137は内外面に片切彫によって密な文様を施文し、どちらも素地・釉は精緻である。136は口縁部内面に四方櫛文、内面に花文、外面にラマ式蓮弁文と思われる文様を施す。

(b) 皿類(138~189)

内湾皿(138~141) 138~139は内面に櫛描きによる蓮弁文を施す。両者は文様・法量ともにほぼ同一だが、接合しない。140は内外面、141は外面に線描き蓮弁文を施す。

**玉縁皿** (142～145) 口縁端部直下を削ってやや玉縁状を成す。施釉によって内湾皿もしくは端反皿のように見える。内外面ともに無文である。

**外反皿** (146・147) 腰から緩く折れて外反する。147は腰がより強く折れ、外反する。どちらも内外面ともに無文である。

**口折皿** (148～151) 体部は丸みを持ち、口縁端部が強く折れ、鉗縁のようになる。148は内外面ともに無文で、それ以外は外面に蓮弁文を施す。149は全面施釉後、高台内の釉を輪状に削り取る。150は片切形と思われるが明瞭でない。

**輪花皿** (152～168) 口縁輪花状を呈し、腰で折れて外反する。素地はいずれも粗く、文様も粗略で口縁に三条の波状圍線を施すものがほとんどであり、刻花文を伴うものもある。底径が5cm未満で口径12cm未満を小型(152・153・157・161・162・167)、底径6cm以内で口径13cm以内を中型(154・155・158・159・160・163・165・166)、それ以上を大型と分類する。164は稜花皿の可能性が考えられる。166は内面に青海波文を施文する。

**菊皿** (169・170) 口縁輪花状を呈し、内面を削り込んで菊弁を表現し、外面もやや波打つ。170は菊弁の表現がはっきりしないが、高台の形状や高台内に透明釉を施釉する点で共通性があり、菊皿であると判断した。景德鎮産である。

**碗もしくは皿** (171～189) 底部のみ残存で、碗か皿かの判定は難しい。171は内外面に片切形により蓮弁文を施していると思われる。171～176は全面または高台内まで施釉後に高台内を輪状に削ぎ取り、見込みに印花を施す。172～174は素地・釉調とともに精緻で175は素地は赤色で粗く見込みを円形釉割ぎする。177～180は高台外側から内面に施釉後、疊付端部を面取りし、高台下半部を削り込む。181・182は疊付、183～187は高台外側まで施釉する。188は高台際まで施釉し、高台は疊付両端を削って接地面が非常に狭い。

**盤** (189～194) 189は口縁が端反り、内外面無文である。190・191は口縁端部をつまみ上げる鉗縁状口縁であり、190は内面に片切形刻花文、191は内面に細蓮弁文を施す。192～193は内面に細蓮弁文を持ち、見込みに印花文を押す。194は胴部内面及び見込みに幅広い削りによる蓮弁文、外面に線刻蓮弁文を施す。

(c) その他 (195～207) 195・196は香炉である。筒状の器形で口縁が内側に折れており、外面には赤線が数条に入る。197～199は器壁が厚く、外面に片切形による刻花文や鍋蓋弁文が施文された瓶もしくは酒会壺と思われる。200は円盤状の突堤が付く器形である。201は梅瓶の口縁である。青白磁の可能性もあるが小片のため判断し難い。202～207は瓶や壺などのいわゆる袋物と思われるが、器種については不明である。202は内面に調整時の削り屑が残り熔着している。

### 1-3 青花 (第127～131図: 208～299)

**概要と分類** 碗・皿・盤・小杯が出土し、破片数は959点である。主に小野正敏氏による分類を援用し、小野分類に当てはまらないものは森毅氏の分類を参照した(小野1982、森1995)。漳洲窯産青花は森村健一氏による分類を参照した(森村1995)。

(1) 景德鎮窯の青花 全面施釉後に疊付のみを釉剥ぎする。口縁や疊付は鋭い造りであり、高台内側の削り目も鋭い。疊付に砂粒が溶着する。呉須の発色は概して良好で文様も明瞭だが、粗悪なものもある。

(a) 碗類 (208～230)

**小野B群:** 14世紀末～15世紀中葉 (208・209)

見込みが広い端反りの碗である。208は体部がやや直立して、口縁が外に強く屈曲する。外面に草花文を描く。209は見込みが広く、高台際から緩く立ち上がる器形からB群に属すると判断した。

**小野C群:** 15世紀後半～16世紀後半 (210～220)

体部が開く直口縁であり、見込みはやや窄む、いわゆる「蓮子(レンツー)碗」である。210・211は外面胴部にアラベスク文、口縁部に波瀾文、見込みに蓮花を描き、210は高台内に白色釉を施釉する。213・214は外面に小花文を配し、文様や釉調もよく似るが接合はしない。215は文様に濃み描きを多用している。

**小野E群:** 16世紀中葉～後葉 (221～228)

見込みが盛り上がる側頭心の碗であり、腰部で丸みを持って立ち上がり、口縁まで直線的にのびる。胴部の文様は精緻なものが多く、多様である(221～225)。また高台内に鉛を配すものも多い(226～229)。226は見込みの膨らみはほとんどないが、高台は小さく、内側を深く皿拭に削り込んで文字を描くなどE群の特徴を持つ。

**森IV a類 (230)** 体部はE群と同じだが、見込みが平坦となる碗である。外面に丸花文、内面に如意頭文内に文字を描く。

(b) 皿類 (231 ~ 262)

小野B1群：15世紀後半~16世紀後半 (231~237)

端反りの皿であり、高台は脅付外側を削り断面三角形に形成し、接地面は狭い。胴部外面に唐草文、見込みに玉取獅子文 (231 ~ 234)、花樹 (233)、十字花文 (236/237) を描く。

小野B2群：16世紀後半 (238 ~ 242)

端反りの皿であるが、B1群に比してより大きくて端反る。240は口縁内面端部を釉剥ぎし、鉄軸を施している。見込みの文様は文字や人物など多様となる (241・242)。外面はいずれも無文である。

小野C群：15世紀後半~16世紀後半 (243 ~ 250)

底部が甚箇底を呈し、口縁が内湾する皿である。口縁外側に波濤文、胴部外面に芭蕉葉文、見込みには挖子花文 (243 ~ 246) や花文 (248 ~ 250) を描く。また胴部内面に文様を持つものもみられる。

小野E群：16世紀中葉~後葉 (251 ~ 261)

口縁部内湾の皿であり、高台はB群同様である。251 ~ 255は小型品、258 ~ 261は大型品である。文様は多様化し、魚や蟹を描くものもある (256・257)。組み合わせも様々で251・254は胴部外面に花鳥折枝文を描くが、口縁部内面には251は四方禪文、254は七宝文を描く。258・259はどちらも見込みに欄干を描き、中央に瓶と花を配している。260は見込みに龍を描くが、呉須の発色が悪く文様は黒ずんでいる。

折れ縁皿 (262) 銀線で口縁端部が輪花状の小型品である。胴部内外面に印刻蓮弁文を施し、鉄軸内面に簡略化した波濤文、外面に渦文を描く。

小杯 (263 ~ 266) 263・264は腰から緩く立ち上がり、やや開いて口縁まで直線的にのび、外面に唐草文を描く。265は見込みに寿山福海、高台内に「福」を描く。266は腰が折れる筒状の杯である。

(2) 潤洲窯の青花 粗製品の一群で、呉須は暗色で文様を太書きする。素地は粗く、磁器質のものと陶器質のものがある。脅付または高台外側から内面に施釉し、見込みを釉剥ぎするものもある。高台内や脅付を釉剥ぎしないために、離れ砂が熔着することが多い。器形や文様は景德鎮窯を模しているが、文様については簡略化感が顕著である。高台内は削りが粗い。

(a) 碗類 (267 ~ 279)

小野C群 (森村碗B内碗型)：15世紀後半~16世紀後半 (267~279)

腰部から丸みを持って口縁部に延びる。精製品と粗製品がある。267は口縁外面に波濤文、胴部外面に芭蕉葉文、見込みに蓮花を描き、器形も見込みが窓の景德鎮窯に似るが、高台の削りは浅く、高台は無釉で赤色化している。見込みに花文 (273 ~ 275) や擬人化した「壽」(277) を描くもの、高台内無釉のもの (267~268・274~276・277~279) が多い。

(b) 皿類 (280 ~ 294)

小野B2群 (森村皿C端反型)：16世紀後半 (280~281)

280は口縁外側に界線を描き、2枚が熔着した状態で出土した。281は口縁内面に四方禪文を丸と線によって簡略化して描く。

小野C群 (森村皿B甚箇底型)：15世紀後半~16世紀後半 (282 ~ 292)

森村皿B甚箇底型である。景德鎮窯に比べ、器壁が厚く口縁端部も鈍い。282 ~ 288は外面に粗略な文字や唐草文、見込みに「壽」を描く。290は外面に単位の大きな芭蕉葉文、見込みに花文を描く。その他 (293・294) どちらも見込みを蛇の目釉剥ぎするもので、見込みに花文を描く。294は白色釉を施釉後、透明釉を施釉している。

盤 (295 ~ 298) 295・296は胴部がやや丸みを持ち、鉄縁となる。胴部外面に印刻蓮弁文を施し、口縁内面に唐草文を配す。また、素地や釉調も共通するが、同一個体ではなく、295の方がやや大きい。297は腰部から緩く立ち上がり内湾する。精製品だが呉須はやや緑色を呈する。

小杯 (299) 腰部から緩く立ち上がり、口縁は端反りである。やや灰色の器面に簡略化した文様を描いており、呉須は暗色を呈する。

#### 1-4 褐釉陶器 (第132 ~ 134図: 300 ~ 335)

**概要** 天目茶碗・壺・壺・蓋などが出土しており、破片総数は226点である。すべて中国産である。

**天目茶碗 (300 ~ 309)** 軸は概して粘性高く、厚く掛かる。下地に鉄軸を施釉した後、褐釉を施釉するものもある。素地は精良なもので、灰白色粒が見られるものもある。301・302は口縁端部が鋭く形成されるが、300はやや鈍い。底部は断面方形で、底部中央を上げ底状に削るもの (303)、さらに周縁部を斜位に削るもの (304 ~ 308)、脅付内側を強く削って高台となるもの (309) がある。

**四耳壺 (310～319)** 310～313は頸部を持たず、口縁部玉縁状となり、器形はなで肩で横耳が付く。口縁部を釉剥ぎする。いずれも口縁端部を外側に強く折り曲げて成形されるが、全体を丸く仕上げるもの（310～312）と上部に明確な屈曲点を設けるもの（313）がある。314～316は頸部が直立気味に立ち、口縁部玉縁状となり、器形は肩張りで丸みを持ち、横耳が付く。外面に褐釉。314・315は内面に黒褐釉を施釉し、口縁端部を面取りするように釉剥ぎする。317～319は肩張りの器形で外面に施釉する。317は縦耳、318・319は横耳である。

**壺 (320～331)** 320は上部に平坦面を持つ鈍状口縁であり、端部は厚い方形である。外面に施釉するが、口縁部上面と内面を釉剥ぎする。外面の釉が逆流しているため、逆さまの状態で焼成されたと思われる。321～324は釉調や素地に灰色・白色釉が多く含まれる点で共通しており、同一個体であると思われる。頸部から直立気味に緩く立ち上がり、外に強く折れて上部に平坦面を持つ鈍状口縁を持つ。外面に施釉し、口縁部上面と内面を釉剥ぎする。釉ちぢれがひどく、内面にはタタキ痕が残る。325～331は底部のみであり、全体の器形は不明である。325～327は内面に黒褐釉、外面に褐釉を施釉し、上げ底である。328は胴部がやや開く器形で、底部は上げ底である。内面には釉を拭き取った痕跡が見られる。329は胴部が丸みを帯びた器形であり、底部は厚くやや上げ底である。底面以外の内外面に同一釉を施釉する。330・331は外面のみ施釉する。どちらも素地が粗く、灰白色粒が目立つ。331は赤色化している。

**その他・不明 (332～335)** 332は円盤状の蓋であり、外面のみ施釉する。333は頸部から直立して立ち上がり、端部が内側に折れる鈍状口縁をもつ小壺である。332と径がほぼ一致するためセットであった可能性もある。334は壺の肩部と推測され、器壁は薄く燒締められて硬質である。外面に粘土が多く付着する。335は壺か瓶の体部である。輪轂目が強く残る内外面に黒褐釉を施釉する。

## 1-5 無釉陶器 (第134図: 336～339)

**概要** 全体形のわかるものは無いが大型製品が出土しており、すべて中国産である。336～338は壺で、胎土や色調など非常に似ており、336・338

は外面に白色粘土による目積みもしくは重ね焼の痕跡が残り、同一技法による焼成が窺えるため、同一個体である可能性が高い。339は器壁が薄く、焼締め陶器である。底部は上げ底で、体部が大きく聞く壺か壺であると思われる。全体に自然釉がかかるが、内底には白色釉溜りのようなものが残る。

ほかにも壺や壺といった大型製品の体部と思われるものが出土しており、それらの素地は褐色粒をまばらに含むが、精緻で赤褐色を呈する。また、内外面は黒色・褐色に変色している。

## 1-6 その他の貿易陶磁

(第134図: 340～346, 521)

**概要** 琥珀釉・青白磁・鬱釉染付・色絵・三彩・翡翠釉・ベトナム青花・青磁小壺があり、破片総数90点である。

**瑠璃釉磁器 (340・341)** 340・341は小型の碗や瓶であろう。素地は精緻で内面に透明釉、外面に瑠璃色の釉を施釉する。

**青白磁 (342)** 青白磁龍首水注 (342) は水注の注口部分に龍の造形を表したものである。全体の表現はやや粗略だが、舌・目・肩上隆起・冠毛が残り、耳と角は欠損する。

**鬱釉染付 (343)** 343は鬱釉染付の小杯である。外面に不透性的褐色釉、内面及び高台内に透明釉を施釉する。見込みに呉須で文字を描く。景德鎮窯産と思われる。

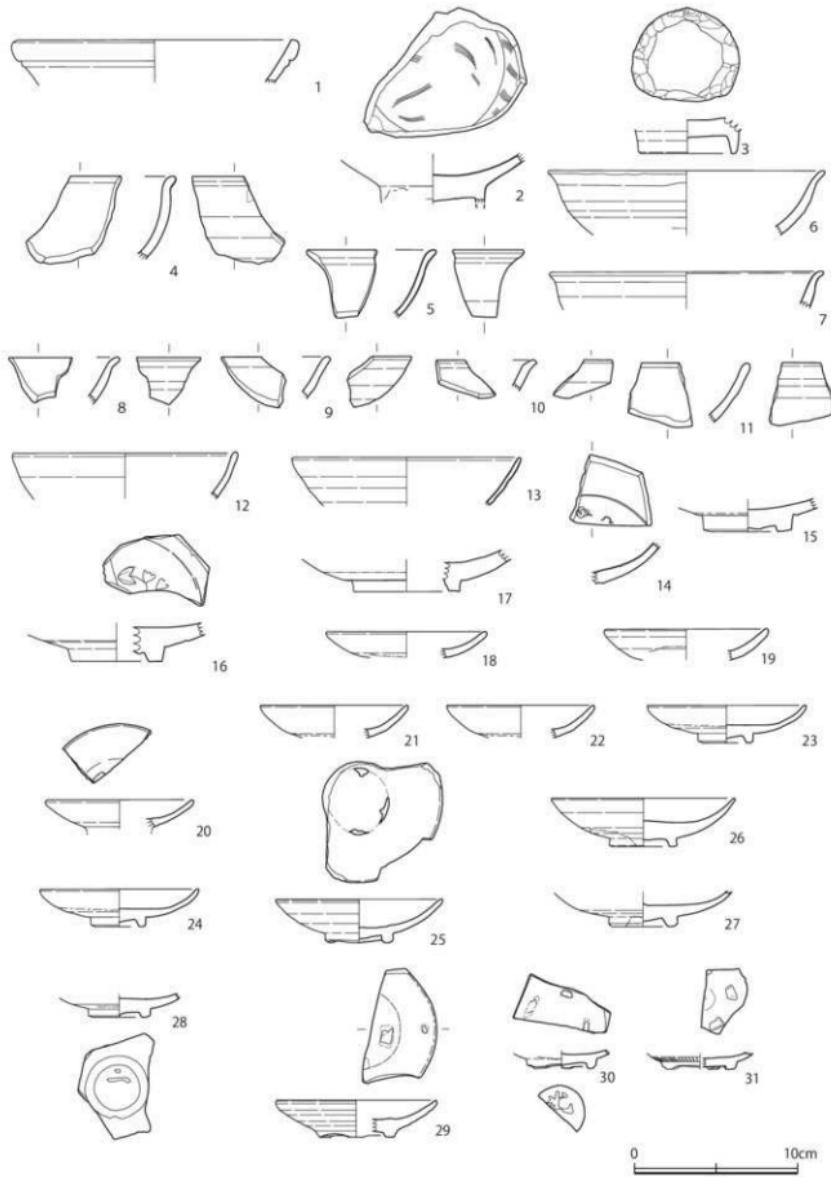
**色絵 (344)** 344は色絵碗で、二次的に被熱し退色している。高台は細く直立する。

**華南三彩 (345)** 345は華南三彩である。外面のみ緑色に彩色され、瓶の底部であろう。素地は粗い。

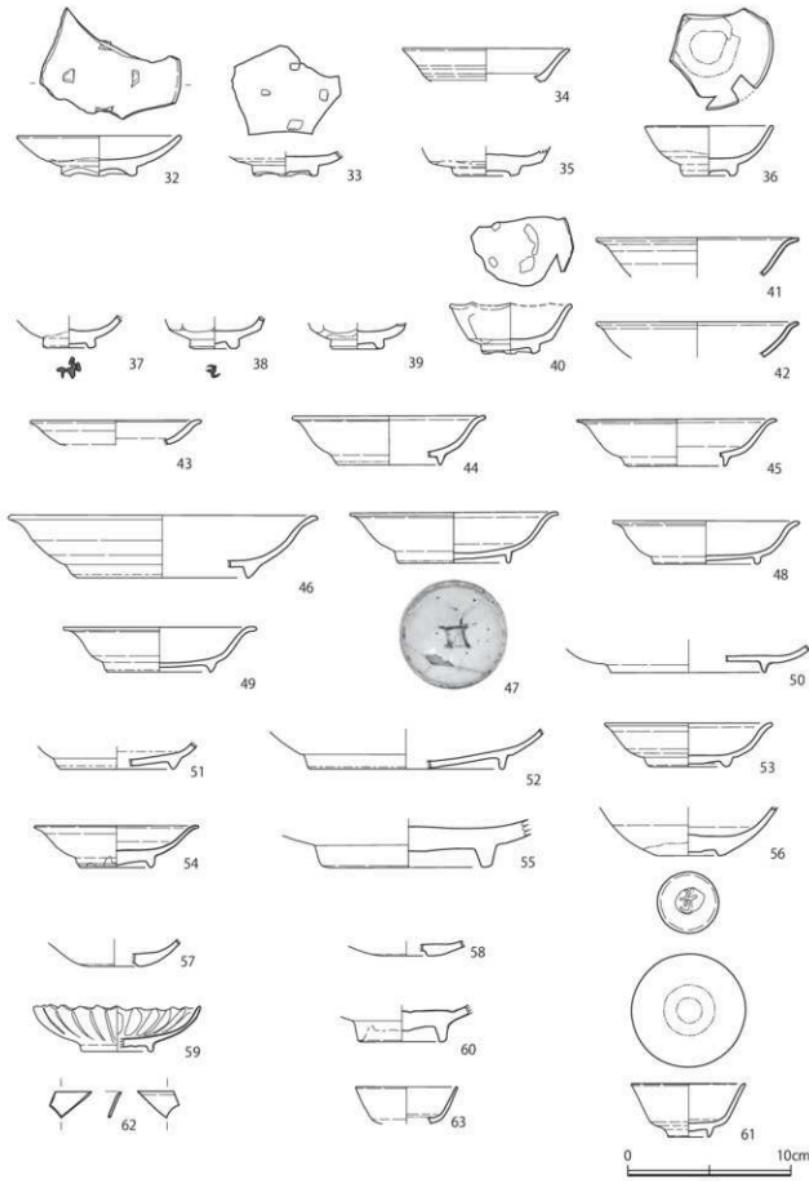
**ベトナム青花 (346)** 346の他には東南アジア産陶磁器は出土しておらず、素地の粗さや呉須の発色は漳洲窯産青花に似るため疑問が残るが、中国産青花には無い口縁内側に曜珞文を描くという特徴からベトナム青花として報告する。346はベトナム産青花の花瓶である。外面には芭蕉葉文を描く。

**青磁小壺 (521)** 521は景德鎮窯産の青磁小壺である。手捏ね成形と思われ、胴部内面に粘土の継目が大きく段状に残る。外面は底面付近まで施釉し、一部内面口縁付近にもかかる。内面には白磁釉を施す。内面底部にフリモノが付着している。16世紀後半から17世紀初頭の製品である。

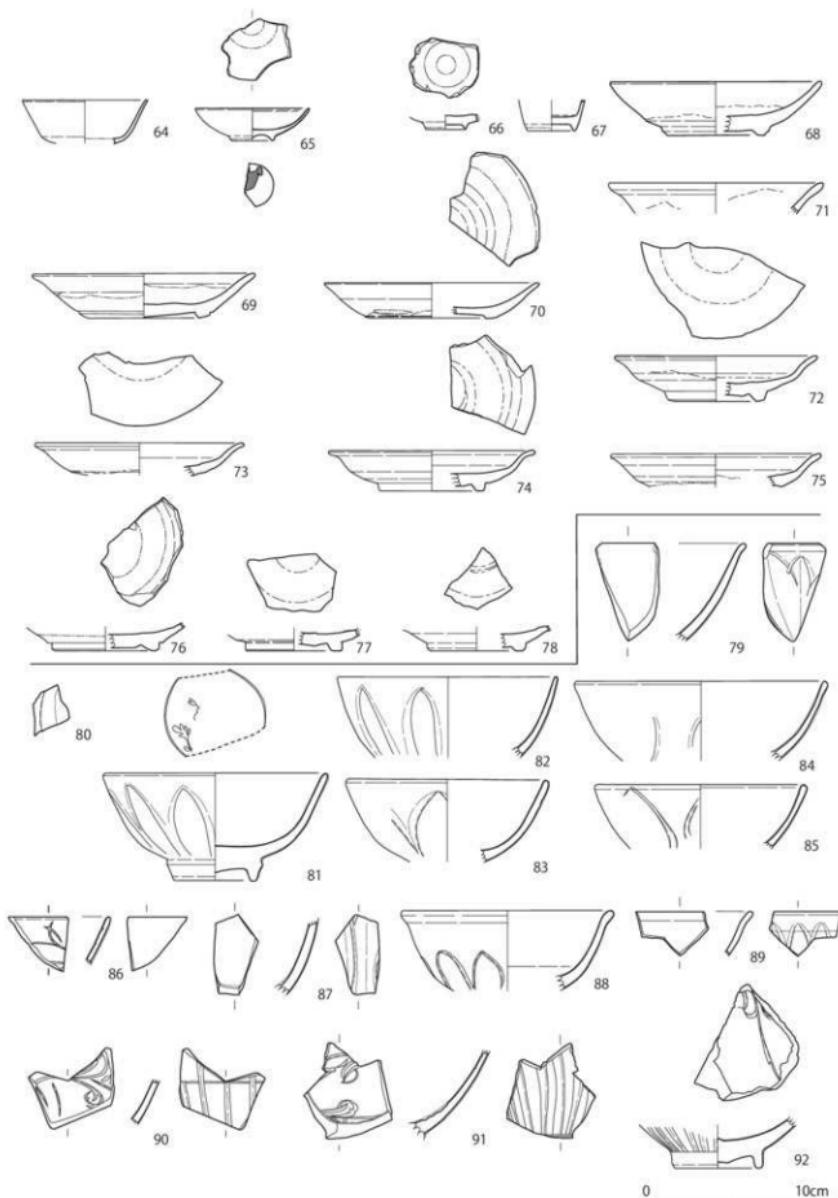
(児玉)



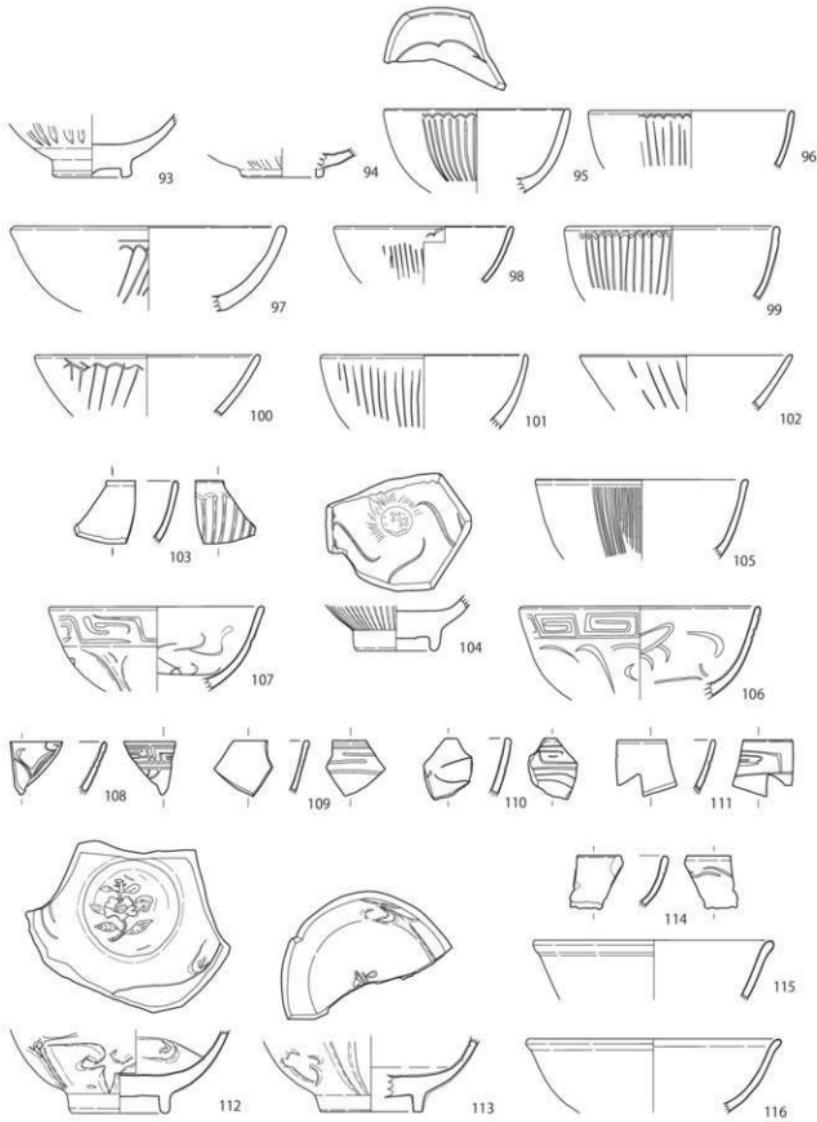
第120図 白磁実測図(1)



第 121 図 白磁実測図 (2)

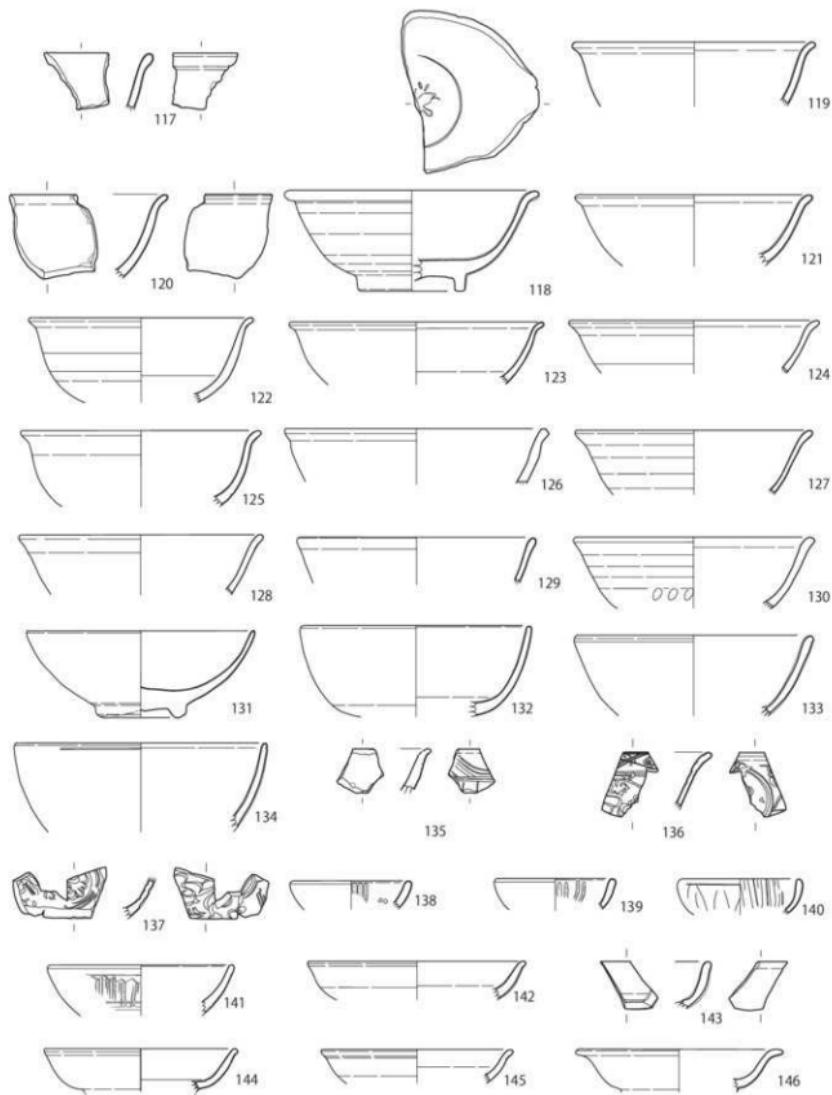


第122図 白磁実測図(3)・青磁実測図(1)



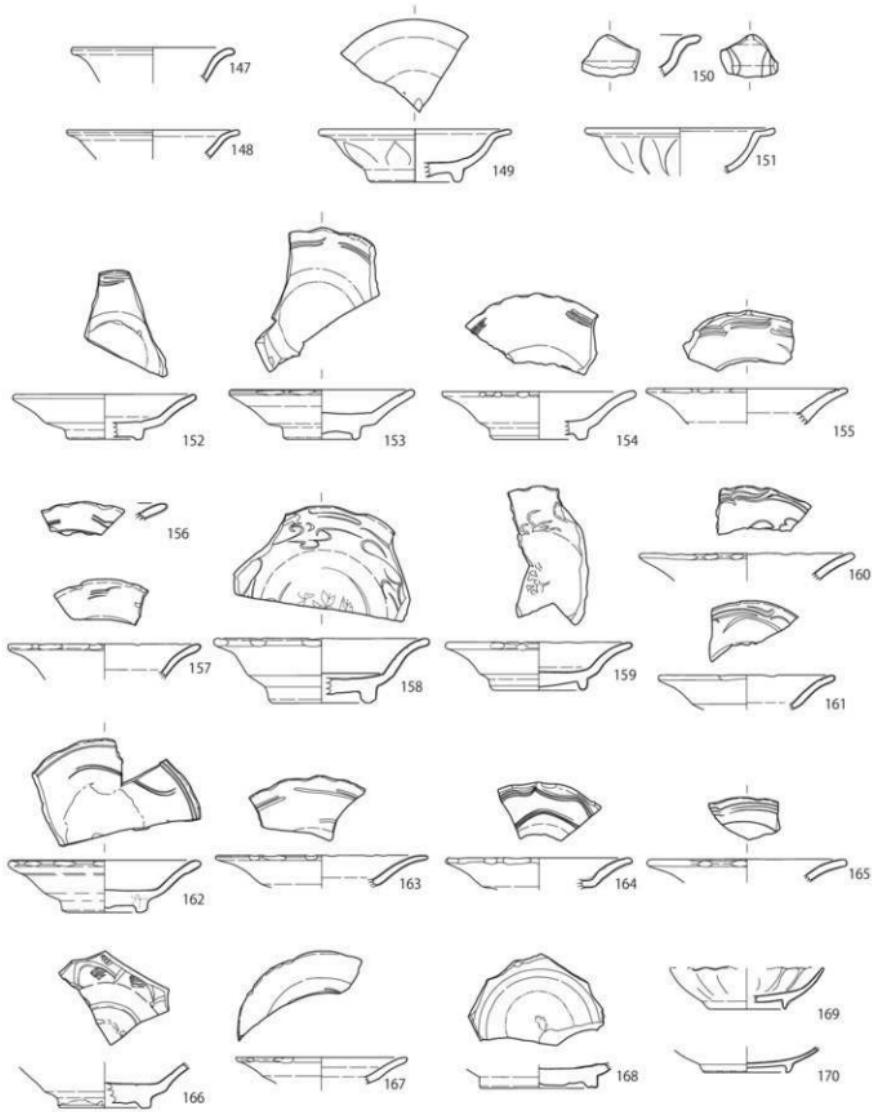
第123図 青磁実測図(2)

0 10cm  
1/3

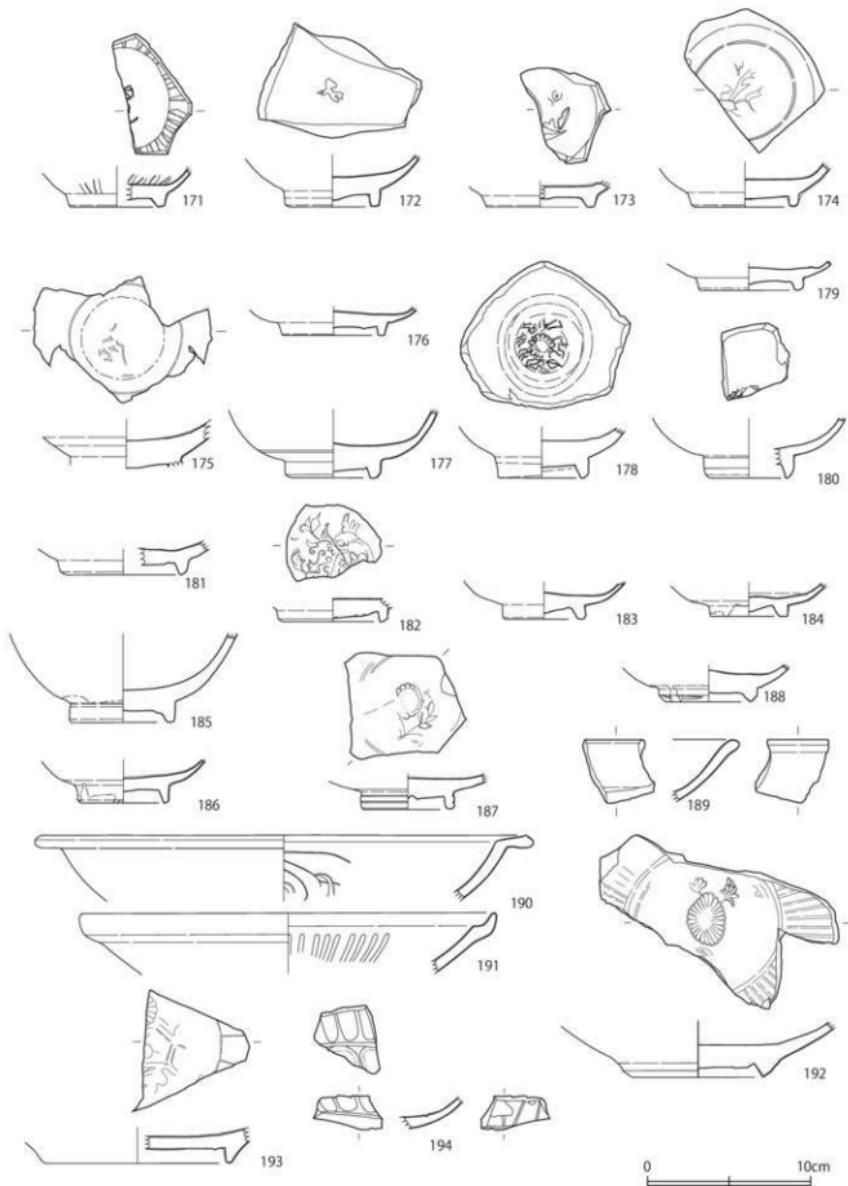


第124図 青磁実測図(3)

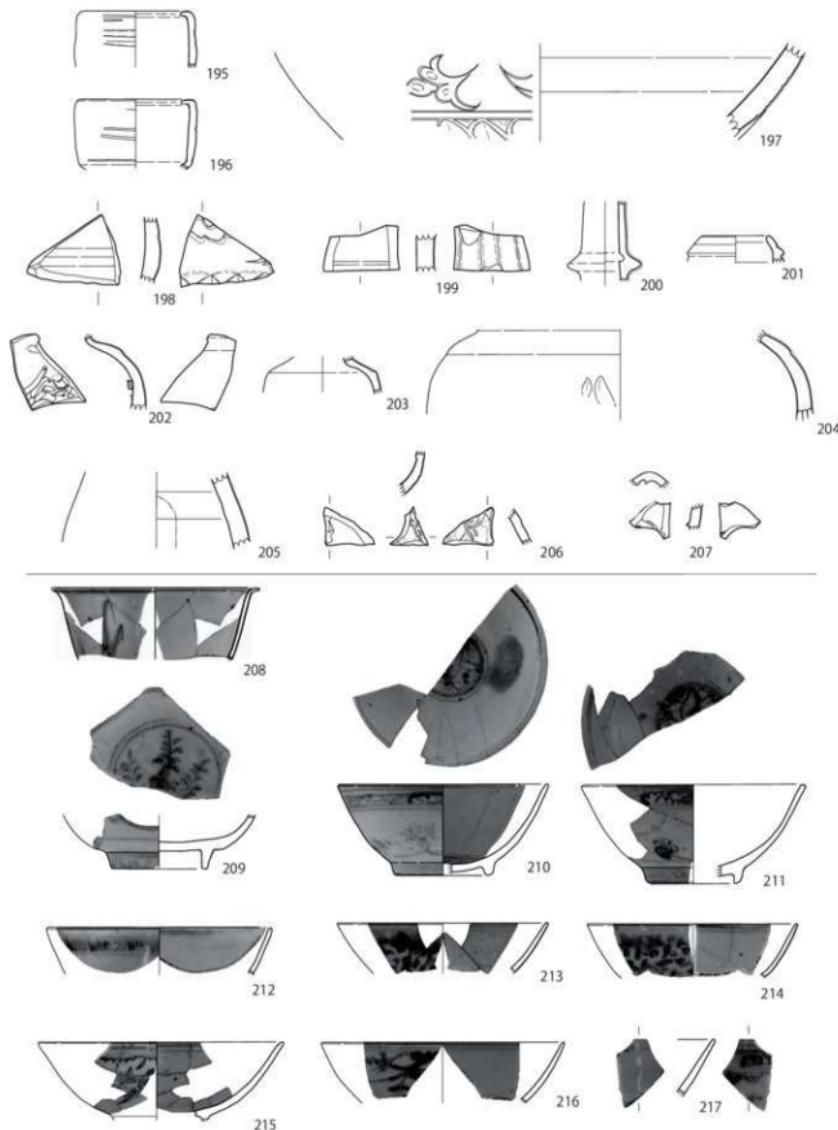
0 10cm  
1/3



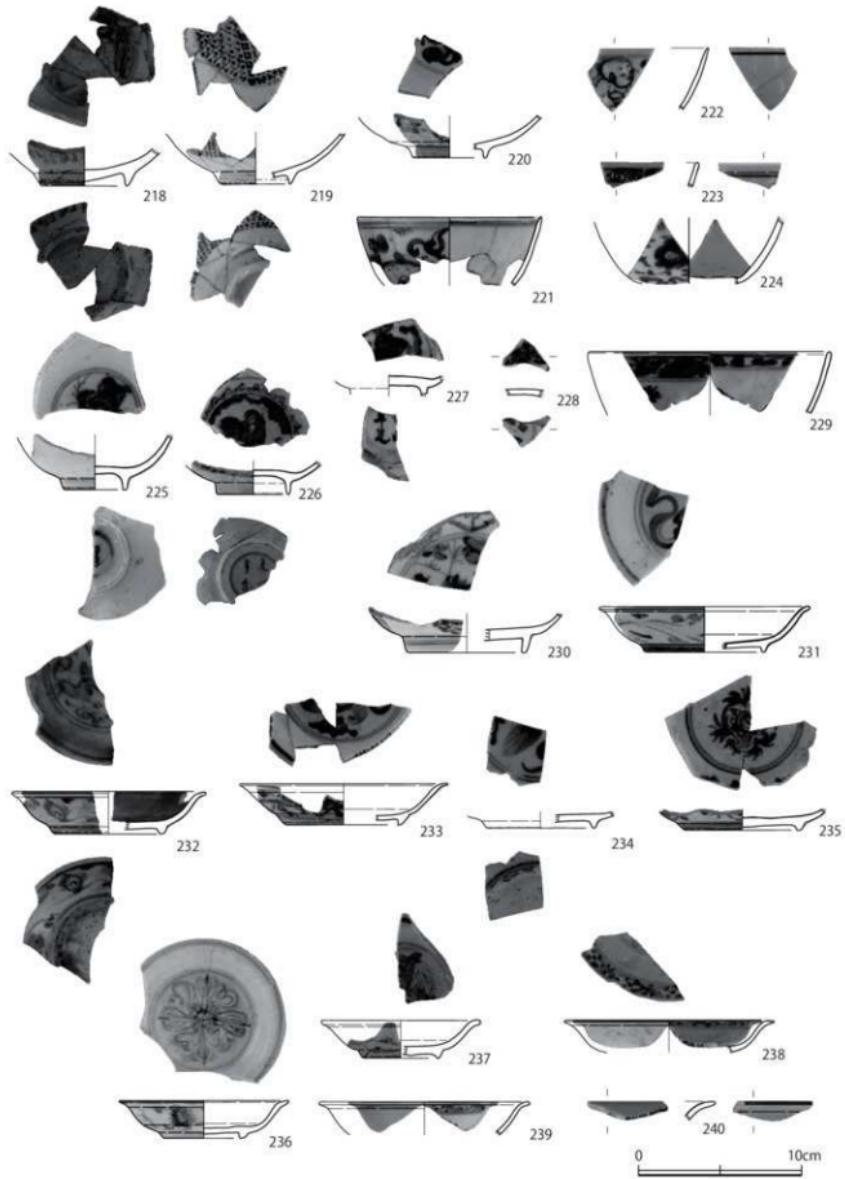
第125図 青磁実測図(4)



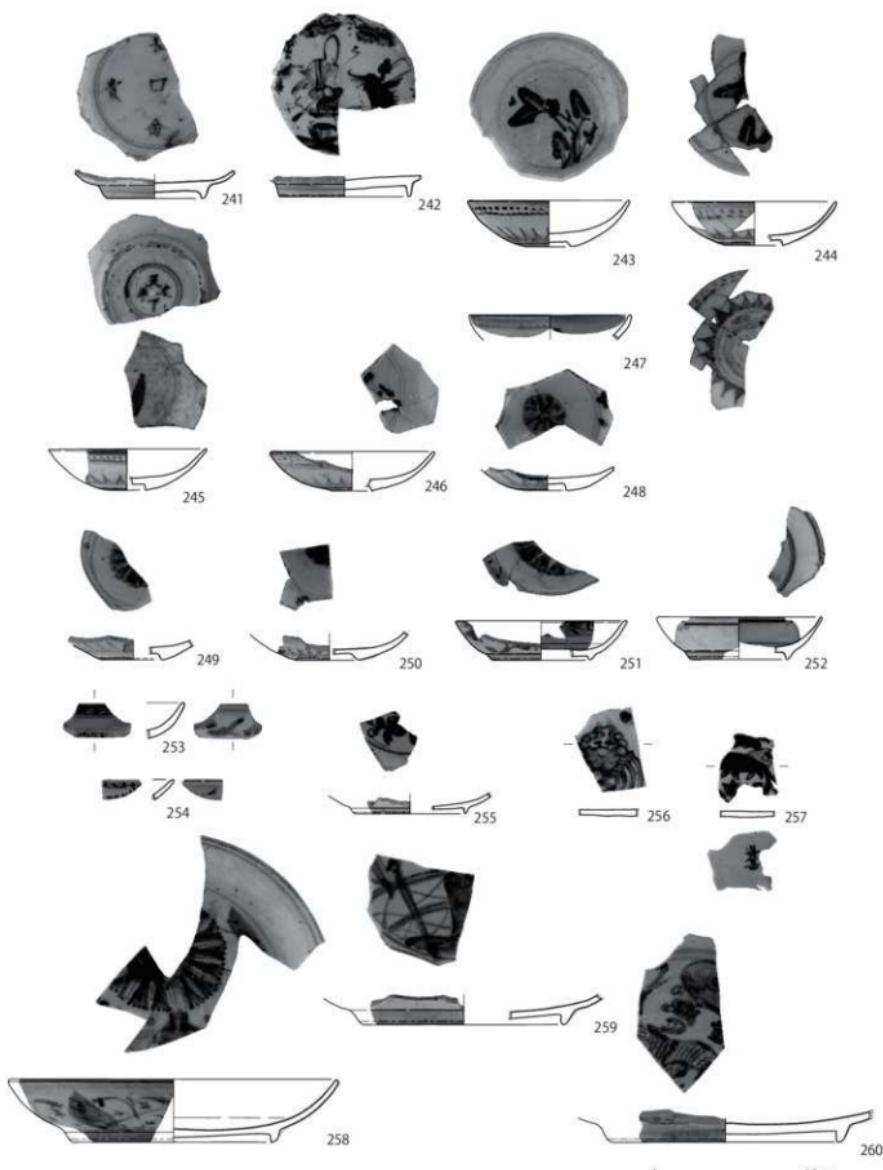
第126図 青磁実測図(5)



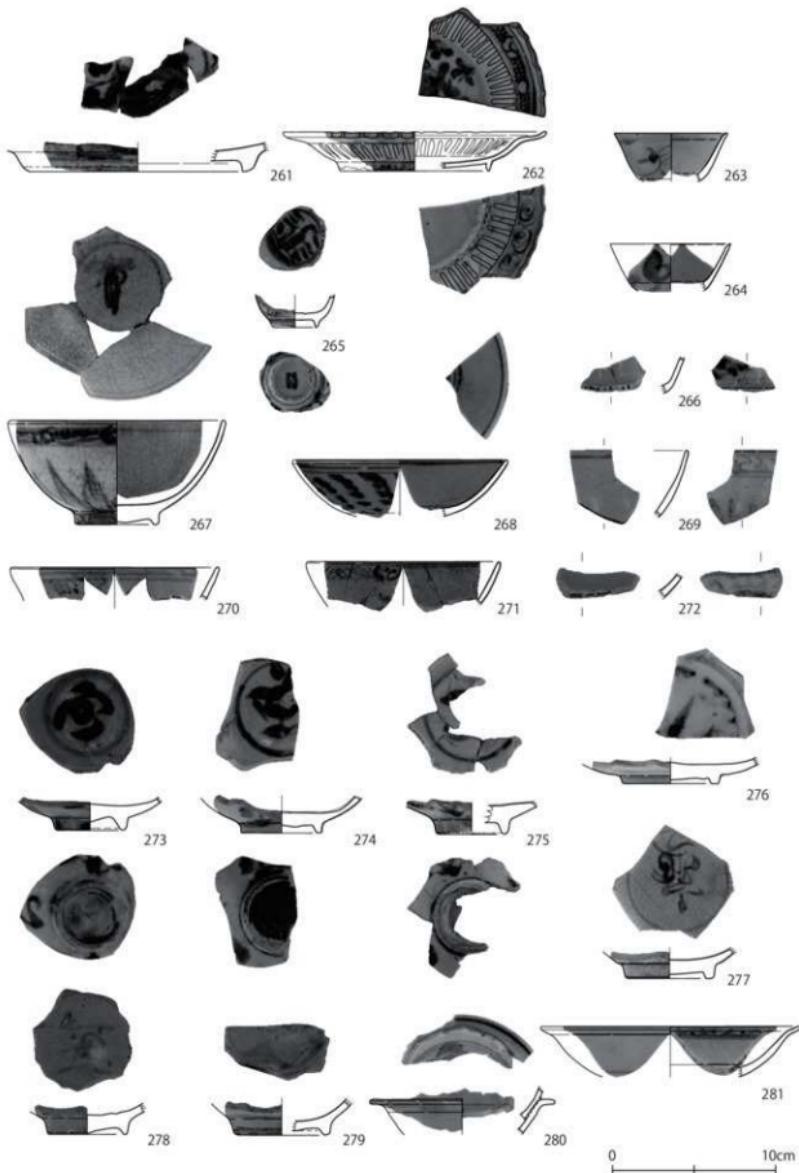
第127図 青磁実測図(6)・青花実測図(1)



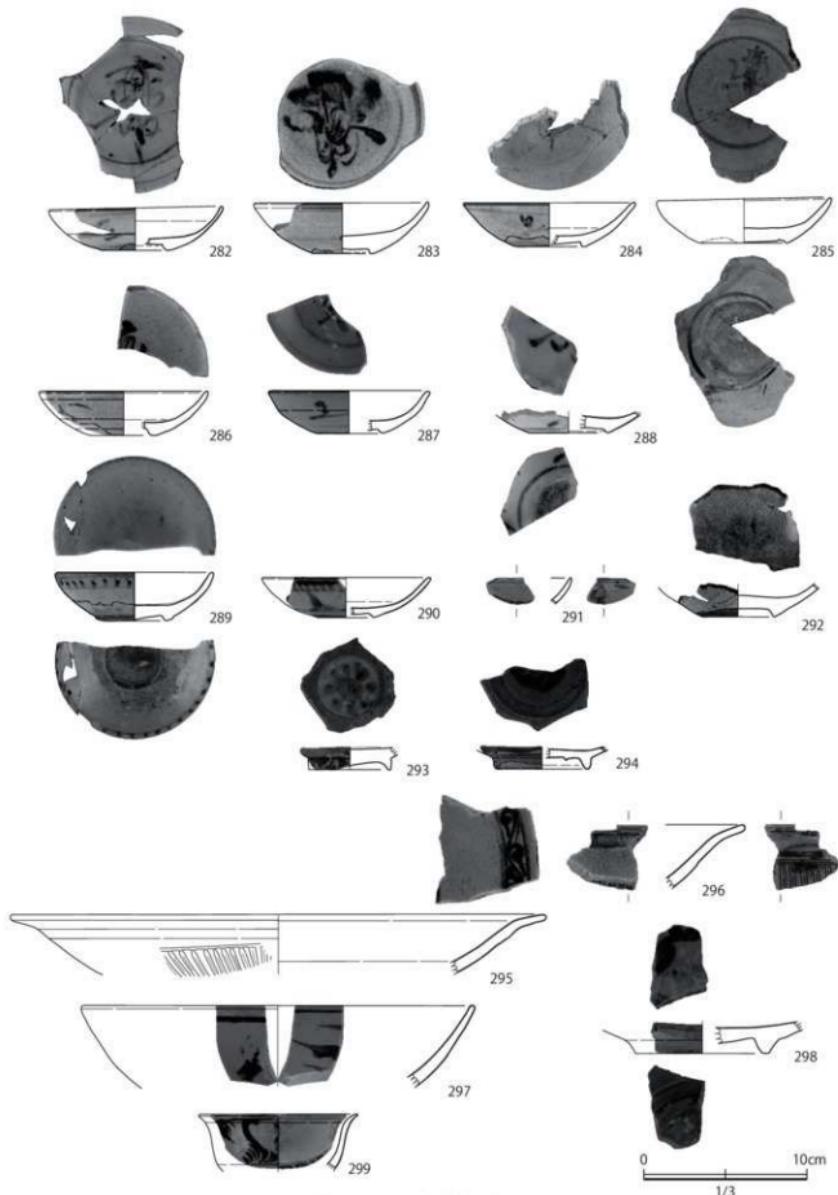
第128図 青花実測図(2)



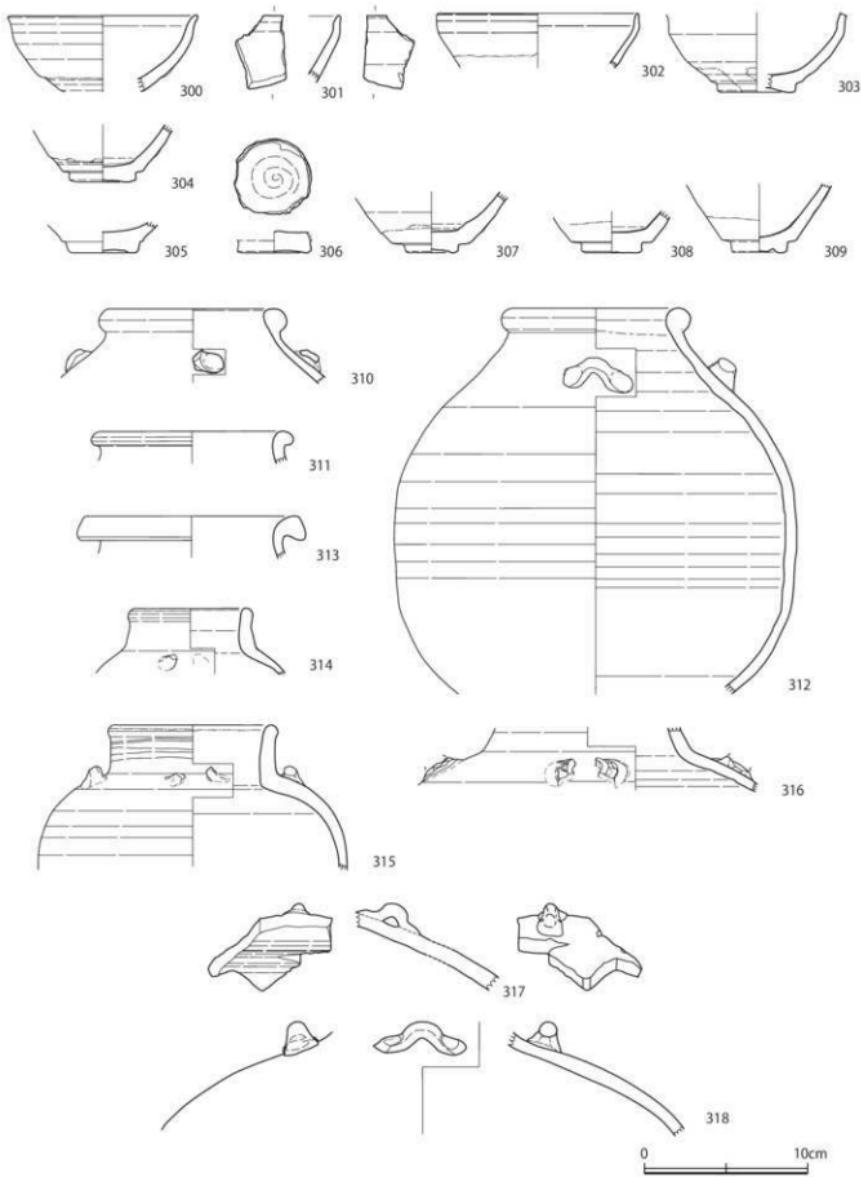
第129図 青花実測図(3)



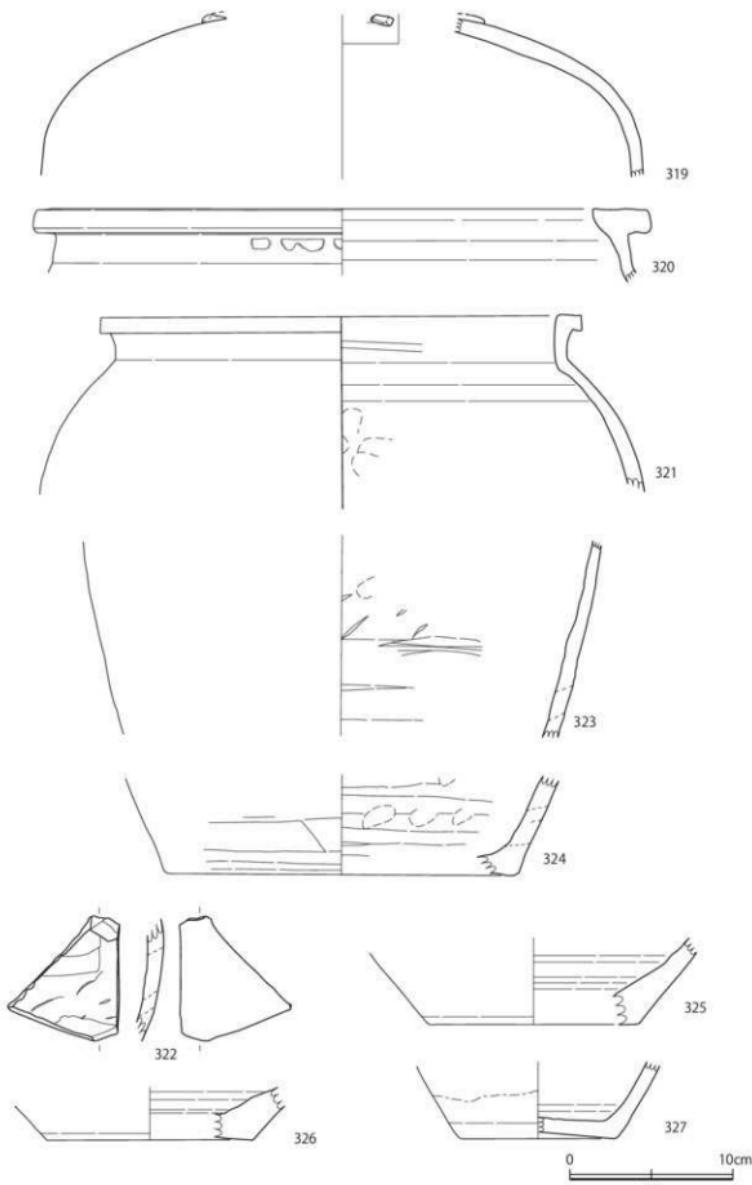
第130図 青花実測図(4)



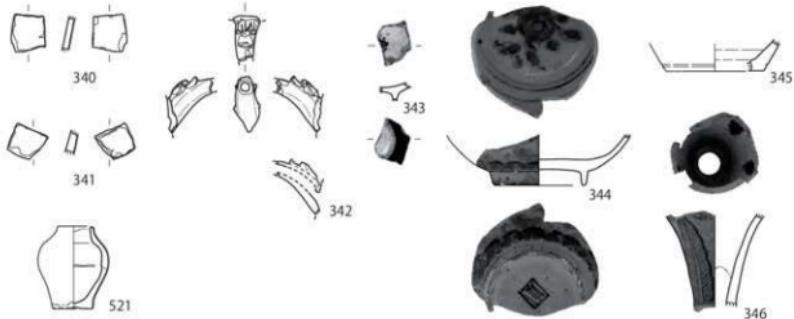
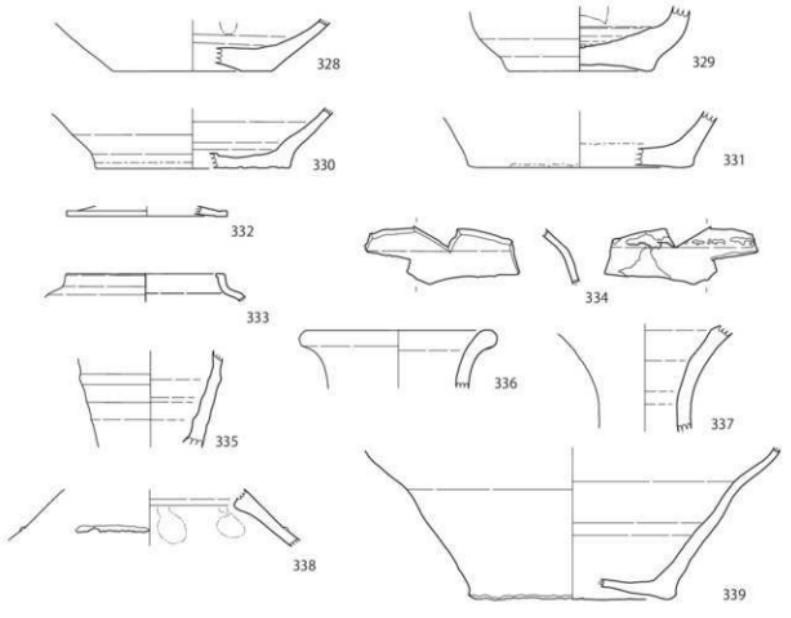
第131図 青花実測図(5)



第 132 図 褐釉陶器実測図 (1)



第133図 褐釉陶器実測図(2)



0  
10cm  
1/3

第134図 褐釉陶器実測図(3)・その他貿易陶磁

## 2 中世国産陶器（第135～141図）

**概要** 出土した国産陶器の出土量は、備前焼が圧倒的に多く、常滑焼や瀬戸・美濃焼は少數であった。

### 2-1 備前焼（第135～140図：347～465）

**概要** 備前焼は、甕・壺・擂鉢を中心として小壺、徳利などの小型器種も出土している。

**整理報告にあたって** 備前焼は、間壁忠彦による窯跡の変遷や製品の変化などを総合的に捉え、時期区分を行った研究を嚆矢とし、乗岡実氏による擂鉢を軸とした編年（乗岡編年）など盛んに研究が進められている（間壁1991、乗岡2000）。

近年では、重根弘和氏が擂鉢の口縁部形態を中心として型式分類を行い、型式の存続時期について言及している（重根2005など）。

型式の時期が明確に区分される乗岡編年とは異なり、重根氏による分類案（重根分類）では各型式間の変化が漸移的で型式の存続時期に重複が見られる点が特徴であり、同時期におけるバリエーションを考慮したものとなっている。

また、乗岡編年が擂鉢の口縁部形態やスリメの条数、胎土などの各要素を複合的に検討して分類を提示しているのに対し、重根分類は口縁部形態の詳細な検討に基づいた分類であり、分類基準を明瞭に捉えることができる。

塩見城出土の備前焼については、上記の理由から重根分類を援用して整理・報告を行うこととする。

ただし、甕・壺や擂鉢の体部や底部、小型器種については、口縁部形態に基づく分類を適用することができず、年代等の比定は困難である。

しかし、間壁・乗岡両氏によれば、15世紀末以降に精良な粘土（いわゆる田土）が用いられるようになり、それ以前の砂粒を多く含む粗い粘土（山土）と一線を画するという（間壁1991、乗岡2000）。この指摘は時期判断の基準となりえる。

そこで、口縁部が残存していない出土資料については、山土（15世紀代）と田土（16世紀代）の区別に基づいて、胎土による分類を行った。

なお、乗岡氏は近世1期（＝VB期）には胎土中に黒色鉱物粒を含むものが多くなる傾向を指摘している（乗岡2002）。塩見城跡出土の備前焼でも同様の傾向が看取された。

### 擂鉢（347～409）

**概要** 口縁部については、基本的に重根分類を援用して分類する。また、ⅢB期以降、つまりVA・B期については、乗岡編年での分類基準（中世6期、近世1期）を援用した。

**ⅢB期**（14世紀前葉～14世紀中葉） 口縁部上端が平坦で、その内側がやや突出して拡張した形状になるもの（347～349）。

**ⅣA-1期**（14世紀前葉～14世紀後葉） 口縁端部内側がわずかに上方に突出し、外側が強く押圧を受けて潰れ、その角度が鈍角になるもの（350～351）。

**ⅣA-2期**（14世紀中葉～15世紀中葉） 口縁端部内側が上方へ伸び、外側がつぶれて突出気味になるもの（352～359）。

**ⅣB-1期**（15世紀前葉～15世紀後葉） 口縁部内側に明瞭な稜を残して、その端部を上方へ拡張したもの（360～371）。

**ⅣB-2期**（15世紀中葉～16世紀初頭） 口縁部内側に明瞭な屈曲をもち、その端部は大きく上方へ拡張し、外側も突出したもの（372～375）。

**ⅣB-3期**（15世紀後葉～16世紀初頭） 口縁部がほぼ均一な厚さで上に伸びるもの（376～382）。

**V A期**（16世紀初頭～16世紀後葉） 乗岡編年の中世6期に相当する。口縁端部内側が強いヨコナデにより先端に段をもつもの（383～387）。

**V B期**（16世紀中葉～17世紀初頭） 乗岡編年の近世1期に相当する。口縁部内面に段を持ち、交差スリメがあるもの（388～394）。

このほかに、体部・底部のみ残存した破片として395～409を図示した。

このうち、395～402が山土、403～409が精良な田土を使用しており、田土の中で黒色鉱物粒を含むものは、VB期に相当する。400は、口径が15cm程度の小型の擂鉢である。

### 甕・壺（410～449）

**Ⅲ期**（14世紀前葉～14世紀中葉） 口縁部を折り曲げて玉縁をつくるもの（410～413）。

**ⅣA期**（14世紀前葉～15世紀中葉） 口縁部を外側に大きく折り曲げて、断面長楕円形の玉縁をつくるもの（414～417）。

**ⅣB期**（15世紀中葉～16世紀初頭）

甕：細長い長楕円形の玉縁口縁（418～428）。

#### V期（16世紀代）

壺：玉縁の下半部を強くなることにより凹線状の沈線が巡るもの（429～431）。

壺：玉縁は縮小し、断面形は三角形に近い形状となるもの（432・433）。

このほかに、体部・底部のみ残存した破片として434～449を図示した。このうち、434～447が山土、448・449は精良な土田を使用している。

また434・435には肩部に5条・6条の櫛描き条線が見られ、壺の肩部と思われる。437には肩部に縱横3本ずつの沈線で格子状にしたヘラ記号が施され、左上の格子部分を横1本の沈線で細分している。愛媛県湯築城跡など他地域でも類例の知られるもので、窯印である可能性がある。438は437と同様の窯印と思われ、左下部分に相当すると考えられる。また、内面はハケ目調整のあとナデ消している。443は内面部付近にも自然釉がみられる。

445～449の底部片は、いずれも内面部付近から底部及び底面付近をクロナデを施し、底部の接合部分を入念に接着させている。440～443は四耳壺である。

#### その他の器種（450～465）

いずれも精良な土田を用いたもので、先の分類のV期（16世紀代）に相当する。

水屋壺（450～452）は、同一個体と思われる。短く外反する口縁部をもち、肩部に2本の粘土紐を継り、綱状とした双耳を貼り付ける。

水屋壺は16世紀代に顕著に見られる器種（間壁1991）で、口縁部や双耳の形態、胴部区画線などをもとに分類がなされた（柴田1998、北野2006）。

これによると、口縁部形態はやや新相の特徴（北野分類のA3、柴田分類のB-2類）を有しているものの、双耳形態は丁寧に造形され、古相の様相を呈しており、属性間の年代観にギャップが見られるが、16世紀前半の年代が想定される。

鶴首形彫利（453・454）は、口縁部を片口状につまり出す。456は、体部が一部欠損しており、窓状を呈している。内面が黒く変色し灯明具への転用である。457・458は小壺もしくは鳶口壺の底部で、458は底部外面に十字のヘラ記号が施される。

459は、口縁部外面に三角形状に突帯を貼り付け、肩部が張る器形となる、肩衝様の小壺であろう。

460～465は鉢で、器高の低い浅鉢と器高の高い深鉢とに大別される。浅鉢はいずれも口縁部を丸く内湾させるもので、湾曲する体部をもつもの（460）と直線的な体部を持つもの（461）がある。

462は、口縁部のみではあるが、口縁端部と口縁部外面に重ね焼きの痕跡が確認できる。463・464は深鉢で、口縁端部に面を持ち、内外に張り出したもの（463）と直線的に収めたもの（464）がある。

464は、口縁部上面の外側部分のみに自然釉が掛かり、内側は掛かっていないことから、重ね焼きされていたと思われる。いずれも建水など茶道具として用いられた可能性がある。

また、465は鉢の把手であると考えられるが、破損品を意図的に整形し、把手部分のみを作り出した可能性が高い。

#### 2-2 濑戸・美濃焼（第141図：466～482）

**概要** 濑戸・美濃焼は、古瀬戸中期様式から大窯段階のものが出土した。分類や年代観等は、藤澤良祐に氏による編年案を参照した（藤澤2008など）。

466は、古瀬戸中期様式Ⅲ期（14世紀前半）の折線深皿である。口縁端部の拡張が顕著になり、三角形状につまみ上げられている。

467は水滴で、古瀬戸中期様式で特徴的に見られる器種の一つである。福井県一乗谷朝倉氏遺跡例は14世紀代とされている（朝倉氏遺跡調査研究所編1979）。

468は縁釉の小皿である。口縁部のみ灰釉が漬け掛けされており、底部内面周辺はハケ塗りされており、後期様式Ⅱ期（14世紀後葉）に位置づけられる。

470・471は片口の小瓶である。470は口縁部が強く外反し、端部が丸く收められるので、後期様式Ⅰ～Ⅲ期（14世紀後半～15世紀前半）であろう。

472は直線大皿で、体部から口縁部までほぼ同じ厚さで口縁端部を丸く收め、体部は直線的な器形である。後期様式Ⅲ期（15世紀前葉）に位置づける。

473も直線大皿であるが、口縁部直下に1条、体部外面に2条の沈線が確認できる。同器種で体部外面に沈線を持つ類例にあたることは出来なかったが、体部が内湾することから後期様式Ⅳ期古段階（15世紀中葉）に相当すると思われる。

474は折線深皿もしくは直線大皿の底部で、体部下半が露胎で底部内面に灰釉のハケ塗りが認められ

ることから、後期様式Ⅲ期（14世紀前葉）であろう。

475・476は壺もしくは瓶子である。475の口縁部は外に折り返して幅の狭い縁帯を形成し、縁帯の下端部が丸く收められていることから、後期様式Ⅳ期古段階（15世紀中葉）に相当すると思われる。476は、壺の肩部で4条1組の平行沈線が見られる。

477は鉢皿で、外面底部付近まで釉垂れが認められ、緩やかに湾曲しながら立ち上るので、後期様式Ⅰ～Ⅲ期（14世紀後葉から15世紀中葉）となる。

478・479は天目茶碗である。体部外面に筋軸を施し、胎土が中国産天目茶碗と比してやや軟質で浅黄橙色もしくは灰白色を呈するものを瀬戸美濃焼として抽出したが、中国産との区分には曖昧な部分が残る。高台が残存していないため、時期を判断することは難しい。ただし、体部から口縁部への立ち上がりなどから大窯2～3期（1545～1575年）のものと思われる。

480は口縁部が短く屈曲し、直線的な体部を持つもので、内外面に灰釉がかかるが潰け掛けによるものらしく、体部内面が露胎となる。小片のため器種は不明であるが、口縁部の形態は天目茶碗に類し、灰釉天目に類するものかもしれない。

481は丸皿の底部である。逆三角形状の高台で見込みに花文がある。口縁部及び体部が残っていないため、詳細な時期は不明であるが、底部が薄い作りである点などから大窯2段階後半（1480～1495年）に位置づけられる。

482は筒形香炉である。完形資料で口縁端部を内側につまみ出す、いわゆる開香炉の形態を呈する。外面は全面に灰釉を掛けている。大窯前半には青磁の筒形香炉を形態的に模倣したものが多いが、本例は形態的大きく異なることから大窯第3段階後半から第4段階前半（1575～1597年）の年代が想定される。

## 2-3 常滑焼（第141図：483～486）

483・484は甕の口縁部である。483は中野分類の6b型式、484は10型式にそれぞれ相当し、前者は14世紀中葉、後者は15世紀後半の年代觀が与えられる（赤羽・中野1995）。

（田中敏・測ノ上）

## 3 中・近世陶磁器（第142～144図）

**概要** 中世末から近世以降の陶磁器は、表土や造成土および耕作土層から碗・皿をはじめとして瓶、鍋類が出土した。产地については、大多数が肥前であるが、薩摩・萩・瀬戸・京都・信楽も少數見られた。近世後半に位置づけられるものが多い。

**分類について** 分類及び編年は肥前系陶磁器については大橋康二氏による5期区分を参照した（九州近世陶磁研究会 2000）。

各期の年代については以下のとおりである。

I期	1580～1610年代
－1	1580～1594年頃
－2	1594年頃～1610年代
II期	1600～1650年代
	（磁器の場合 1610～）
III期	1650～1690年代
IV期	1690～1780年代
V期	1780～1860年代

### 3-1 磁器

（第142・143図：487～520、522、523）

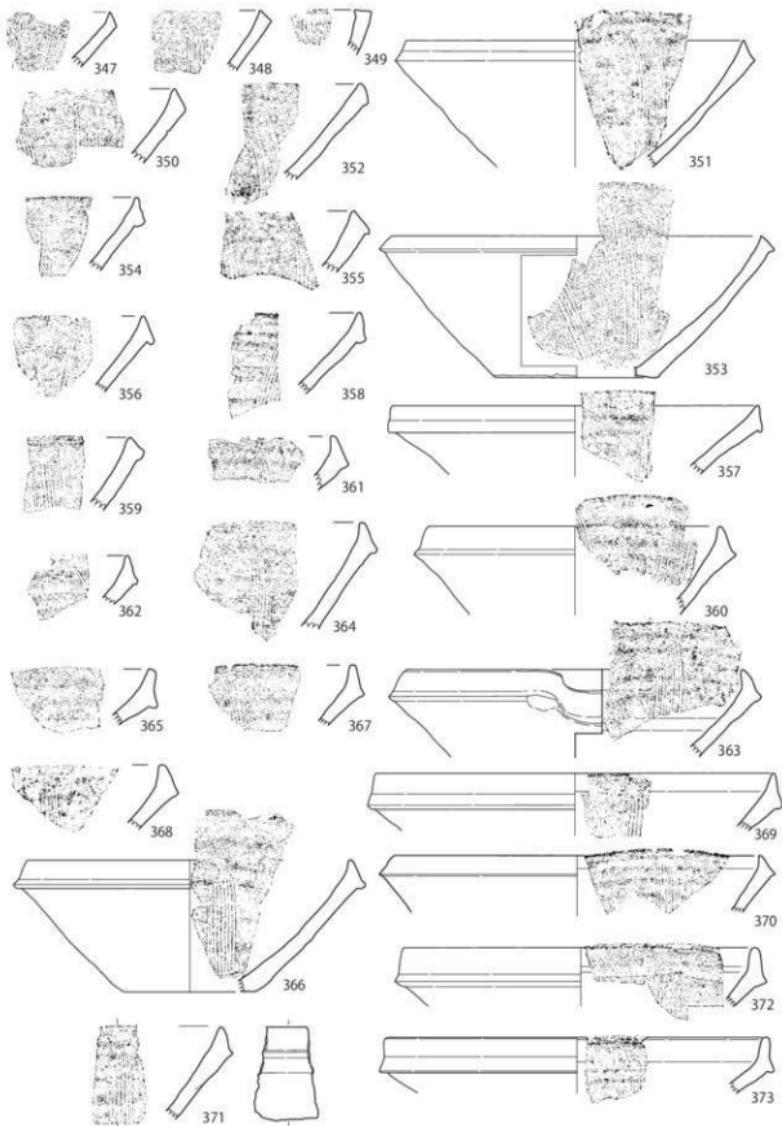
**碗・小杯（487～500）** 487～500は碗である。487は外面が青磁、内面が簡素な染付であり、高台はすべて露胎となることからI～2期に属する。488・489はIII期に属する。

490～494はいわゆるくらわんか碗と言われる、長崎県波佐見で生産された碗であり、IV期に属する。コンニャク印判による施文や見込みを蛇の目釉割ぎにして重ね焼きする手法はIV期の特徴である。全体的に器壁は厚く粗雑な印象であり、呉須の発色も悪く、やや黒ずんでいるものが多い。

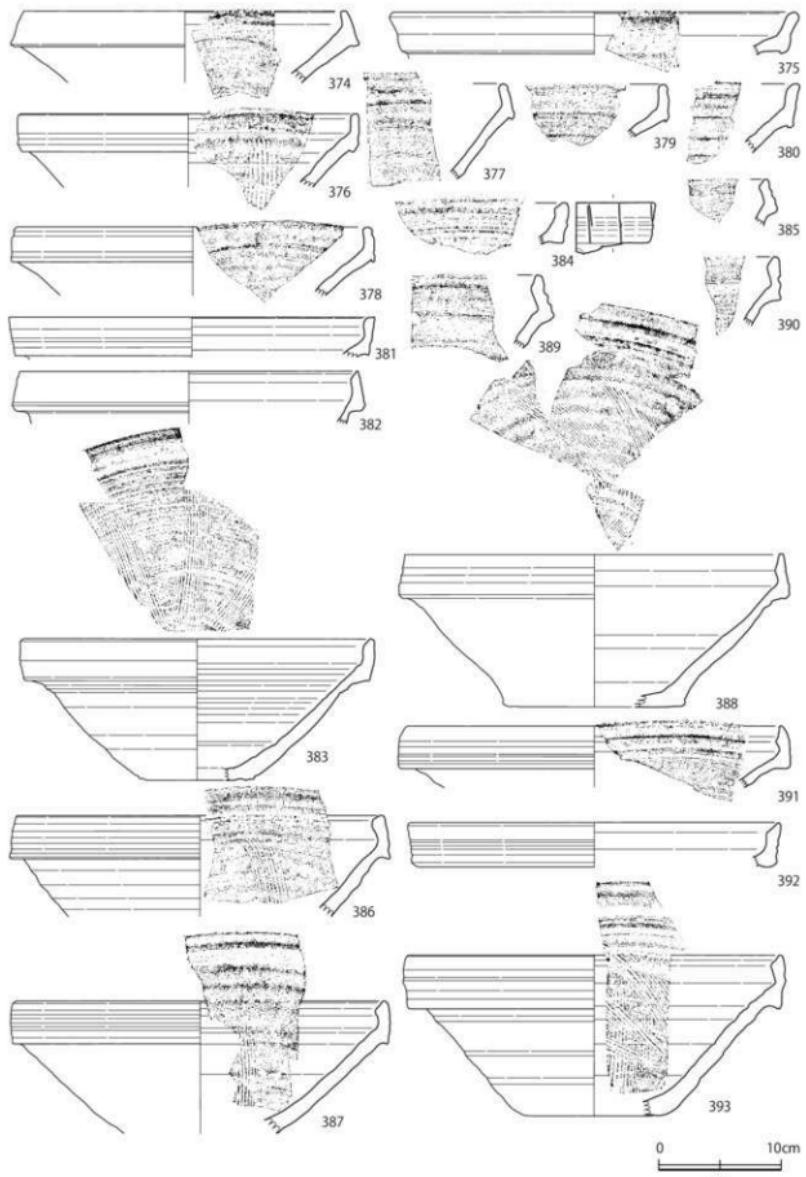
495は丸碗で小さな高台を持ち、やや外に聞く。外面に線描きによって扁文を描く。

496は蓋、497は碗で外面青磁、内面染付、高台内は透明釉を施す青磁染付である。どちらも口縁内面に四方摩文を描き、496は内面中央にコンニャク印判五弁花文を印す。

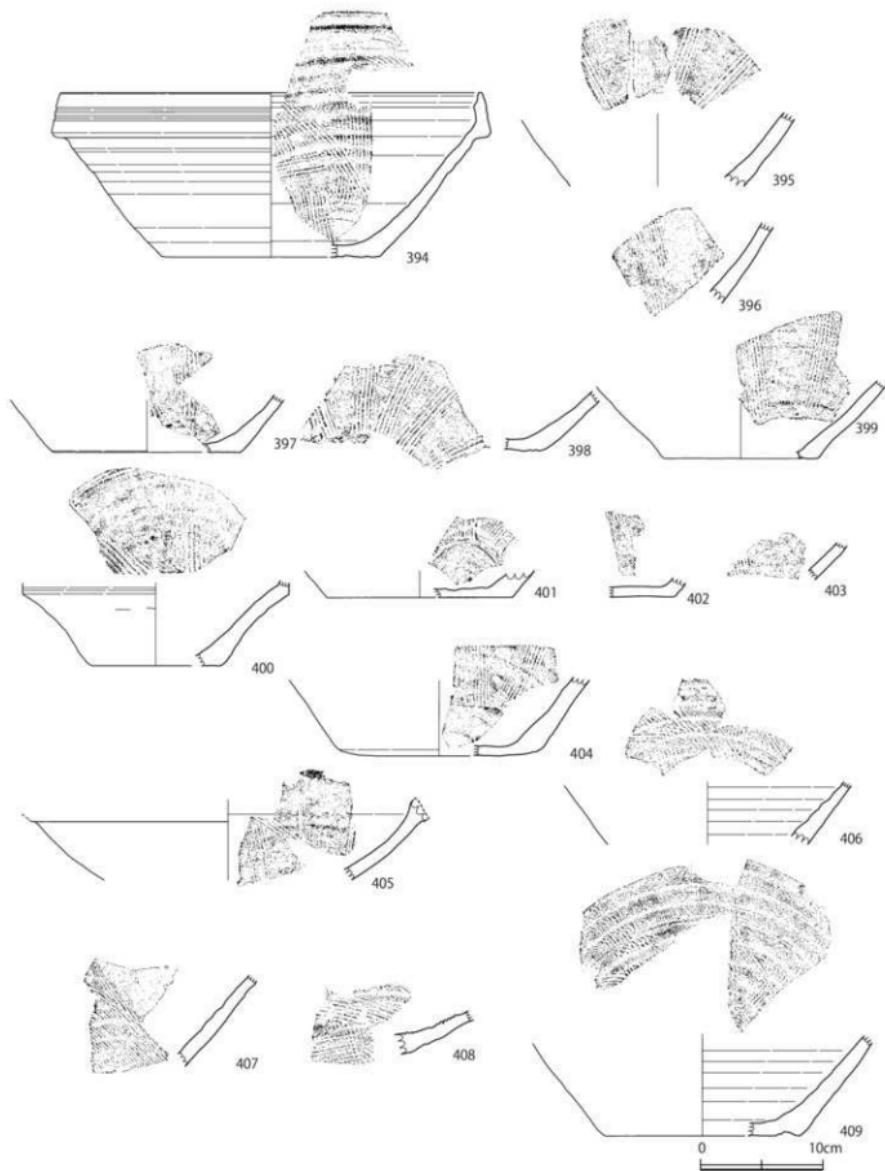
498～500は広東碗であり、V期に属する。いずれも外面に山水文を描く。498は蓋だが、499と意匠を全く同じにしており、広東碗に伴う蓋であると思われる。しかし、両者は出土地点が離れており、セットであった可能性は限りなく低い。



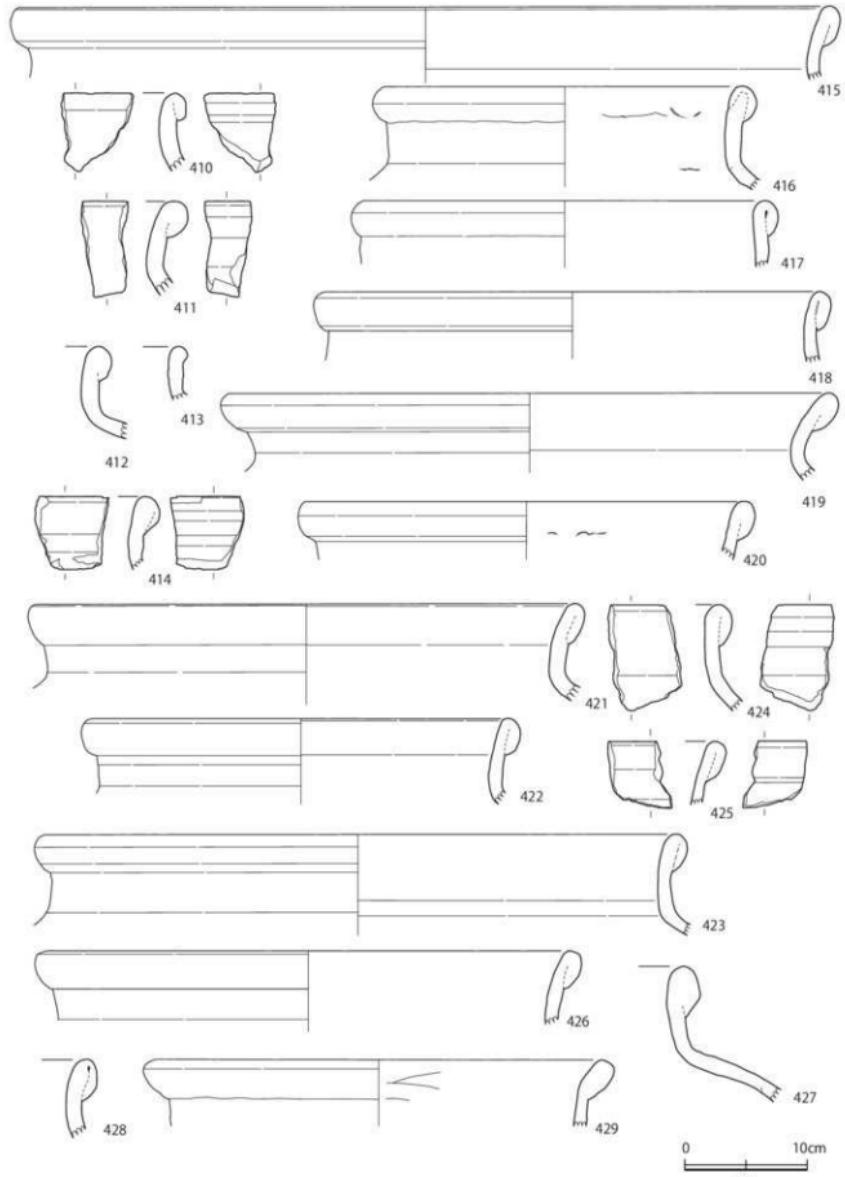
第135図 備前焼実測図(1)



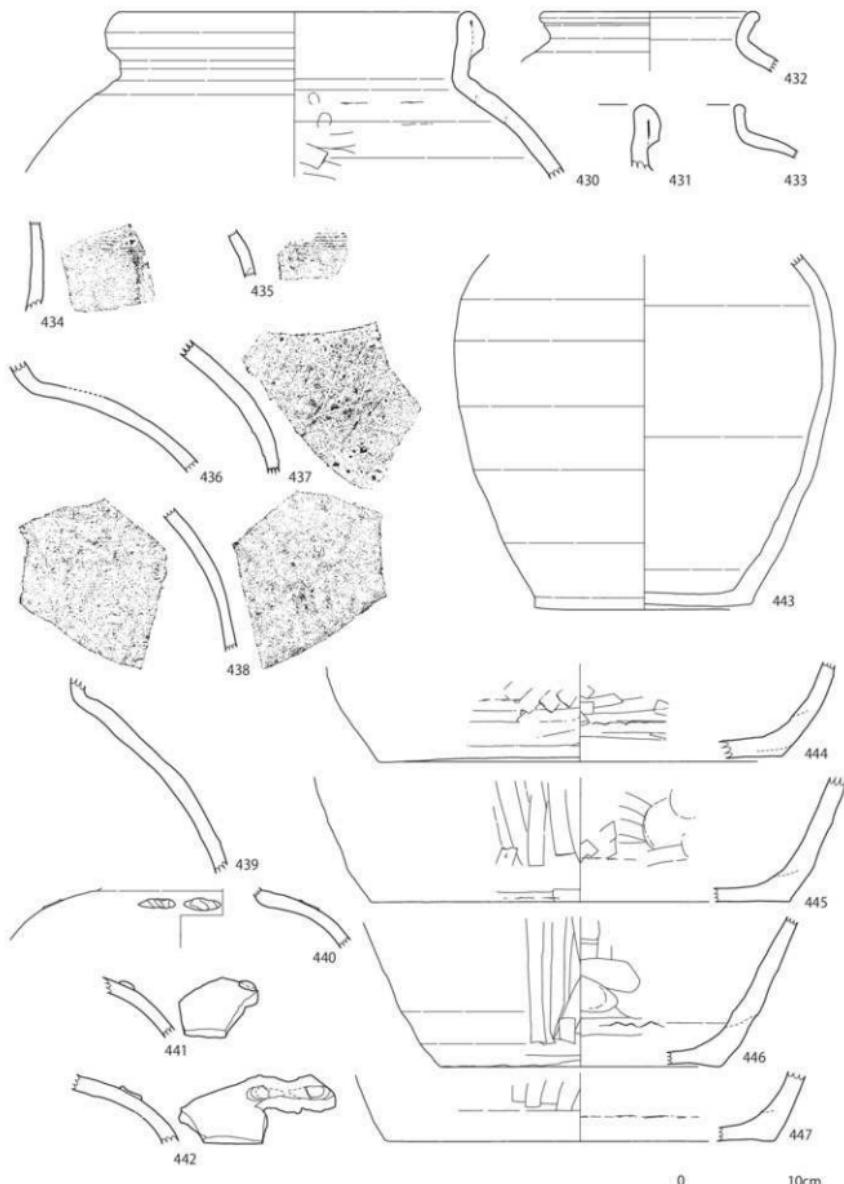
第 136 図 備前焼実測図 (2)



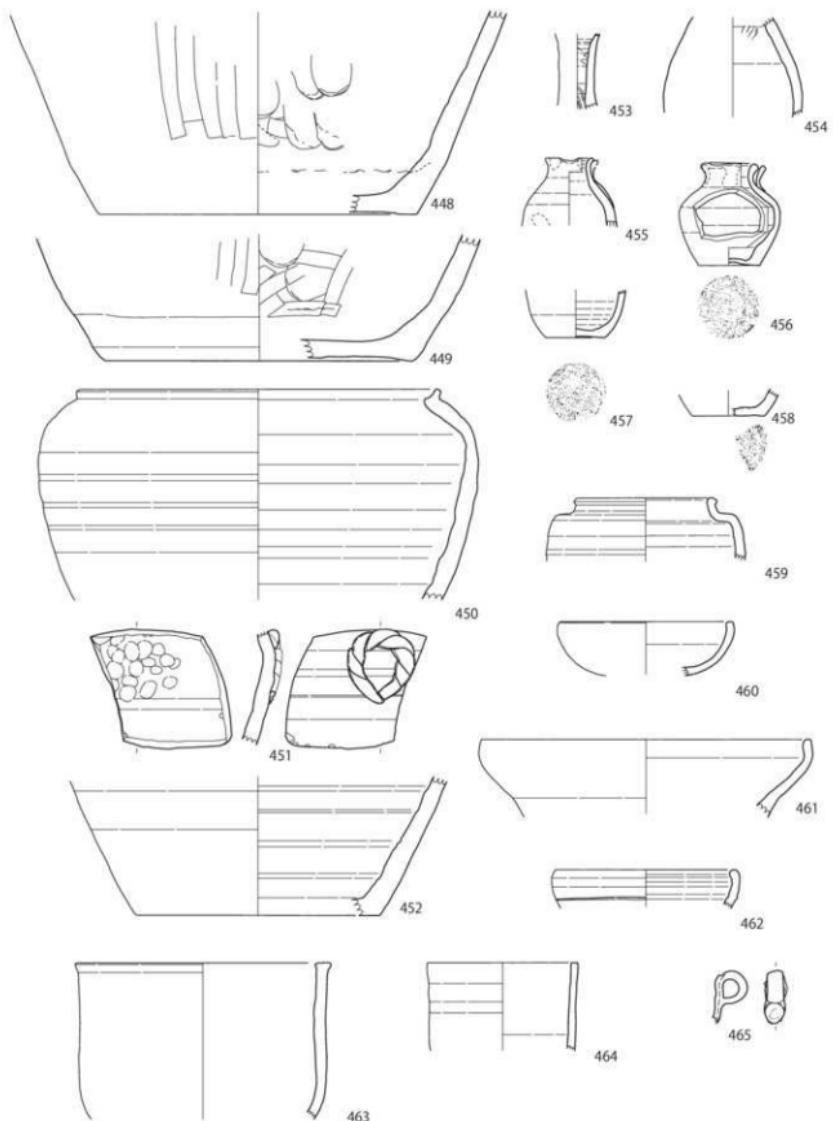
第137図 備前焼実測図(3)



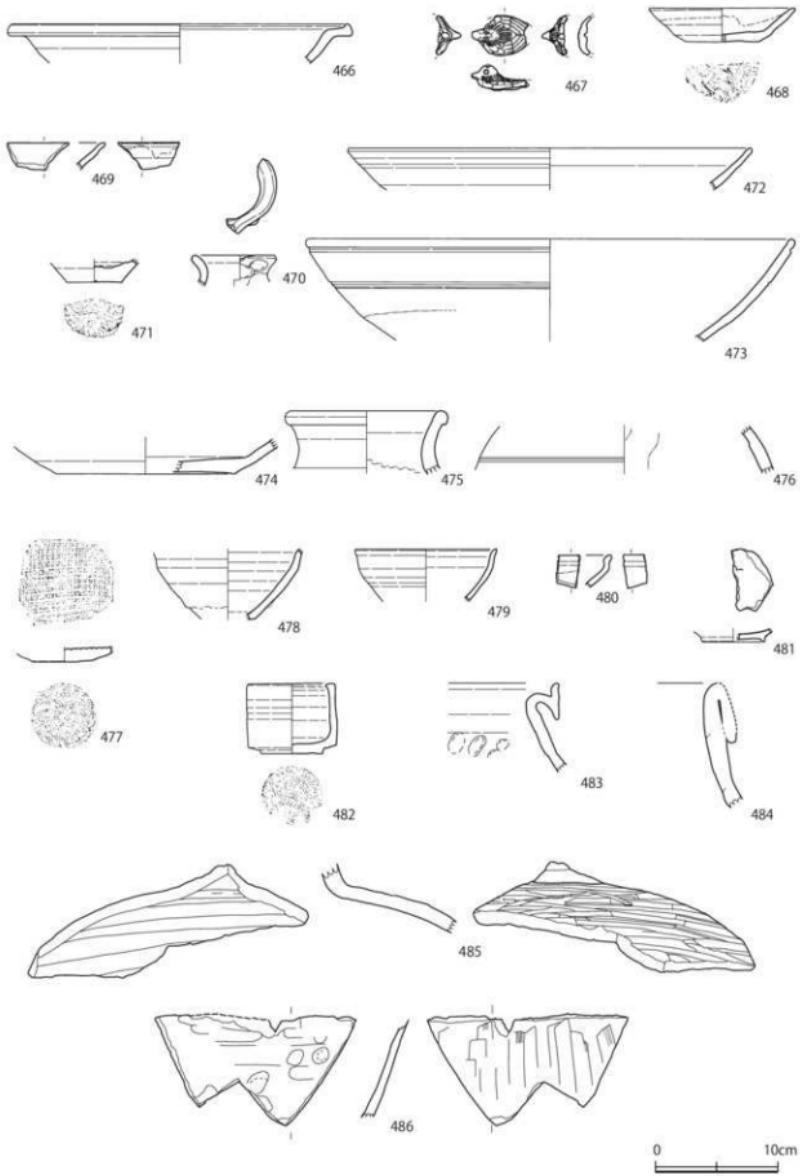
第138図 備前焼実測図(4)



第139図 備前焼実測図(5)



第 140 図 備前焼実測図 (6)



第 141 図 瀬戸・美濃焼実測図・常滑焼実測図

501・502は小杯であり、どちらもIV期に属する。

501は高台際から緩く立ち上がり外反する器形であり、外面にコンニャク印判松文を印す。502は白磁で器壁は厚く、口縁部端反りである。見込みを蛇の目軸剥ぎする。

皿(503～515) 503～509は五寸皿、510は手描皿、511は七寸皿である。

503～511は、511を除いて見込みにコンニャク印判五弁花文を印すIV期である。概して器壁の厚いものや素地が粗いものが多い。呉須の発色も悪く黒ずみ、506・507・509は一部暗緑色を呈する。509は見込みを蛇の目軸剥ぎする。

512～515はV期に属する。512・513は蛇の目凹型高台を持つ。513～515はロクロ成形後、型打ち技法によって成形されており、513・514は口縁輪花状で口唇部に鉄軸を施釉する。

515は方形の四皿であると思われる。

瓶(516～518) 516・517は小型で、体部が丸く膨らみ細い首が付く鶴首瓶である。516は草花文、517は簡便化した蜻唐草文が描かれる。

518は玉壺春形の瓶であるが、口縁部によって編年されるため時期については不明だが、高台が甚苟底ではないので、III期以降と考えられる。軸は白っぽく、呉須は不明瞭である。

仏具(519・520) 519は仏壇器で、高台内をやや深く削り込む。体部がないため編年にてはめることはできないが、19世紀代の製品と思われる。

520は仏花瓶で、口縁部は端部をつまみ上げる盤口形であり、両肩部に装飾が付く。口縁内側まで青磁釉を施釉する。

その他(522、523) 522は紅皿で、V期に属し、貝殻状に内面から型打ち成形している。口縁部は切り落としにより上部に平坦面を持ち、底部は小さい平底である。

523は外面染付、内面無釉の板状であり、角瓶などが想定されたが器壁が、薄いため水滴とした。18世紀後半と思われる。

(児玉)

### 3-2 陶器(第144図:524～537)

概要 様々な産地のものが出土しているが、肥前産が多数を占める。

肥前産は近世前半が中心であり、その他は18世紀以降である。銅緑釉を施釉する陶器については佐賀県嬉野市内野山窯産とされる。

肥前系碗(524～526) 524はいわゆる京焼風陶器であり、III期である。高台は露胎で断面方形に削り出し、腰部が丸く、直立して口縁に延びる。大橋分類のII類にあたる(大橋1990)。見込みに銅緑山水文を描き、高台内に「清水」の印跡を掠す。

525・526はIV期に属し、高台内がアーチ状で、灰釉を全面施釉後に豊付を釉剥ぎする。

肥前系皿(527～532) 527～530はI期であるが、窯詰め法によって2期に分けられ、I～I期(527)は重ね積みをせず、I～2期(528・529)は胎土目積みを行う。530を除いて低い削り出し高台を持ち、高台内は兜巾状となる。素地はいずれも粗く、鉱物粒を多く含んでいる。

527は灰釉を外面に施釉するが、還元焼成により灰緑色を呈する。胎土目がないI～I期とした。

528は体部が開き気味に内湾し、灰釉を胸部から内面に施釉する。豊付に胎土目が残るが、見込み内には目跡がないため、目積みされた皿の一番上で焼成されたと考えられる。

529は腰部から緩く立ち、折れて外に大きく聞く。蘿灰釉を施釉し、腰部から底部は露胎である。

530は鉄釉により内面に文様を描く。直口縁だが、小片のため器形の詳細は不明である。

531・532は見込みを蛇の目軸剥ぎし、高台内が兜巾状を呈するためIII期に属する。531は鉄釉を全面施釉し、532は銅緑釉を高台内以外に施釉する。532は豊付と見込みに砂目積みの痕跡が残る。

肥前系その他(533～537) 533～535は鉢で、533・534は内面に白土を用いた刷毛目による波線と横線の装飾を施した後、灰釉および緑釉を施釉する、いわゆる二彩唐津である。

535は口縁玉縁で器壁の厚い鉢である。素地は精良だがスが多く、内外面に銅緑釉を施釉する。

536は描跡であり、工具による8条のスリメが密

に施される。スリメの端部はナデによって消されず、未処理であるためⅢ期と考えられる。また口縁部外面に鉄軸を施釉する。

537は土瓶の注口で、外面に銅緑釉を施釉する。

**肥前系以外 (538～546)** 538～542は京都・信楽系の碗である。538は口縁が内湾し、外面に色絵により筆文を描く。

539は小杉碗といわれる松文が特徴の碗であるが、その文様は見られない。しかし、高台際を水平に削って体部を明確に屈曲させ「ハ」の字状に開く器形を通じており、小杉碗とした。

540～542は端反碗であり、灰釉を施釉する。いずれも高台付近より露胎である。542はさらに口縁部に緑釉を施釉する。

543は瀬戸・美濃系の蓋付鍋である。体部下半が丸みを帯びた器形で、蓋と接する内面受部は釉剥ぎしており、口縁部下には注口を持つ。19世紀の所産とされる。

544は渦巻き高台を持ち、蘿灰釉を施釉することから萩焼とした。高台際を水平に削って、体部が「ハ」の字状に開く器形である。

545は薩摩焼の土瓶である。苗代川系と思われる。内面に施釉されているため皿の可能性もあったが、目跡はなく、体部がやや上げ底状に削られるので土瓶とした。外面の露胎部分にスグが付着している。

546は京焼の向付と思われるが、宮崎県北部で生産された丸山焼の可能性もある。受け口口縁であり、口縁端部を内側に押し入れて輪花状を成す。灰釉の上から化粧土を重ね掛けている。

(児玉)

## 第2節 土器類(第145～150図)

**概要** 土器類とは、繩文時代・弥生時代の土器、古墳時代の土器と須恵器、奈良・平安時代の土器と須恵器、および塙見城跡が機能していた中世(概ね14～16世紀代)の中世土器を総称した。

まず、最も出土量が多く、且つ塙見城として機能していた時期にあたる中世土器について報告を行う。なお、繩文～平安時代の土器類は、次項にて「古代以前の土器」として後述する。

### 1 中世土器(第145～149図)

**報告にあたって** 中世土器(547～670)には、焼成技術の違いに基づく「土師質」・「瓦質」の区別があるが、その中間的な要素を持つ土器も多く、明確な分類が困難な場合も多い。

今回の報告では、土師質・瓦質問わず中世に属する土器を「中世土器」とした上で器種による分類、整理をし、地域性など各型式の設定を行った。

#### 1-1 坤・皿・小皿(第145・146図:547～618)

**概要と分類** 塙見城跡出土の中世土器のうち、坤や皿といった器種の大半は、口縁部を失って体部下半から底部が残存するのみであった。そのため、全體形が把握可能な資料は少なく、坤・皿・小皿などの器種分類が困難な場合多かった。

その出土位置(地点)は、旧石器から現代までの遺物を含む包含層中からが多いことから、一括資料は得られず、層位的な取り上げができなかった。

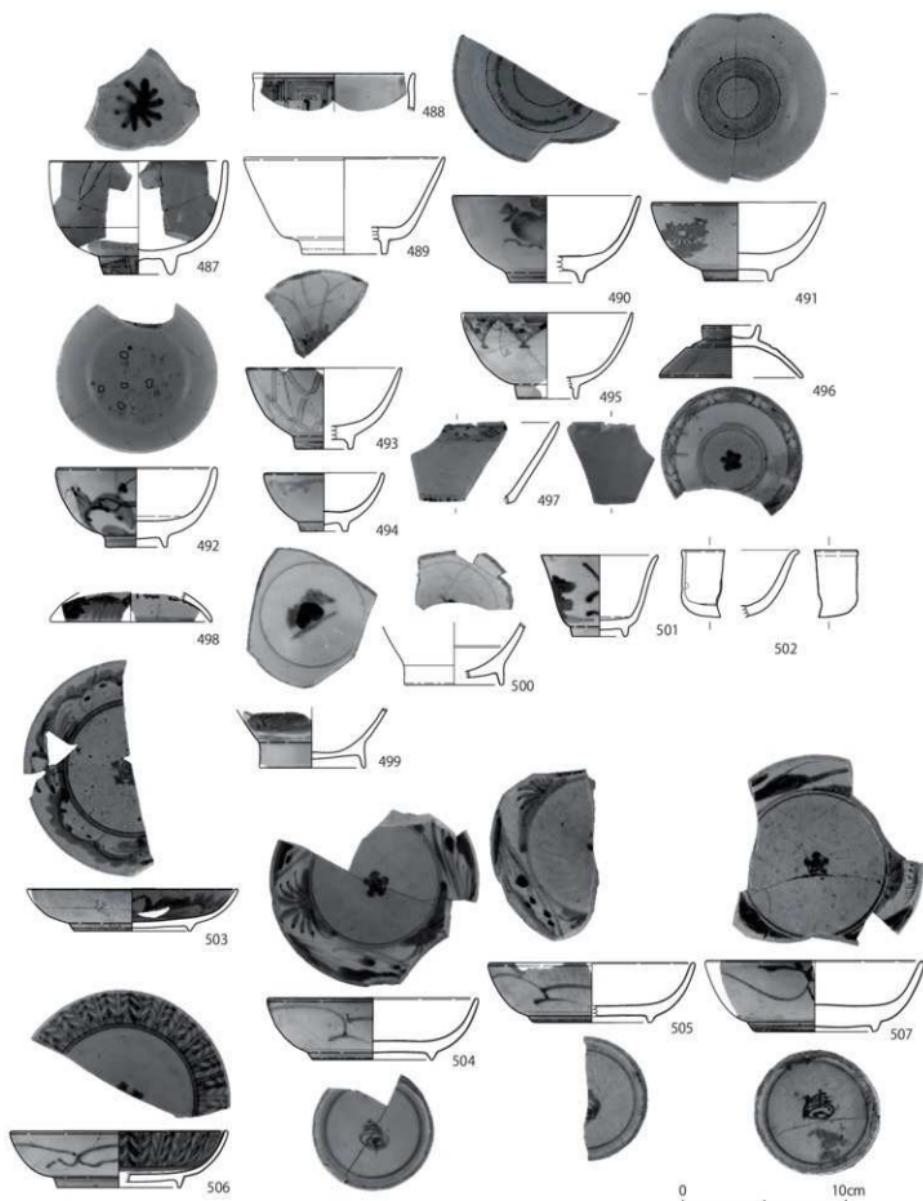
そのため、一括資料中の法量差や器形の違いによる個体群の抽出やセット関係の把握、さらには個体群の前後関係などの検討を踏まえた、年代比定の作業は行えなかった。

今回の報告では、製作技法や形態や胎土等の特徴に着目して、A～Fに分類した。特に法量の観点から口径が極小な一群を「小皿」と分類した。

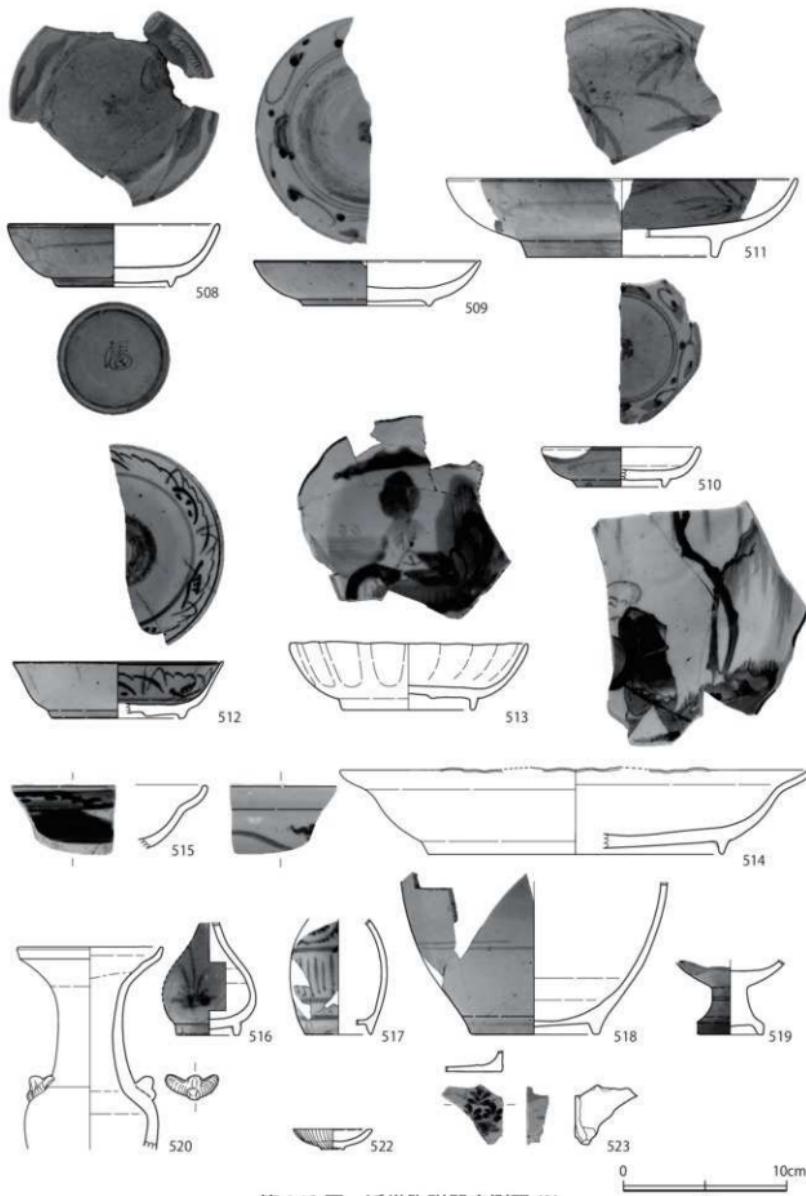
なお、底部調整が分かるものは約9割が底部ヘラ切りであり、底部糸切りは客観的な様相を示す。

**A類(547～549)** 体部内面に工具による螺旋状の沈線が見られるもの。底部ヘラ切り。胎土に赤い斑紋が顕著に見られる。

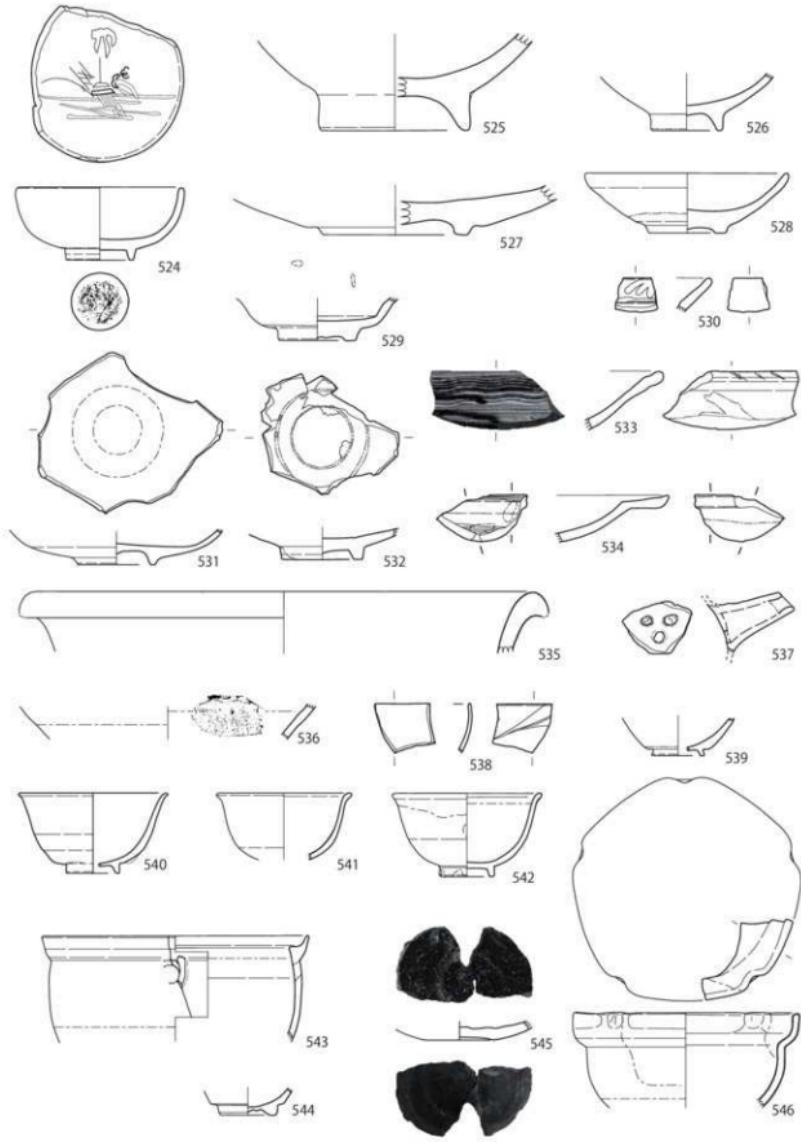
**B類(550～556)** 回転ナデによるロクロ目を顯著に残すもの。体部が直線的に開く逆台形状を呈す



第 142 図 近世陶磁器実測図 (1)



第143図 近世陶磁器実測図(2)



第 144 図 近世陶磁器実測図 (3)

る。底部ヘラ切り。ヘラ切り後に板ナデを施したものも見られる。胎土に赤い斑紋が見られる。

**C類(557～566)** 見込部分にのみ工具による螺旋状の沈線、もしくはロクロ目が見られるもの。全形の分かる557は皿であることから、C類はいずれも皿であると考えられる。

**D類(567～576)** 底部付近のナデが顕著で、底部が直立して立ち上がり、体部が内湾気味となるものの、浅黄橙色を呈するものが多い。

**E-1類(577～579)** ヘラ切りによる粘土のヨリを丁寧にナデしており、丸みを持って立ち上がる体部を持つ。

**E-2類(580・581)** 1類よりさらにナデが顕著になり、底部がやや落ち込んだ形状を呈する。

**E-3類(582～587)** 1類と同様に丸みをもって立ち上がるが、ヘラ切りによる粘土のヨリが顕著に残るものである。

**F類(588～596)** 他の分類に比べて胎土がやや赤みを帯び、直立した体部を持つもの。

**小皿(597～607)** 法量的に口径や底径が最小なものを「小皿」とし、器形からA・B類に区分した。

**小皿A類(597～602)** 体部が内湾気味に立ち上がるものの。

**小皿B類(603～607)** 直線的につまみ出す部類。

**その他(608～616)** 細分できなかった遺物群である。底部、体部ともに厚みがあり、整形が甘いもの(608～609)や、口縁部のみで分類できなかったが、丁寧な整形で直立する口縁部(610)がある。また、底部調整が糸切りの一群も見られる(611～616)。

**外来系土器(617・618)** 特徴的な器形を持つものとして617・618がある。

617は、白色を呈する皿で、他の皿と比べてやや薄く仕上げられている。塙見城跡で唯一の白色系土器で、ロクロ成形によるものであるが回転ナデの痕跡が丁寧にナデ消されており、京都系土器の影響が想定される。

618は、底部周縁部にヘラケズリを施すもので、水の手曲輪の井戸跡(SF1)石敷部下面より出土した。復元口径が約19cmで他の皿と比べて格段に大きい。見込みには溝状のナデ痕跡を残し、底部は糸切りである。類似した資料は、宮崎県都之城跡や鹿児島県富隈城跡、鹿児島城跡等の島津氏系城郭に多い。

## 1-2 煮炊具(第146・147図:619～646)

**概要** 煮炊具は、口縁部下に鈎をもつ羽釜と鈎を持たない鍋、そして肩部に耳を有する双耳釜がある。

**羽釜(619～623)** 619～621は、いわゆる和泉河内型羽釜である。口縁部外面に段状に沈線を施し、水平に延びる鈎を持つ。また体部外面はケズリによって成形され、内面にはハケメが見られる。

焼しが良好で、瓦質焼成により胎土が白色を呈するもの(619・620)は、和泉河内産の搬入品である可能性が高い。

621は内外面ともに焼されるが、胎土は橙褐色で土師質なので、模倣品であると考えられる。森島康雄氏の編年案を援用するならば、いずれも15世紀後半に位置づけられる(森島1990)。622は胴部片であるが、内面に細かなハケメ、外面上にはケズリを施す。外面上の調整は、和泉河内型に顕著な技法のひとつであり、和泉河内型の体部である可能性がある。

623は外面上にタテハケを施し、断面方形の鈎を付す。鈎の突出度も高く、胴部がやや外傾することなどから、石鍋模倣系の羽釜である。

**鍋(624～632)** 624は播磨型鍋である。口縁部下に突帯を有し、突帯裏の内面は横位の強いナデとなる。長谷川真氏によれば15世紀後半から16世紀前葉に位置づけられる(長谷川2008)。

625・626は防長型の瓦質鍋である。体部と口縁部の境に明確な屈曲部を有し、断面「く」の字状を呈する。また口縁端部は内側に搞み上げるか、折り曲げたもので、625は岩崎仁志氏のIV A新(16世紀後半)、626はVB(16世紀後葉)に相当する。

627・628は、体部外面に格子目のタタキ痕を残すもので、防長型鍋の体部であろう。

629は口縁部外面に段を持つもので、山口県西部で見られる西長門型鍋b(岩崎2007)または豊前・豊後で見られる釜A(山本2007)に類似する。いずれの場合も14世紀代にあたり、口縁部直下に突帯を持つもの形態化した段階のものである。

630は瓦質の鍋で、受け口状の口縁部を有する小型品である。631・632は、外反する口縁端部を三角形状に肥厚させる鍋で、広島県等で出土する瓦質土器鍋B(鈴木1996)に類似し、15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる。

**双耳釜 (633～646)** 633～639は、双耳釜の口縁部である。口縁部の立ち上がりの角度や長さ、端部の成形技法、外面調整、焼成など個体ごとのバリエーションが多い。その中で、637～639は、土師質で口縁端部を短く摘み上げたもので、他の双耳釜と特徴を異にする。

640～646は、肩部から胴部・鰐部にかけての破片である。640では耳貼付時の刻み目を確認することができる。641は肩部に図像が不明ではあるが、沈線文様を施している。644～646は土師質の双耳釜で、他に比べて器壁が厚く、短い三角形状の鰐を持つことが特徴である。砂粒の少ない精良な胎土であり、接合はしないものの先の637～639と同型式の双耳釜と考えられる。なお、645は鰐貼付時の沈線が確認できる。

### 1-3 撥鉢 (第148図:647～654)

647～651は瓦質の撥鉢である。胎土、焼成具合などいずれも異なり、多様性がある。

650は、口縁部内面に断面三角形の突帯を貼り付ける防長系の瓦質撥鉢である。防長型瓦質撥鉢の編年観から15世紀後半に位置づけられる(岩崎1990)。651は見込に波状のスリメが施され、装饰性豊かである。

652～654は土師質の撥鉢である。体部の器厚が約1.2cmと厚く、口縁部の形状から備前焼を模倣した土師器である。口縁部外面の凹線(沈線)が見られない点や、横位のスリメを持つ個体が見られること、また口縁部下角の成形技法など、備前焼とは異なる特徴が読み取れる。モデルとなったと思われる備前焼撥鉢の編年を援用すると、16世紀後半に位置づけることができる。

### 1-4 火鉢・風炉 (第148・149図:655～667)

655は土師質の深鉢形火鉢で、口縁部に2条、体部下半に1条の計3条の突帯を貼付ける。口縁部の2条突帯は、その鰐を文様帯とし、菊花文のスタンプを2個1組の単位で施文している。板状の脚部を有し、体部外面はケズルによつて密着している。

656～657は瓦質の浅鉢形火鉢である。体部がやや内湾しながら立ち上かる器形で、底部から鰐部まで器厚が均質である。658は鰐部の形状等から瓦質の風がむも考えられる。

659～661は、瓦質火鉢の獸脚である。660は体部下端に突帯を貼付け、661は器壁が薄く、雲文の透かしが貫通するなど、それぞれ特徴が異なることから、別個体であると考えられる。また、662は底部に円形の小孔が穿たれたもので、外面の剥離痕から円柱状の中空脚部が伴うものであることが分かる。器壁の厚さや他の類例などから、風がの脚部となる可能性が高い。

663～666は、防長系の瓔形火鉢である。体部外面に粗い磨きを施し、内面には顕著なハケメが見られる。663は、口縁端部外側に三角形状の突帯を貼付けて肥厚させたもので、口縁部外面に板小口のスタンプが3本一組で施文されている。藤原彰久の瓔形火鉢の分類ではII b類に相当し、16世紀後半の年代観が与えられている(藤原2005)。

667は焼成・胎土等が異なるものの、器形の類似性から同じ瓔形火鉢と推測される。肩の張り出しも弱く、663より後出する特徴を持つ。

### 1-5 その他の器種 (第149図:668～670)

668は土師質の香炉、もしくは小型の火鉢である。体部外面に沈線による葉脈文が施され、全面に細かなハケメが見られる。全体的に造りが甘く、シャープさに欠けることから、在地生産のものであろう。

669は、体部外面に平行タタキを施す壺の胴部である。670は、火鉢などで用いる目皿と思われ、近世以降の可能性もある。  
(潤ノ上)

## 2 縄文～平安時代の土器 (第150図)

### 2-1 縄文土器 (第150図:671～673)

**概要** 671～673は縄文時代早期の深鉢形土器である。表土や耕作土中から出土した。

671・672は円筒形土器である。671は口縁部から胴部にかけて残存しており、口縁部に刺突列点、外面に横方向の貝殻条痕、内面には風化が著しいが横方向の貝殻条痕がそれぞれ施文されている。前平式土器と考えられる。672は胴部であり、外面には横方向の貝殻条痕が施文され、内面は風化が著しいが斜方向の荒いナデ調整が施されている。

673は角筒形土器の胴部で、知覧式土器と考えられる。外面は縱方向の貝殻腹縁文が施されるが、内面は風化が著しく、調整不明である。

(原口)

## 2-2 弥生土器 (第150図:674～680)

**概要** 674～680は弥生土器である。壺・壺・鉢の破片は、表土や耕作土中より出土した。弥生時代中期～後期の土器と考えられる。

674・675は台付き壺の底部で、山ノ口式土器に相当する。674は風化が著しいが、全面にナデと思われる調整が施されている。675は上部と底部にナデ調整が、側縁に工具によるナデ調整が、裾部に指押さえ調整が、それぞれ施されている。

676・677は壺の底部である。676は内外面ともに工具によるナデ調整が施され、裾部と内面には一部にススが付着する。677は風化が著しく、内面は調整不明である。外面と底部には工具によるナデと思われる調整が施されている。

678は複合口縁壺の口縁部である。内外面とも横方向の工具によるナデ調整が施されるが、内面は風化が著しい。

679は鉢の口縁部である。いずれも風化が著しいが、外面は丁寧なナデ、内面はナデ調整の後、外面は縱方向のミガキ、口縁部は横方向のナデと思われる調整がそれぞれ施されている。

680はミニチュア土器の鉢の底部である。外面は縱方向の工具によるナデ、および一部に指押さえ調整が施されている。内面は棒状かと思われる工具による多方向のナデ調整が施されている。底部は貼付底とも考えられ、ナデ調整が施されている。器面の一部に黒変が見られる。

(原口)

## 2-3 須恵器 (第150図:681)

**古墳時代** 681は曲輪A3で出土した高环の坏部片である。外面に柳描き波状文が施され、田辺昭三氏による陶邑編年のMT15型式段階に併行すると考えられる。この他に、南側曲輪群で同型式段階の壺口縁部が出土している。

**奈良・平安時代** 表土や耕作土中より須恵器が少数出土したが、図化に堪えなかった。器種の判明するものは、壺、台付壺、甕などがある。

(渕ノ上)

## 第3節 瓦 (中近世) (第150～152図)

**概要** 塩見城跡出土の瓦は、土師質や軟質の瓦質、須恵質を呈する中世瓦と燧しが良好で硬質の瓦質を呈する近世瓦がある。

**瓦の特徴** 塩見城跡出土の中世瓦は、焼成技術の点で土師質と軟質の瓦質、そして一部に自然釉を伴う須恵質に区分することができる。

丸瓦は、吊り紐や布目、離れ砂など、両者の間に技法上の差を見出すことは難しい。吊り紐痕は、すべて布袋の外でている段階で16世紀代に位置づけることができる。瓦質の丸瓦(684)に見られる棒状の工具痕が、関西地方では16世紀代に位置づけられる点と整合する(市本1995)。

平瓦には須恵質を呈するものが含まれ、703のように他の瓦とは異なる調整技法が見られる。

### 1 中世瓦 (第150・151図:682～704)

**軒丸瓦 (682)** 塩見城跡で出土しているのは、682のみである。巴文を伴う瓦当部のみの出土であり、摩耗が激しく調整等は不明瞭である。

**丸瓦 (683～688)** 中世丸瓦は南側曲輪群でのみ出土している。凹面に布目、吊り紐の痕跡を明瞭に残す。吊り紐は頂部がループ状をなすもの(683)と燃り糸状の結び目になるもの(684～687)が見られる。684には凹面に工具側面で叩いた棒状の叩き痕がみられる。

焼成に目を向けると、土師質(685～687)と軟質の瓦質(683・684・688)がある。

**平瓦 (689～703)** 689～696は、軟質の土師質で、凹面、凸面ともにナデにより平滑に仕上げられ、離れ砂の痕跡を残す。697～701は灰白色を呈し、やや硬質である。

702・703は須恵質を呈する。702は、凹面にナデの痕跡を残し、703は凹面に離れ砂の痕跡を明瞭に残し、凸面にはハケメが認められる。

**不明 (704)** 704は棟瓦のような形態を呈するが、軟質の瓦質で中世の特徴を有することから、中世瓦に含めた。器種・部位については不明である。

## 2 近世瓦 (第151・152図: 705 ~ 717)

**概要** 近世瓦は、多くが西側谷部(第3章第7節)で出土した。四面にコビキBが明瞭に残る近世初頭期の瓦群Aと、棧瓦出現以後(18世紀以後)の瓦群Bがあり、いずれも同一層位から出土した。18世紀後半以降の肥前磁器を伴う。しかし、瓦葺の建物跡自体は検出されなかった。付近には比留巻神社が鎮座するので、神社と関連する可能性は高い。

**軒丸瓦** (705・706) 705は、四面にコビキBが確認でき、細い吊り紐痕も確認できる。瓦当部は約1/4が残存しており、珠文が扁平で巴文との間に圍線は見られない。706は珠文が立体的で、イブシが良好で一部銀化している箇所もある。

**丸 瓦** (707 ~ 710) 707は凹面の吊り紐の痕跡が5本以上確認され、山崎が指摘する「九州タイプ」の吊り紐である(山崎2000)。布痕が明瞭に残るが、僅かにコビキBを確認することができる。色調、焼成状態から軒丸瓦705と同一個体の可能性がある。708・709は凹面にコビキBが確認でき、布痕と棒状圧痕を明瞭に残すが、吊り紐痕は確認できない。709は凹面広端面の面取りも丁寧な作りである。710は凹面に縱方向の条線が多く残るが、布痕、吊り紐痕等は確認できない。棒状工具痕跡の可能性もあるが、他のものと比べて細かい点で異なる。

**平 瓦** (711) 711は、凹凸面にコビキBが確認でき、凹面は丁寧に磨かれている。凹面側は広端部を除く3辺で僅かに面取りが見られる。

**棧 瓦** (712 ~ 716) 714・715は軒棧瓦で、瓦当面には珠文と巴文、宝珠唐草文が見られる。

**伏間瓦** (717) 717は角伏間瓦である。棧接合面はハケが施され、強化されている。凹面が丁寧に磨かれている。

**瓦群Aの年代** 瓦群Aは、コビキBの痕跡とともに九州タイプの吊り紐痕が確認できる。707は宮崎県内における九州タイプの吊り紐痕をもつ瓦の初例となった。県内での近世初頭の城郭として著名な佐土原城の天主部から出土した丸瓦は、コビキAもしくはコビキBで一部に本州タイプの吊り紐痕が確認される(木村1999)。瓦群Aの年代は、コビキBから、17世紀初頭以降の可能性が考えられる。しかし、上述の瓦群Bと同じ箇所から出土しており、18世紀を遡る遺物は周辺からは出土していないため、年代を確定することはできない。(測ノ上)

## 第4節 土製品 (第153図)

### 1 土錘 (第153図: 718 ~ 806)

**概要** 管状土錘(89点)が出土し、すべて図化した。一部については、貫通状況を観察するため軟X線写真を撮影した。長さ3.5~4.5cm、重量6.5~9.5g程度の小型品を主体とし、重量が30.0gを超える大型品が2点ある(744・791)。

**形態分類** 以下に分類することが可能である。

**A類**: 両端部がやや窄まり胸部が曲線をなす。

**B類**: A類に類似した形態で細身。

**C類**: 胸部がやや膨らむ紡錘形。

**D類**: 太さが比較的均一な筒形。

**E類**: 寸胴の形状。

**胎土** 1mm未満の長石・石英・雲母・砂・赤色粒等を含むものが多い。精良で灰色(黄灰色などを含む)または黒色を呈するものと、やや胎土が粗く、褐色を呈するものとに大きく二分される。

**製作技法** 本遺跡において主流である比較的細長い形態をとる管状土錘は、芯棒に粘土を巻きつけ形成したもの(広島県草戸千軒町遺跡調査研究所1993・1994)と考えられるが、これは形成後、芯棒を抜き取り焼成するものと、抜かずに芯棒ごと焼成するものと、2パターンが想定され、芯棒を抜き取る際にそのまま引き抜く場合と、回転させながら引き抜く場合が考えられる(細辻2001)。

一方、久保禎子氏が現代の民俗例として土錘の製作技法を紹介している(久保1997)。久保氏によると、芯棒には細い竹、ススキ・カヤ・ヨシの茎、ムギカラなどを用い、粘土には田の床土や、瓦用のものなどを用いていた場合もあるという。丸めた粘土塊に芯棒を押し付け、手のひらで数回転がして形成し、芯棒を抜いて乾燥させた後、焼成する。また、粘土をうどん状に伸ばして芯棒に巻き付け形成する例もある。なお芯がムギカラの例であるが、芯棒を抜かずにそのまま焼成することもあったようだ。

この視点を基にすれば、722・724等の孔径が狭い個体については、ススキの茎など細い芯棒が用いられた可能性がある。また、粘土の接合痕が認められるものがある。756は小型品であるが、板状に薄く引き延ばした粘土を芯棒に巻きつけて形成した様子が接合痕と胎土の流れから観察され、776は同じく板状に薄く引き延ばした粘土を芯棒に巻きつけて形成しており、その粘土層が数箇所剥がれ落ちてい

る様子が伺われる。746は孔の一部が湾曲しているが、孔内面と装着された縄の摩擦、すなわち使用痕によりこのような抉れ方をするとは考えにくく、製作の段階で湾曲した芯棒を使用し、これを抜かずにそのまま焼成したか、あるいはムギカラなど柔らかい素材を芯棒として用いたか、いずれかの可能性がある。

720は孔内面が一部凹んでいる。

また、750・761は両端部の孔径がラッパ状に広がっているが、その根元の部分は窄まっており、さらに孔の中央部は広がるという複雑な形態となっている。

本遺跡出土土錘中、1点のみ孔部が貫通していない個体が認められる(766)。一部の背状土錘については、球形の粘土塊に棒を突き刺すことにより形成されたと考えられ、孔の片方の端に粘土の盛り上がりがみられる例(前出草戸千軒町遺跡 1993)や、同様に球形の粘土塊に対して一方あるいは両方から孔を穿った可能性が考えられる例(港区芝公園1丁目遺跡調査団 1988)も報告されている。

766は失敗品だと考えられ、胴部の両端から中心に向かってそれぞれ孔が穿たれているが、どちらも次第に先細りしており貫通にはいたらない。すなわち、細長く形成された粘土塊に対して、先端の尖った細い棒状の工具を用いて両端から孔を穿つという製作方法が認められる。

737・740・741等、孔の中央部が狭まっており、中央部から両端部にかけて孔径が広がる個体も見られるが、これも使用痕のみならず整作方法に基づく孔の形態である可能性も考えられる。

**生産と流通** 芯棒に粘土を巻き付け形成したものと、粘土塊に両端から孔を穿ち形成したものと、本遺跡出土土錘については、このように少なくとも2通りの製作パターンが想定される。

なお、両端部からではなく、片方の端から孔を穿ったものが存するかについては、現状では明らかにしえない。また、これら整作方法の差異が何に由来するものであるのかは、現時点では明らかにしえず、今後の課題としたい。ただし、1点のみとはいえた出土遺物中に失敗品(766)が混ざっているということは、当時において土錘は、一度にある程度の数量を一括して入手したものと推測される。

**生業の復元** 中世山城から土錘が出土することについて、在城者が山麓の河川で日々の糧を得るために漁撈を行っていたとの指摘がある(中井 2001)。

塩見城跡の南側には塩見川、西側には東川、東側には小河川があり、網漁が可能である。まさしく、中井氏の指摘に合致する環境にある。

## 2 陶製硯(第153図:807)

807は陶器製の硯で、長方形の硯の左下隅のみ残存する。(原口)

## 3 土製聖人像(円盤状土製品)(第153図:808)

808は、SG1-2区の造成(スロープ)面で出土した円盤状土製品である。中央部分が欠損し、2片に破片化していた。第153図では2片それぞれの展開図を、写真図版61は2片を復元的に配置した写真を掲載した。

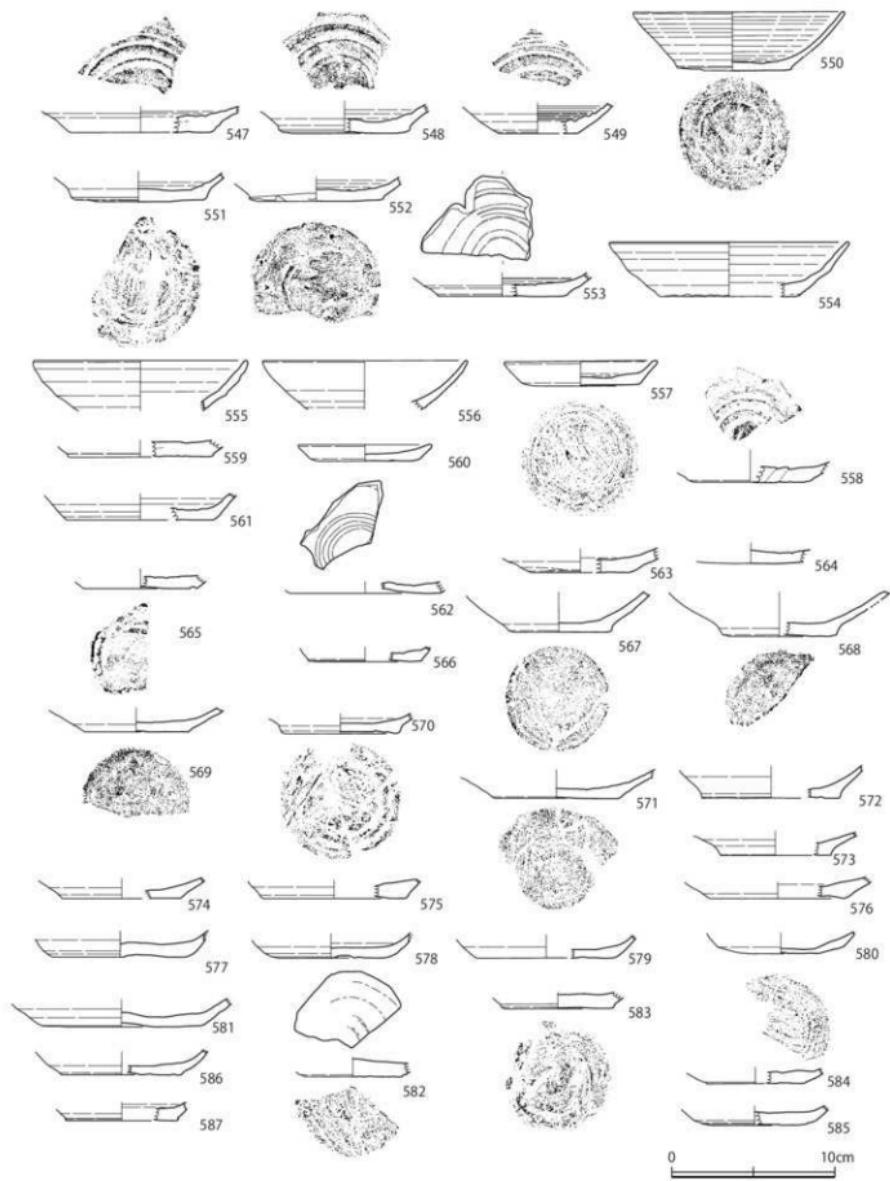
808の平面形は、下面が張り出す円盤形と復元され、残存長5.4cm、復元幅7.5cm、最大厚約1cmである。上端部は、つまみ状の突出部を有していた可能性がある。表側は、中央部分に女性像、右下には葉のレリーフが読み取れる。裏面は磨耗して光沢を放ち、上面から裏面に抜ける穿孔が2箇所ある。

表側の図像は、「マリア十五玄義図」等に同様なものが認められるので、聖母マリアがキリストを抱き、手にバラ(橋)を持つ聖母子像と解釈され、キリスト教関連遺物と理解される。

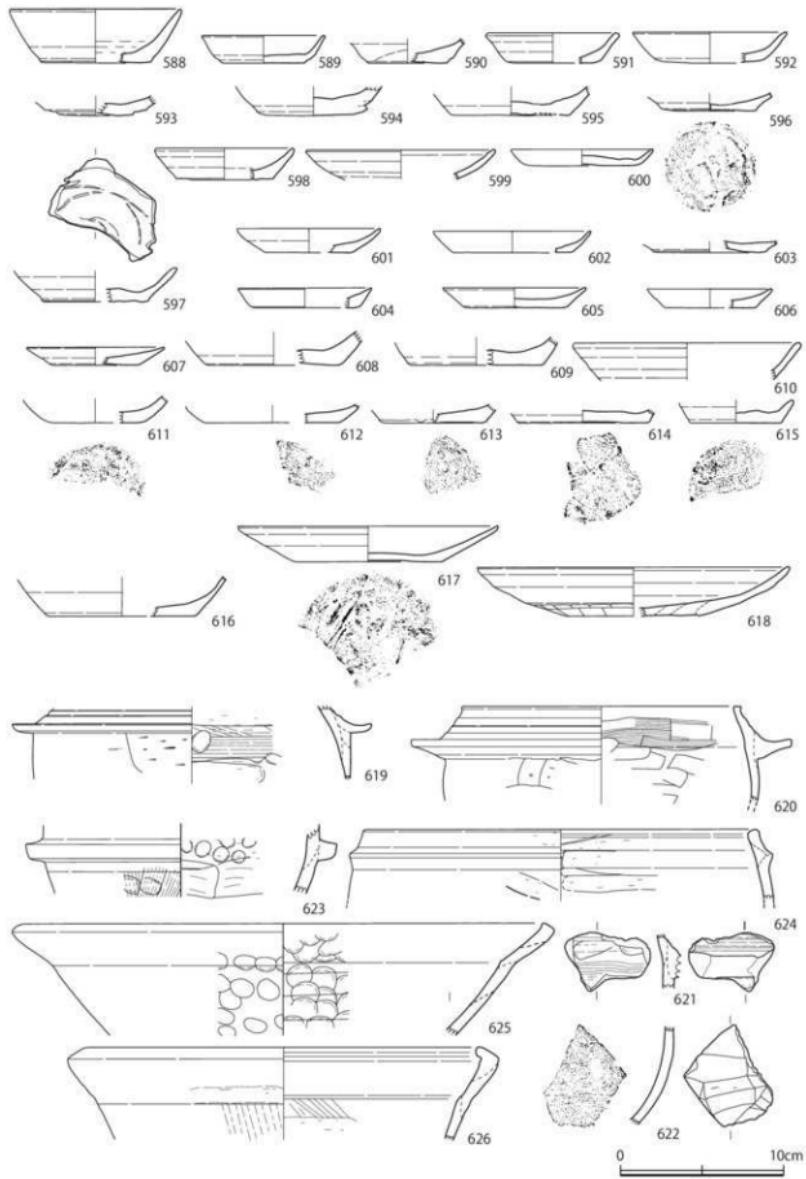
瓦質焼成品であると思われる。混和材が全くなく、極めて精良な胎土であるなど、他の中世土器とは明らかに異なる特徴を持つ。硬質に焼き締まった製品である。

成形技法は、裏面が大きく陥没したように凹み、その内部が中空なので、中子を用いた型押しと考えられる。808は裏面に磨耗面と2箇所の穿孔が認められるので、紐を通して首に掛けるメダイと考えられる。ただし、金属製のメダイに比べてかなり大きいことから、壁に掛けるか、棚に置くなど身に着ける以外の方法で使用された可能性もある。

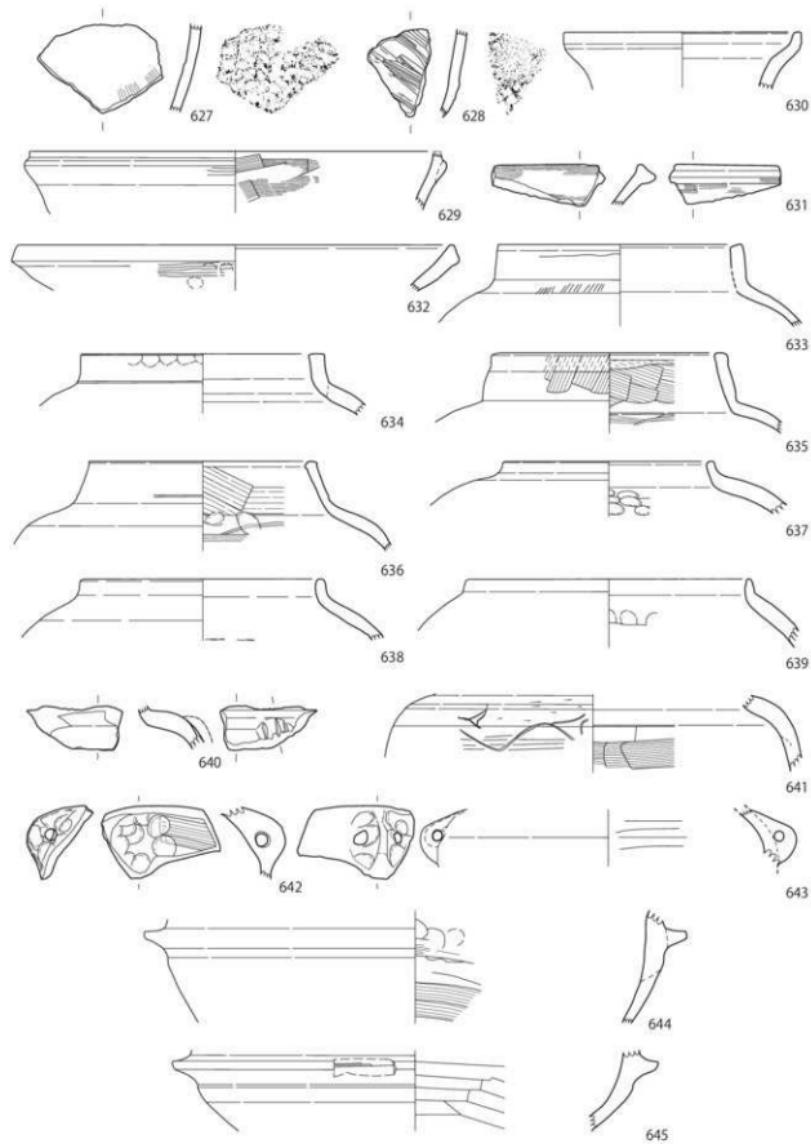
(測ノ上)



第145図 中世土器実測図(1)



第 146 図 中世土器実測図 (2)



第147図 中世土器実測図(3)